鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (59)

国分隼人道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

春田(はるた)遺跡・石塚(いしづか)遺跡・坂ノ下(さかのした)遺跡

1991年3月

鹿児島県教育委員会

序　　文

この報告書は，国分隼人道路建設に先立って，平成元年度から2年度にかけて鹿児島県教育委員会が実施した春田遺跡・石塚遺跡・坂ノ下遺跡の発掘調査の記録です。

これらの遺跡からは，縄文時代，古墳時代，古代から中・近世にいたる時期の遺構・遺物が発見されました。

なかでも，縄文時代早期の格子状押型文土器や古墳時代の無茎鉄鏃等は，鹿児島県内でも数少ない貴重な出土品で，今後の研究に大いに役立つものと期待しています。

姶良地域の歴史を明らかにする上で貴重な手がかりとなるこの報告書を，広く鹿児島県の歴史研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに，発掘調査に御協力下さった日本道路公団福岡建設局鹿児島工事事務所，隼人町教育委員会並びに関係各位に心から御礼申し上げます。

平成3年3月

鹿児島県教育委員会

教育長　大田　務

例　　言

1. この報告書は，国分隼人道路建設に伴う春田遺跡・石塚遺跡・坂ノ下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，日本道路公団福岡建設局鹿児島工事事務所からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては，日本道路公団福岡建設局鹿児島工事事務所と隼人町教育委員会の協力を得るとともに，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏，鹿児島大学法文学部助教授森脇広氏の指導助言を得た。また，森脇氏には地質に関する玉稿をいただいた。
4. 本書で用いたレベル数値は，すべて海抜絶対高である。
5. 遺物の実測・製図及び写真撮影は中村耕治・鶴田静彦が分担して行った。
6. 本書の編集は，中村耕治・鶴田静彦が行い，執筆分担は以下のとおりである。

   第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ章，第Ⅴ章第2節，第Ⅵ章 …… 鶴田

   第Ⅱ章 …… 倉元

   第Ⅴ章第1節，第Ⅵ章 …… 中村
7. 本書に用いた遺物番号は通し番号とし，本文及び挿図・図版の番号は一致する。

＜目　　次＞

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 6

第１節　調査に至るまでの経過 …… 6

第２節　調査の組織 …… 6

第３節　調査の経過 …… 8

第４節　委託契約 …… 12

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 16

第１節　遺跡の位置 …… 16

第Ⅲ章　層　序 …… 23

第Ⅳ章　平成元年度の調査 …… 24

第１節　石塚遺跡 …… 24

第２節　坂ノ下遺跡 …… 26

第３節　春田遺跡 …… 26

第Ⅴ章　平成２年度の調査 …… 52

第１節　石塚遺跡 …… 52

第２節　坂ノ下遺跡 …… 108

第Ⅵ章　まとめにかえて …… 122

附論　周辺の地形地質と遺跡のテフラ（森脇　広） …… 149

挿 図 目 次

第１図　春花田遺跡出土遺物 ……17
第２図　隼人町管内遺跡地図 ……21
第３図　土層模式柱状図 ……23
第４図　石塚遺跡トレンチ配置図 ……25
第５図　坂ノ下遺跡トレンチ配置図……27
第６図　坂ノ下遺跡付近路線計画図 ……27
第７図　春田遺跡グリッド及びトレンチ配置図…29
第８図　春田遺跡付近路線計画図 ……30
第９図　春田遺跡土層図 ……31
第10図　溝状遺構平面図 ……32
第11図　遺物出土状況 ……33
第12図　出土遺物（縄文土器１） ……35
第13図　出土遺物（縄文土器２） ……36
第14図　出土遺物（縄文土器３） ……37
第15図　出土遺物（縄文土器４） ……38
第16図　出土遺物（縄文石器１） ……40
第17図　出土遺物（縄文石器２） ……42
第18図　出土遺物（古墳土器１） ……44
第19図　出土遺物（古墳土器２） ……47
第20図　出土遺物（古代・中世・近世）……49
第21図　出土遺物（中世・近世２）……51
第22図　石塚遺跡地形図及び計画路線図 ……53
第23図　石塚遺跡土層図１ ……55
第24図　石塚遺跡土層図２ ……57
第25図　石塚遺跡土層図３ ……59
第26図　Ⅴ層上面地形図及び遺物出土状況 ……61
第27図　１号・２号集石遺構 ……63
第28図　出土遺物（縄文早期土器） ……64
第29図　出土遺物（縄文早期石器） ……65
第30図　出土遺物（縄文中・後期土器） ……67
第31図　Ⅲ層遺物出土状況 ……69
第32図　出土遺物（縄文晩期土器１） ……71
第33図　出土遺物（縄文晩期土器２） …… 73
第34図　出土遺物（縄文晩期土器３） …… 74
第35図　出土遺物（縄文晩期石器１） …… 77
第36図　出土遺物（縄文晩期石器２） …… 79
第37図　出土遺物（縄文晩期石器３） …… 80
第38図　出土遺物（縄文晩期石器４） …… 81
第39図　古墳時代土壙・土器 …… 84
第40図　出土遺物（古墳土器１） …… 85
第41図　出土遺物（古墳土器２） …… 86
第42図　出土遺物（古墳土器３） …… 88
第43図　出土遺物（古墳土器４） …… 89
第44図　出土遺物（古墳土器５） …… 90
第45図　出土遺物（土製品・鉄器） …… 95
第46図　出土遺物（古代土器１） …… 97
第47図　出土遺物（古代土器２） …… 98
第48図　出土遺物（古代須恵器） …… 101
第49図　Ⅱ層遺物出土状況 …… 102
第50図　中世溝状遺構 …… 103
第51図　出土遺物（中世・近世土器）…… 104
第52図　出土遺物（中世・近世磁器）…… 106
第53図　出土遺物（中世・近世土製品）…… 107
第54図　出土遺物（銅銭） …… 107
第55図　坂ノ下遺跡土層図１ …… 109
第56図　坂ノ下遺跡土層図２ …… 110
第57図　Ⅱ層遺物出土状況 …… 111
第58図　Ⅲ層遺物出土状況 …… 112
第59図　出土遺物（古墳土器１） …… 113
第60図　出土遺物（古墳土器２） …… 114
第61図　出土遺物（古代・中世・近世）…… 117
第62図　出土遺物（中世・近世陶磁器）…… 119
第63図　出土遺物（石器１） …… 120
第64図　出土遺物（石器２） …… 120

表　目　次

第１表　隼人町管内遺跡地名表 …… 18
第２表　石塚遺跡トレンチ別遺物出土状況 …… 24
第３表　坂ノ下遺跡トレンチ別遺物出土状況 …… 26
第４表　春田遺跡トレンチ別遺物出土状況 …… 28
第５表　春田遺跡縄文前期～後期土器観察表 …… 36
第６表　春田遺跡縄文晩期土器観察表 …… 38
第７表　春田遺跡石器観察表 …… 41
第８表　春田遺跡古墳土器観察表 …… 45
第９表　春田遺跡古代～近世土器観察表 …… 50
第10表　石塚遺跡縄文早期土器・石器観察表 …… 65
第11表　石塚遺跡縄文中期・後期土器観察表 …… 66
第12表　石塚遺跡縄文晩期土器観察表 …… 75
第13表　石塚遺跡縄文石器観察表 …… 82
第14表　石塚遺跡古墳土器観察表 …… 91
第15表　石塚遺跡古墳土製品・鉄器観察表 …… 95
第16表　石塚遺跡古代土器観察表 …… 99
第17表　坂ノ下遺跡古墳土器観察表 …… 114
第18表　坂ノ下遺跡古代～近世土器観察表 …… 117
第19表　坂ノ下遺跡石器観察表 …… 121

図　版　目　次

図版１　石塚遺跡空中写真 …… 127
図版２　石塚遺跡・坂ノ下遺跡確認調査 …… 128
図版３　春田遺跡発掘風景及び遺物出土状況・溝状遺構 …… 129
図版４　春田遺跡出土遺物(1) …… 130
図版５　春田遺跡出土遺物(2) …… 131
図版６　春田遺跡出土遺物(3) …… 132
図版７　春田遺跡出土遺物(4) …… 133
図版８　石塚遺跡調査風景及び土層断面 …… 134
図版９　石塚遺跡土層断面及び集石遺構 …… 135
図版10　石塚遺跡遺物出土状況（縄文時代） …… 136
図版11　石塚遺跡遺物出土状況（古墳時代・古代） …… 137
図版12　石塚遺跡遺物出土状況及び溝状遺構 …… 138
図版13　石塚遺跡出土遺物(1) …… 139
図版14　石塚遺跡出土遺物(2) …… 140
図版15　石塚遺跡出土遺物(3) …… 141
図版16　石塚遺跡出土遺物(4) …… 142
図版17　石塚遺跡出土遺物(5) …… 143
図版18　石塚遺跡出土遺物(6) …… 144
図版19　石塚遺跡出土遺物(7) …… 145
図版20　坂ノ下遺跡発掘風景及び土層断面・出土遺物 …… 146
図版21・図版22　坂ノ下遺跡出土遺物 …… 147

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

日本道路公団（日本道路公団福岡建設局）は，鹿児島県姶良郡隼人町において国分隼人道路の建設を計画し，工事予定路線内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（以下，県文化課）に照会した。

これを受けて県文化課では昭和63年度に分布調査を行い，工事予定線路内において石塚遺跡，坂ノ下遺跡，春田遺跡の存在を確認したため，日本道路公団と，これらの遺跡の今後の取り扱いについて協議を行い，文化財の保護と事業の推進との調整を目的として，確認調査を実施することとなった。確認調査は，日本道路公団と鹿児島県との間で委託契約が結ばれ，鹿児島県教育委員会が調査主体者となって実施した。

さらに，確認調査の期間中に上記3遺跡の取り扱いについて協議を行い，当初の期間内で調査可能な春田遺跡については確認調査に引き続いて，本調査を行うこととし，石塚遺跡，坂ノ下遺跡については，平成2年度に建設予定地内の本調査を実施することで調整がなされた。

平成2年度は，本調査を実施するとともに，県教育庁文化課埋蔵文化財重富収蔵庫において整理・報告書作成作業を行った。

第2節　調査の組織

発掘調査は，日本道路公団鹿児島工事事務所と鹿児島県知事との委託契約に基づき，鹿児島県教育委員会が担当した。調査の組織は以下の通りある。

1.　平成元年度の調査

事業主体者　日本道路公団鹿児島工事事務所	所長	安野　正
	副所長	大津　茂
	庶務課長	田浦好秀
		大山宏行
		八代耕一
		高山智里
	用地課長	藤井勝昭
		野中賢一郎
	工務課長	松野洋一
		吉田一宏
		今村利男
		岩元まゆみ
	工事長	大山俊悟
		若松一彦

			上田卓司
調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濱里忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井浩一
調査企画担当者	〃	課長補佐	奥園義則
	〃	主幹	立園多賀生
		主任文化財研究員	
	〃	兼埋蔵文化財係長	吉元正幸
調査担当者	〃	主査	牛ノ濵修
	〃	文化財研究員	鶴田静彦
調査事務担当者	〃	企画助成係長	京田秀允
	〃	主査	平山章
	〃	主事	末永郁代

2. 平成2年度の調査

事業主体者	日本道路公団鹿児島工事事務所	所長	安野正
		副所長	大津茂
		庶務課長	岩下治義
			宮地保
			高山智里
		用地課長	藤井勝昭
			赤石秀樹
		工務課長	松野洋一
			吉田一宏
			高橋敏宏
			藤本聡
			岩元まゆみ
		工事長	大山俊悟
			金子明義
			森下哲郎
			中村均
調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	大田務
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井浩一
調査企画担当者	〃	課長補佐	濱松巖
	〃	主幹	立園多賀生

鹿児島県教育庁文化課	主任文化財研究員	
〃	兼埋蔵文化財係長	吉元正幸
〃	主査	中村耕治
〃	文化財研究員	倉元良文
〃	〃	鶴田静彦
〃	企画助成係長	濱崎琢也
〃	主査	平山章
〃	主事	末永郁代

なお，発掘調査及び整理作業にあったては，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏，福岡大学文学部教授小田富士雄氏，鹿児島大学法文学部助教授森脇広氏，鹿児島市立鹿児島玉龍高校教諭成尾英仁氏の指導・助言を得た。

また，発掘調査においては隼人町教育委員会の協力をいただき，作業員として隼人町野久美田，住吉，小浜の方々に協力をいただいた。

第3節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄にて週ごとに略述する。

平成元年度の調査

7月3日～7月7日　石塚遺跡の調査開始。器材搬入，作業員に対し発掘調査についての諸注意。草払い後グリッド設定。D－3・4・5・6トレンチの設定，掘り下げ。青磁，土師器片が出土。文化課吉元埋蔵文化財係長来跡。

7月10日～7月14日　D－4・5・6トレンチにおいて成川式土器が出土，またD－6トレンチでは古道と思われる遺構を検出。D－3トレンチでは，赤ホヤの下位層より押型文土器出土。D・E－5，E－8，C－8トレンチの設定，掘り下げ。D・E－5トレンチより成川式土器出土，E－8トレンチより縄文式土器出土。C－8トレンチでは遺物の出土は見られず。

日本道路公団鹿児島工事事務所田浦庶務課長来跡。文化課京田企画助成係長，末永主事来跡。

7月18日～7月21日　B－3・4・6，F－7，H－6トレンチの設定，掘り下げ。各トレンチとも遺物の出土は見られず。

7月24日～7月28日　G－1・2・3・4，F・E・G・H－2，H－4，H－6トレンチの設定，掘り下げ。G－1・2・3，F・G・H－2トレンチより，土師器，成川式土器が出土。他のトレンチからは遺物の出土は見られず。写真撮影，遺物取り上げ及び土層図作成。台風10号接近のため防風対策。石塚遺跡の今後の取り扱いについて現地協議。石塚遺跡の確認調査終了。坂ノ下遺跡へ器材運搬。

7月31日～8月4日　坂ノ下遺跡の調査開始。草払い後グリッド設定。B－3・5・7・13

トレンチの設定，掘り下げ。各トレンチとも遺物の出土は見られず。

8月7日～8月11日　C－2・4・6・8トレンチの設定，掘り下げ。各トレンチとも遺物の出土は見られず。

8月17日～8月18日　E－2・4トレンチの設定，掘り下げ。両トレンチとも遺物の出土は見られず。

8月21日～8月25日　E－6・8，G－8トレンチの設定，掘り下げ。G・E－8トレンチより土師器，成川式土器が出土。E－6トレンチからの出土は見られず。文化課吉井課長，吉元埋蔵文化財係長来跡。D・E・F・G－8トレンチの設定，掘り下げ。

8月29日～9月1日　D・E・F・G－8トレンチより土師器，成川式土器出土。写真撮影，遺物取り上げ及び土層図作成。

9月4日～9月8日　9月7日をもって坂ノ下遺跡の確認調査終了。春田遺跡へ器材運搬。9月8日より春田遺跡の調査開始。草払い後グリッド設定。

9月12日～9月14日　F－4・6・8・10トレンチの設定，掘り下げ。各トレンチともに遺物の出土は見られず。各トレンチとも出水がおびただしい。

9月18日～9月22日　H－2・4・6・7トレンチの設定，掘り下げ。H－4・6・7トレンチからの遺物の出土は見られず。H－2トレンチより成川式土器，黒曜石等が出土。台風22号接近のため，防風対策。9月21日より全面調査を開始する。

9月25日～9月29日　H－1・2・3区のⅡ層・Ⅲ層の検出。Ⅱ層より土師器，青磁片等が出土，Ⅲ層においては，成川式土器，縄文式土器及び石鏃が出土。Ⅳ層に掘り込まれた溝状遺構を検出。

10月2日～10月6日　G－1・2・3区のⅡ層・Ⅲ層の検出。写真撮影，遺物取り上げ。

10月11日～10月13日　I－1・2・3区のⅡ層・Ⅲ層の検出。下位層確認のための深掘り。

10月16日～10月17日　発掘器材・遺物の梱包，搬出。10月17日をもって発掘調査終了。

平成2年度の調査

4月16日～4月20日　（石塚遺跡）

石塚遺跡発掘調査開始。器材搬入，テント・プレハブ設営。H－2，G－2区の掘り下げ。Ⅱ層より中世の遺物出土。文化課吉元係長来跡。

4月23日～4月27日　（石塚遺跡）

G－2・3・4区，H－2・3区の掘り下げ。Ⅲ層より成川式土器，黒曜石製石鏃出土。

（坂ノ下遺跡）

23日より坂ノ下遺跡の発掘調査開始。表土剝ぎ，E・F－7区の掘り下げ。Ⅱ層より土師器出土。

5月7日～5月11日　（石塚遺跡）

G－1・2・3区，F・G・H－2区のⅡ層・Ⅲ層の検出終了。赤ホヤ下位の包含層確認のため，深掘りを実施。G－3区のⅤ層より磨製石斧が出土。D－8区より春日式土器出土。

（坂ノ下遺跡）

D・E・F－7区の掘り下げ。Ⅲ層より成川式土器，石斧・石鏃等が出土。

5月14日～5月18日　（石塚遺跡）

G－1・2区，H－1・2区の赤ホヤを重機にて除去後，Ⅴ層の検出。

H－2区のⅤ層より集石遺構を検出。文化課濱崎企画助成係長，末永主事来跡。

（坂ノ下遺跡）

D・E・F－7区のⅡ層・Ⅲ層の検出終了。赤ホヤ下位の包含層確認のため，深掘りを実施するが，赤ホヤ下位層からの遺物の出土は見られず。

5月21日～5月25日　（石塚遺跡）

G－3区のⅤ層より集石遺構を検出。集石遺構の実測，写真撮影。C－4区～D－4区にかけて溝状遺構を検出。時期は中世と思われる。隼人町教育委員会社会教育課藤浪氏，重久氏来跡。

（坂ノ下遺跡）

D・E・F－7区の出土状況写真撮影，遺物取り上げ。D・E・F－7区のⅢ層上面の地形図作成（10cmコンタ）。

5月28日～6月1日　（石塚遺跡）

G・H－1・2区Ⅴ層上面の地形図作成（10cmコンタ）。C・D－5・6区のⅠ層掘り下げ。近世と思われる古道を検出。

（坂ノ下遺跡）

D・E・F－8区の掘り下げ。

6月5日～6月8日　（石塚遺跡）

溝状遺構の空中写真撮影。D－3区において，土師器を伴う焼土を検出。出土した遺物は，内黒土師器及び内面ヘラ削りの甕である。

（坂ノ下遺跡）

D・E・F－8区の出土状況写真撮影，遺物取り上げ。D・E・F－8区のⅢ層上面の地形図作成（10cmコンタ）。6月8日をもって坂ノ下遺跡の発掘調査を終了する。鶴田及び坂ノ下遺跡の作業員は石塚遺跡の発掘調査に合流する。

6月11日～6月15日　（石塚遺跡）

溝状遺構の50分の1及び20分の1の実測図作成。B－3・4・5区のV層の掘り下げ。縄文時代早期の押型文土器が出土。文化課吉井課長，立園主幹来跡。

6月18日～6月22日　（石塚遺跡）

C－3・4区，D－3・4区のⅢ層の掘り下げ。縄文時代晩期の土器及び石斧・石匙等が出土。

6月25日～6月29日　（石塚遺跡）

E－5・6区，F－5区のⅠ層掘り下げ。青磁・白磁・染付け等が出土。橿原考古学研究所橋本氏来跡。

7月2日～7月5日　（石塚遺跡）

E－5・6区，F－5・6区のⅢ層掘り下げ。縄文式土器・成川式土器・石斧等が出土。

7月9日～7月13日　（石塚遺跡）

G－4区Ⅰ層より土馬出土。E－3・4区のV層上面の地形図作成（10 cmコンタ）。E－3・4・5区，G－4区のV層掘り下げ。

7月16日～7月20日　（石塚遺跡）

F－3区において古墳時代の落ち込み検出。北側のセクションベルトの除去。県文化財保護審議会委員河口貞徳氏現地指導のために来跡。文化課平山主査・末永主事来跡。

7月23日～7月27日　（石塚遺跡）

G・F・G－4区の東側土層断面実測。F－3区の落ち込み内遺物実測。E・F－5区のV層掘り下げ。冨山教育次長・立園主幹来跡。

7月30日～8月2日　（石塚遺跡）

出土遺物の梱包・発掘用具の水洗及び搬出，テント・プレハブの撤去。8月2日をもって発掘調査を終了する。

報告書作成に伴う遺物等の整理作業は，平成元年の調査終了直後から一部開始した。平成2年度は，全面調査終了後から平成3年3月まで鹿児島県教育庁文化課埋蔵文化財収蔵庫において行った。

第４節　委託契約

委　託　契　約　書

1　委託事務の名称　　平成元年度国分隼人道路埋蔵文化財発掘調査委託契約
2　調査施行区域　　鹿児島県姶良郡隼人町
3　委　託　期　間　　平成元年　６月13日から
　　平成２年　３月31日まで
4　委　託　金　額　　10,403,000円（消費税３％相当額 303,000円を含む）

日本道路公団（以下「甲」という。）は，鹿児島県（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第１条　甲は，別紙発掘調査計画書に基づき，頭書の委託金額の範囲内で頭書の調査の実施を乙に委託する。

第２条　甲又は乙の都合により，委託期間を延長し，若しくは発掘調査計画を変更し，又は調査を中止するときは，事前に協議して書面により定めるものとする。

第３条　乙は，委託契約締結後，遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し，甲に提出しなければならない。

第４条　乙は，第３条の資金使用計画書に基づき，頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払いを甲に請求することができる。

２　甲は，前項の請求があったときは，頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して，請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第５条　甲は，必要と認めるときは，頭書の調査の処理状況について調査し，又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

２　乙は，甲が期限を指定して中間報告を求めたときは，これに応じなければならない。

３　乙は，発掘調査の実施にあたり，作業箇所に作業表示旗を掲げ，発掘調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

４　乙は，当該年度に係る発掘調査が完了したときは，完了届を委託期間内に甲に提出しなければならない。

５　乙は，費用精算調書を作成し，委託期間満了後１箇月以内に甲に提出しなければならない。

６　乙は，発掘調査が完了したときは，すみやかに発掘調査の実施結果に基づく報告書を作成し，甲に提出しなければならない。

第６条　この契約に基づく報告書・費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取り扱いは，甲が特に指定しない限り，乙の本来の事務取り扱いに準じて処理するものとする。

第７条　乙がこの契約に基づき，甲の費用をもって取得した購入物件等は，すべて甲に帰属す

ものとする。ただし，甲は発掘され又は発見された埋蔵文化財に関する甲の権利は，放棄するものとする。

第８条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続きについては，乙が代行するものとする。

第９条　乙の責に帰する事由により，頭書の期間内に第５条第４項に規定する完了届を提出しないときは，甲は遅滞損害金として期間満了日の翌日から起算し，提出当日までの遅滞日数につき頭書の委託金額に対して年8.25％の割合で計算した金額を徴収することができる。

２　甲の責に帰すべき事由により，第４条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には，乙は甲に対して年8.25％の割合で遅滞利息の支払いを請求することができる。

第10条　乙の責に帰すべき事由により，甲が契約を解除したときは，乙は頭書の委託金額の10分の１を違約金として，甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは，甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書２通を作成し，当事者記名押印のうえ各自１通を保有する。

平成元年　６月13日

甲　福岡市中央区天神２丁目14番13号
日本道路公団福岡建設局
局長　臼井　信

乙　鹿児島市山下町14番50号
鹿児島県
知事　土屋佳照

変更契約書（第2回）

日本道路公団（以下「甲」という。）と鹿児島県（以下「乙」という。）とは，平成2年4月1日付けで締結し，平成2年5月31日付けで一部変更締結した「国分隼人道路埋蔵文化財発掘調査に関する委託契約書」（以下「原契約書」という。）の一部を次のとおり変更する。

1.	委託金額	44,353,000円 （消費税3％相当額 1,291,834円を含む）
2.	委託期間	平成2年4月1日から 平成3年3月31日まで
3.	発掘調査計画書	別紙のとおり
4.	その他	この契約に記載のない事項については，原契約書のとおりとする。

この変更契約の証として本書2通を作成し，当事者記名押印のうえ各自1通を保有する。

平成2年6月30日

甲　福岡市中央区天神2丁目14番13号
日本道路公団福岡建設局
局長　中島英治

乙　鹿児島市山下町14番50号
鹿児島県
知事　土屋佳照

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

第１節　遺跡の位置

石塚遺跡は隼人町野久美田字石塚，坂ノ下遺跡は同坂ノ下，春田遺跡は隼人町小浜字春田に所在する。

これらの遺跡の所在する隼人町は，県本土及び姶良郡のほぼ中央部に位置し，南側は鹿児島湾の最奥部に面する。また，東は国分市・霧島町，西は溝辺町・加治木町，北は牧園町・横川町に接している。町域は南北約16キロメートル，東西約４～６キロメートルと南北に細長い。北部は霧島山系からのびるシラス台地が入りくんだ複雑な地形で，この台地を浸食しながら嘉例川・霧島川・西光川が流れ，中央東側を南流する天降川に合流し，三角州（国分平野）を形成して鹿児島湾に注いでいる。

この国分平野は，県下でも有数の穀倉地帯である。歴史的には，大隅国の国府・国分寺が置かれた場所で，大隅一ノ宮を称する鹿児島神宮も所在する。また，隼人町内山田小字八ノ坪・五ノ坪，同小田小字六ノ坪当等の地名にみられるように条理制の痕跡を残している所でもあり古代より大隅国の中心地であった。

第２節　周辺の遺跡

隼人町内の遺跡は，鹿児島県文化課が昭和59年から実施した「国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査」により新たに27箇所の遺跡の存在が確認され，現在の遺跡分布は第２図のとおりである。

つぎに，隼人町内の主な遺跡についての概略を説明する。

〈石塚遺跡・坂ノ下遺跡周辺〉

小田遺跡　（６）

隼人町小田隼人塚団地内に位置する。小田遺跡の立地は，東側に笛吹川，西側及び南側にもそれぞれ小川があり，これらの川にはさまれた微高地で標高は10m～15mを測る。遺跡の中央部を東西に日豊線が走る。隼人塚団地建設に伴い昭和48年に発掘調査が実施され，成川式土器や溝状遺構が発見された。つづいて，昭和58年にも 1,400㎡を対象に発掘調査され，弥生式土器・成川式土器をはじめ花弁型住居址や溝状遺構などが確認された。

春花田遺跡　（８）

隼人町野久美田字春花田・柳田・迫田・森田・川原田・楠元・京田・石元・横枕に広がり，国分平野西端部に位置する。東西に走る日豊本線と県道北永野田・小浜線が交差する地点の南側に広がる標高約10m～15mの微高地にある。昭和59年の「国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査」では，多量の縄文式土器及び黒曜石，少量の成川式土器，土師器が採集されている。縄文式土器はその大半が後期のものであったが，縄文中期の春日式土器，縄文後期の市来式土器なども確認されている。

第２図は，その時採集された遺物である。１は春日式土器，２は市来式土器，３は松山式土器に類似した土器で，４～７は縄文後期の土器と思われる。

また，平成２年から隼人町教育委員会により発掘調査が進められている。縄文中期から縄文後期・弥生・古墳・平安・中世・近世と各時代を通じて多量の石器・土器等の遺物，住居跡・土壙・溝等の遺構が発見されており，平野部の縄文遺跡の存在と遺構の広がりから大集落の存在をうかがわせる点に特徴を持つ。

この他に，梅木迫遺跡（26），梅ヶ迫遺跡（７），有馬迫遺跡（33），石田遺跡（34）等が確認されている。

〈春田遺跡周辺〉

坂下遺跡（30）

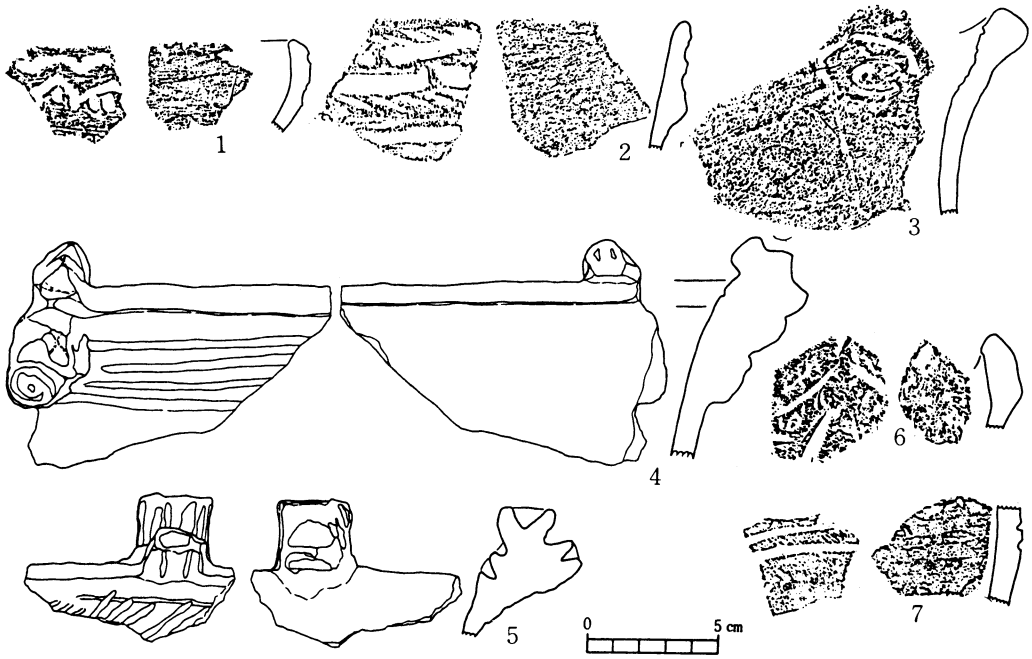
隼人町小浜字坂下・二反田・西村・岩崎にあり小浜集落の西端部に位置し，標高10m～20mである。遺物は，成川式土器・土師器等が確認されている。

上里遺跡（31）

隼人町小浜字上里にあり，国道10号線北側の小浜集落の標高20mの地点に位置している。遺物は，縄文式土器と黒曜石片，成川式土器，土師器が確認されている。

畠山遺跡（32）

隼人町小浜字畠山・八反田にあり，日豊本線が東西に，福の川が南西に遺跡のほぼ中央部を走る，標高10m～20mの水田あるいは畑地帯である。遺物は成川式土器と土師器が確認されている。



第１図　春花田遺跡出土遺物

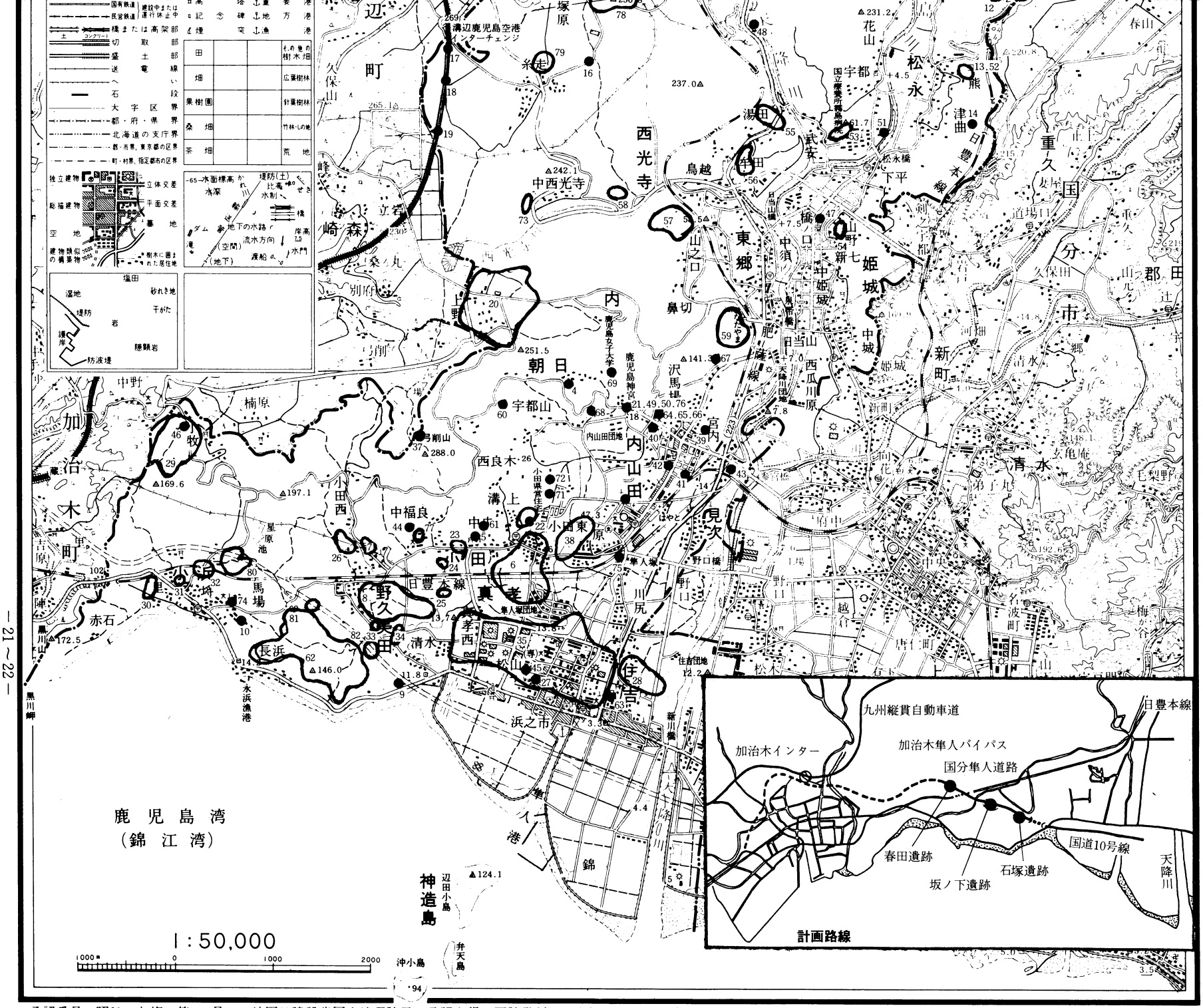
第１表　隼人町管内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
61－1	十三塚原第一地点	嘉例川佐屋窪（鹿児島空港内）	台地（平地）	縄（前・中）	手向山，塞ノ神阿高式土器		61－08
2	東原（A）	西光寺十三塚原東原，長迫	〃	縄・弥	磨石（？）・成川式土器土師器，縄文式土器		
3	東原（B）	嘉例川　東原	山地	縄・弥	成川式土器，土師器縄文式土器，黒曜石，磨石（？）		
4	鳥ヶ迫	朝日118 鳥ヶ迫	山腹（畑地）	縄	石皿		
5	石神田	小田中央2755，2744石神田　清水	山下	縄・弥	大型石斧土師器（高坏）		
6	小田	小田塚原（隼人塚団地内）	宅地	縄（中）～平安	塞ノ神式土器，成川式土器（カメ・壺）須恵器蓋	昭和54年４月発掘県文化課報告書	3
7	梅ヶ迫	小田西，梅ヶ迫，六ノ坪，高尾野	畑地	縄～古歴	磨石，成川式土器土師器，須恵器		
8	春花田	野久美田　春花田	水田	縄（後）～古歴	縄文式土器（松山式・市来式），黒曜石，成川式土器		
9	破戸脇	野久美田　破戸脇（通称　ガタ山）	石切り場（海岸端）	縄	磨製石斧		
10	馬場	小浜　馬場	平地	縄	石斧（半磨製）		
11	後原	松永　後原	〃	古～歴	成川式土器，土師器		
12	桂板	松永　桂板	〃	古	〃		
13	藤熊	松永　平熊　藤熊	丘	〃	〃		
14	津曲	松永　津曲	段丘	弥（後）	弥生式土器（壺）（松木薗式）	昭和28年頃出土隼人郷土誌	2
15	岩井戸	嘉例川　岩井戸3615		古	成川式土器		
16	立迫	西光寺　糸走立迫　松ノ尾	台地（平地）	古	〃		
17	西免	西光寺　西免	〃	弥（末）	〃	昭和49年調査（縦貫道敷地）	09
18	中尾	西光寺　中尾	〃	〃	〃	県文化課報告書〃	010
19	入道	西光寺　入道	〃	〃	〃　土師器	〃	011
20	格木原	格木原・前村中・下，中島中落上・下中原，野敷	台地（平地）	古～歴	成川式土器土師器　須恵器		
21	鹿児島神宮貝塚	内2496（神宮境内）	高台	弥（前）	貝殻，土器片		
22	柏木	小田溝上　柏木	畑地	古	成川式土器		
23	国領畑	国領畑	平地	古～歴	土師器　成川式		
24	小薗田	小薗田，辻園	〃		成川式		
25	六反田	六反田，小薗田，辻園	〃	古	成川式		
26	梅木迫	小田西，梅木迫，新寺	畑地	縄～古歴	成川式土器土師器，黒曜石		
27	伽藍	真孝1，108（伽藍神社境内）	微高地	弥（後）	弥生式土器（尖底壺）鉄剣	昭和20年頃出土	
28	住吉	住吉，四方境・石小積，御油田・西原	平地	古～歴	成川式土器　土師器		
29	小牧	小牧，屋敷前，宮崎，馬塚，立迫，長田，姥山，三重田，山添	台地	縄文～古歴	成川式，土師器，黒曜石		

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
61－30	坂下	小浜里，坂下・二反田	水田（傾斜地）	縄古～歴	黒曜石，成川式，土師器		
31	上里	小浜　里・上里	平地	〃	成川式，土師器，縄文		
32	畠山	小浜　畠山・八反田	〃	古～歴	〃		
33	有馬迫	有馬，二反田	台地	古	成川式		
34	石田	石田A，尾園，二反田，永緑	〃	縄古～歴	黒曜石，成川式，土師器		
35	真孝	夏陰，高城，下林田大宝，上林田他	平地	〃	成川式，土師器		
36	嘉例川	嘉例川　安楽	畑地（天降川渓谷）	平安	須恵器蔵骨器（外部は宝塔形の軽石容器）	昭和29年頃出土 隼人郷土誌	
37	弓削丘	朝日749 夜帰（弓削山）	台地端（畑地）	平安（初期）	須恵器蔵骨器	昭和18年11月4日出土	4
38	岩井堂	小田　東459 岩井堂（ひまわり幼稚園内）	宅地	奈良	土師器（丸底鉢）須恵器		
39	沢家の墓	内5791　沢最口	畑地	鎌倉江戸	延応元年銘層塔・五輪塔板碑（単・双式）・角柱石塔，さつま塔残欠・近世墓	三国名勝図会・旧記雑録 桑幡家文書・隼人郷土誌	6
40	桑幡家の墓	内　御前馬場	〃	〃	宝塔・宝篋印塔残欠，五輪塔・近世墓	〃	
41	留守家の墓	内山田	〃			〃 留守家系図	
42	竜波見家の墓	内山田	〃	室町	宝塔・五輪塔・板碑，永禄十二年銘範供養塔 天文十一年銘秀範供養塔	桑幡家文書 旧記雑録	
43	大津家の墓	見次　大津	〃	〃	三重層塔・五輪塔・宝篋印塔・宝塔残欠		
44	樺山家の墓	小田　中福良 和田（小野小学校）裏山	山林	〃	樺山忠副・信久墓（宝印塔）・五輪塔・月輪塔 彫石碑	三国名勝図会，旧記雑録　樺山氏系図，薩藩叢書（称名墓誌）	8
45	山王墓地	真孝　山王馬場（高専の下）	平地	江戸	二十三夜待女人石塔 津友二十一世梅堂塔		
46	馬場の経塚	小浜　小牧　馬塚	台地	室町	天正四年銘肝付入道 以安供養塚・馬頭観音	三国名勝図会，旧記雑録 肝付氏系図	
47	湯の本権現碑	姫城1568山野（清姫温泉内）	宅地	鎌倉	永仁元年銘石碑		8
48	宮内原用水完成記念碑	嘉例川（水天渕発電所）	天降川河畔	江戸	享保二年銘水神記碑 宝暦七年銘改造碑	島津国史・西藩人物伝（陽盛常）・隼人郷土誌	
49	正八幡宮造替石灯碑	内2496（鹿児島神宮境内）	高台	〃	宝暦六年銘石灯籠	隼人　日当山町郷土史研究会誌	
50	正宮山植杉記碑	〃	〃	〃	宝暦七年銘角柱碑	三国名勝図会 旧記雑録（日秀上人）	
51	菅原神社磨崖仏	松永8282－8 森	微高地	室町	慶長四年七月造銘 磨崖仏40数本	止上神社古文書（寛延二年調書）三国名勝図会，東襲山郷土誌	04
52	平能城跡	松永　平熊　藤熊	丘	不明	石積・空堀	日本城郭体系18	
53	鶴ヶ城跡	松永　峯下・上園田（霧島病院裏山）	山林	南北朝	土塁・空堀・曲輪	三国名勝図会 止上神社古文書（寛延二年調書）	
54	湯峯砦跡	姫城　山野	丘	〃	土塁	三国名勝図会 東襲山村郷土誌	
55	荒瀬城跡	西光寺　湯田・荒瀬宇都	山林小山	〃	土塁・空堀	島津国史，旧記雑録	
56	角井ヶ城跡	西光寺　鳥越（春光園前の山）	小山	不明	土塁		

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
61－57	茶臼城跡	西光寺　勢溜・八ヶ窪	山林	不明	土塁・空堀	日当山村郷土誌	
58	日当山城跡	西光寺　城下	独立峰	南北朝	空堀・井戸	島津国史・旧記雑録　三国名勝図会 日当山村郷土誌	
59	笑隈城跡（咲隈）	内　新田山・隈城（　子神社裏山）	山林	〃	土塁・空堀・石積	三国名勝図会	
60	野神城跡（塁）	朝日　野神（末広養鶏場一帯）	ミカン畑	南北朝	土塁・石積 古銭（洪武通宝）	三国名勝図会 日当山村郷土誌	
61	小田城跡	小田　石神田	山林	不明	土塁	日本城郭体系18	
62	生別府城跡（長浜）	小浜　本城・鉢窪・烏帽子石・新城・南城	〃	室町	土塁・空堀・郭・館跡	島津国史・ 旧記雑録 三国名勝図会	06
63	富隈城跡	住吉　竜波見（稲荷山）	微高地	安土桃山	野面積石垣　大手門	〃 藩名勝考	07
64	弥勒院跡（寺）	内225（宮内小学校内）	平地	平安～江戸	土師器（灯明皿）・須恵器・青磁片（龍泉窯・高麗）	三国名勝図会・旧記雑録・桑藩家文書・正八幡文書 隼人郷土誌	
65	〃	内　堀ノ内（宮内小北側前方）	〃	江戸 明治	元和元年銘墓・五輪塔 坊主墓・石祠型墓		
66	〃	（宮内小北側）	平地（田中）	江戸	寛保元年銘墓 坊主墓多数		
67	正興寺跡	内（沢馬場の墓地）	傾斜地 墓地	鎌倉 江戸	五輪塔・宝篋印塔 坊主墓・石柱塔	〃	
68	正高寺跡	内山田1730	山林	南北朝 江戸	永徳二年銘五輪塔・板碑 角柱塔・仏像・逆修塔	〃	
69	三光院跡	朝日20－2（日秀神社境内）	山腹	室町	元亀三年銘大通智勝如来石塔・石仏群 五輪塔・板碑・層塔	昭和48年調査 三国名勝図会 旧記雑録	
70	正福院馬頭観音堂跡	内山田　獅子尾山	丘	江戸 明治	空順上人入定石室 空順作不動明王・仏像 石馬残次	三国名勝図会・ 薩隅日琉諸郷便覧・国分道帳 空順法印日録	
71	正国寺跡	内山田1509　蛭田	山林	室町 江戸	康治元年九月銘　石仏（阿弥陀座像光背あり・菩薩立像）・阿弥陀仏・長足塔婆・読誦塔	三国名勝図会 旧記雑録 国分道帳	
72	〃（墓地）	〃	〃	〃	大五輪塔・板碑・近世墓		
73	西光寺跡	西光寺　山王前	山林 水田	鎌倉	宝塔・宝篋印塔 五輪塔（日吉山王境内）	三国名勝図会 旧記雑録 日当山村郷土誌	
74	見隆寺跡	小浜古城（小浜小学校右手）	山下	江戸（？）	宝篋印塔・坊主墓	三国名勝図絵	
75	隼人塚	見次　役所前	平野	平安（末期）	石造層塔２墓　四天王像	（国）大正10年3月8日	7
76	宮内の田の神	内　（鹿児島神宮下）	〃	江戸	天明元年九月銘石像 田の神	（県）昭和43年3月29日	012
77	供養谷	小田　供養谷	畑	古墳～歴史	成川式土器・土師器		
78	長迫	嘉例川　長迫・下原外	台地	縄文・古墳	縄文式土器・成川式土器 土師器		
79	大迫	西光寺　大迫	台地	古墳	成川式土器・土師器		
80	春田	小浜　春田	微高地	縄文～古墳歴史	縄文式土器・成川式土器 土師器	平成元年発掘	
81	坂ノ下	野久美田　坂ノ下	傾斜地	古墳・歴史	成川式土器・土師器	平成元・２年発掘	
82	石塚	野久美田　石塚	台地	縄文～古墳歴史	縄文式土器・成川式土器 土師器	平成元・２年発掘	

鹿児島県　姶良郡
隼人町管内遺跡地図



承認番号　昭61　九複　第180号この地図は建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。

愛媛県東宇和郡宇和町大字卯之町2丁目　☎(0894)㊷-0592㈱乙媛印刷社

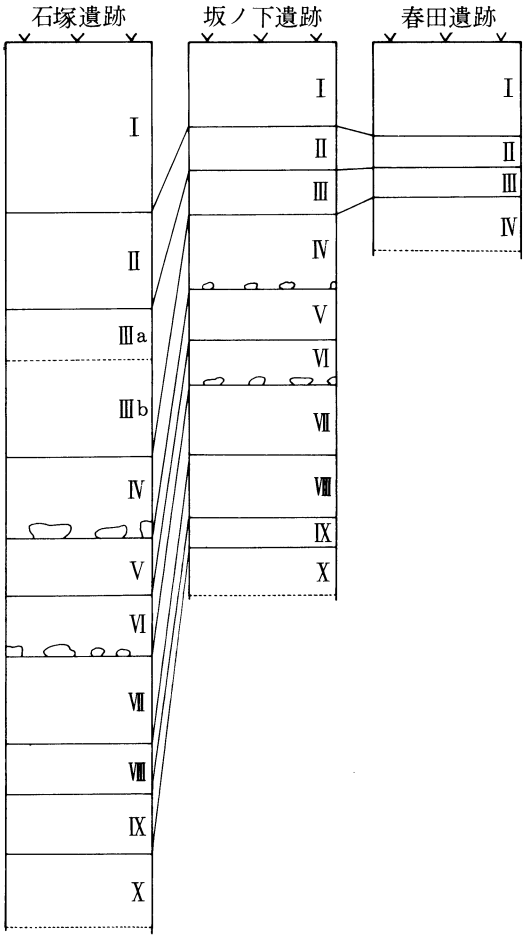
第2図　隼人町管内遺跡地図

鹿児島県姶良郡隼人町役場

第Ⅲ章　層　　序

石塚遺跡，坂ノ下遺跡，春田遺跡の基本的な層序は，第２図の通りであるが，部分的には削平されたり，存在しなかったりした層もある。

特に春田遺跡においては，基準土層のⅣ層以下の堆積は認められず，Ⅳ層以下は乳白色の無遺物層であった。



第３図　土層模式柱状図

Ⅰ層　灰黒褐色の耕作土で，色調により２層に細分できる部分もある。また大正３年の桜島火山灰が部分的に見られる所もある。

Ⅱ層　黒色腐植土層。やや粘質を帯びた微粒子の有機質の層であり，中世の遺物を包含する層である。

Ⅲ層　暗褐色火山灰土層。割合に締まった火山灰土である。パミスの量により上下２層に細分できる。下部になるほどパミスの量が多い。縄文時代中期・晩期，古墳時代，奈良・平安時代の遺物を包含する層である。

Ⅳ層　黄橙色火山灰土層。アカホヤ火山灰と呼ばれるもので，鬼界カルデラを起源とする噴出物である。Ⅳａ層が黄橙色火山灰土層，Ⅳｂ層が砂粒を含む軽石層である。

Ⅴ層　粘質を帯びた比較的細粒の火山灰土層で，乾くとクラックが発達する。縄文時代早期の遺物を包含する層で霧島周辺に分布する青灰色土層に相当するものである。

Ⅵ層　乳白色土層。やや粘質を帯びた火山灰土で微細の軽石を含む。下部は明橙色を呈し，径0.5 ～１cmほどの軽石をブロック状に含む。

Ⅶ層　黒褐色腐植土層。やや硬質の有機質土で粘質が強く，乾くとクラックが発達する。

Ⅷ層　灰白色火山灰土層。「サツマ」と呼ばれる桜島を起源とする噴出物である。

Ⅸ層　暗茶褐色粘質土層。通称「チョコ層」と呼ばれる粘性の強い火山灰土である。

Ⅹ層　黄白色火山灰土層。姶良カルデラを起源とする噴出物である。

第Ⅳ章　平成元年度の調査

第１節　石塚遺跡

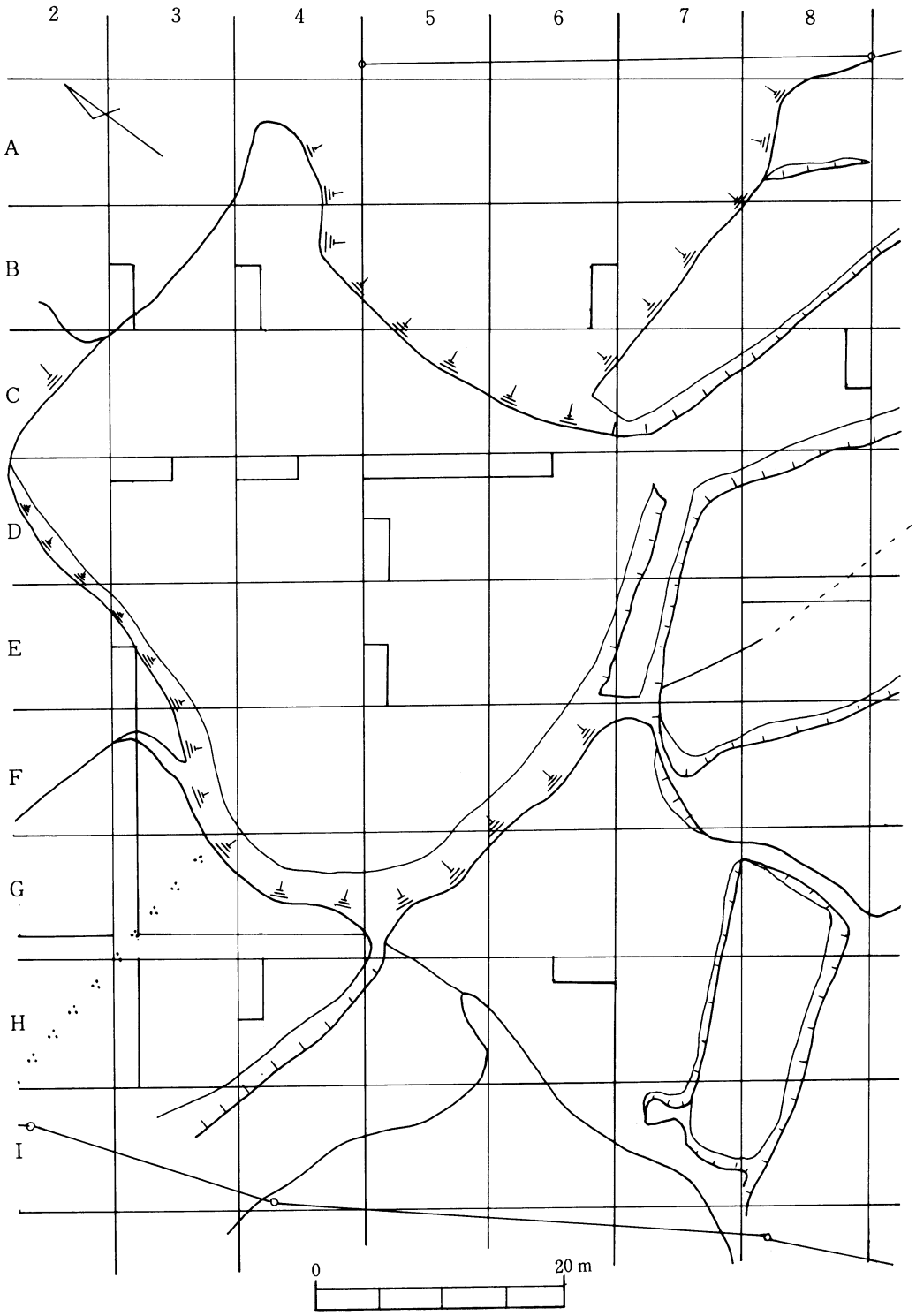
確認調査

石塚遺跡の確認調査は，建設予定道路のＡラインのセンターラインを基準とし，10×10ｍのグリッドを設定し，第４図のようなトレンチを設定して行った。その結果，縄文時代早期・晩期，古墳時代，奈良・平安時代，室町・鎌倉時代の遺物と近世のものと思われる古道を検出した。第２表は各トレンチ別の出土状況である。

なお，確認調査において出土した遺物・遺構等については，第Ⅴ章の平成２年度の調査で一括して扱った。

第２表　石塚遺跡トレンチ別遺物出土状況

トレンチ番号	出土の有無	出土遺物	時代	遺構の有無	備考
Ｂ－３	無				
Ｂ－４	無				
Ｂ－６	無				
Ｃ－８	無				
Ｄ－３	有	縄文式土器	縄文早期	無	押型文土器
Ｄ－４	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｄ－５Ｎ	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	溝状遺構・ 古道	
Ｄ－５Ｗ	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｄ－６	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｅ－２	無				
Ｅ－５	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｅ－８	有	春日式土器	縄文中期	無	
Ｆ－２	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｆ－７	無				
Ｇ－１	無				
Ｇ－２Ｅ	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｇ－２Ｓ	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｇ－３	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｇ－４	無				
Ｈ－２	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
Ｈ－４	無				
Ｈ－６	無				



第4図　石塚遺跡トレンチ配置図

第２節　坂ノ下遺跡

確認調査

坂ノ下遺跡の確認調査は，建設予定道路のＡラインのセンターラインを基準とし，10×10mのグリッドを設定し，第５図のようなトレンチを設定して行った。その結果，古墳時代を中心として，奈良・平安時代，室町・鎌倉時代の遺物が出土した。第３表は，各トレンチ別の出土状況である。

なお，確認調査において出土した遺物については，第Ⅴ章の平成２年度の調査で一括して扱った。

第３表　坂ノ下遺跡トレンチ別遺物出土状況

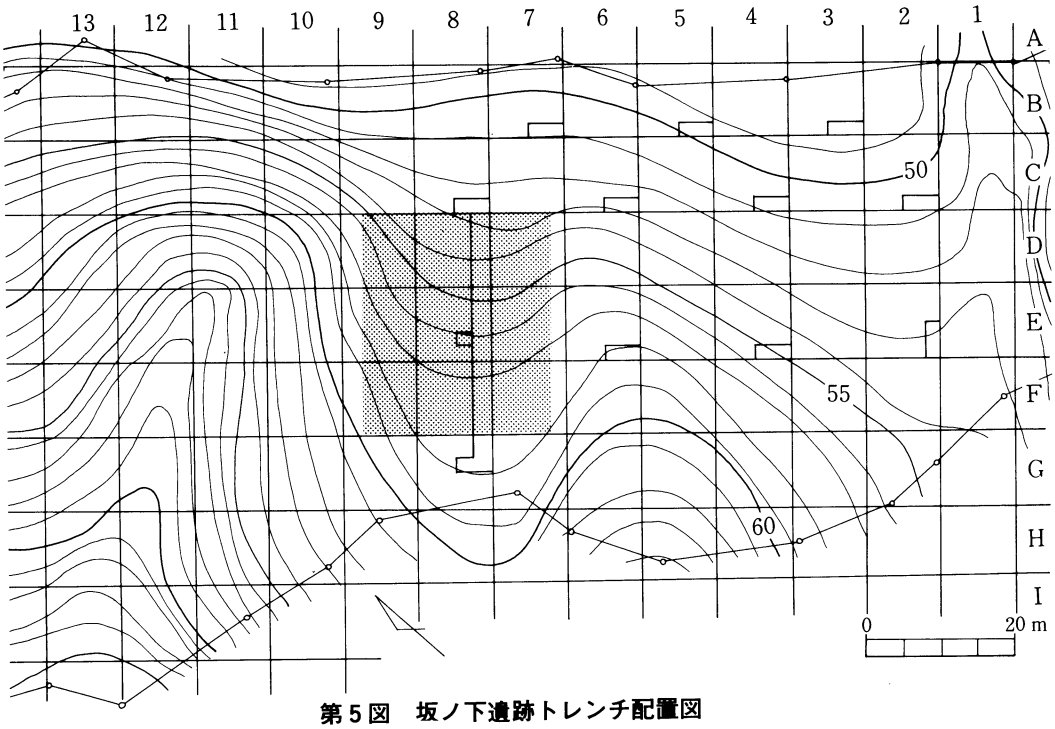
トレンチ番号	出土の有無	出土遺物	時代	遺構の有無	備考
Ｂ－３	有	石匙	縄文	無	層位不安定
Ｂ－５	無				
Ｂ－７	無				
Ｂ－13	無				
Ｃ－２	無				
Ｃ－４	無				
Ｃ－６	無				
Ｃ－８	無				
Ｄ－８	有	成川式土器・土師器 青磁	古墳・古代・中世	無	
Ｅ－２	無				
Ｅ－４	無				
Ｅ－６	無				
Ｅ－８	有	成川式土器・土師器 青磁	古墳・古代・中世	無	
Ｆ－８	有	成川式土器・土師器 青磁	古墳・古代・中世	無	
Ｇ－８	無				

第３節　春田遺跡

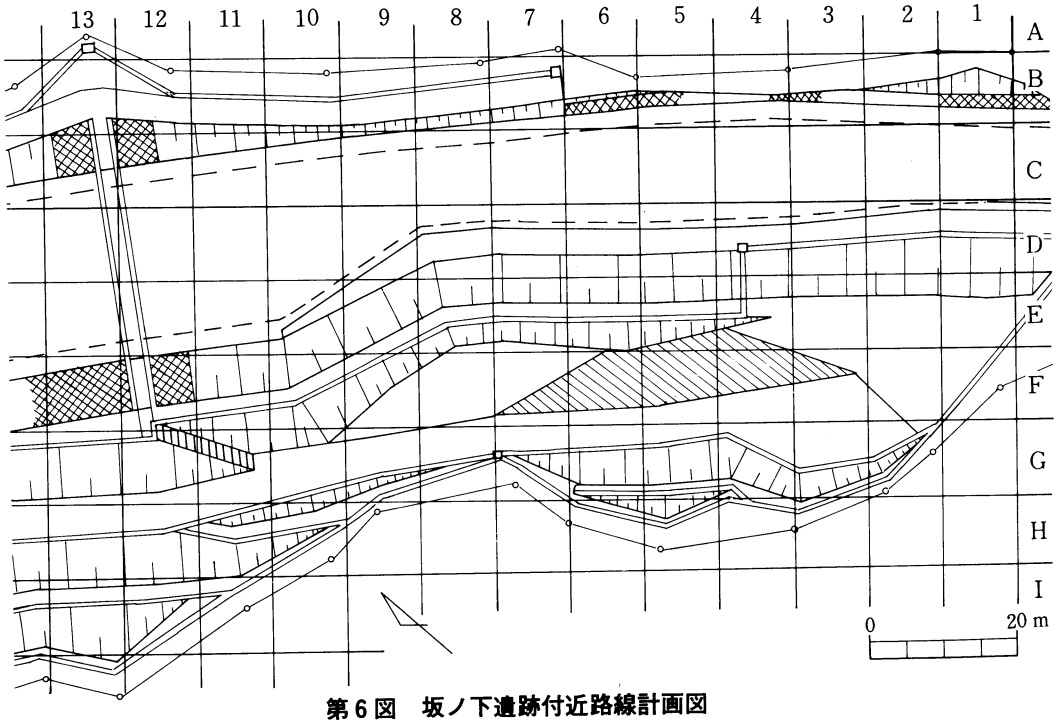
確認調査

春田遺跡の確認調査は，建設予定道路のＡラインのセンターラインを基準とし，10×10mのグリッドを設定し，第７図のようなトレンチを設定して行った。その結果，縄文時代前期・中期・後期・晩期，古墳時代，奈良・平安時代，鎌倉・室町時代の遺物が出土した。第４表は，各トレンチ別の出土状況である。

なお，確認調査において出土した遺物については，確認調査に引き続いて実施した全面調査の項で一括して扱った。



第5図　坂ノ下遺跡トレンチ配置図



第6図　坂ノ下遺跡付近路線計画図

第４表　春田遺跡トレンチ別遺物出土状況

トレンチ番号	出土の有無	出　土　遺　物	時　代	遺構の有無	備　考
F－4	無				
F－6	無				
F－8	無				
F－10	無				
H－2	有	縄文式土器・成川式土器 土師器・青磁	縄文晩期・古墳 古代・中世	無	
H－4	無				
H－6W	無				
H－6S	無				
H－7S	有	石　斧	縄　文	無	層位 不安定
H－7E	無				

全面調査

春田遺跡は隼人町小浜字春田に所在する。北側の標高約 170mの台地からなだらかに傾斜し錦江湾にいたる台地裾野の標高45mの微高地に位置しており，遺跡の東側数百mの地点には今でもこんこんと水が湧き出て付近の水田を潤している星原池がある。また，南東約１kmの地点には，中世の山城である長浜城が存在する。

春田遺跡の全面調査は調査の経過で記したが，確認調査において遺物が出土し，国分隼人道路建設により破壊される約 400㎡について，石塚遺跡・坂ノ下遺跡・春田遺跡の確認調査に引き続いて実施したものである。

全面調査の結果，縄文時代前期・中期・後期・晩期，古墳時代，奈良・平安時代，鎌倉室町時代の遺物が出土した。また，時期及びその性格が不明の溝状遺構が２条検出された。

1.　**遺構**（第10図）

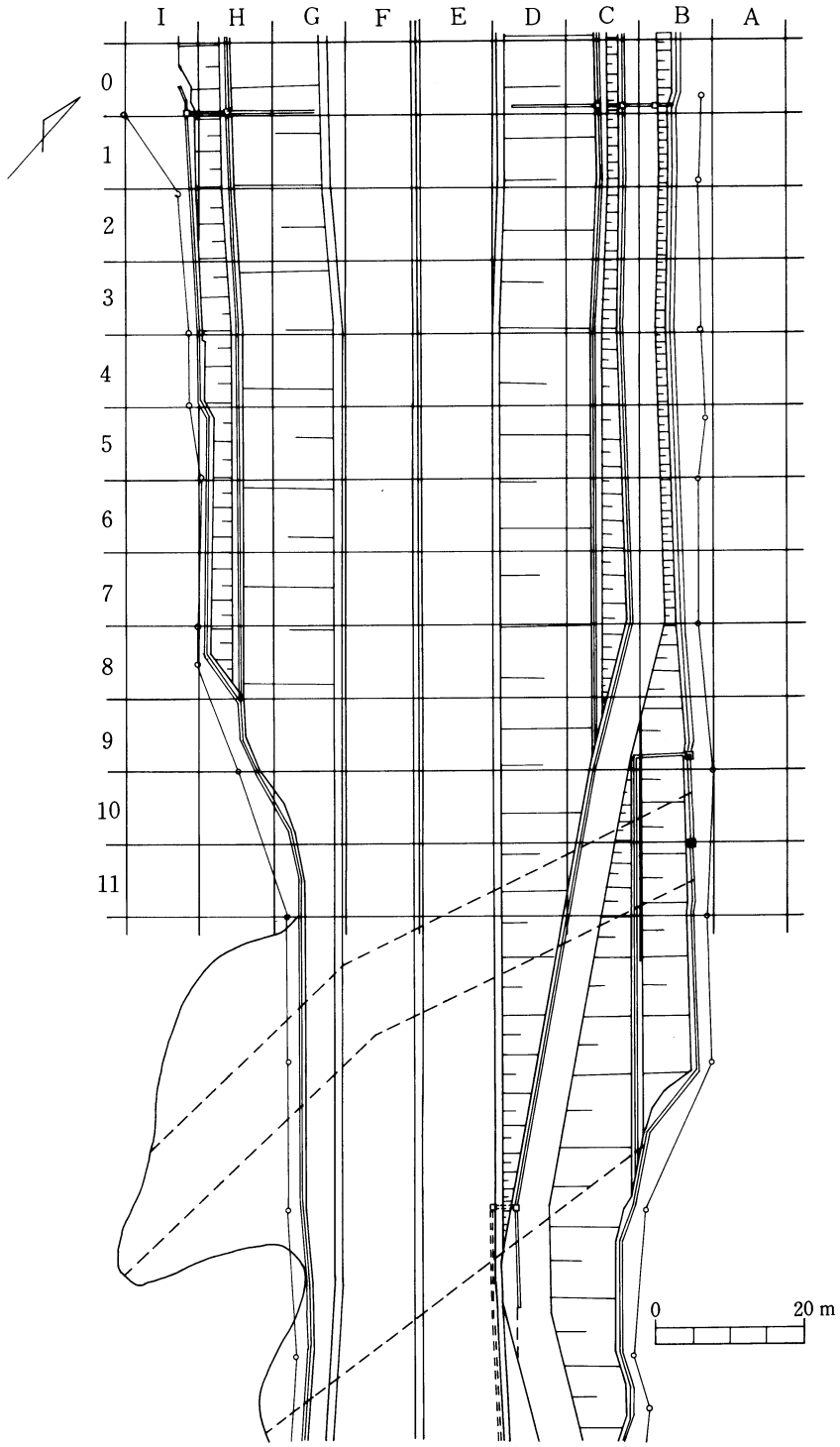
春田遺跡では，２条の溝状遺構が検出された。溝１はG－２区，G－３区からH－３区へ「へ」の字状にのび，幅約50cm～90cm，深さ約40cmを測るものである。また，G－２区においては，北へ約1.5mほど分岐している。

溝２はG－２区からH－２区へ東西にのびるもので，幅約90cm，深さ約40cmを測るものであり，東端は溝１と交わるものと考えられる。

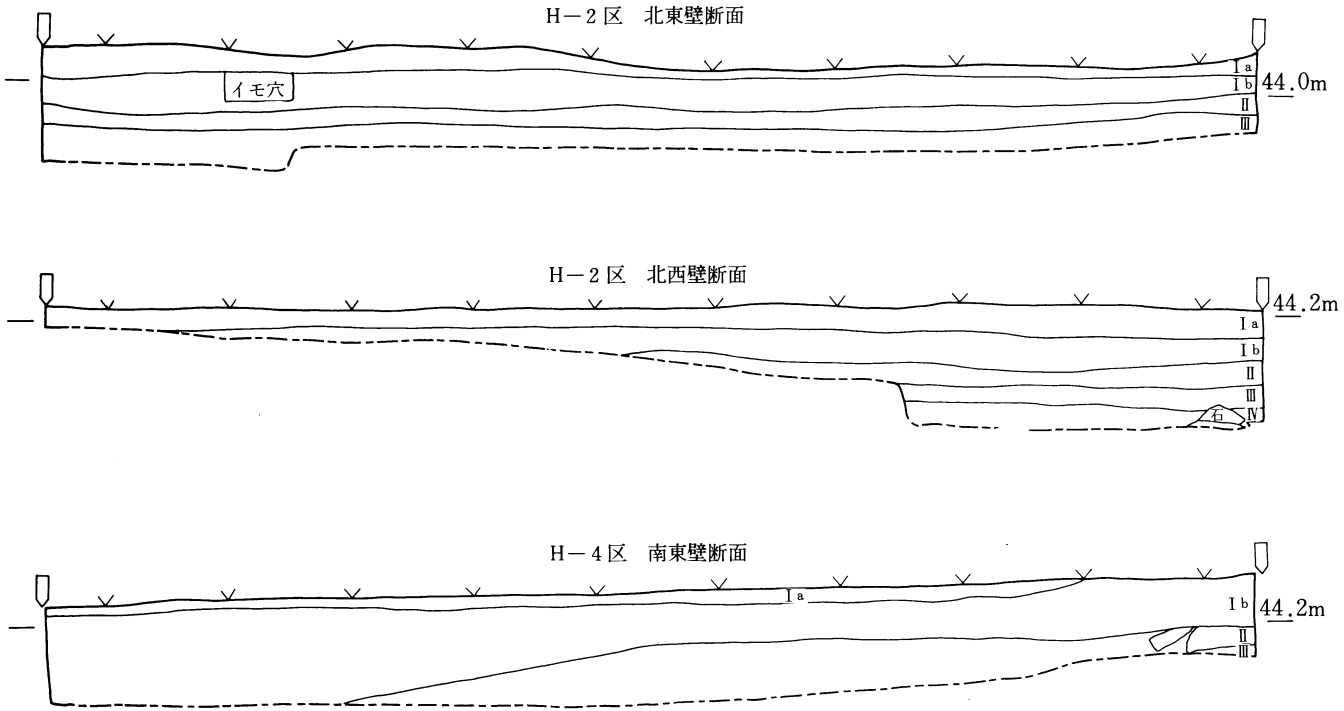
溝１，溝２とも埋土がⅡ層とは異なり，軽石まじりの灰茶褐色を呈するものであり，埋土中からは，成川式土器・縄文時代晩期の深鉢形土器の底部・土師器等が混在する状態で出土した。

これら２本の溝状遺構の時期及び性格については，遺物の出土状況及び埋土の状況などから，後世のものである可能性が強いものと考えられよう。また聞き取りによると，以前の畑地の区割に近いようであるということでもあった。

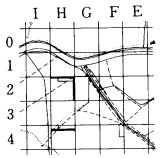
第7図　春田遺跡グリッド及トレンチ配置図



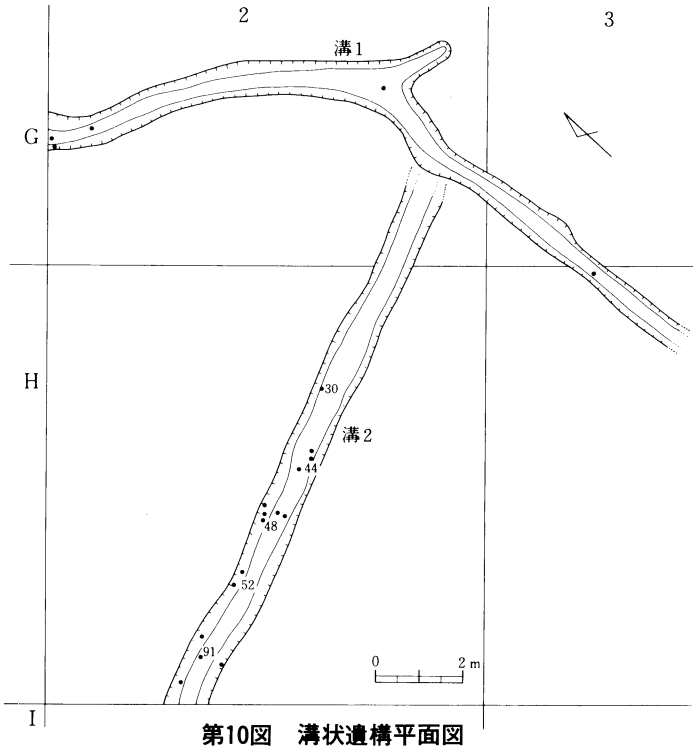
第 8 図　春田遺跡付近路線計画図



Ⅰ層　灰黒色耕作土
Ⅱ層　黒色腐植土
Ⅲ層　暗褐色火山灰土（パミス混入）
Ⅳ層　乳白色火山灰土層



第9図　春田遺跡土層図



第10図　溝状遺構平面図

2. 縄文時代の遺物

（第12図～第17図）

縄文時代は，前期・中期・晩期の各期の遺物がⅡ層及びⅢ層上面において出土している。

(1)　土器

1から13は深鉢形土器である。

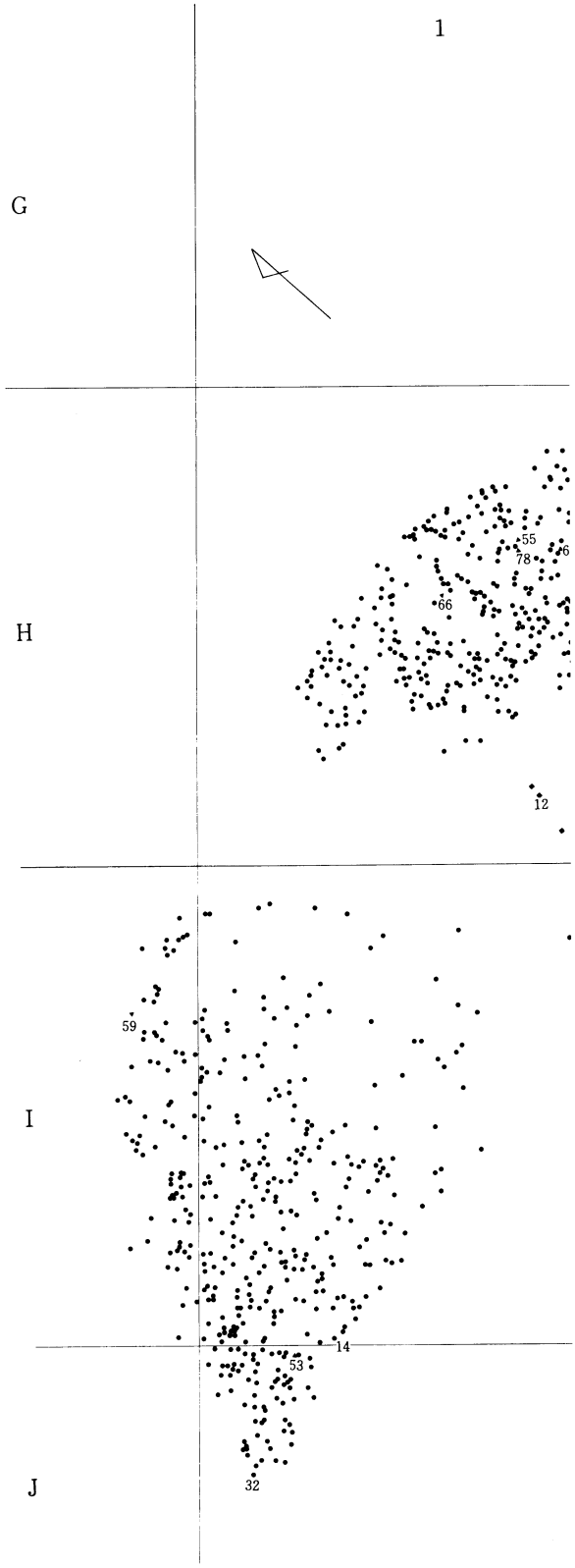
1は胴部片で，短沈線による幾何学文を施すものである。

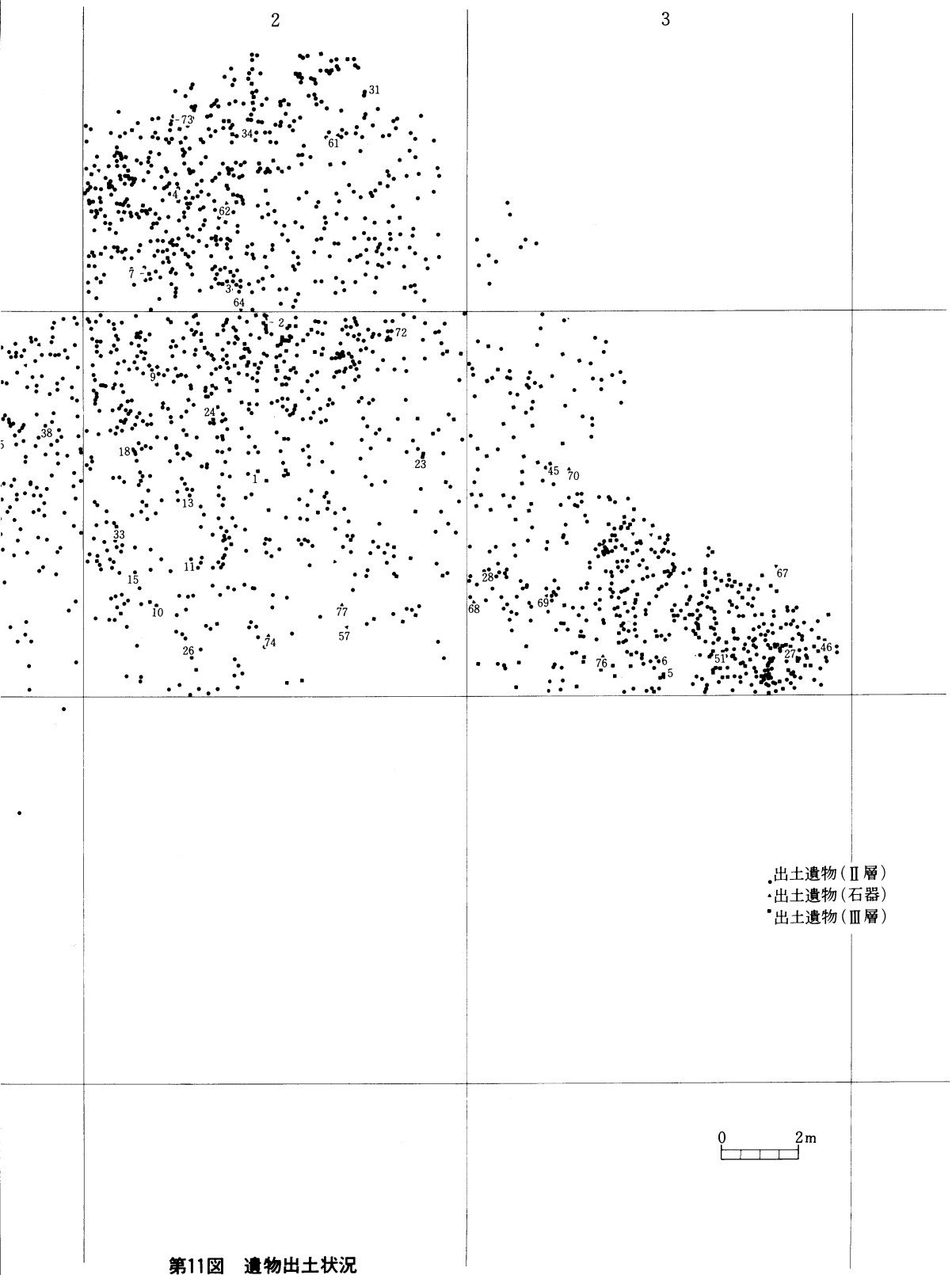
2は口縁部が内湾し縄文が口縁部まで施され，ヘラ施状文具により連続する刺突文を施すものである。現存で2段の刺突が観察される。3は頸部から胴部にかけての破片である。頸部でくびれ，口縁部は欠損しているが大きく内湾してキャリパー状を呈するものと考えられる。頸部以下には縄文を転がし，頸部付近は縄文を施した後になで消している。内面の整形はヘラ削りである。4は口縁部外面に凹線を横位に施し，外傾する口唇部に凹点を施すものである。

5・6は口縁部が内傾したのち，屈曲して外反し口唇部が平坦を呈するものであり，外面にうすい帯状の粘土板を貼り付け，ヘラ状施文具により斜位の沈線文を施すものである。6は口唇部に文様帯をもうけるために粘土紐を貼り付け，押し引き状の刻みを施すものである。7は外傾する口唇部に2本の沈線文を施し，その沈線間及び口唇部と口縁外面との境にヘラ状施文具により，刺突文を施すものであり，内外面ともナデ仕上げである。

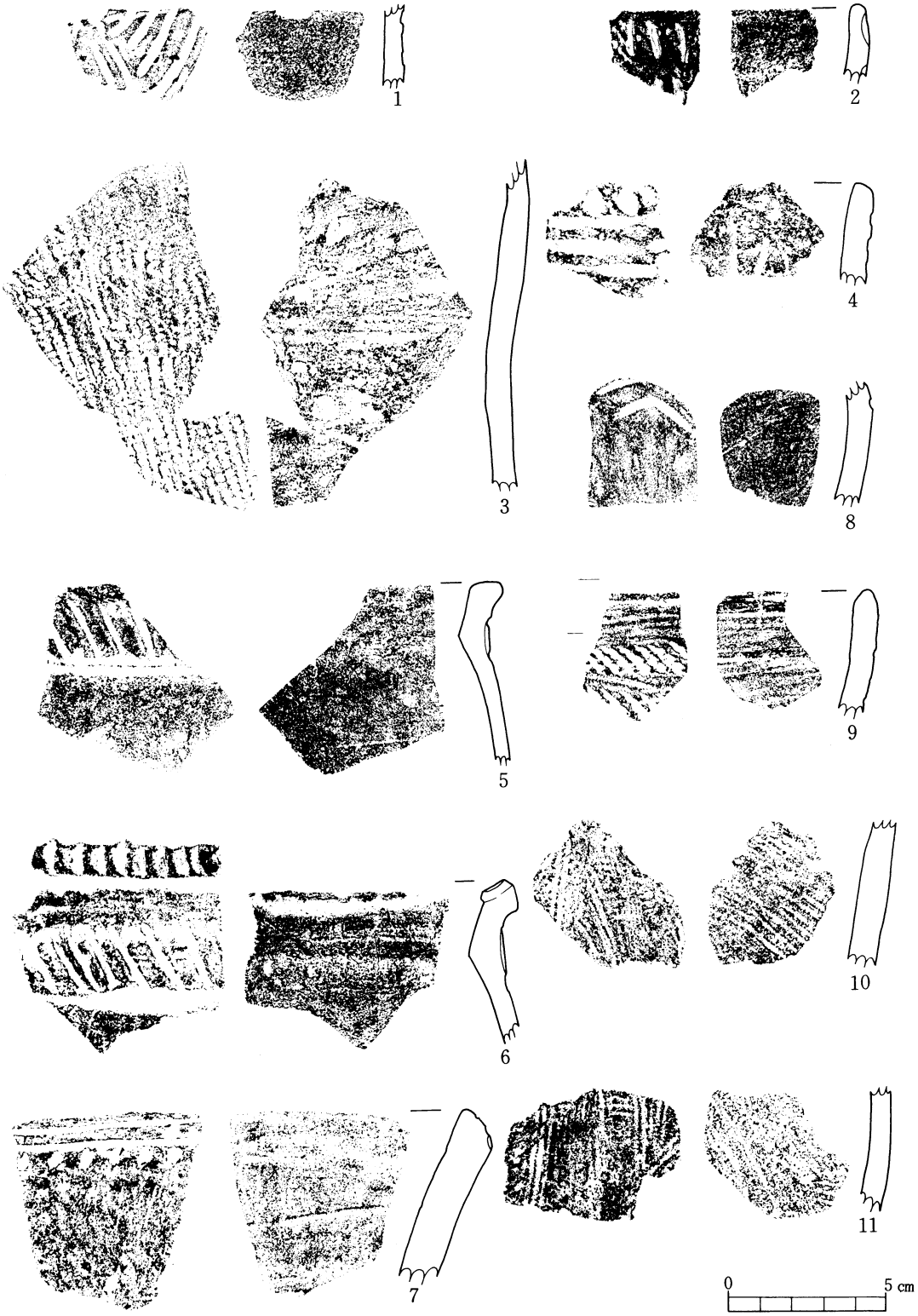
8は，胴部の屈曲する部分と考えられ，「へ」の字状の凹線文を施すものである。内外面ともていねいなヘラ磨きが施されている。9はやや内湾する口縁部で，貝殻腹縁により連続した刺突文を施すもので，内外面とも貝殻条痕である。10・11は，内外面に貝殻条痕が観察される胴部片である。

13・14は底部である。13は大きく外側へのびる底部である。平底を呈し内外部ともにヘラ磨き状の調整がうかがえるものであるが，時期については特定しがたい。13は平底ではあるが接地面が若干丸みを帯びている。外面は貝殻条痕の後，ナデ仕上げを行っている。14は，土器片を打ち欠いて円形に加工した円盤形土製加工品と思われるのである。周縁部を打ち欠いただけで，表面や裏面には手を加えていない。

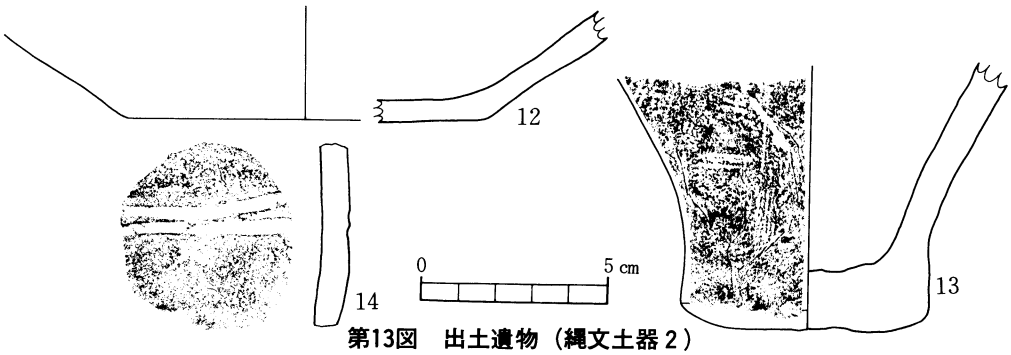

1
G
H
55
78
6
66
12
I
59
14
53
J
32



第11図　遺物出土状況



第12図　出土遺物（縄文土器１）



第13図　出土遺物（縄文土器２）

第５表　春田遺跡縄文前期～後期土器観察表

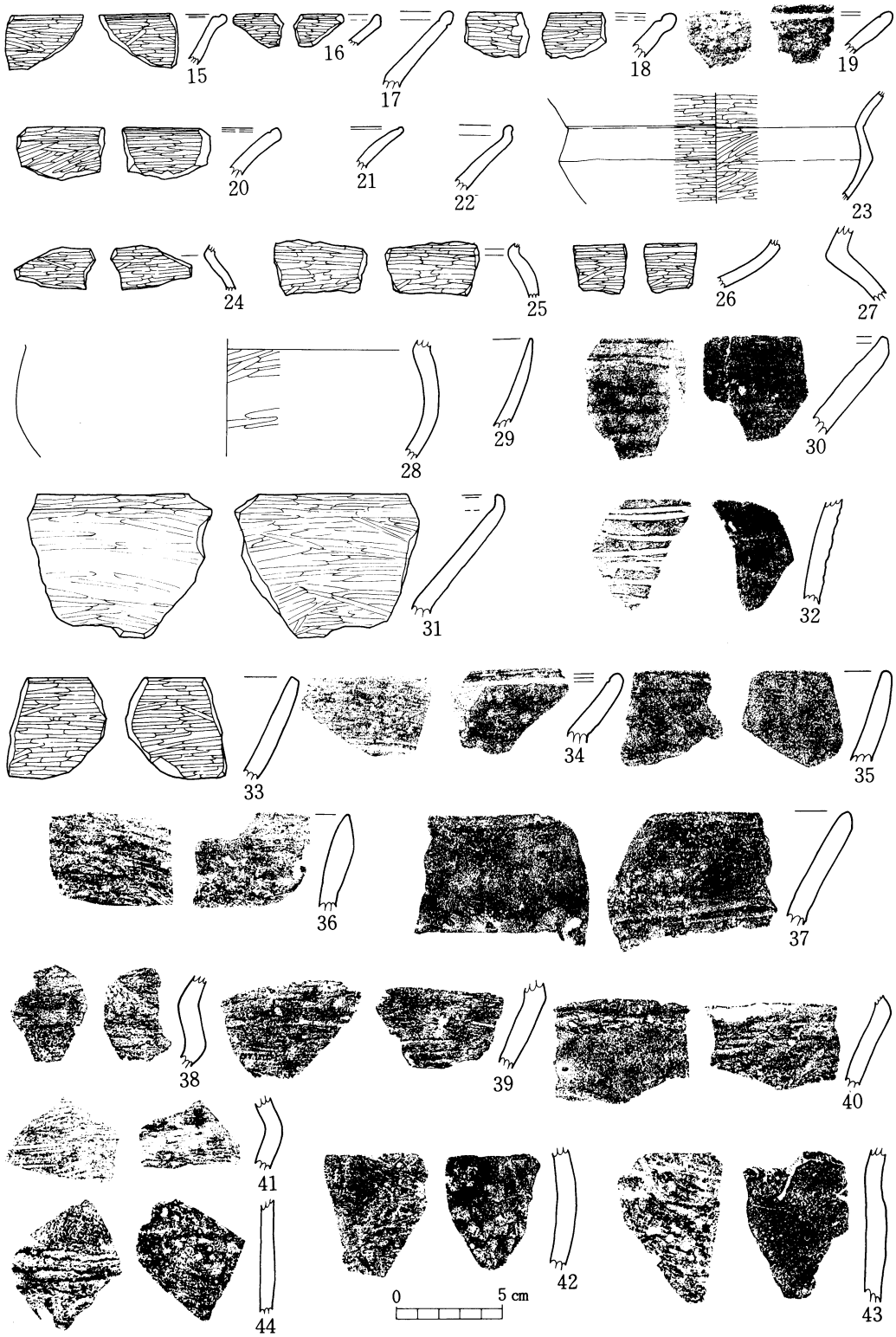
挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第12図	1	H－2	Ⅲ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	幾何学文，煤付着
	2	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	縄文	〃	刺突文，ＬＲ
	3	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	ヘラ削り	〃，ＬＲ
	4	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	明茶褐色	ナデ	不明	凹線文
	5	H－3	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	ナデ	沈線文
	6	H－3	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
	7	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	8	H－1	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	9	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻刺突文
	10	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	11	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
第13図	12	H－1	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	ヘラ磨き	ナデ	時期不明
	13	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	貝殻条痕	〃	
	14	I－1	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	ナデ	〃	メンコ・煤付着

15から51は縄文時代晩期の土器である。

15から22は浅鉢形土器の口縁部片である。15は口縁部が短く外反し，口縁部内面に段を有するもので，内外面ともヘラ研磨である。16は口縁部が直行するもので，内外面ともヘラ研磨であり，内面に若干の煤の付着が認められる。18から21は口縁部内面に一条の沈線を施すものであり，内外面ともヘラ研磨である。17は口縁部内外面に一条の沈線を施すものであり，内外面ともヘラ研磨である。

23から28は浅鉢形土器の胴部片である。23は頸部と胴部で屈曲するもので，胴部の屈曲部には稜を有する。24・25及び26は胴部，頸部の屈曲部で，24・25は胴部に最大径があるものと考えられ，内外面ともヘラ研磨である。27・28は胴部が球状を呈すると考えられるものである。

29から37は，深鉢形土器の口縁部片である。29は口縁部が若干内湾し，先端がとがるもので器壁は薄い。30・31は口縁先端が若干内湾するもので，内外面ともヘラ研磨である。30は口縁部先端を平坦におさめるもので，31は口縁内面にくぼみを有するものである。32は数条の沈線を有するもので，口

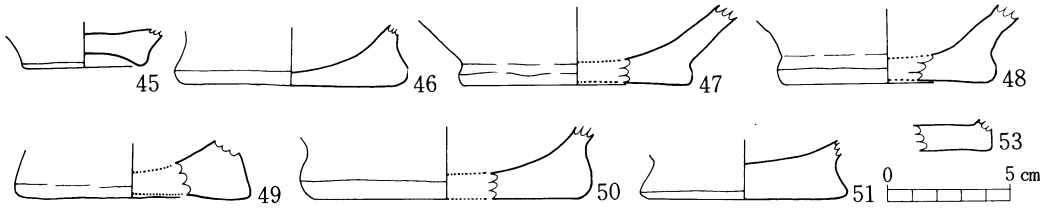


第14図　出土遺物（縄文土器３）

縁部破片と思われるが傾きは不明である。33から35は口縁部が内湾するものである。33は内外面ともヘラ研磨で，外面に少量の煤の付着が認められる。34は，口縁内面に一条の稜を有する。36・37は口縁部が直行するものである。36は口縁部が肥厚し，内外面ともヘラ削りである。

37から43は深鉢形土器の胴部片である。38から44は屈曲する胴部で，38は胴部で屈曲内湾し，頸部で外反して口縁部へ至る器形と考えられ，屈曲部の稜線が明瞭である。39から44も屈曲する胴部であるが，小片のため器形等は明らかでない。42は内外面ともナデ仕上げ，43は外面がヘラ削り，内面がナデ仕上げ，44は内外面ともヘラ削りの後ナデ仕上げである。

45から51は深鉢形土器の底部と考えられるものである。45は上げ底状を呈するものである。46から51は平底を呈するもので，底面は張り出し，たちあがりはいったん中に入ってから外開きで立ち上がるものである。52は平底を呈し，底面からの立ち上がりはまっすぐである。小片のため，その他の特徴については不明であり，時期についても疑問が残る。



第15図　出土遺物（縄文土器４）

第６表　春田遺跡縄文晩期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第14図	１５	Ｈ－２	Ⅱ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	口縁内面に段
	１６	Ｈ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	１７	Ｇ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	口縁内外面に沈線
	１８	Ｈ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	口縁内面に沈線
	１９	Ｇ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
	２０	Ｈ－３	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃
	２１	Ｇ－２	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃
	２２	Ｉ－１	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	２３	Ｈ－２	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	灰茶褐色	〃	〃	
	２４	Ｈ－２	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	２５	Ｇ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	２６	Ｈ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	２７	Ｈ－３	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	ナデ	
	２８	Ｈ－３	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	不明	ヘラ研磨	
	２９	Ｈ－２	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
	３０	Ｈ－２	溝	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第14図	31	G－2	Ⅱ	石英，長石，角閃石	良好	黒茶褐色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	外面に煤付着
	32	J－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色		ナデ	沈線文
	33	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	
	34	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヘラ磨き	口縁内面に沈線
	35	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色		ナデ	外面に煤付着
	36	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ヘラ削り	ヘラ削り	
	37	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	
	38	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ヘラ削り	〃	
	39	H－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	工具ナデ	工具ナデ	外面に煤付着
	40	H－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	
	41	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	条痕後ナデ	条痕後ナデ	外面に煤付着
	42	H－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ナデ	ナデ	〃
	43	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ヘラ削り	ナデ	
	44	H－2	溝	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	内外共ヘラ削り後ナデ		外面に煤付着
第15図	45	H－3	Ⅲ	〃 〃 〃	やや良	茶褐色			器壁があれている
	46	H－3	Ⅱ	〃 〃 〃	良	〃	ナデ	ナデ	
	47	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	48	H－2	溝	〃 〃 〃	〃	〃	〃	工具ナデ	
	49	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	
	50	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	51	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	52	H－2	溝	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	時期不明，内面灰黒色

(2) 石器（第16図～第17図）

縄文時代の石器はⅡ層，Ⅲ層において石鏃・石匙・スクレーパー・加工痕のある石器・剥片・石核・磨製石斧・すり石・石錘等が出土した。これらの石器がどの時期に伴うものか確定は困難であるが，出土した縄文式土器が前期から晩期であることから，ここでは，縄文時代に伴うものとして取り扱いたい。

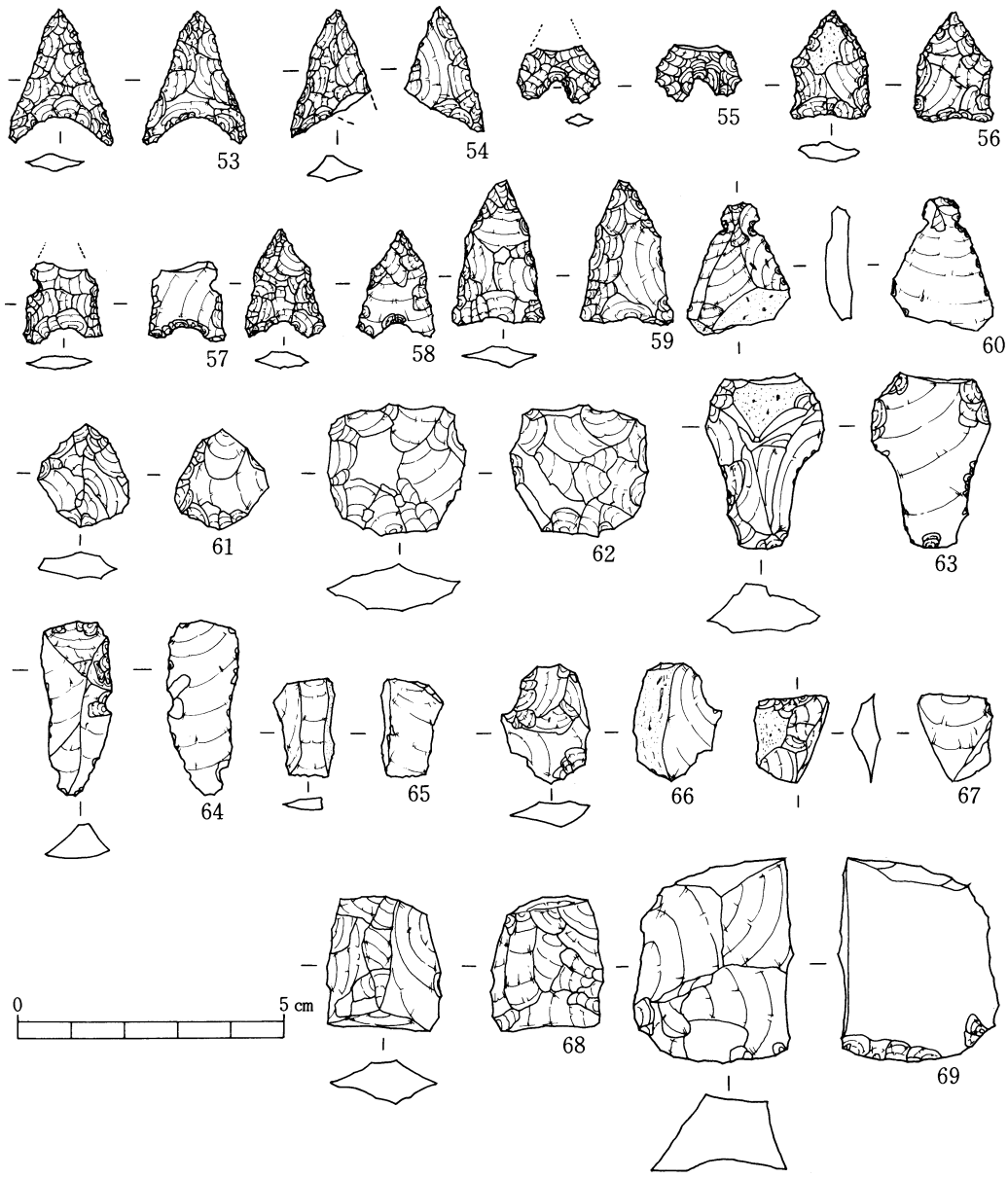
石鏃（第16図）

石鏃は全部で７点出土している。石材についてみてみると黒曜石３点，チャート２点，頁岩１点，玉髄１点である。これらは，形状において二等辺三角形，異形（五角形）の２種類に分けられる。

53～55は，二等辺三角形を呈する石鏃である。53は基部が凹基でＵ字状に抉れるものである。

54は一方の脚部を欠損しているため，抉りの深さについては明らかでない。55は，基部が凹基でやや抉りの深いものである。先端部は欠損しており，二等辺三角形あるいは正三角形の形状を呈すると考えられるものである。

56から59は異形の石鏃である。両側縁に突起を有し五角形を呈するもので，56・59がチャート57・58が黒曜石である。



第16図　出土遺物（縄文石器１）

石匙（第16図）

60は縦長の剥片を素材とした縦型の石匙であり，石材は黒曜石である。

削器（第16図）

削器は2点出土している。61は横長の剥片を利用し，側縁部に片面からのていねいな調整剥離を施している。62は，両面から全面にやや粗な調整剥離を施しているものである。

加工痕・使用痕のある石器（第16図）

63・64は縦長の剥片を利用したものである。63は側縁部及び端部に加工が施されており，64は側縁部に使用によると思われる刃こぼれが見られる。

剥片・石核（第16図）

65・67は縦長の剥片，66は横長の剥片である。石材は，65・66が黒曜石，67が玉髄である。68・69は不定形の剥離面をもつ石核である。石材は68がチャート，69が玉髄である。

石斧（第17図）

石斧は磨製石斧が2点出土している。70はやや小型の石斧で，風化により研磨痕は部分的にしか観察しえない。刃部は両刃である。71は全面に研磨が施され，刃部には使用によると思われる刃こぼれがみられる。刃部は両刃である。

すり石

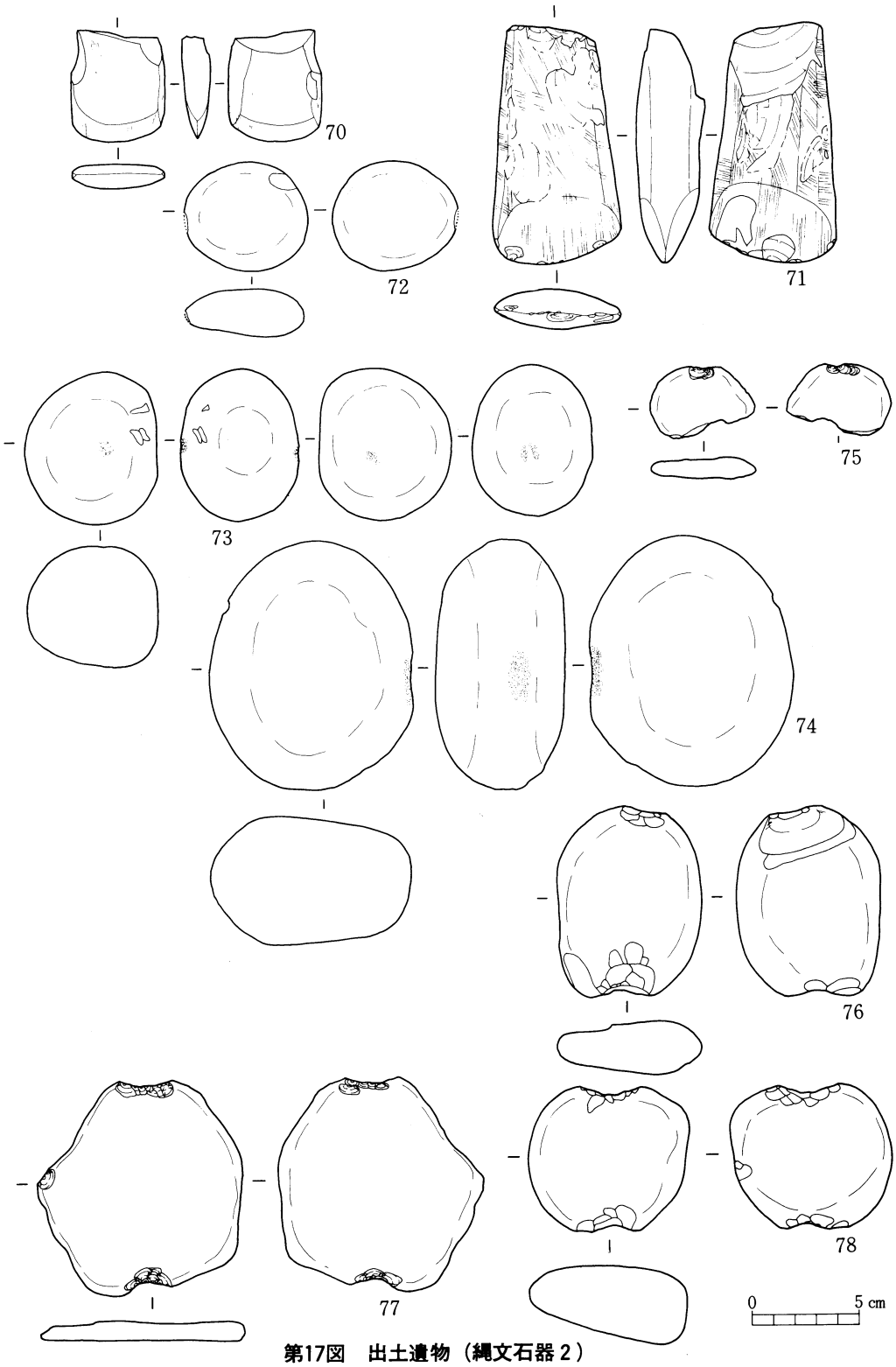
すり石は3点出土している。72は，偏平な楕円形を呈するもので小型である。73は全面に作業面が認められ，特に側面は著しい。また，一部に敲打の痕跡も認められる。74は両面に作業面が認められ，側面に敲打の痕跡が認められる。

石錘

石錘は4点出土している。75・77は偏平な石を素材としたものである。76は楕円形の石を素材としたもので長軸に抉りを設けている。78は円形の石を素材としたものである。

第7表　春田遺跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	最大重g	石材	備考
第16図	53	J－1	Ⅱ	石鏃	2.5	1.9	0.3	0.81	頁岩	
	54	H－3	Ⅱ	〃	(2.4)	1.4	0.45	(1.0)	玉髄	
	55	H－1	Ⅱ	〃	(1.05)	1.5	0.2	(0.48)	黒曜石	
	56	H－1	Ⅱ	〃	2.0	1.5	0.3	1.09	チャート	
	57	H－2	Ⅲ	〃	(1.5)	1.4	0.2	(0.6)	黒曜石	
	58	H－1	Ⅱ	〃	2.0	1.4	0.25	0.62	〃	
	59	I－0	Ⅰ	〃	2.7	1.2	0.35	1.46	チャート	
	60	H－2	Ⅱ	石匙	2.5	1.9	0.4	1.42	黒曜石	
	61	G－2	Ⅱ	削器	1.9	1.7	0.4	1.3	玉髄	
	62	G－2	Ⅱ	〃	2.4	2.5	0.8	6.05	〃	



第17図　出土遺物（縄文石器２）

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器　　種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	最大重g	石　材	備　考
第16図	63	H－3	Ⅱ	加工痕のある 石器	3.3	2.15	0.9	4.85	玉髄	
	64	G－2	Ⅱ	使用痕のある 石器	3.3	1.3	0.6	1.91	黒曜石	
	65	H－1	Ⅱ	剝　片	1.85	1.15	0.2	0.52	〃	
	66	H－1	Ⅱ	〃	2.2	1.6	0.45	1.52	〃	
	67	H－3	Ⅰ	〃	2.65	1.4	0.45	1.21	玉髄	
	68	H－3	Ⅱ	石　核	2.5	2.0	0.9	4.73	チャート	
第17図	69	H－3	Ⅰ	〃	3.8	2.8	1.4	16.82	玉髄	
	70	H－3	Ⅲ	磨製石斧	(8.25)	4.4	1.15	(46)	粘板岩	
	71	H－8	Ⅰ	〃	11.45	6.0	1.95	308	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	
	72	H－2	Ⅱ	すり石	5.2	5.9	2.25	85	安山岩	
	73	G－2	Ⅱ	〃	7.1	5.2	5.65	356	〃	
	74	H－2	Ⅲ	〃	11.8	9.4	6.0	875	真珠岩	
	75	H－3	Ⅲ	石　錘	(4.9)	2.9	1.0	(13)	安山岩	
	76	H－3	Ⅲ	石　錘	9.0	6.6	2.66	205	安山岩	
	77	H－2	Ⅲ	〃	10.1	9.7	0.95	200	〃	
	78	H－1	Ⅱ	〃	6.8	7.65	3.6	220	花崗斑岩	

3　**古墳時代の遺物**（第18図～第19図）

(1)　**土器**（第18図～第19図）

古墳時代の土器は，甕形土器，鉢形土器，壺形土器，坩形土器，高坏形土器等が出土している。

79～114 は甕形土器である。79～83は口縁部で，79～82は外反するものである。83は復元口縁径27cmを測る。口縁部は直行し，頸部には断面三角形の貼付け突帯を有するものである。

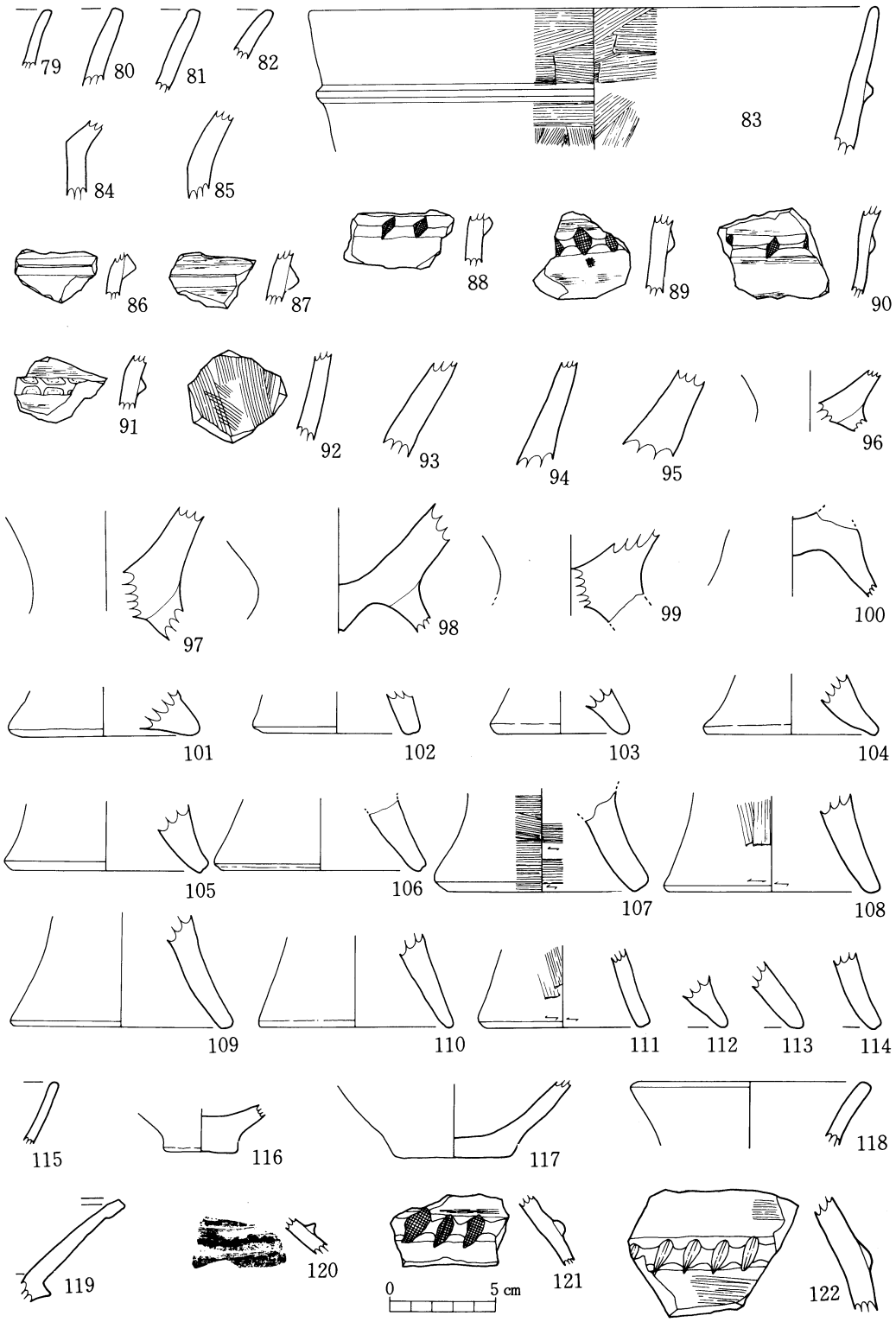
86～91は頸部であり，いずれも頸部で外反するものである。86・87は刻みを施さない断面三角形の貼付け突帯を巡らし，88～90は布目の痕跡をもつ刻み目突帯を巡らすものであり，91は粘土紐つまみ出し状の突帯を巡らすものである。

92～95は胴部片であり，92は外面にハケ目が強く残るものである。96～100 は底部と胴部の接合部分であり，98は外底部につまみ出し状の突起を有するものである。

101 ・114 は底部で上げ底の脚台である。101 は浅い上げ底の脚台である。

111 ・117 は鉢形土器である。115 は鉢形土器の口縁部であるが小片のため器種については疑問が残る。116 は平底で，底部からまっすぐに立ち上がり外へ開くものである。117 は安定した平底を呈し，外側へ開くものである。

118 ～126 は壺形土器である。118 は外反する口縁部である。119 は断面三角形の突帯を巡らした，しまった頸部から口縁部は直線的に外反し，端部はわずかに肥厚させ，口唇部は平坦にお



第18図　出土遺物（古墳土器１）

さめる。調整は内外面ともナデ調整である。古墳時代の壺形土器の中で扱ったが，口縁部のみの破片のため全体の形状については知りえず，また時代についても疑問が残るものである。

120 ～124 は胴部片である。120 ～122 ，124 は肩部に突帯を巡らすものである。120 は刻みのない断面三角形の突帯，121 は布目の痕跡を持つ刻み目突帯，122 は板状工具による刻み目突帯，124 は幅1.8 cmほどの貼付け突帯を巡らし，ヘラ状工具により斜位の平行沈線及び突帯上部に一条の沈線を巡らすものであり，突帯下部にも同様の沈線が施されるものと考えられる。123 は球状を呈するもので，胴最大径部に断面が半円状に近い刻み目突帯を巡らすものである。125・126 は底部付近で，丸底あるいは丸底に近い平底を呈するものと考えられる。

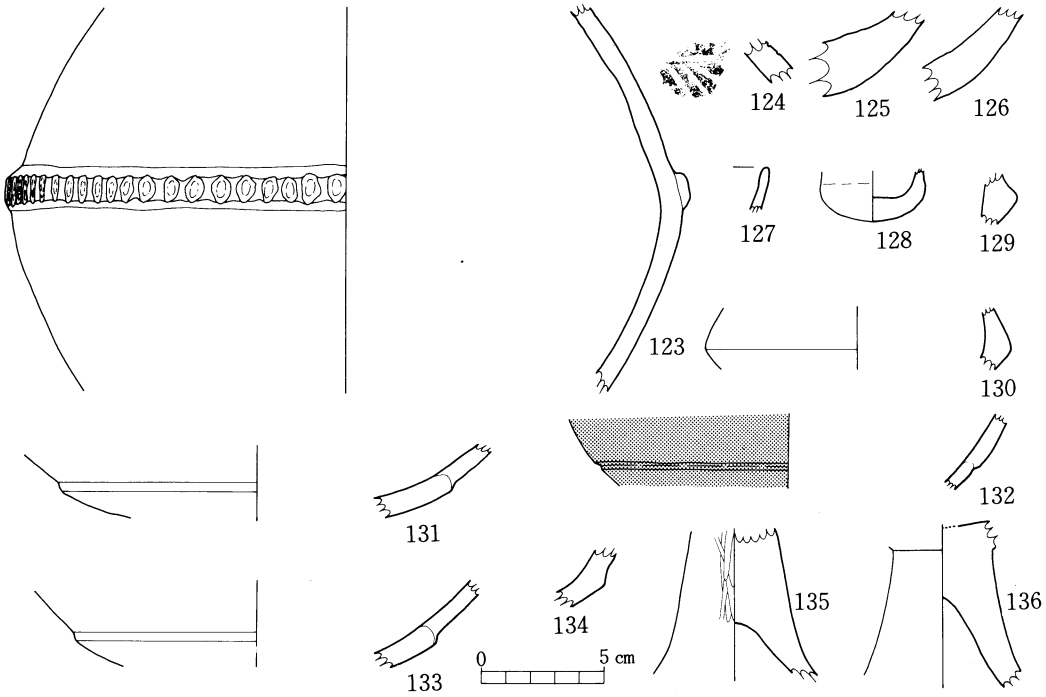
127 ・130 は坩形土器である。127 は内湾気味の口縁部である。128 は丸底で手捏状のものであり，口縁部は欠損する。129 ・130 は胴の屈曲する部位で，屈曲部に稜を持つものである。

131 ～136 は高坏形土器である。131 ～133 は，立ち上がりと底部の境に段を有するもの，134 は稜を有するものである。132 は外面に丹と思われる赤色顔料が塗布されている。135・136 は脚柱部である。脚柱は短めであり，裾は外に広がるものと考えられる。

第 8 表　春田遺跡古墳土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第19図	79	I－1	II	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
	80	H－2	II	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	81	H－7	I	〃 〃 〃	〃	〃			器壁があれている
	82	H－1	II	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	
	83	G－2	II	〃 〃 〃	〃	〃	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	突帯
	84	H－1	III	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	
	85	H－2	II	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	86	I－1	I	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	突帯，外面に煤付着
	87	H－2	II	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃 〃
	88	H－2	II	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	刻目突帯
	89	H－2	I	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃
	90	H－2	II	〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	刻目突帯外面に煤付着
	91	H－2	溝	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	つまみ出し突帯
	92	G－2	III	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	ハケ目	ハケ目	
	93	H－1	II	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ナデ	ナデ	
	94	J－1	II	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	95	H－7	I	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	内面に煤付着
	96	H－3	II	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	97	I－1	II	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	内面に煤付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第19図	98	H－7	Ⅲ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	外底部に突起
	99	H－7	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	100	Ⅰ－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	101	H－7	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	102	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	103	Ⅰ－1	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	104	Ⅰ－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	105	Ⅰ－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	106	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	107	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
	108	H－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	内外面に煤付着
	109	H－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	110	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	
	111	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	112	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	113	Ⅰ－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	114	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	115	H－1	Ⅲ	〃〃〃（精選土）	〃	〃	〃	〃	
	116	Ⅰ－1	Ⅰ	石英，長石，角閃石	〃	〃	〃	〃	丹が部分的に付着
	117	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	118	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	119	H－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	三角突帯，口縁肥厚
	120	H－3	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	三角突帯
	121	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	刻目突帯
	122	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	〃
	123	J－1	Ⅱ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色			器壁があれている
	124	J－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃			突帯，器壁があれている
	125	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	
	126	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ハケ目	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
	127	Ⅰ－0	Ⅱ	〃〃〃（精選土）	〃	明茶褐色	ナデ	ナデ	
	128	Ⅰ－0	Ⅱ	石英，長石，角閃石	〃	灰茶褐色	〃	〃	
	129	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃		丹塗り



第19図　出土遺物（古墳土器２）

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎　土	焼成	色　調	外面調整	内面調整	備　考
第19図	130	Ⅰ－1	Ⅲ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	
	131	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	132	H－1	Ⅱ	〃〃〃（精選土）	〃	赤茶褐色	ヘラ磨き	ヘラ磨き	丹塗り
	133	H－2	Ⅱ	石英，長石，角閃石	〃	茶褐色			器壁があれている
	134	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色		ヘラ磨き	器壁があれている
	135	H－1	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	ﾅﾃﾞﾍﾗ磨き	ナデ	ナデ
	136	Ⅰ－1	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	ナデ	ナデ	

4　古代・中世・近世の遺物（第20図～第21図）

古代・中世・近世の遺物はⅠ層・Ⅱ層から土師器・須恵器・青磁・白磁・染付け・陶磁器等が出土した。

(1)　土師器（第21図）

土師器は，皿・坏・椀・甕等が出土し，ろくろからの切り離しの手法もヘラ切り，糸切りによるものが混在して出土している。時期についても古代から近世までと幅があるが，ここでは一括して取り扱った。

137 ～150 は皿である。137 ・138 ・141 ・142 ・144 ・146 ・148 は復元口縁径が 7 cm～ 8 cm，140 ・143 は 9 cm，145 は6.6 cmを測るものである。139 ・149 は推定で139 が10cm，149 が13cm程と考えられる。134 ・146 ・147 は底部に糸切りの痕跡を観察することができるが，他は磨滅が著しく明瞭でない。

152 ～162 は坏である。152 ～154 は口縁部だけで底部が欠落しているため，坏か椀か判断できないが，ここでは坏として考えたい。152 ～154 は口縁部がいずれも外反するもので152・153 は端部を鋭くおさめ，154 は丸くおさめるものである。155 ・162 は底部であり，157 はヘラ，161 ・162 は糸切りの痕跡が観察できる。163 ～165 は高台を有する椀で，いずれも高台部分は貼付けである。166 は甕の口縁部である。口縁部は内外面ともにナデ，頸部内面はヘラ削りである。

167 ・168 は土製品である。167 は坏の底部に穿孔を施したもので，紡錘車への転用の可能性も考えられる。縁辺部については磨滅が著しく，調整等は明らかでない。168 は現存長3.6 cm径1.5 cmの棒状を呈するもので，若干の湾曲が見られる。

(2) **須恵器**（第20図）

165 ～174 は須恵器である。165 は甕と考えられるもので，外面が格子目叩き，内面は同心円叩きである。170 は外面が平行叩き，内面は同心円叩きの後ナデを施している。171 は外面が平行叩き，内面の調整については不明である。173 は甕と考えられるもので，外面が格子目叩き，内面は平行叩きの後ナデを施している。174 は甕の肩部付近と考えられるもので，外面が格子目叩き，内面は同心円叩きである。

(3) **青磁・白磁**（第21図）

青磁・白磁は碗・皿・盤が出土している。

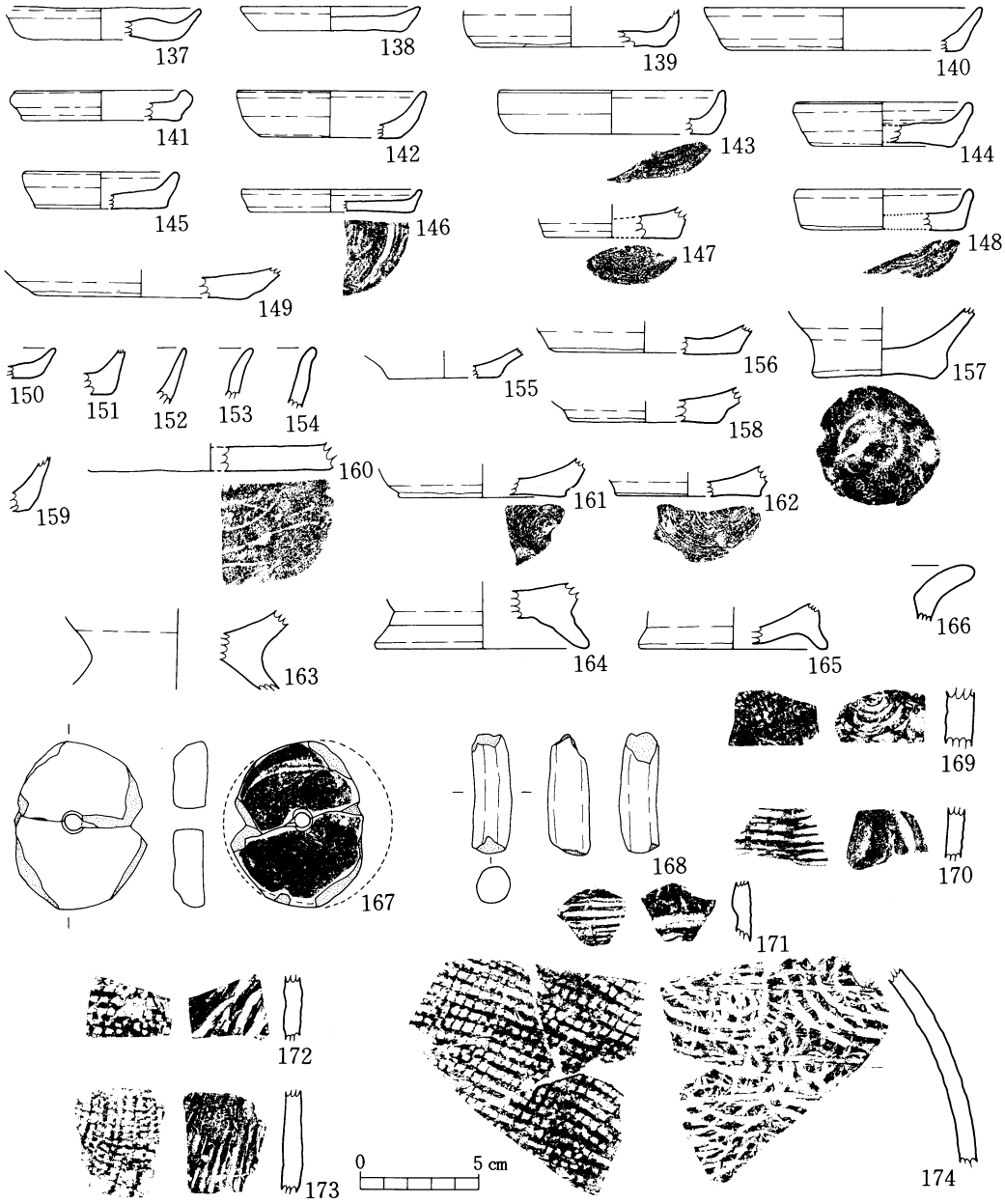
175 ～205 は青磁である。175 ～182 は口縁部が内湾する碗であり，178 ・179 はヘラ描きによる細い蓮弁文，180 は縞蓮弁文，181 は雷文風の文様を施す。183 ・184 ・185 ・186 ・187 ・188 は外反する碗である。189 ～193 は体部で193 はヘラ描きによる細い蓮弁文が施される。194 ～204 は底部である。202 は縞蓮弁文を施すもので，高台外面まで釉が施され，畳付から外底部は露胎となる。203 ・204 は見込みに陰刻が施されるもので，203 は草花文，204 は十字文と思われるものである。205 は復元底部径が15cmを測る盤である。釉は高台内面から外底部まで及ぶが，釉をかきとった痕跡が見られる。

206 ～209 は白磁である。206 は口縁が内湾する皿である。209 は皿の底部で，釉は体部下半まで施され，内底部及び高台畳付に重ね焼きの目痕が残る。208 は内湾する碗で，玉縁状を呈するものである。209 は皿の底部で，釉は外底部までおよぶ。

(4) **染付け・陶器**（第21図）

210 ～214 は染付けである。210 は碁笥底皿で，体部下半まで釉を施すが，一部に高台までおよぶ釉だれが見られる。見込みには「寿」字の文様と思われるものが見られる。211 は口縁部が若干外反し端部は鋭くおさめるもので，口縁外面に界線を巡らし，草花文を描くものである。

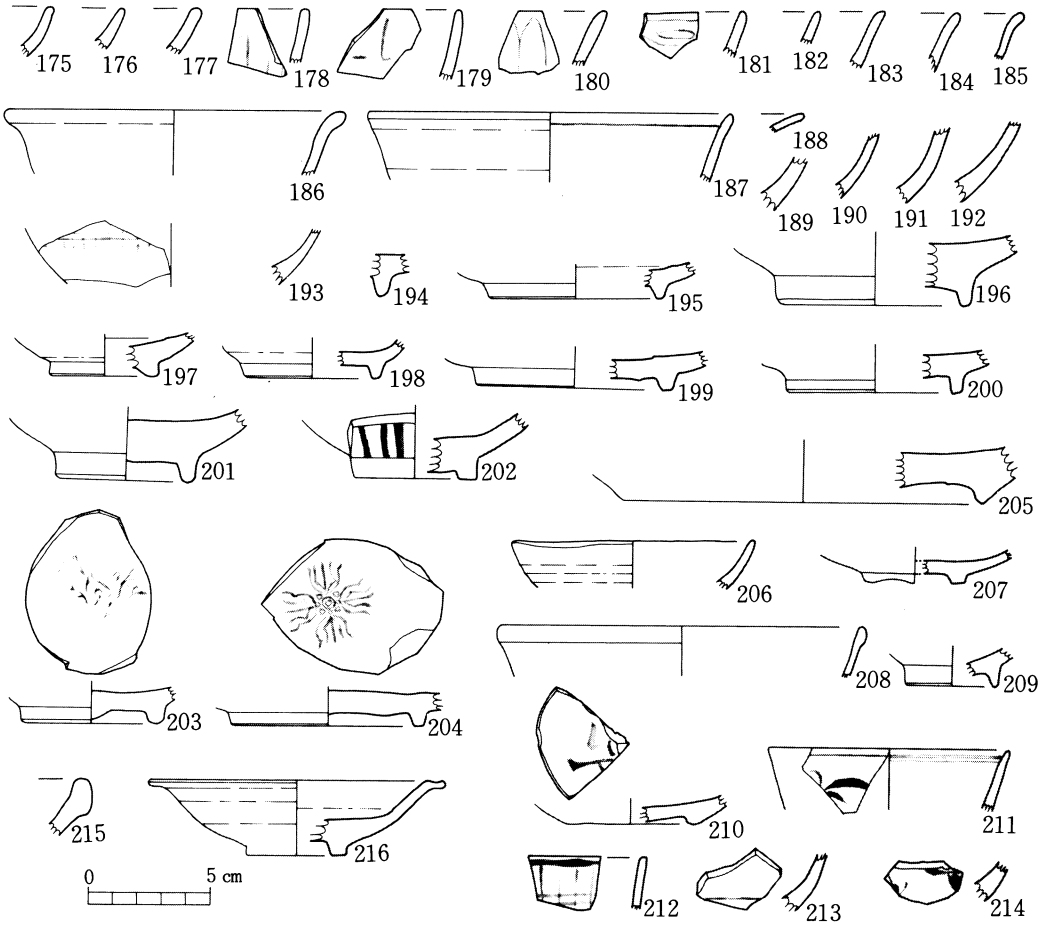
212 は筒型碗の口縁部と思われるものである。213 ・214 は碗の体部である。215 は，暗灰色を呈し口縁部は外面に肥厚するもので，東播系の鉢と考えられるものである。216 は口縁端部が外反し内面に段を持つ皿で，近世のものと考えられるものである。



第20図　出土遺物（古代・中世・近世１）

第９表　春田遺跡古代～近世土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎　土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第20図	137	G－2	Ⅱ	石英，長石，角閃石(精選土)	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	138	H－1	Ⅱ	〃〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	139	H－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	140	G－2	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	141	H－7	Ⅰ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	142	J－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	143	H－1	Ⅱ	〃〃角閃石（〃）	〃	〃	〃	〃	
	144	H－7	Ⅰ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	145	G－2	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	茶褐色	〃	〃	
	146	G－2	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	147	G－2	Ⅰ	〃〃角閃石（〃）	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	148	H－1	Ⅰ	〃〃（〃）	〃	茶褐色	〃	〃	
	149	I－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	明茶褐色	〃	〃	
	150	G－2	Ⅱ	〃〃角閃石（〃）	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	151	H－1	Ⅰ	〃〃（〃）	〃	茶褐色	〃	〃	
	152	G－2	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	153	G－2	Ⅱ	〃〃角閃石（〃）	〃	明茶褐色	〃	〃	
	154	H－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	淡茶褐色	〃	〃	内面に煤付着
	155	H－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	156	H－1	Ⅱ	〃〃角閃石（〃）	〃	〃	〃	〃	
	157	H－1	Ⅱ	〃〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	158	I－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	159	H－2	Ⅱ	〃〃角閃石（〃）	〃	〃	〃	〃	
	160	G－2	Ⅱ	〃〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	161	G－2	Ⅰ	〃〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	
	162	H－2	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	茶褐色	〃	〃	
	163	I－1	Ⅱ	〃〃角閃石（〃）	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	164	H－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	内面が灰茶褐色
	165	H－1	Ⅱ	〃〃（〃）	〃	〃	〃	〃	内面外底部が灰茶褐色
	166	H－1	Ⅱ	〃〃角閃石	〃	暗茶褐色	〃	ﾅﾃﾍﾗ削り	
	167	H－2	Ⅱ	〃〃〃（〃）	〃	茶褐色	〃		紡錘車？
	168	H－1	Ⅱ	石英，長石，角閃石	〃	〃	〃		土製品，時期不明
	169	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	格子目叩	同心円叩	
	170	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	灰茶褐色	平行ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ 後ﾅﾃﾞ	
	171	H－1	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	172	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	灰茶褐色	格子目叩	平行ﾀﾀｷ	
	173	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	ﾀﾀｷ 後ﾅﾃﾞ	
	174	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	灰白色	〃	同心円叩	



第21図　出土遺物（中世・近世２）

第Ⅴ章　平成２年度の調査

第１節　石塚遺跡

石塚遺跡は，隼人町野久美田石塚に所在する。鹿児島湾の北岸にせまる標高約146 mの通称城ノ原台地は中世の長浜城跡で現在はミカンが栽培されている。遺跡は城ノ原台地の北斜面に位置し，東・南・西の三方を囲まれた谷頭状の台地にあり，南側が標高約55m・北側が標高約50m の傾斜をもっている。北側には春花田遺跡のある微高地や国分平野が広がる。

石塚遺跡は，日本道路公団が計画している国分・隼人道路の建設に伴う分布調査により発見された遺跡で，平成２年度に県文化課が確認調査を実施した。確認調査によると，縄文時代早期・縄文時代晩期・古墳時代・中世の遺物が出土している。

確認調査の結果に基づき，本年度全面調査を実施したもので，縄文時代早期の集石遺構・土器・石器，縄文時代中期・晩期の土器・石器，古墳時代の土壙・土器・鉄鏃，奈良・平安時代の土師器，中世の土師器・土製品などの資料が得られた。

1.　縄文時代の遺構・遺物（第27図～第38図）

縄文時代は，早期・中期・晩期の各時期の遺物及び早期に伴う集石遺構が２基検出された。

(1)　遺構（第27図）

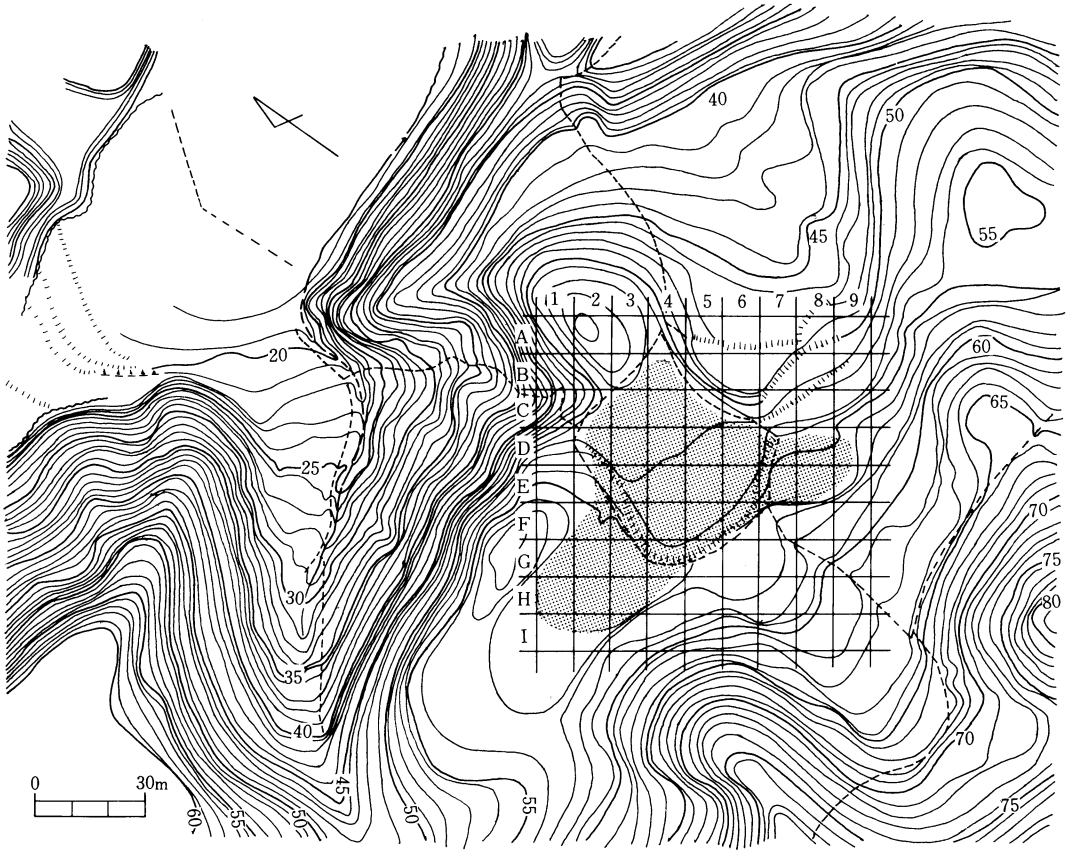
遺構について見ると，Ⅴ層中において集石遺構２基が検出された。

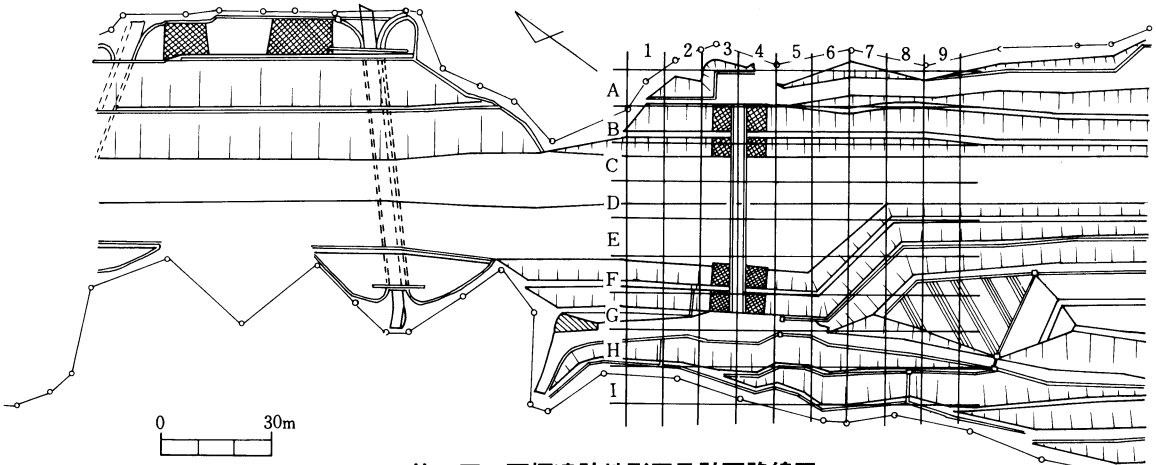
・１号集石（第27図）

１号集石は，Ｈ－２区－Ⅴ層において検出されたものである。80×80cmのほぼ円形を呈しており，礫は総数138 個を数え，10cm大の火成岩系の角礫が多く使用されている。礫のうち２・３個は赤変したかとも思われるものがあるが，集石内において焼土及び炭化物等の痕跡は認められず，火が焚かれたかどうかは明確ではない。礫を除去した後に掘り込み等の確認を行ったが遺構は検出されなかった。また，この集石に伴った土器等の遺物も出土していない。

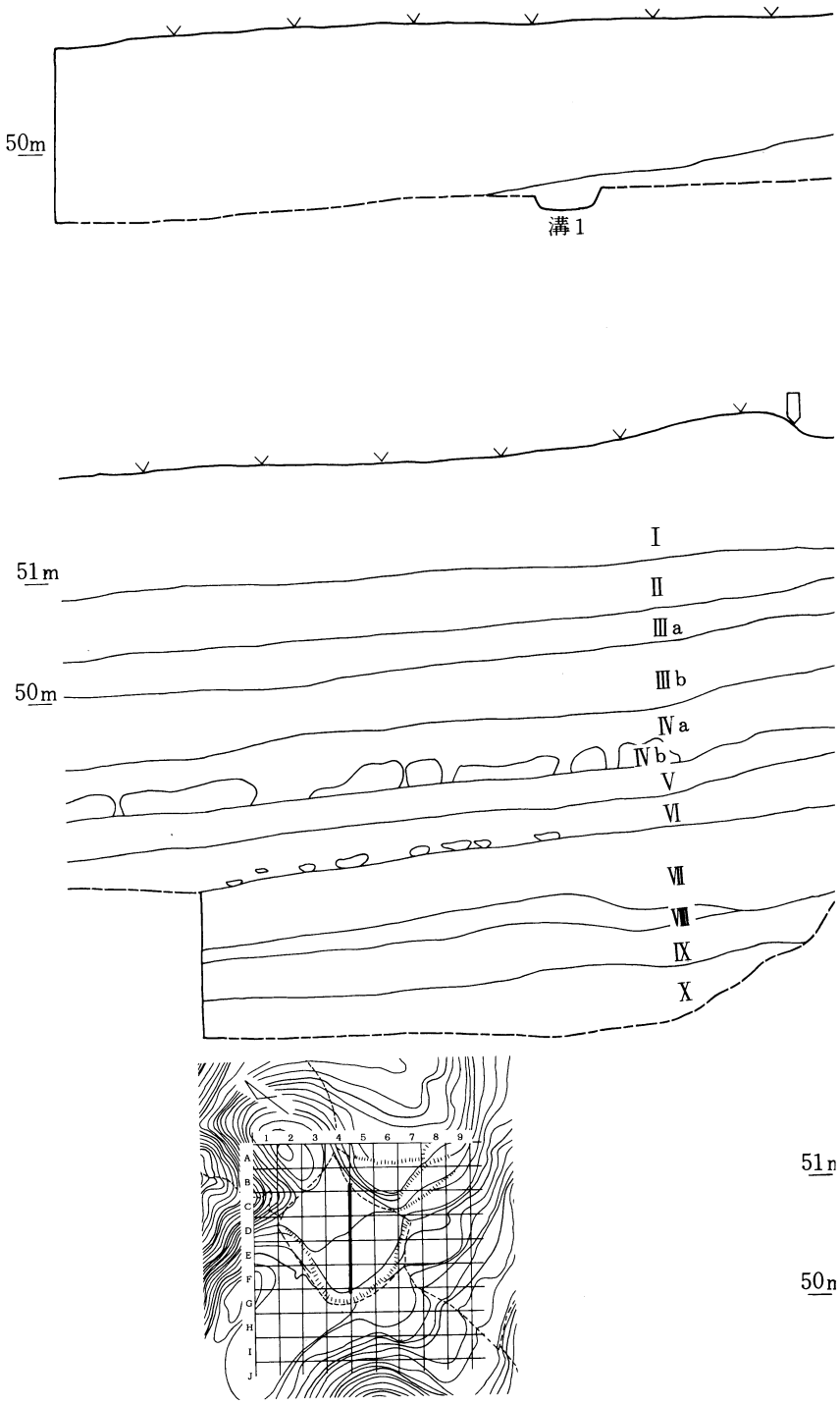
・２号集石（第27図）

２号集石は，Ｇ－３区－Ⅴ層において検出されたもので，１号集石より北東へ12mの位置にある。１号集石に比してまばらで礫数も少なく集石遺構として捉えてよいか迷ったものである。２×２ｍの範囲に32個の礫が認められる。10～15cm大の火成岩の角礫が使用されている。中央において約20個の礫の集中が見られるが，礫間には空間があり密ではない。集石内においては焼土及び炭化物等の痕跡は認められない。また，集石の下部において掘り込み等の遺構は検出されなかった。この集石に伴う土器等の遺物も出土していない。

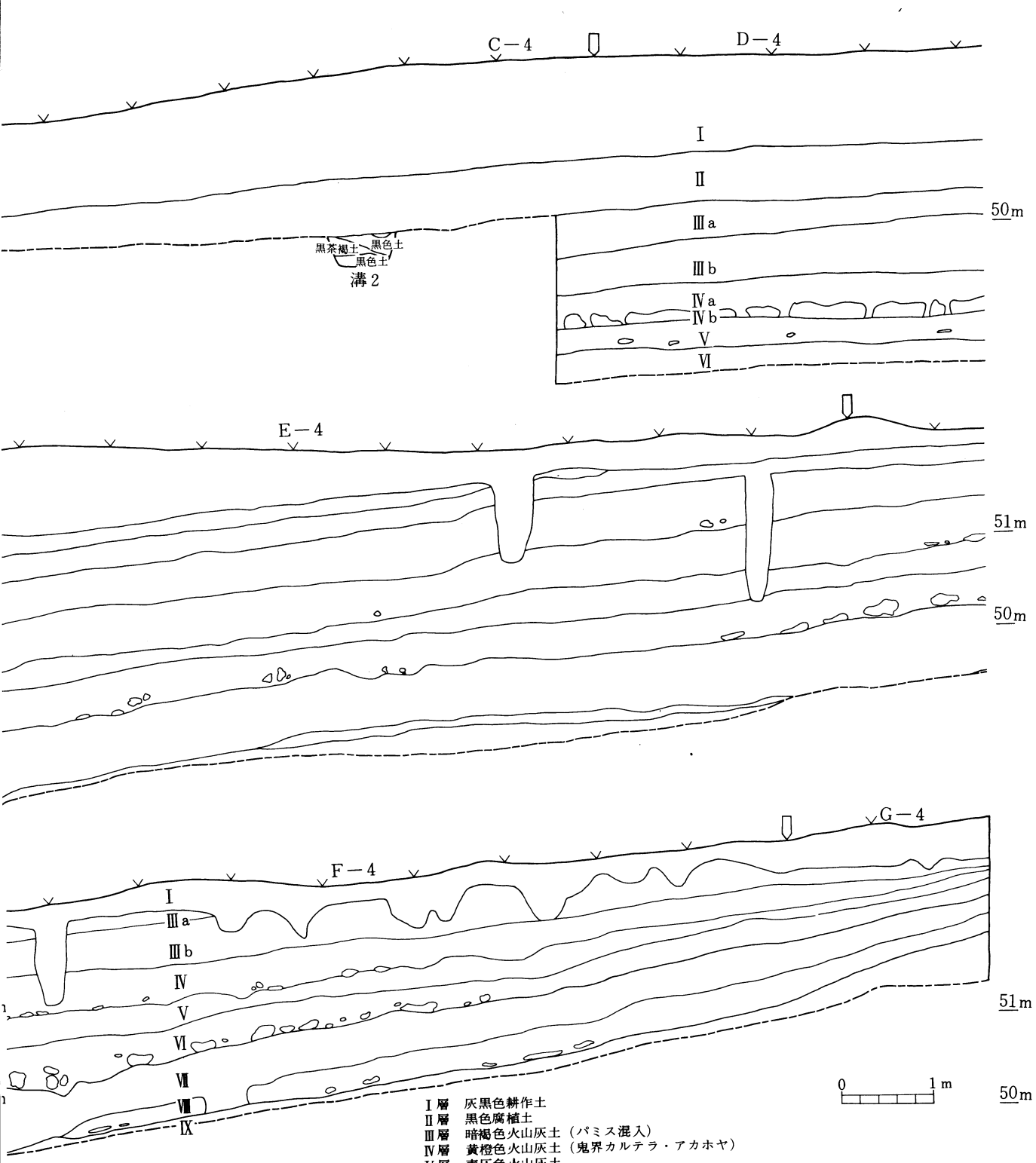




第22図　石塚遺跡地形図及計画路線図

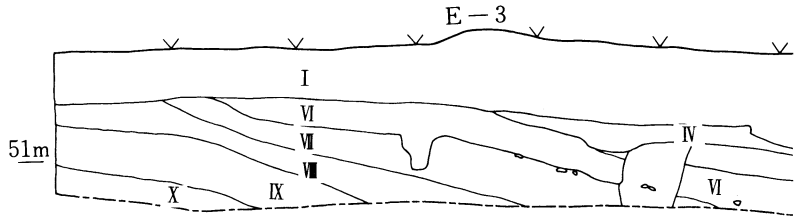

50m
溝1
51m
50m
I
II
IIIa
IIIb
IVa
IVb
V
VI
VII
VIII
IX
X
1 2 3 4 5 6 7 8 9
A B C D E F G H I J
51m
50m

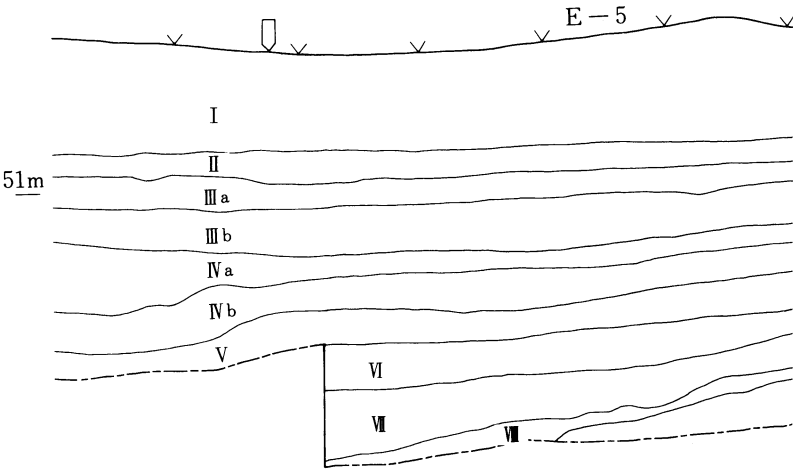
第23図　石塚

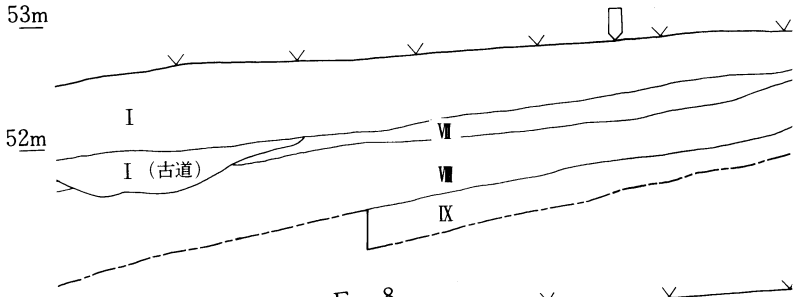


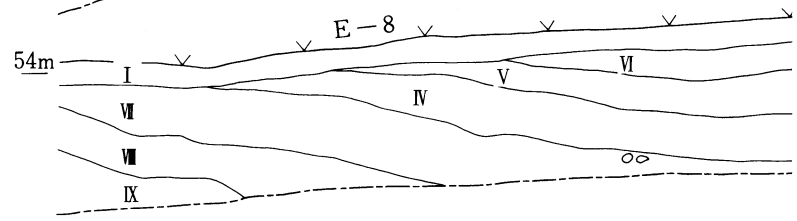
I 層　灰黒色耕作土
II 層　黒色腐植土
III 層　暗褐色火山灰土（パミス混入）
IV 層　黄橙色火山灰土（鬼界カルテラ・アカホヤ）
V 層　青灰色火山灰土
VI 層　乳白色火山灰土（粘質・軽石がブロック状に混入）
VII 層　黒褐色腐植土　（粘質・パミス混入）
VIII 層　灰白色火山灰土（サツマ軽石）
IX 層　暗茶褐色粘質土（チョコレート層）
X 層　黄色色火山灰土（姶良カルデラ・シラス）

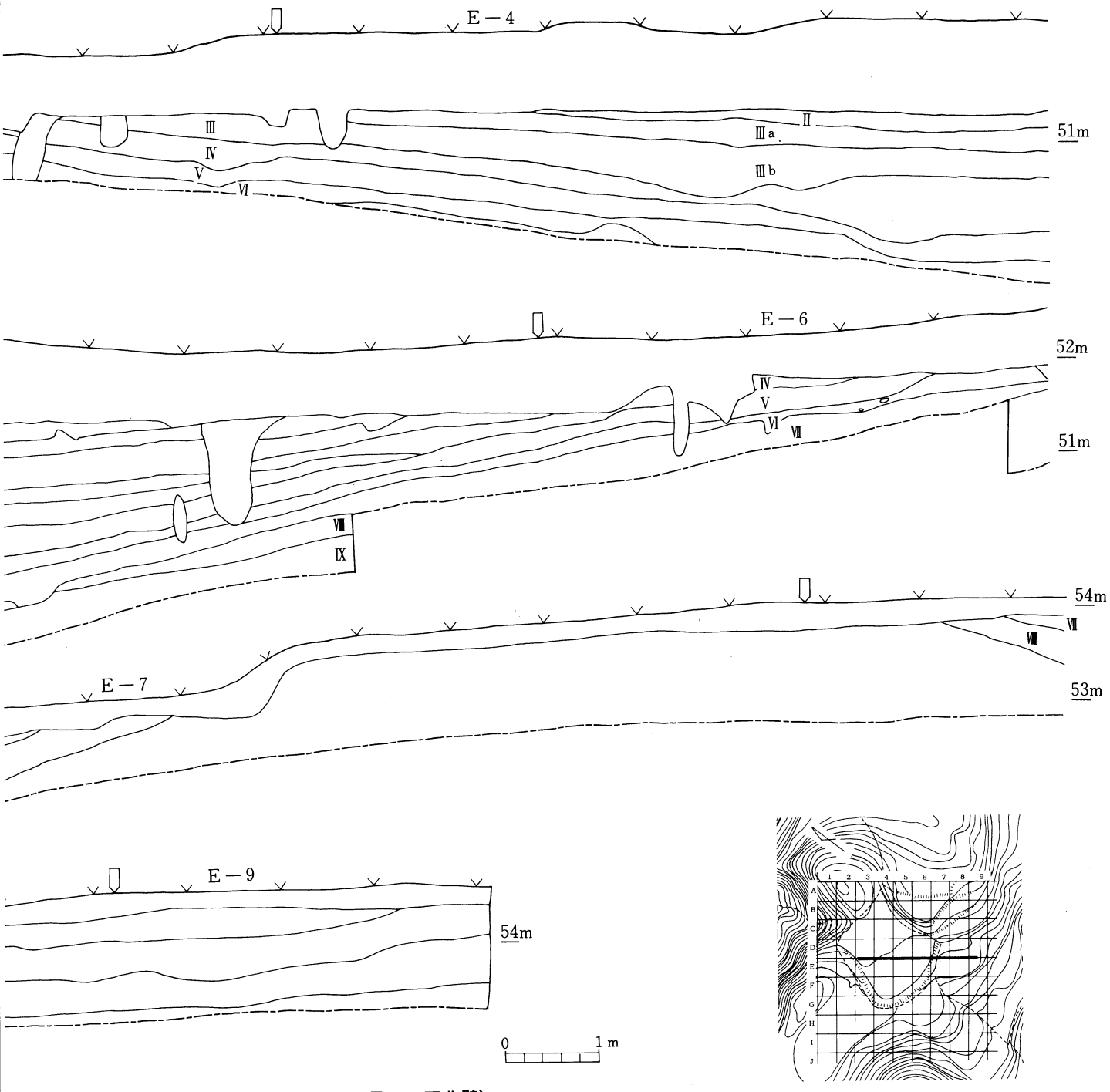
遺跡土層図１（B－４区～G－４区 東壁）


E－3
51m
I
VI
VII
VIII
IX
X
IV
VI

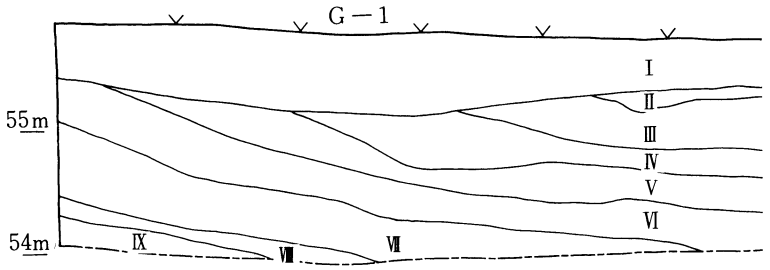

E－5
51m
I
II
IIIa
IIIb
IVa
IVb
V
VI
VII
VIII

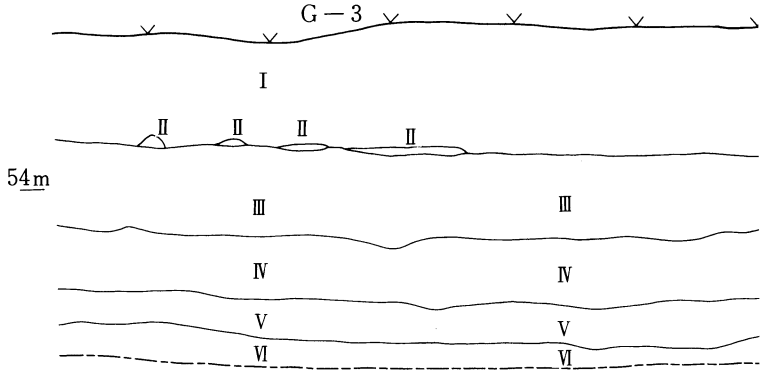

53m
52m
I
I（古道）
VII
VIII
IX

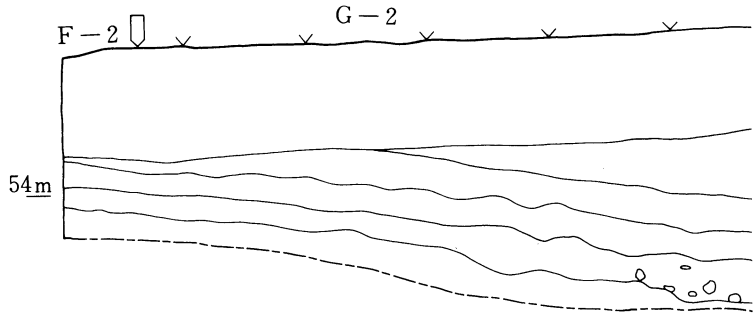

E－8
54m
I
V
VI
IV
VII
VIII
IX

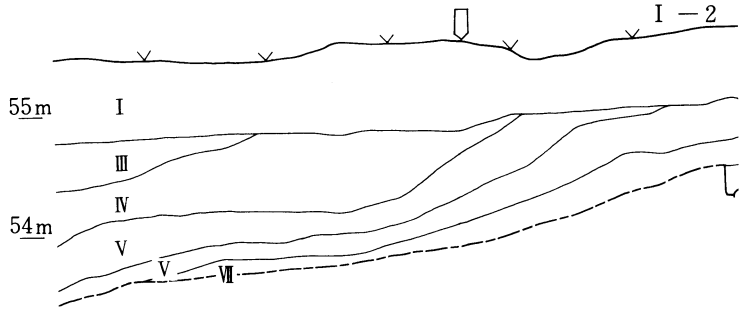


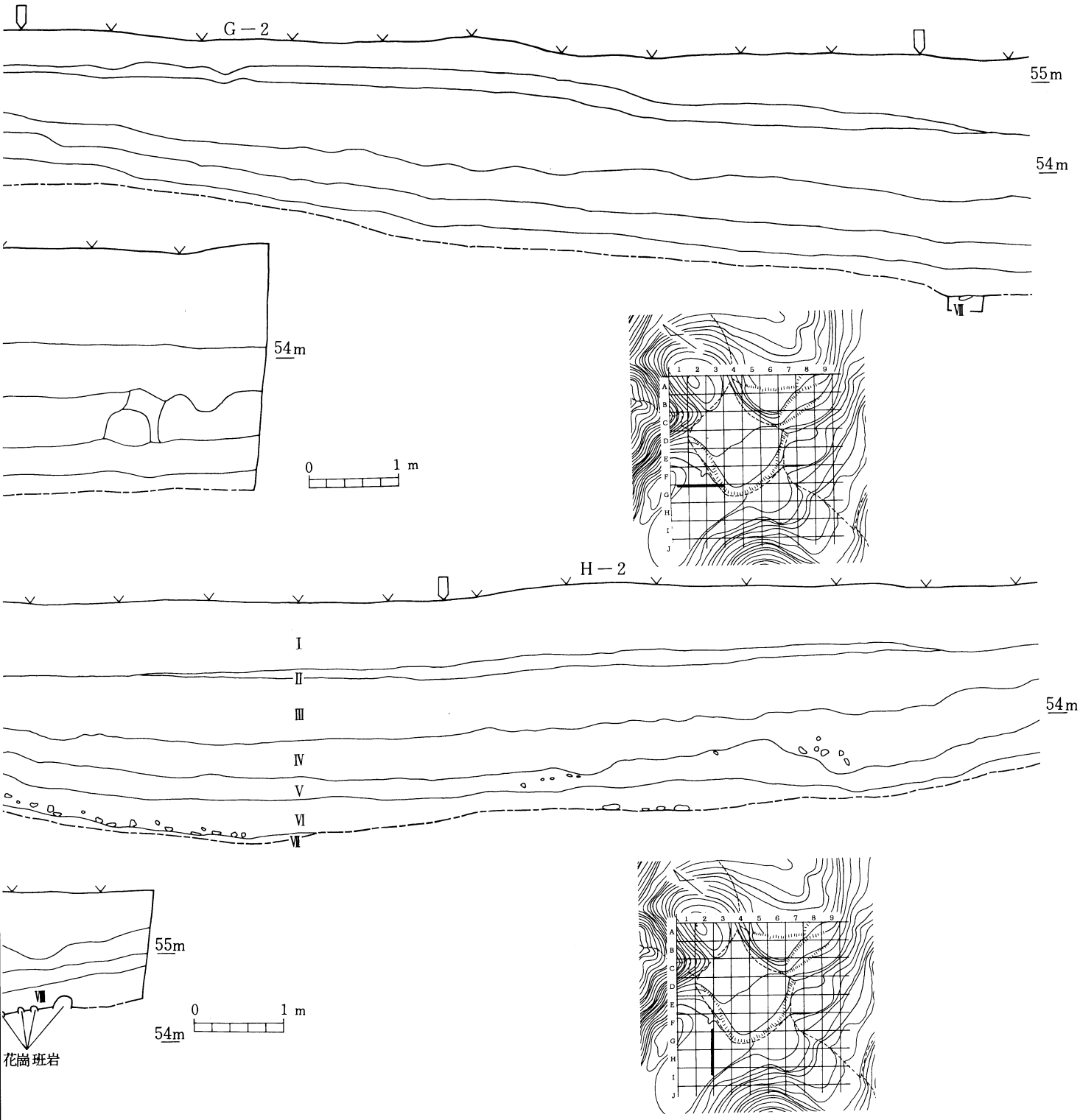
第24図　石塚遺跡土層図２（Ｅ－３区～Ｅ－９区北壁）


G－1
55m
54m
I
II
III
IV
V
VI
IX
VII
VII

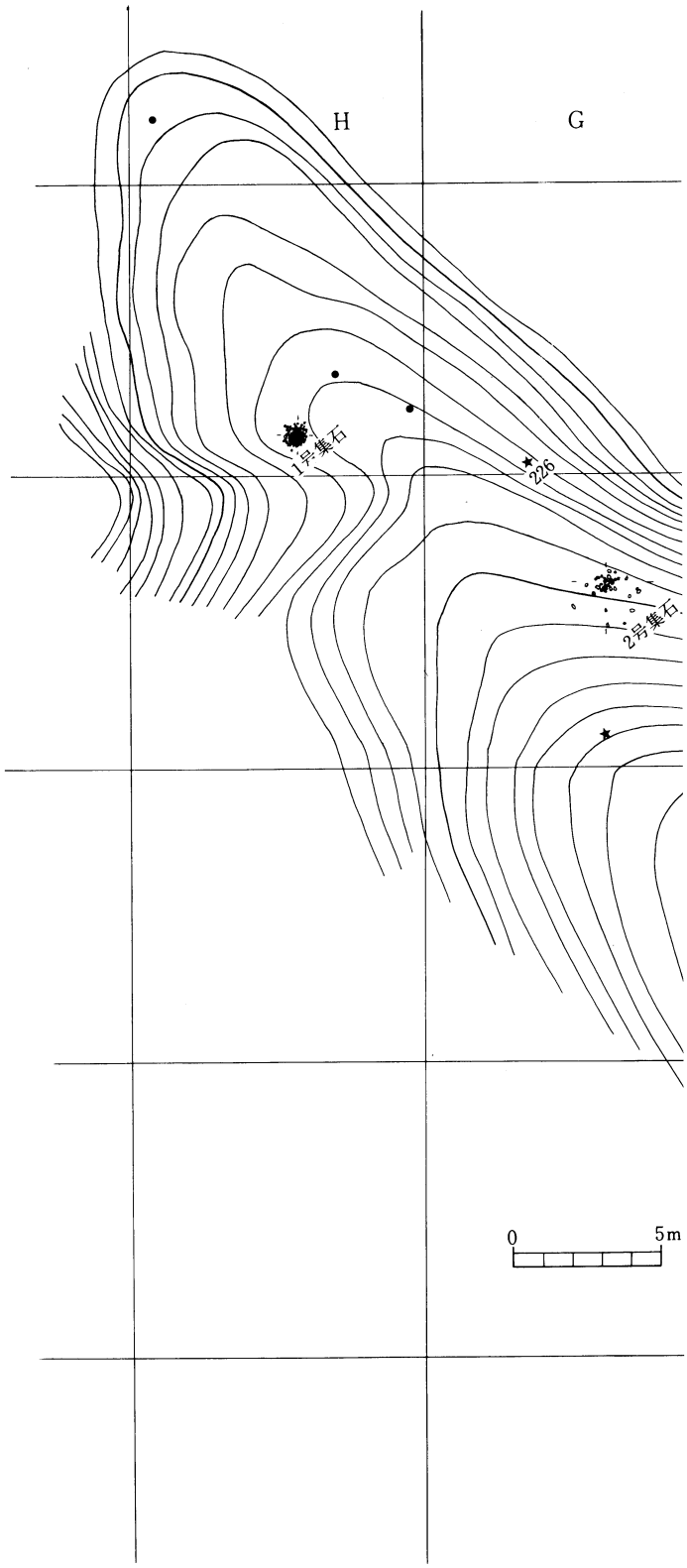

G－3
54m
I
II
II
II
II
III
III
IV
IV
V
V
VI
VI

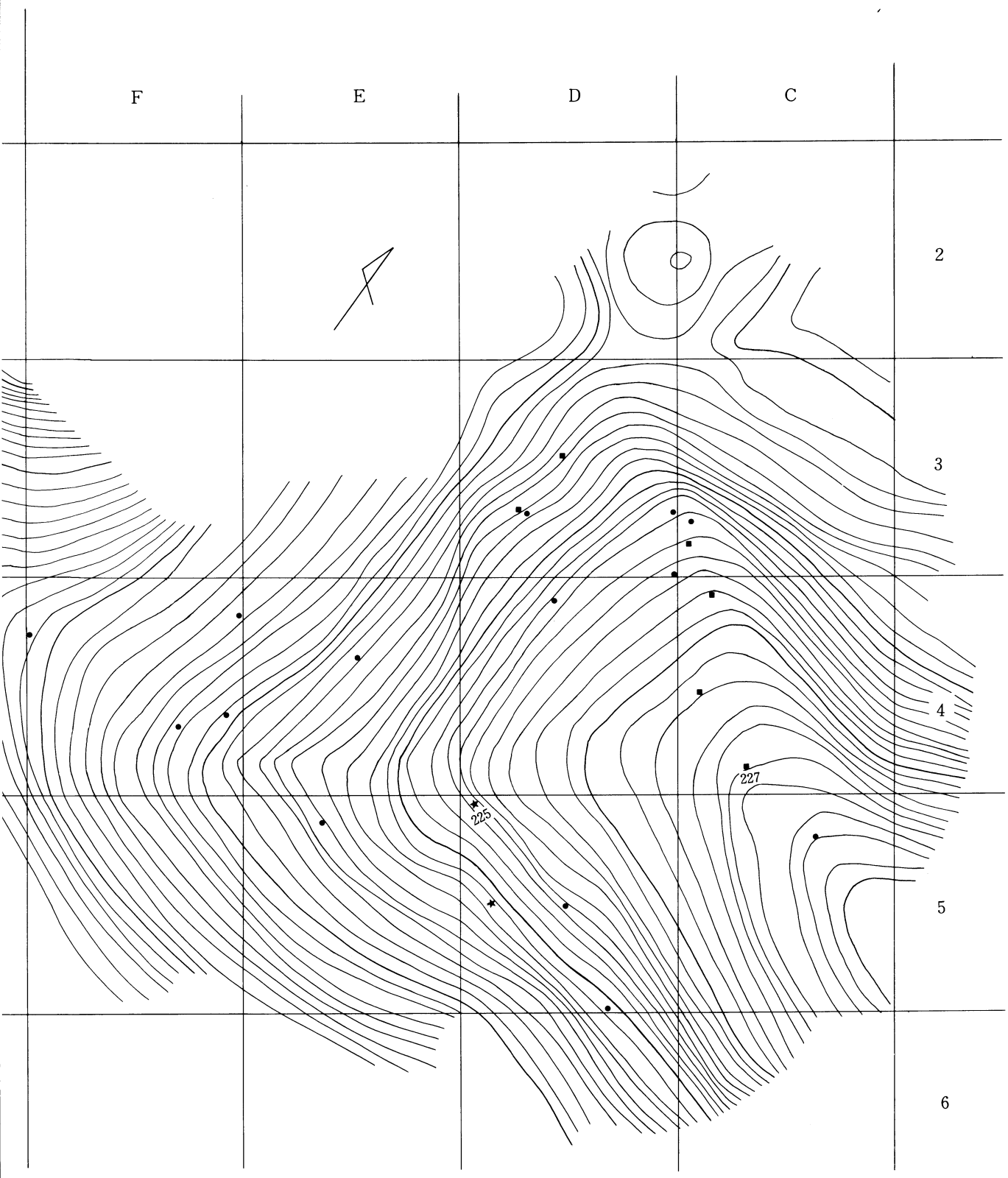

F－2
G－2
54m


I －2
55m
54m
I
III
IV
V
V
VII

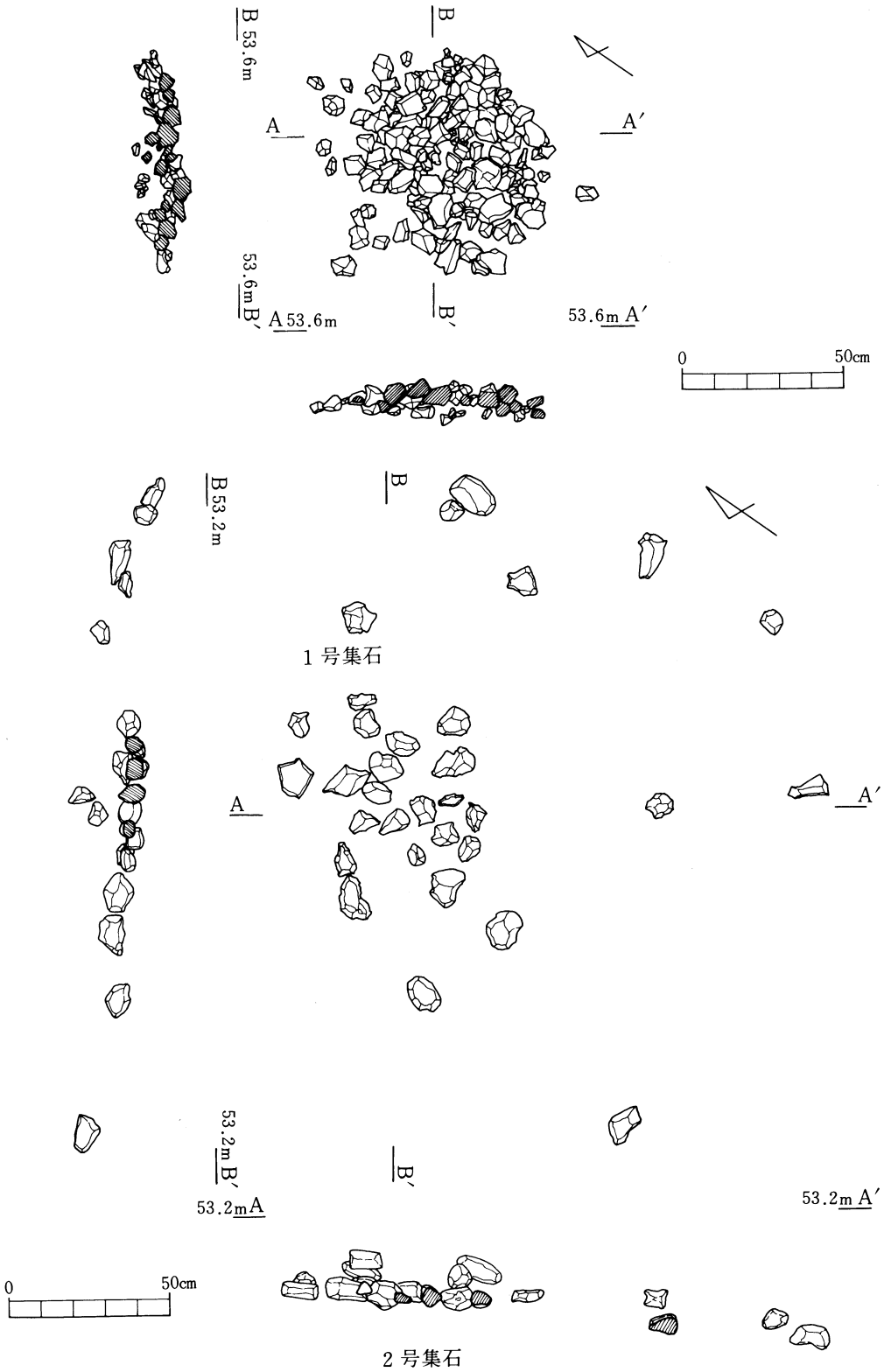


第25図　石塚遺跡土層図３（Ｇ－１区～Ｇ－３区北壁　Ｇ－２区～Ｉ－２区東壁）


H
G
1号集石
226
2号集石
0
5m



第26図　Ⅴ層上面地形図及遺物出土状況



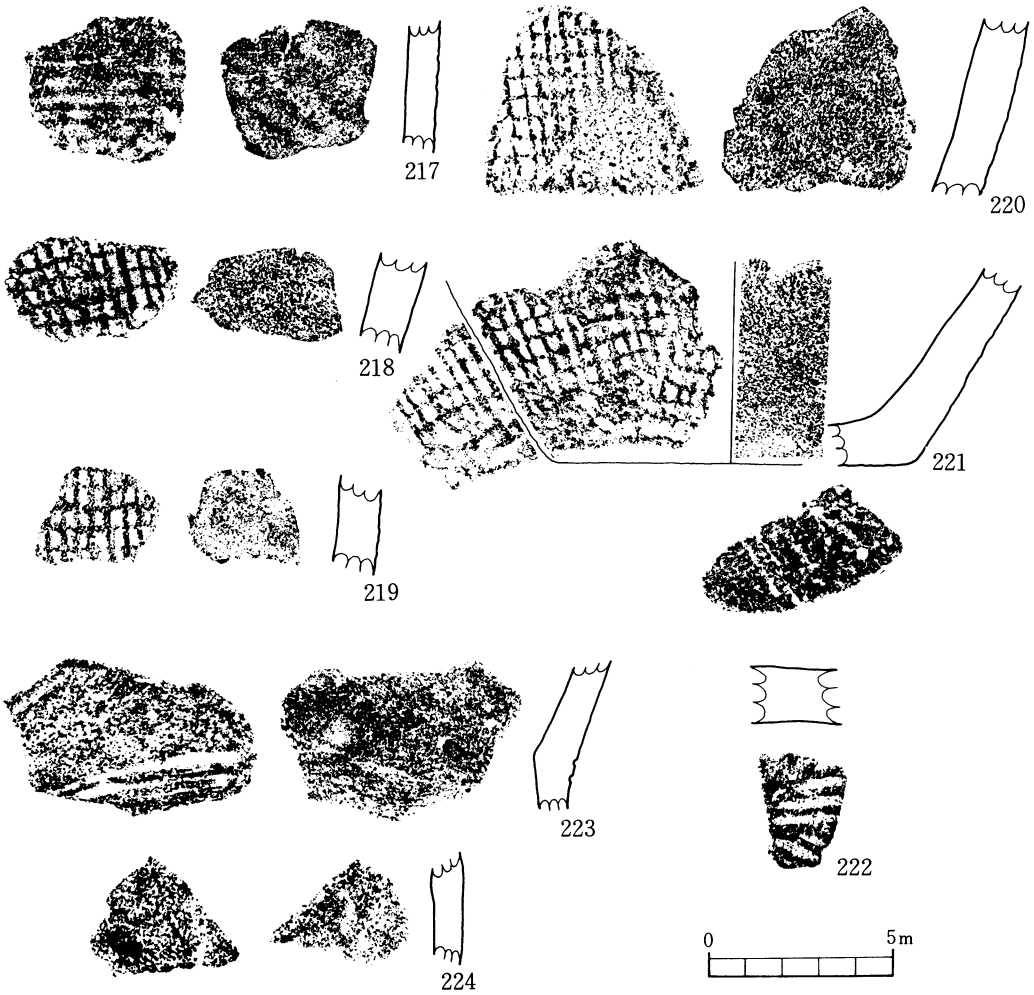
第27図　1号・2号集石遺構

(2) **遺物**（第28図～第38図）

遺物は，早期～晩期の土器・石器が出土している。早期はⅤ層出土。中期～晩期はⅢ層出土である。

・縄文時代早期の土器（第28図）

土器は，Ⅴ層中より出土したものである。217 は横位の押し引き文が認められる円筒系土器である。218 ～222 は同一個体と思われる。平底の底部よりやや外開きに立ち上がるもので，胴部には格子状の押型文が施される。221 ・222 は底部であるが外面に貝殻によると思われる条痕が認められる。223 ～224 は脆く器壁の磨耗が著しいものであるが同一個体と思われる。223 は口縁部がラッパ状に外反すると思われるもので頸部・口辺部に沈線文が施される。224 は器壁の磨耗が著しいもので文様については不明である。

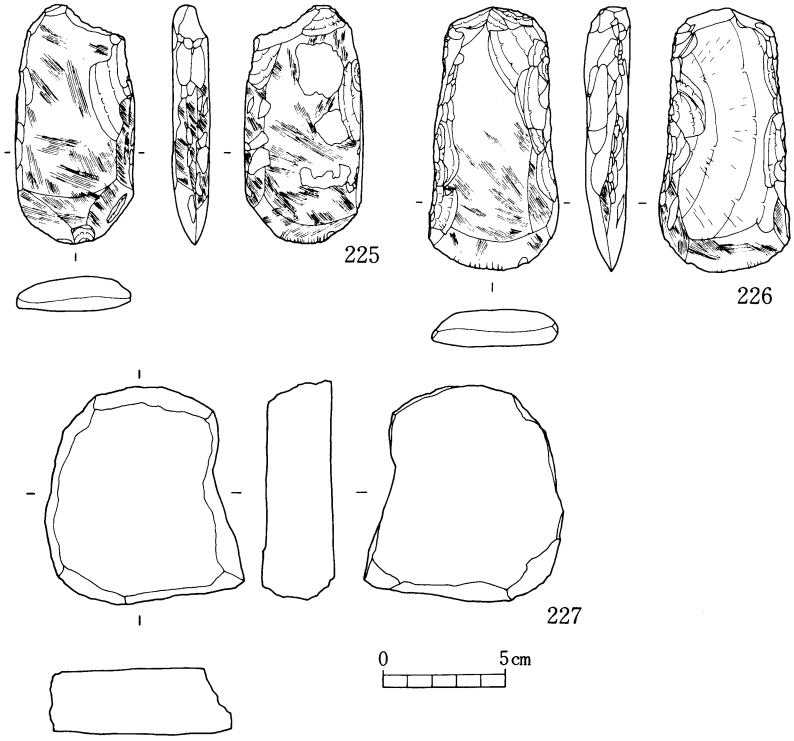


第28図　出土遺物（縄文早期土器）

・**縄文時代早期の石器**（第29図）

石器は，Ⅴ層及びⅥ層中より出土したものであるが，磨製石斧２点と磨痕の認められる偏平石器１点が見られる。

225 はD－５区出土の磨製石斧である。石材は粘板岩で両面及び側面共に丁寧な研磨が施されている。刃部は両刃をなすが研ぎ直しによるものか両辺が擦り減り，とがっている。226 はG－２区出土の磨製石斧である。石材はホルンフェルス。素材となる剝片は横長剝片で，その縁辺に細かい調整が加えられた後，刃部を中心に研磨が施されている。刃部はやや丸みを帯び，両刃である。227 はC－４区出土で偏平な台石と思われる。石材は安山岩で両面に擦ったと思われる痕跡が認められる。



第29図　出土遺物（縄文早期石器）

第10表　石塚遺跡縄文早期土器・石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第28図	217	F－4	Ⅴ	石英，長石，角閃石	やや不良	茶褐色	押し引き文	ヘラ削り	
	218	D－3	Ⅴ	〃　〃　〃	良好	〃	押し型文	ナデ	格子状押し型文
	219	C－3	Ⅴ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	同一個体
	220	D－2	Ⅴ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	221	D－1	Ⅴ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	外底部貝殻条痕

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第28図	222	D－1	V	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色		ナデ	外底部貝殻条痕 218～222は同一個体
	223	F－4	V	〃 〃 〃	不良	暗茶褐色		〃	沈線文
	224	F－4	V	〃 〃 〃	〃	〃		〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	最大重g	石材	備考
第29図	225	D－5	V	磨製石斧	9.8	4.8	1.9	110	粘板岩	
	226	G－2	V	〃	10.8	5.2	1.5	147	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	
	227	C－4	V	台石	(8.95)	(8.25)	2.7	(292)	安山岩	

・縄文時代中・後期の土器（第30図）

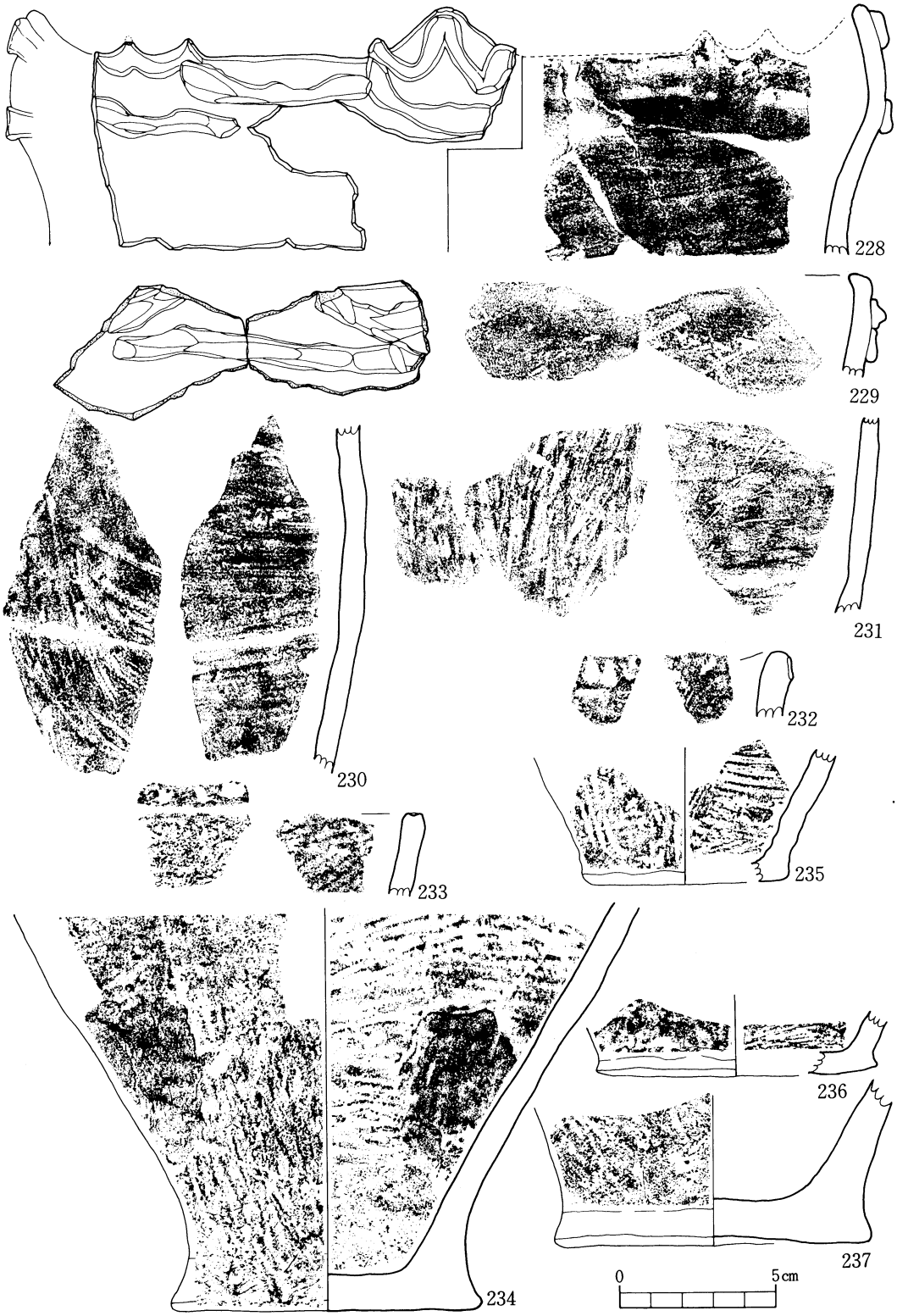
縄文時代中・後期の遺物は，ごくわずかな出土であった。228 ～231 はE－7・8区出土で同一個体と思われる。復元口縁径26.8cmを測るもので，胴部はわずかに張り，頸部はしまる。口辺部は外反し，口縁部は内湾するいわゆるキャリパー状を呈するものである。口縁部は4箇所の突起部を有する波状口縁であるが，その他に粘土紐貼付による突起も見られる。口縁部及び口縁部下位には粘土紐貼付突帯が見られる。器面調整は内外面共に貝殻条痕である。

232 は口縁外面に刻みを施し，233 は平坦な口唇部に刻みをほどこすものである。235 ～237 は深鉢の底部で，内外面に貝殻条痕が施されるものである。

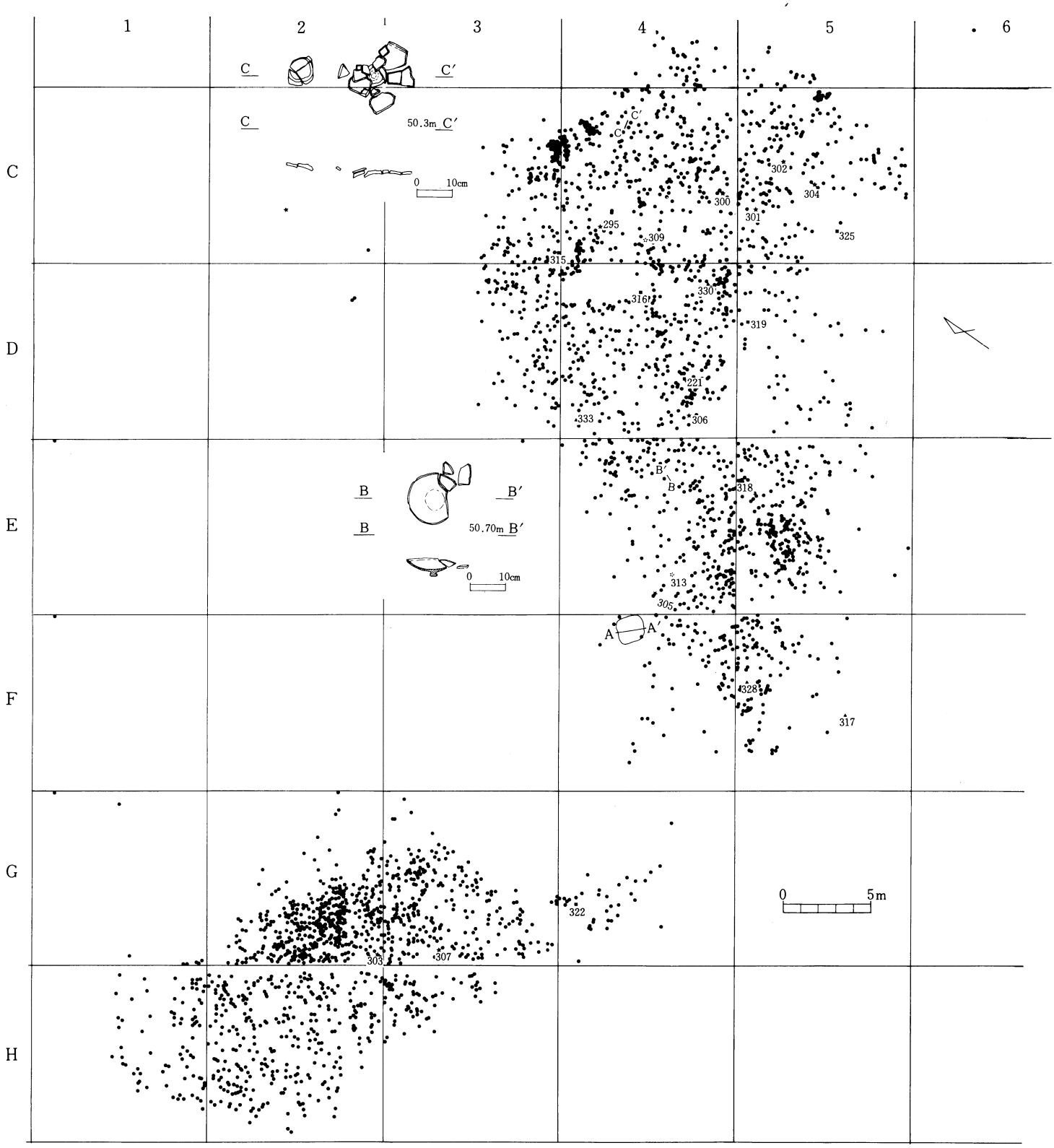
228 ～231 は中期の春日式土器に比定できるものであろう。232 ～237 は後期と思われる。

第11表　石塚遺跡縄文中期・後期土器観察表

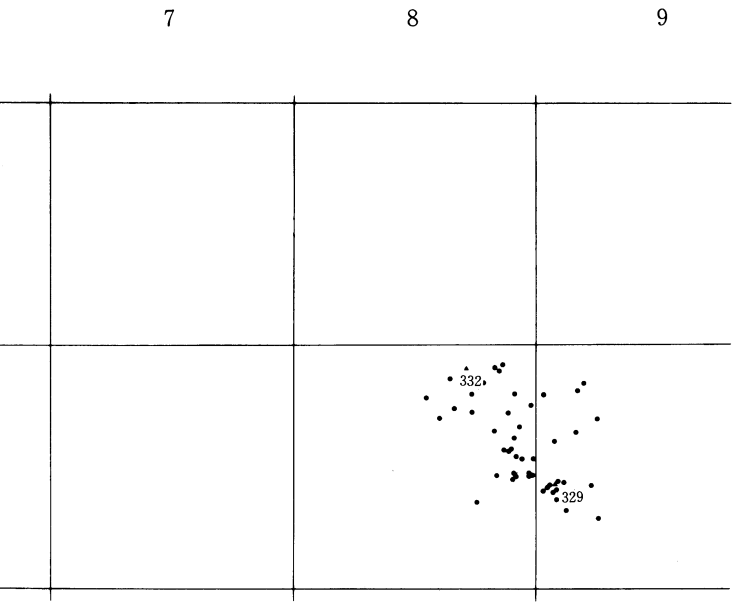
挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第30図	228	D－9	Ⅲ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ヘラ削り	貼付突帯文，煤付着
	229	D－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃
	230	D－9	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ヘラ削り	〃	同一個体，煤付着
	231	D－9	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	煤付着
	232	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	灰黒茶褐色	ナデ	ナデ	口縁部刻目文
	233	C－4	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色		〃	口唇部刺突文
	234	G－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	235	C－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	236	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	237	D－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	ナデ	ナデ	



第30図　出土遺物（縄文中・後期土器）



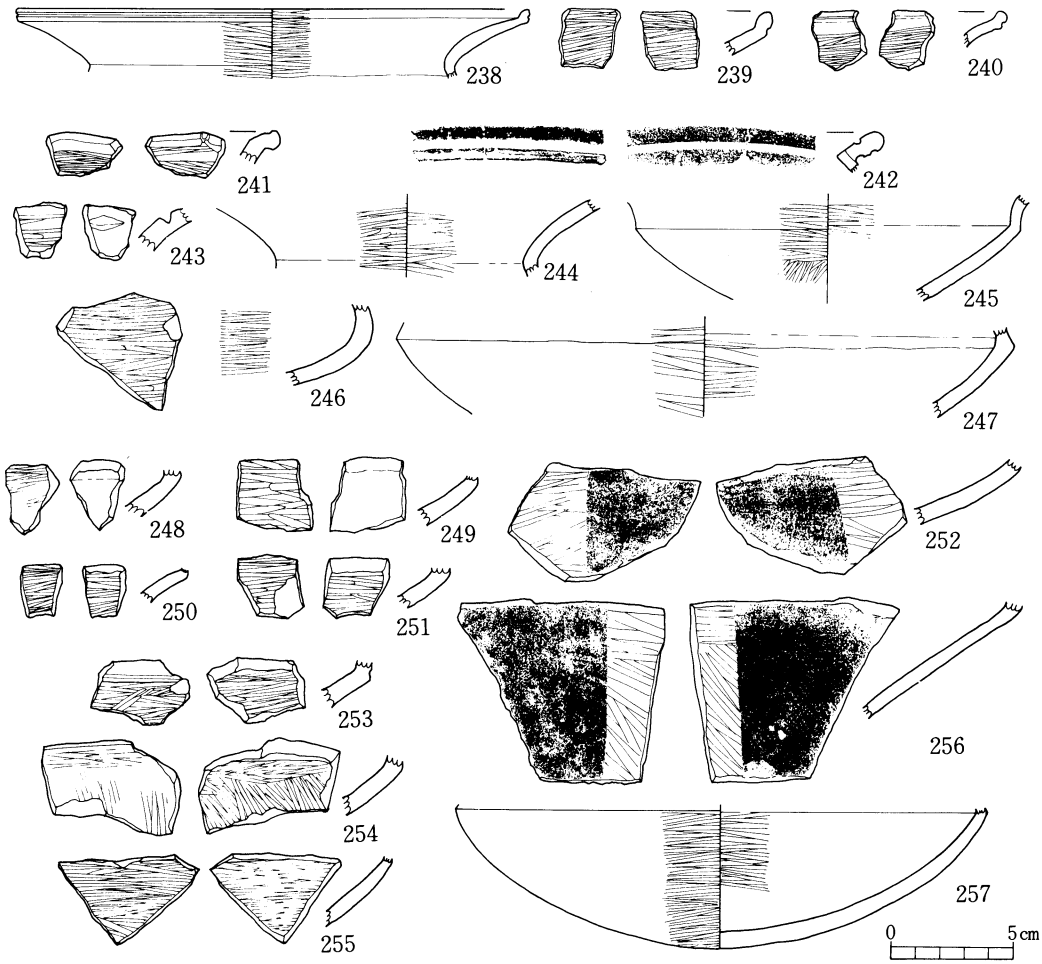
第31図　Ⅲ層遺物出土状況


7
8
9
332
329

・**縄文時代晩期の土器**（第32図～第34図）

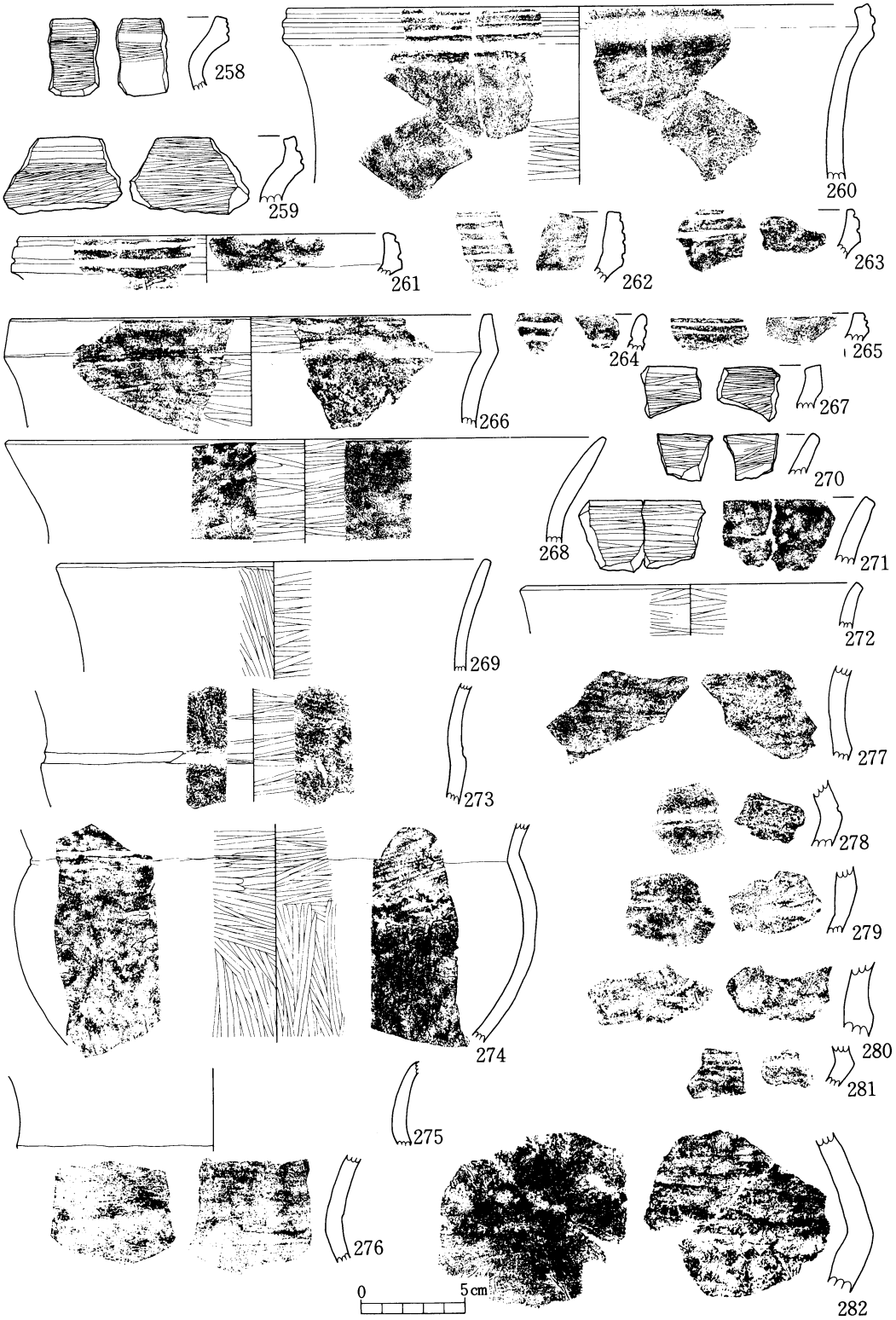
晩期の土器には浅鉢形土器及び深鉢形土器がある。238 ～257 は薄手の精製研磨された浅鉢形土器である。238 ～241 は口縁部が直線的に外反し口唇部の近くで段をなし，短い直立する文様帯を有するもので，口縁直立部外面に１条の沈線を巡らし，内外面共に丁寧な横位のヘラ研磨が施される。238 は復元口縁径21cmを測るもので，大きく外反した口縁部は口唇部近くで段をなし口唇部へ至る。口縁直立部外面には１条の沈線を巡らすものである。241 は口縁部に山形の隆起を有し，内面に沈線文を施す。242 は口縁部は短く頸部は「く」字状に屈曲するもので，口縁部内外面にそれぞれ１条の沈線を施す。調整は内外面共に丁寧な横位のヘラ研磨である。243 は口縁部内面にヘラ切風の刺突文を有する。244 は復元頸部径10.7cmを測るもので，口縁部は頸部から大きく外反する。245 ～257 は胴部屈曲部から底部にかけてのものである。

248 ・249 の内面のヘラ研磨が明瞭でないが，他は内外面共に横位・斜位の丁寧なヘラ研磨が施される。246 は胴部の屈曲部が丸みを帯び稜を有しない。256 は胴部が直線的なもので，胴部上位は横位の，下位は斜位のヘラ研磨が施される。257 は底部が皿状を呈するものである。

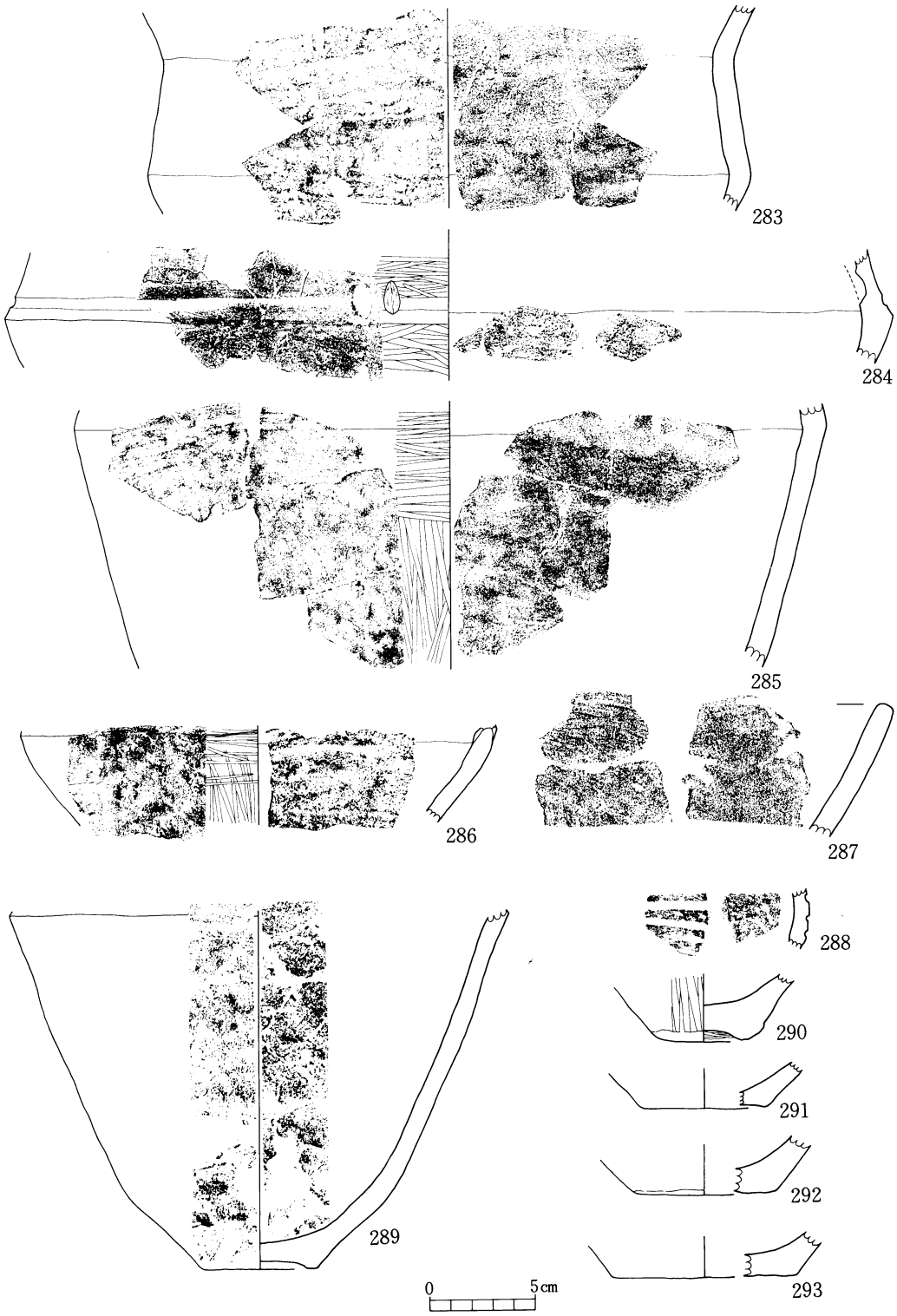


第32図　出土遺物（縄文晩期土器）

258 ～286 は深鉢形土器である。ほとんどのものが，内外面共ヘラ研磨が施された精選土器である。258 ～265 は口縁部が内傾若しくは直立し，口縁部に文様帯を有するものである。文様帯には沈線を巡らすものである。沈線は262 の４条を除き２条である。258 はやや小型のものとおもわれ，胴部屈曲部から口縁部までが短い。260 は復元口縁径27.6cmを測る。胴部屈曲部は見られないが，屈曲部よりわずかに内傾したのち，ゆるやかに外反して口縁部へ至るものである。文様帯の沈線は深く，沈線下位は突帯状になる。色調は淡茶褐色を呈し，調整は内外面にヘラ研磨が一部見られるものの研磨は著しくない。261 は復元口縁径18.1cmを測るものである。262 は口縁部の文様帯の幅がやや広く直立するもので，沈線も４条と数が多い。265 ・266 は口縁部が内傾するが，口縁部に文様帯を有しないものである。266 は復元口縁径23cmを測るもので口縁下位に稜線を有する。268 ～272 は口縁部に文様帯を有せず，外反する口縁部である。口唇部はややすぼまるものと平坦なものがある。268 は復元口縁径28.8cmを測る。口縁部は頸部から外反し，口唇部はややすぼまるものである。薄手で内外面共に横位の丁寧な研磨が施され，外面に二次的な煤が付着している。269 は復元口縁径20.8cmを測る。頸部のしまりは弱く口縁部は直行気味に外反する。外面は縦位，内面は横位の研磨が施され，外面には煤の付着が認められる。272 は復元口縁径16.4cmを測る。やや小型で頸部から口縁部までが短いものと思われ，口縁部は直行気味に外反する。内外面共に横位の研磨が施され，外面には煤の付着が認められる。273 ～276 は頸部から胴部にかけてのものである。273 は頸部に段を有するもので口縁部は直行気味に外反するものである。頸部の段の上位はヘラ削りにより沈線状を呈する。外面の研磨は明瞭でないが，内面は横位の研磨が見られる。外面には煤の付着が認められる。274 は頸部が「く」字状にしまり，胴部は球形状に張るものである。内外面共に頸部付近は横位の，胴部下位は縦位のヘラ研磨が施される。外面には煤の付着が認められる。277 ～282 は胴部の屈曲部付近である。いずれも小破片のため全体形状はつかめない。278 は屈曲部の上位に沈線が１条めぐる。283 は胴部の屈曲部復元径が28.3cmを測るもので，しまりの弱い頸部から外反する口縁部へと移行する。外面は荒いヘラ磨きで，煤の付着が認められる。284 は胴部の屈曲が強いものである。屈曲部の上位には１条の沈線がめぐり，棒状施文具によると思われる凹点が施される。外面調整は丁寧な横位のヘラ研磨である。285 ・286 は屈曲部より下位の胴部である。外面は横位・縦位のヘラ研磨，内面はヘラ削りが施される。286 は屈曲部において接合痕が明瞭に認められる。287 は鉢形土器と思われる口縁部である。わずかに内湾する口縁部で口唇部は平坦である。内外面共にあらいヘラ磨きが施される。288 は４条以上の沈線をめぐらす胴部で，マリ状の器形が考えられるものである。289 ～293 は深鉢形土器の底部である。289 は底部径5.4 cmを測る。わずかに内湾しながら外方へ立ち上がるもので，接地面が輪状を呈するあげ底である。外面調整はヘラ削りであるが，一部ヘラ磨きが見られる。内面は横ナデである。290 も接地面が輪状を呈するあげ底である。外面及び外底面はヘラ研磨が施される。291 はわずかにあげ底状になる底部である。292 ・293 は平底である。



第33図　出土遺物（縄文晩期土器２）



第34図　出土遺物（縄文晩期土器３）

第12表　石塚遺跡縄文晩期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第32図	238	F－5	Ⅲa	石英，長石，角閃石	良好	灰黒色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	
	239	C－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	240	H－3	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	241	E－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	口縁内面に沈線文
	242	H－1	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒褐色	〃	〃	口縁内外面に沈線
	243	H－2	Ⅲa	〃　〃　〃	不良	暗茶褐色	〃		口縁内面に刻み
	244	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	良好	黒褐色	〃	ヘラ研磨	
	245	H－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	246	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	247	H－2	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	248	F－4	Ⅲa	〃　〃　〃	不良	灰褐色	〃		
	249	C－5	Ⅲa	〃　〃　〃	良好	黒褐色	〃		
	250	D－3	表	〃　〃　〃	〃	〃	〃	ヘラ研磨	
	251	D－3	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	252	H－2	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	内外面に煤付着
	253	G－2		〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	屈曲部上位に沈線
	254	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	255	H－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒褐色	〃	〃	
	256	H－2	Ⅲa	〃　〃　〃　雲母	〃	〃	〃	〃	
	257	F－4	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
第33図	258	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	口唇部に2条の沈線
	259	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
	260	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	ﾍﾗ研磨ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削りﾅﾃﾞ	〃
	261	E－4	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	ヘラ研磨	ナデ	〃
	262	E－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	ヘラ研磨	口縁部に4条の沈線
	263	E－4	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	ナデ	口縁部に2条の沈線
	264	E－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	〃
	265	F－4	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃
	266	F－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	黒褐色	〃	ﾍﾗ研磨ﾅﾃﾞ	
	267	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	ヘラ研磨	
	268	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着
	269	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃
	270	D－5	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	灰黒色	〃	〃	〃
	271	D－5	Ⅲ	〃　〃　〃	やや不良	黒褐色	〃	ナデ	〃
	272	C－4	Ⅲa	〃　〃　〃	良好	淡茶褐色	〃	ヘラ研磨	〃
	273	F－4	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	灰茶褐色	ﾍﾗ研磨ﾅﾃﾞ	〃	屈曲部上位に沈線・煤付着
	274	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	ヘラ研磨	〃	外面に煤付着
	275	E－4	Ⅲa	〃　〃　〃	やや不良	灰黒色	〃	〃	
	276	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	良好	暗茶褐色	〃	〃	
	277	F－4		〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	〃		外面に煤付着
	278	D－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃		屈曲部上位に沈線
	279	E－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	ヘラ削り	ヘラ削り	
	280	G－3	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
	281	E－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	ヘラ研磨	ヘラ研磨	
	282	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	外面に煤付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整整	内面調整	備考
第34図	283	G－3	Ⅲa	石英，長石，角閃石	良好	灰茶褐色	研磨・削り	ヘラ削り	外面に煤付着
	284	F－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ヘラ研磨	〃	〃 屈曲部上位に沈線
	285	F－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着
	286	F－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃
	287	D－4	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ヘラ削り	〃	
	288	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色		ナデ	沈線
	289	F－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	研磨・削り	〃	
	290	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ヘラ研磨	〃	内底面に煤付着
	291	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	ヘラ削り	〃	
	292	G－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ヘラ研磨		内底面に煤付着
	293	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	

縄文時代の石器（第35図～第38図）

縄文時代の石器の中でⅢ層及びⅠ層中より出土したものとしては石鏃・石匙・スクレイパー・石斧・すり石・台石・石錘がある。これらの石器がどの時期に伴うものか確定は困難であるが，Ⅴ層出土の早期以外では晩期の土器がほとんどであるため，ここでは縄文時代晩期に伴うものとして取り扱いたい。

石鏃（第35図）

石鏃は全部で15点出土している。石材についてみると黒曜石３点，チャート５点，玉髄４点，ホルンフェルス２点，粘板岩１点である。これらは形状において二等辺三角形・正三角形・異形（五角形）の３類に大別される。

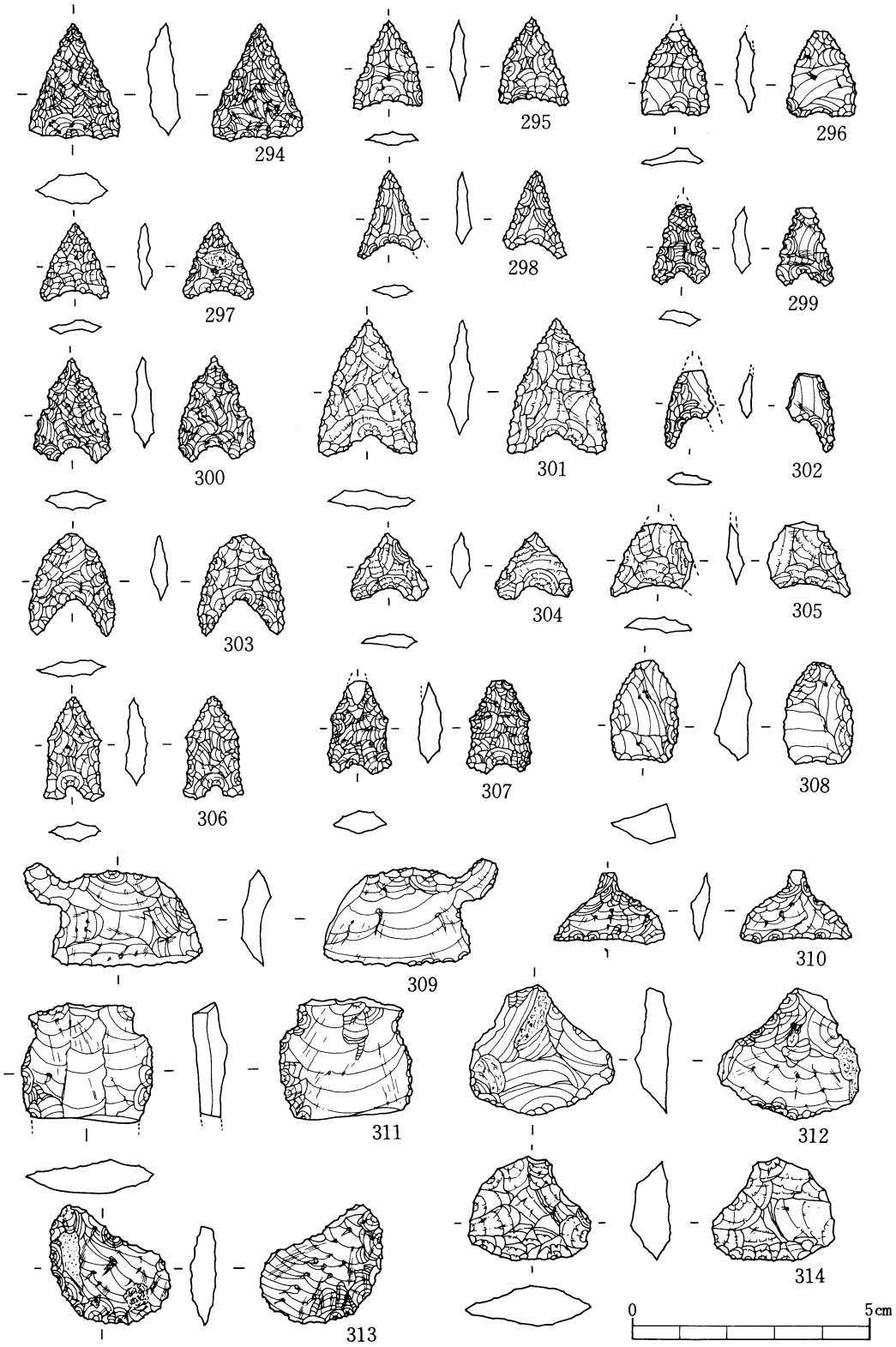
294 ～303 は二等辺三角形を呈する石鏃である。294 は基部が平基でやや厚手のものである。295 ～297 は基部が凹基で浅く抉れるものである。296 は抉りの部分が小さく平基式のものとあまり差がないものである。298 ～303 は凹基で抉りの深いものである。この中でも抉りがⅤ字状を呈するもの（298 ・299 ・301 ），抉りがU字状を呈するもの（300 ・302 ・303 ）に細別される。303 は抉りが深く，先端部が鋭利ではない。

304 ・305 は正三角形を呈する石鏃である。304 はやや小型で，基部がU字状を呈する凹基で抉りはやや浅い。305 は基部が平基に近い凹基で浅く抉れるものである。

306 ～308 は異形の石鏃である。306 ・307 は両縁側に突起を有し，五角形を呈するものである。308 は二等辺三角形を呈する平基の石鏃と思われるが，全体に調整が施されてなく分厚いものである。未製品の可能性が高い。

石匙（第35図）

石匙は４点出土している。309 は横長の剥片を素材とした横型の石匙である。つまみ部が側縁上端から斜め上方にむけてついている。刃部は片刃である。310 はやや小型の横型である。刃部



第35図　出土遺物（縄文晩期石器１）

は内湾刃で，丁寧な交互剥離により刃部を形成している。刃部は両刃である。311 は縦長剥片を素材とした縦型の石匙で，刃部先端を欠損している。つまみ部は側縁を抉ってつくりだしており，側縁は交互剥離により調整する。312 は横長の剥片を素材としたもので，つまみ部のつくりだしが明瞭でなく石匙としてよいか迷った。刃部は片刃で剥離は全面におよんでいない。

削器（第35図）

削器は 2 点出土している。313 は打面を残す縦長の剥片を素材としたもので，刃部は片刃である。314 は丁寧な交互剥離による刃部を有するものである。刃部は両刃である。

石斧（第36図～第37図）

石斧は磨製石斧12点と打製石斧 2 点が出土している。315 ～326 は磨製石斧である。315 は小型で細長いものでほぼ全面に研磨が施されている。上辺・下辺共に刃部を有し，両辺共に刃部は片刃状を呈するものでノミ状の用途が考えられる。316 は基部上方に研磨による抉りを有するという特徴がある。抉りの部分から刃部へかけてひろがっており，刃部は片刃に近い。全面に入念な研磨整形が施される。317 は扁平で全面に入念な研磨が施されているものである。刃部は片刃に近いものであるが右側が擦り減っている。318 ～321 は大型の石斧であるが318 以外は刃部を欠損する。318 は全面に研磨が施されているもので，刃部は蛤刃状の両刃である。319 は一部だけ研磨痕が認められるが，これは風化によるものと思われる。320 も風化により研磨痕が見られないものである。基部は裏面が平坦でかまぼこ状を呈する。321 は全面に研磨が施され，基部端部には敲打痕が見られる。322 は刃部である。全面に研磨が施され，刃部は両刃である。323 は柱状を呈する基部で全面に研磨が施される。324 は全面に入念な研磨が施されるもので刃部は両刃である。325 ・326 は刃部のみである。いずれも残存部は入念な研磨が施されている。使用時に剥落したものであろうか。327 ・328 は打製石斧である。いずれも刃部を欠損するものである。327 は扁平な石斧の基部である。加工痕は側縁にのみ認められる。328 は横長の剥片を素材としたもので縁辺部に剥離が施される。

すり石（第37図）

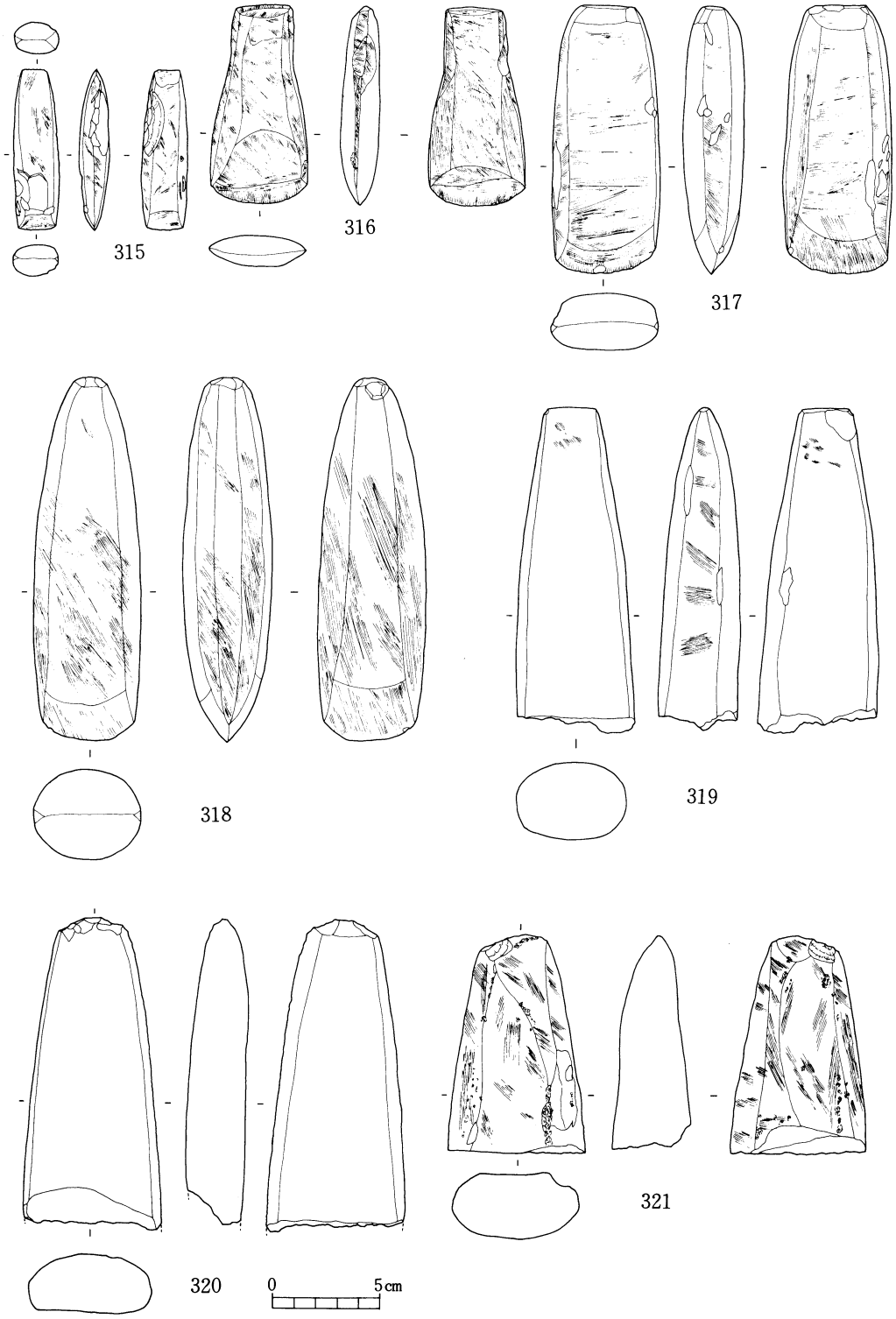
すり石は 4 点出土している。329 は扁平な楕円形を呈するもので両面に作業面が認められ，浅いくぼみを有する。330 ・331 は扁平な円形を呈するもので小型である。330 は両面に作業面が認められ，側面には敲打の痕跡も見られる。331 は両面に作業面が認められる。332 は不正形なものである。全面に作業面が認められる。

台石（第38図）

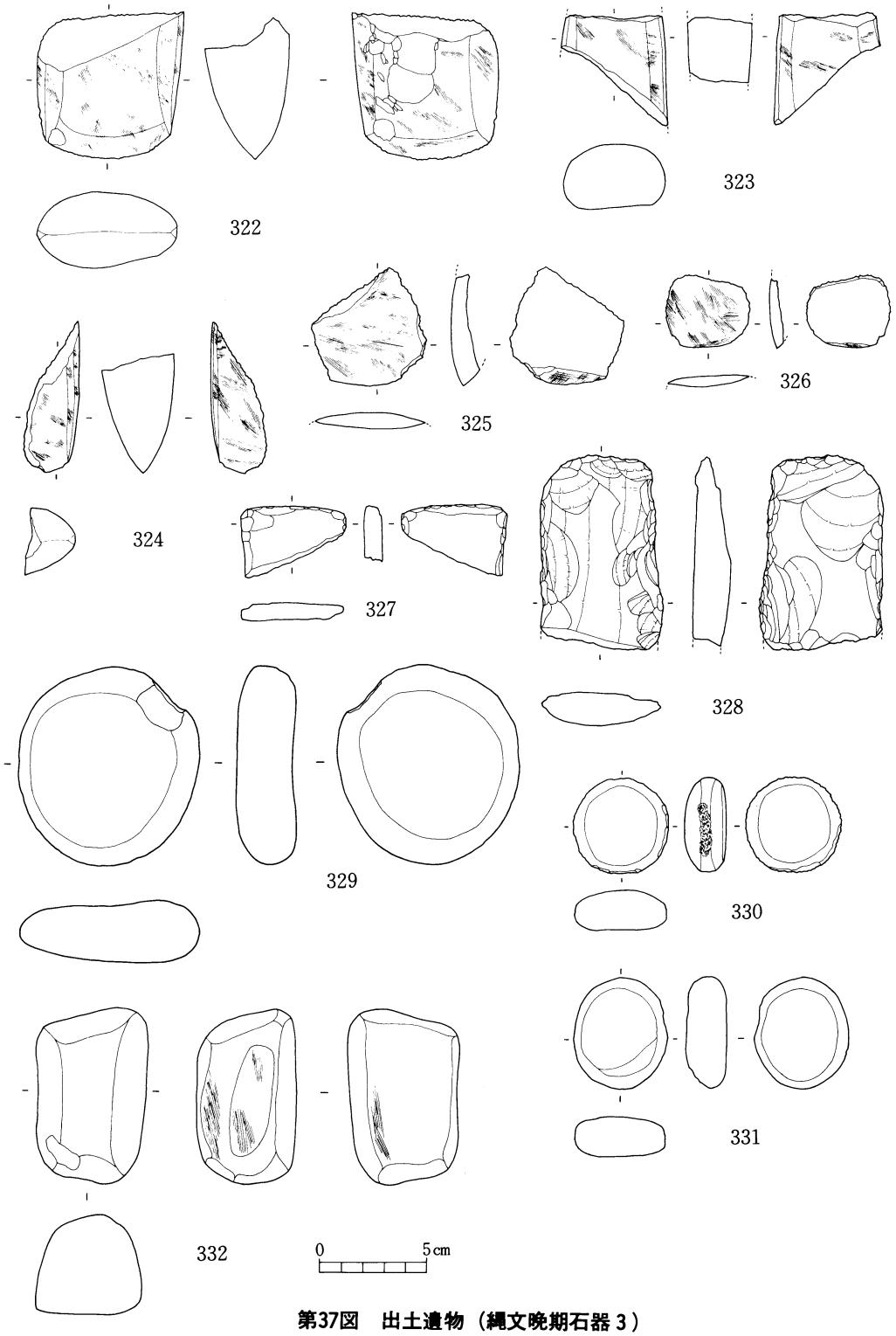
台石としたものは 2 点出土している。いずれも大型の扁平石を素材とするものである。333 は両面に作業面が認められる。334 は表面に作業面が認められる。

石錘（第38図）

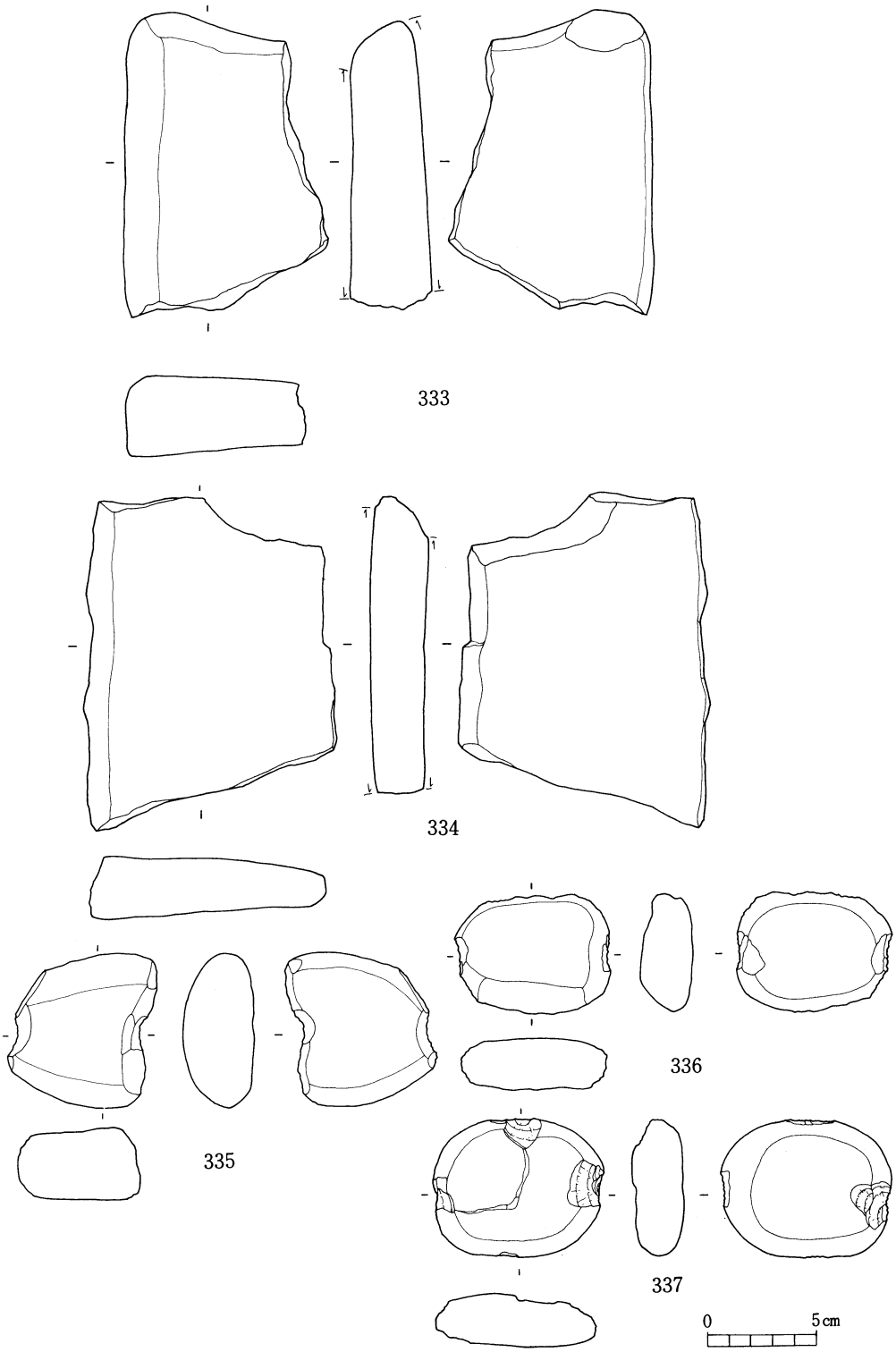
石錘は 3 点出土している。335 は両面に作業面を有するすり石を再利用したもので短軸に抉りを設けるものである。336 ・337 は楕円形の扁平な石を素材とし，長軸に抉りを設けたものである。



第36図　出土遺物（縄文晩期石器２）



第37図　出土遺物（縄文晩期石器３）



第38図　出土遺物（縄文晩期石器４）

第13表　石塚遺跡縄文石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	最大重g	石材	備考
第35図	294	C－2	Ⅲ	石鏃	2.4	1.9	0.6	1.95	黒曜石	
	295	C－4	〃	〃	1.9	1.5	0.3	0.56	チャート	
	296	C－4	Ⅱ	〃	(1.8)	1.5	0.4	(0.79)	玉髄	
	297	H－3	Ⅲ	〃	1.65	1.4	0.2	0.34	チャート	
	298	H－1	Ⅰ	〃	(1.85)	(1.4)	0.3	(0.39)	玉髄	
	299	D－4	〃	〃	(1.7)	1.2	0.3	(0.41)	黒曜石	
	300	C－4	Ⅲ	〃	2.25	1.6	0.5	0.99	〃	
	301	C－5	〃	〃	2.8	2.0	0.5	1.72	ホルンフェルス	
	302	C－5	〃	〃	(1.65)	(1.0)	0.3	(0.25)	玉髄	
	303	G－2	〃	〃	2.12	1.75	0.4	0.94	〃	
	304	C－5	〃	〃	1.4	1.6	0.4	0.58	ホルンフェルス	
	305	E－4	〃	〃	(1.6)	(1.7)	0.35	(0.71)	粘板岩	
	306	D－4	〃	〃	2.2	1.3	0.4	0.94	チャート	
	307	G－3	〃	〃	(2.0)	1.3	0.55	(1.0)	黒曜石	
	308	E－5	Ⅰ	〃	2.2	1.4	0.7	2.57	チャート	
	309	C－4	Ⅲ	石匙	2.1	3.5	0.5	4.21	〃	
	310	D－4	〃	〃	1.4	2.3	0.3	0.87	玉髄	
	311	D－4	〃	〃	(2.4)	2.8	0.68	(5.7)	チャート	
	312	H－1	〃	〃	2.7	3.0	0.7	5.38	玉髄	
	313	E－4	〃	削器	2.5	2.5	0.5	3.73	黒曜石	
	314	F－4	〃	〃	2.2	2.5	0.8	3.52	ホルンフェルス	
第36図	315	C－3	〃	磨製石斧	7.5	2.1	1.5	32	〃	両端に刃部を有する
	316	D－4	〃	〃	9.3	4.5	1.5	111	泥質ホルンフェルス	
	317	F－5	〃	〃	12.5	5.0	2.2	502	砂質ホルンフェルス	
	318	E－5	〃	〃	17.0	5.0	4.2	554	ホルンフェルス	
	319	D－5	〃	〃	(15.3)	5.5	3.7	(459)	〃	
	320	H－2	Ⅱ	〃	(14.6)	6.5	2.7	(415)	安山岩	
	321	D－4	Ⅲ	〃	(12.5)	6.3	3.1	(326)	ホルンフェルス	
第37図	322	G－4		〃	(6.9)	6.8	3.6	(231)	〃	
	323	D－5		〃	(5.2)	4.9	3.0	(87)	砂岩	
	324	E－8		〃	(7.2)	(2.8)	3.2	(60)	蛇紋岩	
	325	C－5		〃	(5.6)	(5.4)	0.8	(30)	砂岩	
	326	D－5		〃	(3.4)	3.9	0.4	(7)	ホルンフェルス	
	327	G－2	Ⅰ	打製石斧	(3.4)	(4.9)	0.8	(15.6)	〃	
	328	F－5	Ⅲ	〃	(9.1)	(5.7)	2.6	(195)	〃	
	329	D－9	〃	すり石	9.4	8.6	2.9	319	安山岩	
	330	D－4	〃	〃	(4.4)	(4.5)	1.9	(51)	〃	側面に敲打痕
	331	C－4	〃	〃	5.2	4.4	1.9	(67)	〃	
	332	D－8	〃	〃	8.2	5.3	4.7	325	〃	
第38図	333	D－4	〃	台石	(14.0)	(9.4)	3.7	(720)	〃	
	334	H－3	〃	〃	(15.3)	(11.5)	2.2	(705)	〃	
	335	D－4	〃	石錘	7.1	(6.9)	3.3	(170)	花崗斑岩	
	336	F－5	〃	〃	(5.5)	(7.1)	2.4	(124)	安山岩	
	337	F－5	〃	〃	(6.3)	(7.8)	(2.5)	(170)	〃	

2. 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代についてみると，遺構は土壙が一基だけ検出されたのみである。遺物は甕形土器・壺形土器・坩・高坏等が見られる。

(1) 遺構（第39図）

遺構は，F－4区において検出されたものであるが，F－4区は畑地とする段階での削平を受けているため，上部の層はなく，遺構が検出されたのもⅦ層上面である。古墳時代の包含層はⅢ層であるので，土壙の本来の規模・深さについてはつかみ得ない。

現況での土壙規模は，平面が 1.5×1.5 mの隅丸方形を呈し，深さは0.3 mである。しかし，深さを復元すると2mくらいの深い土壙であったことがうかがえる。土壙内の埋土は濁った茶褐色で，5～15cm大の花崗班岩礫が多く混在している。遺物は底部を欠損した古墳時代の成川式と考えられる甕形土器が口縁部を下にした状態で出土している。口縁部は土壙のほぼ底面に接しており，欠損している底部はもともとあったものが畑地として削平する時にいっしょに欠落したものと想定される。

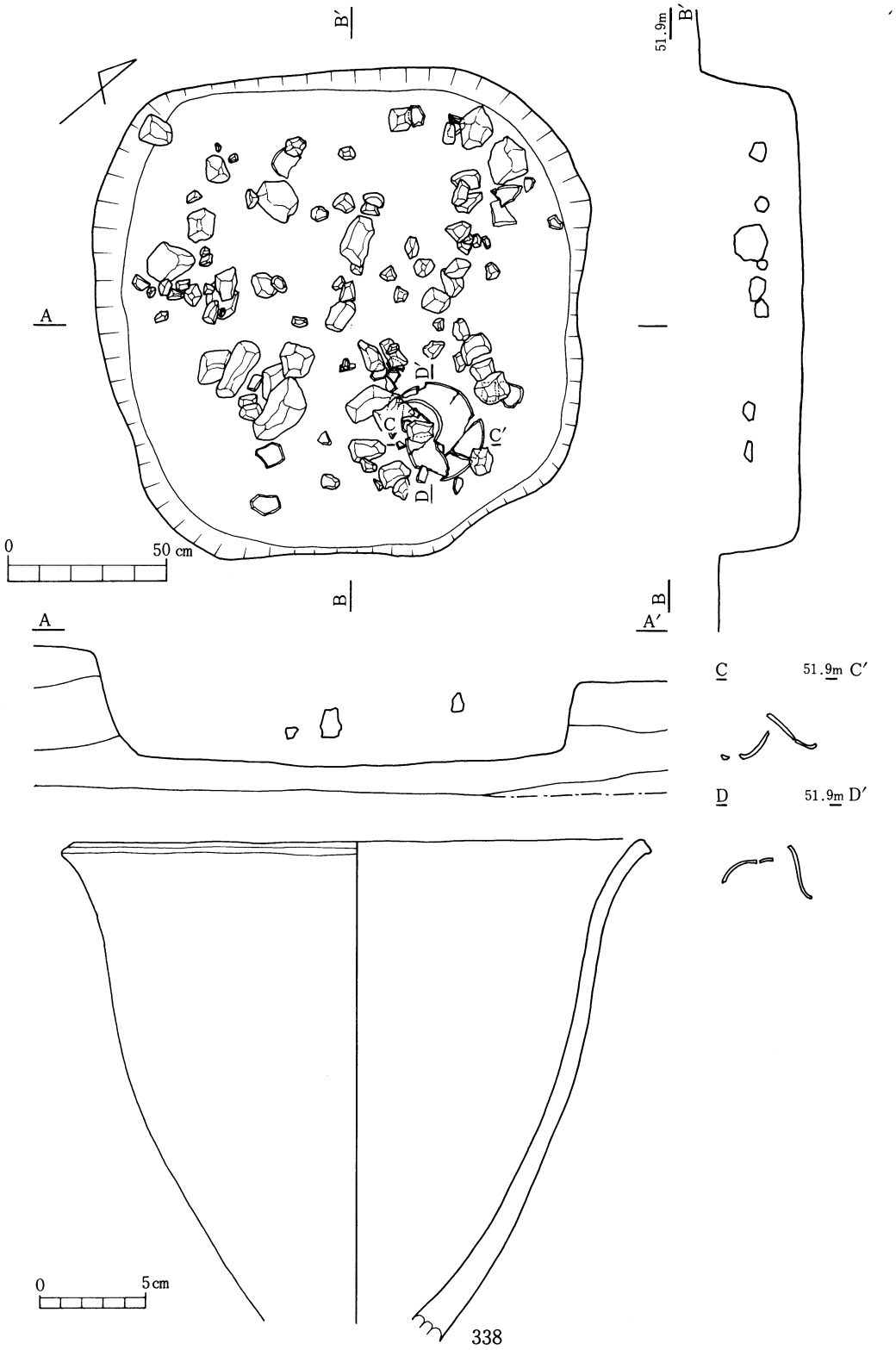
338 は土壙内より出土した甕形土器である。口縁形28cmを測るもので底部が欠損している以外はほぼ完形である。底部は中空の脚台であろうと思われる。底部からほぼ直線的に立ち上がった胴部はあまり張らない。頸部のしまりは弱く胴部からそのまま口縁部の外反部分へと移行するものである。口唇部は僅かに肥厚し平坦におさめる。器面調整は内外面共に調整の痕跡が残らないほどの丁寧なナデ調整が施されているが，外面下位にはヘラ磨きも認められる。胎土には石英・長石・角閃石を含み，焼成は良好，色調は外面は赤茶褐色，内面は暗茶褐色及び黒茶褐色を呈する。また，内底面には焦げ付きによるものではないかと思われる変色した部分が見られる。

(2) 遺物（第40図～第45図）

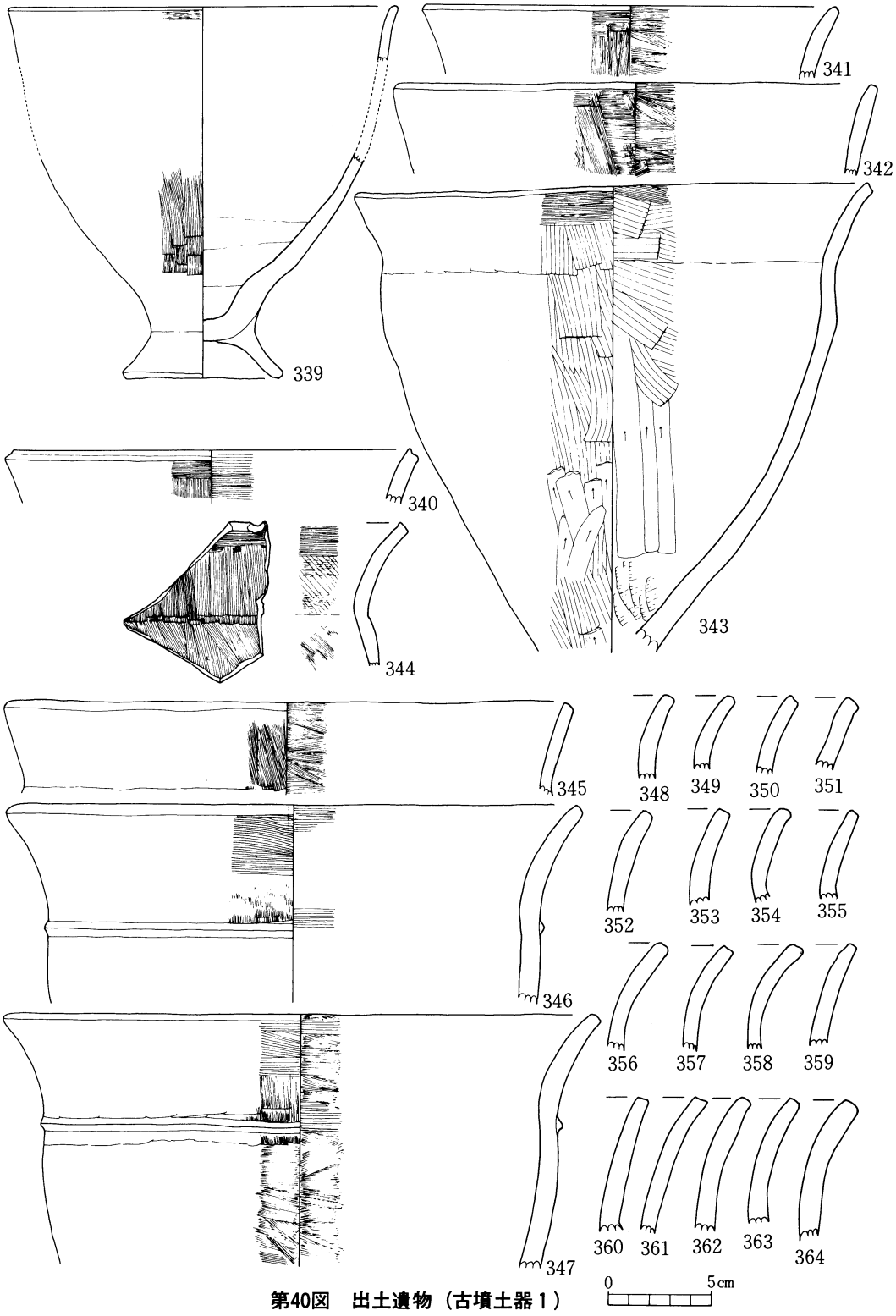
遺物は土器・土製品（双孔棒状土錘）・鉄鏃等が出土している。

甕形土器（第40図～第43図）

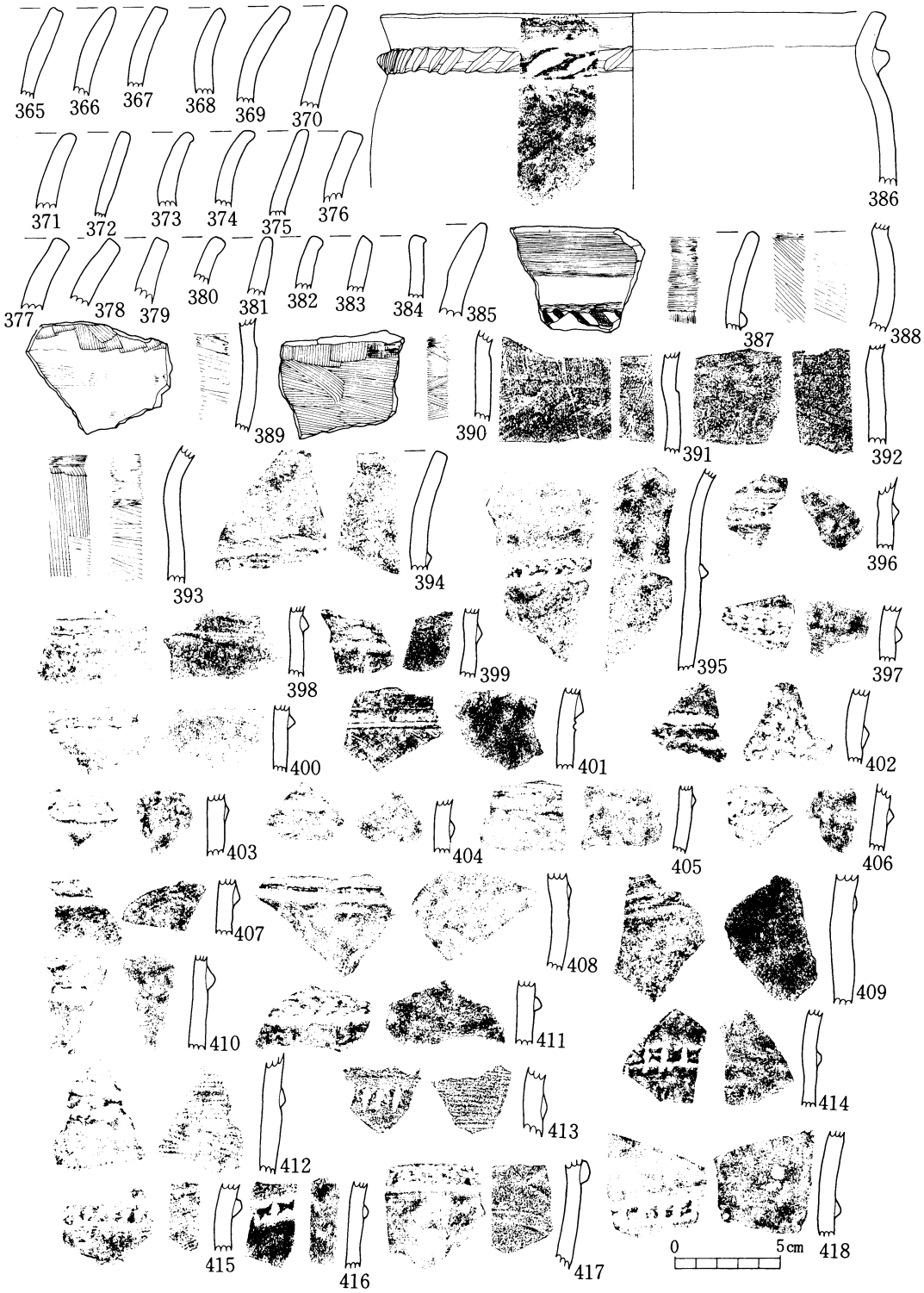
339 ～455 は甕形土器である。339 は復元口縁径19cm・復元器高18cmを測る。底部は浅いあげ底の脚台で，胴部はあまり張らない。頸部のしまりは弱いもので，口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめる。外面は板状施文具によるナデ調整である。340 ～342 ・345 は外反する口縁部である。いずれも頸部から口縁部へのカキ上げ状のナデ調整が観察されるものである。343 は復元口縁径25cmを測る。底部は欠損するが，あげ底の脚台と思われる。胴部はあまり張らずしまった頸部から口縁部が外反するもので，端部は平坦におさめる。内外面の調整は同様で，口縁上位は横ナデ，口縁下位から胴部上位および下端はハケ目，胴部中位はヘラ削りによる調整が施される。外面には煤の付着が認められる。344 は頸部がよくしまるものである。頸部から口縁部へかけて板状施文具によるカキ上げ調整が施されたため，頸部に沈線が巡るかのように見える。346 ・347 は頸部に三角形貼付突帯を1条巡らすもので，口縁部は外反する。突帯の上位から口縁部へかけて板状施文具によるカキ上げ調整が施されている。348 ～385 は甕形土器の口縁部でいずれも外反するものである。386 は復元口縁径24cmを測る。張った胴部から頸部はよくしまり，



第39図　古墳時代土壙・土器



第40図　出土遺物（古墳土器１）



第41図　出土遺物（古墳土器２）

口縁部は短く外反するものである。頸部には刻みを有する貼付突帯を1条巡らす。387 は頸部に刻み目貼付突帯を巡らすもので，外面に煤の付着が認められる。煤は口唇部の外側で付着していない部分との境が明瞭に観察され，煮焚きに使用する時に蓋がかぶっていたものと想定される。388 ～393 は頸部である。いずれも頸部から口縁部へかけてカキ上げの調整が施されるものである。394 ～427 は頸部に貼付突帯を巡らすものである。突帯には三角形突帯（394 ～410），粘土紐つまみ出し状突帯（411 ・412 ），ヘラ及び板状施文具による刻み目を有する突帯（413・415 ～418 ），布目の痕跡を持つ刻み目突帯（414 ・419 ～427 ）が見られる。428 は鉢形土器としての可能性が高いものである。430 ～437 は底部と胴部の接合部分である。438 ～455 は底部であげ底の脚台である。453 ・455 は浅いあげ底である。454 は接合部が直行気味で裾に至ってわずかに外方に開くものである。456 は平底の底部である。鉢形土器の底部と思われる。

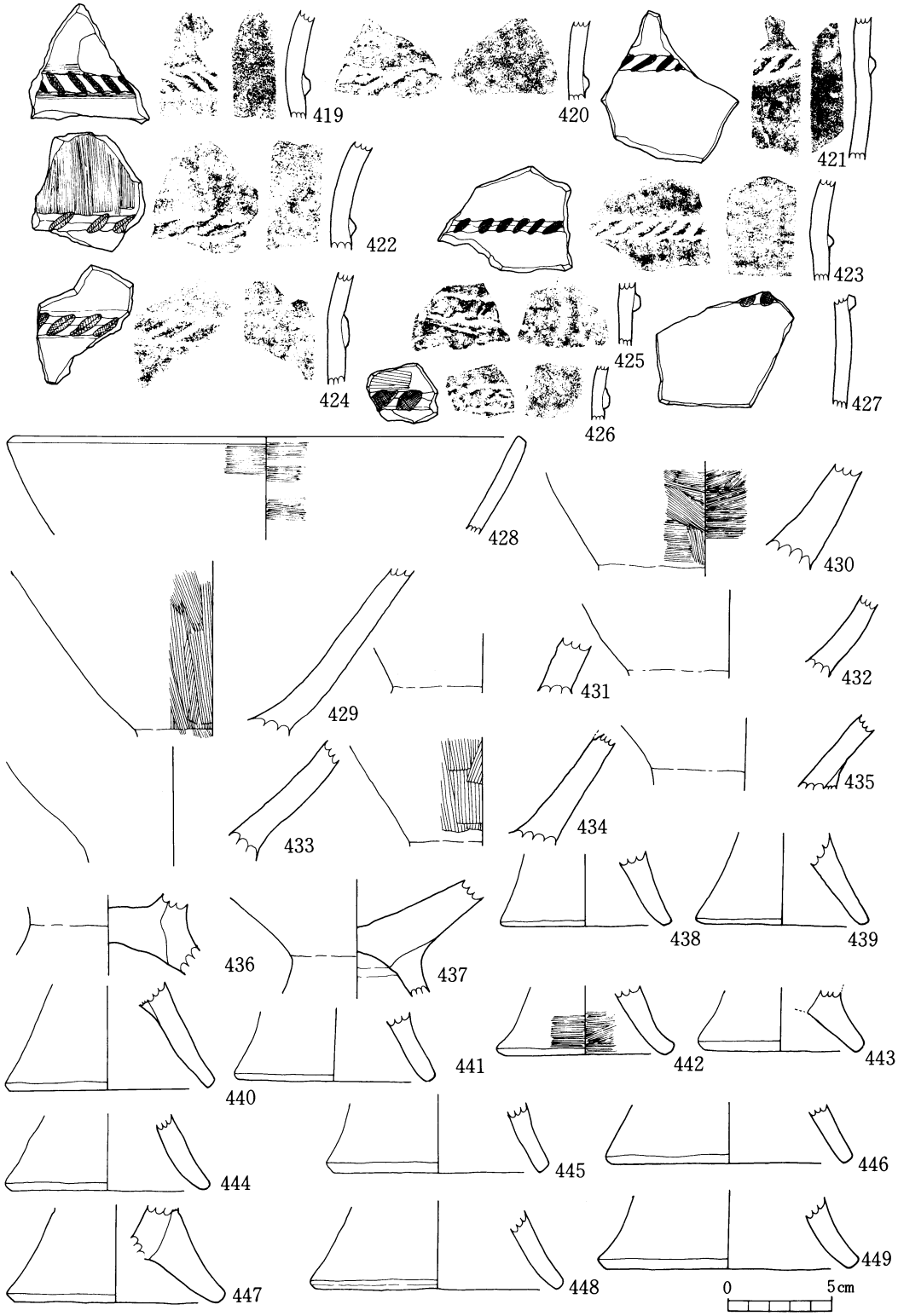
壺形土器（第43図～第44図）

457 ～489 は壺形土器である。457 ～460 は口縁部。457 は復元口縁径12.9cmを測る。頸部はしまり，口縁部は外反する。口唇部はわずかな凹みを有する。内外面共に横位のナデ調整が施される。458 は復元口縁径10cmを測る。口縁部は外反し，端部はわずかに肥厚する。461 ・463 ～482 は貼付けによる突帯を巡らすものである。461 は肩部に刻み目を有する突帯を巡らし，球形状に膨らむ胴部である。刻み目には布目の痕跡が認められる。462 は胴部の上半部に最大径を有するもので平底の底部から胴部は球形状に膨らむ。突帯は巡らさず，薄手の堅緻な土器で，ナデ及びヘラ削りによる調整が施される。463 ～483 は肩部及び胴部最大径の部位に突帯を巡らすものである。463 ～470 は1条の刻み目突帯を巡らすもので，刻みにはヘラ状のもの，布目の痕跡を持つもの等がある。471 ～473 は2条の刻み目突帯を巡らすものである。いずれも刻みには布目の痕跡が認められる。474 ～478 は3条の刻み目突帯を巡らすものである。三角形の細い突帯をくっつけて巡らした後，3条いっしょにヘラで刻みをつけるものである。

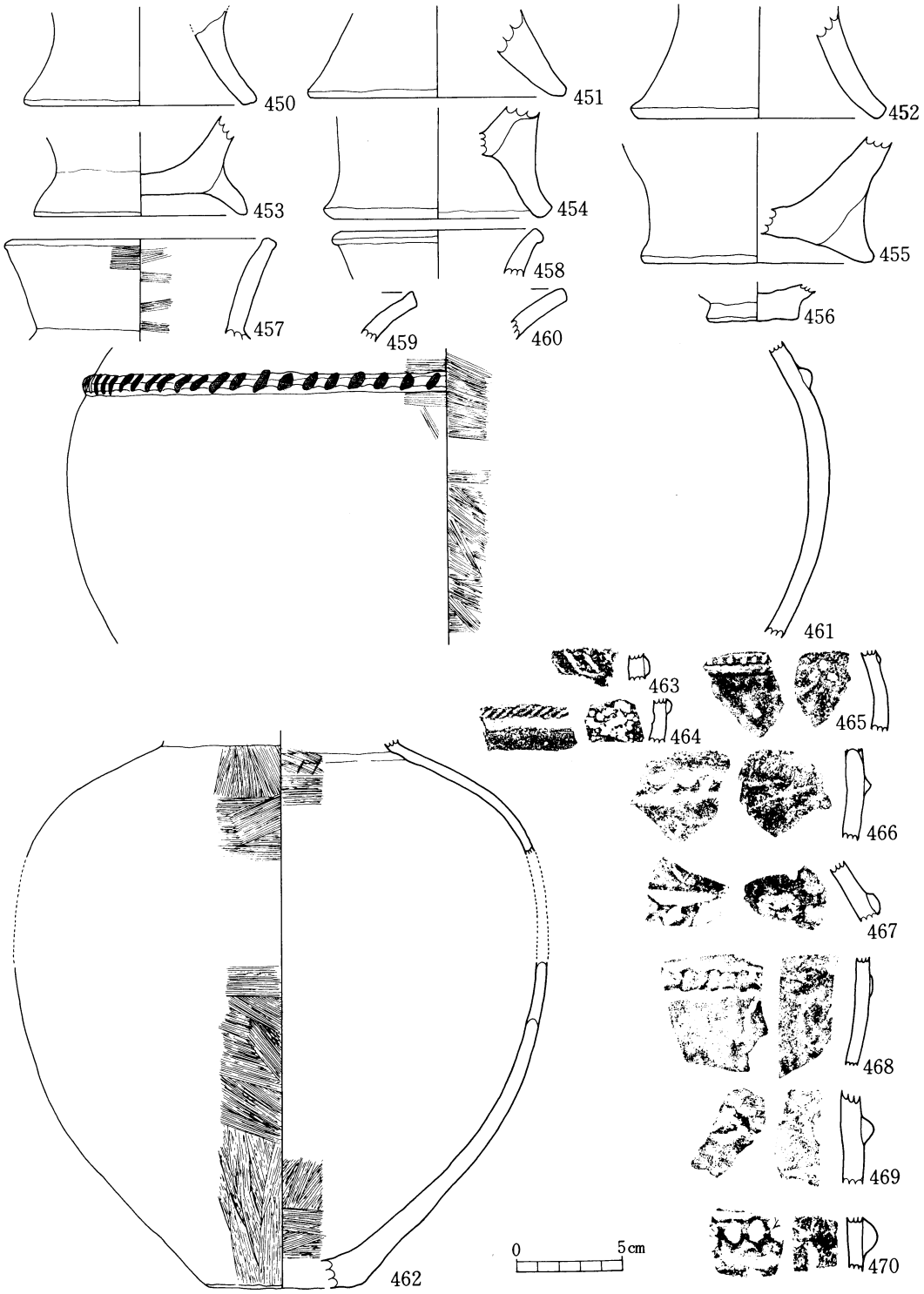
479 ～483 は幅が約1.5 cmの突帯に鋭いヘラによる格子目状の刻み目を施すものである。484 ～489 は底部である。平底（484 ～487 ）と丸底（488 ・489 ）がある。

坩形土器（第44図）

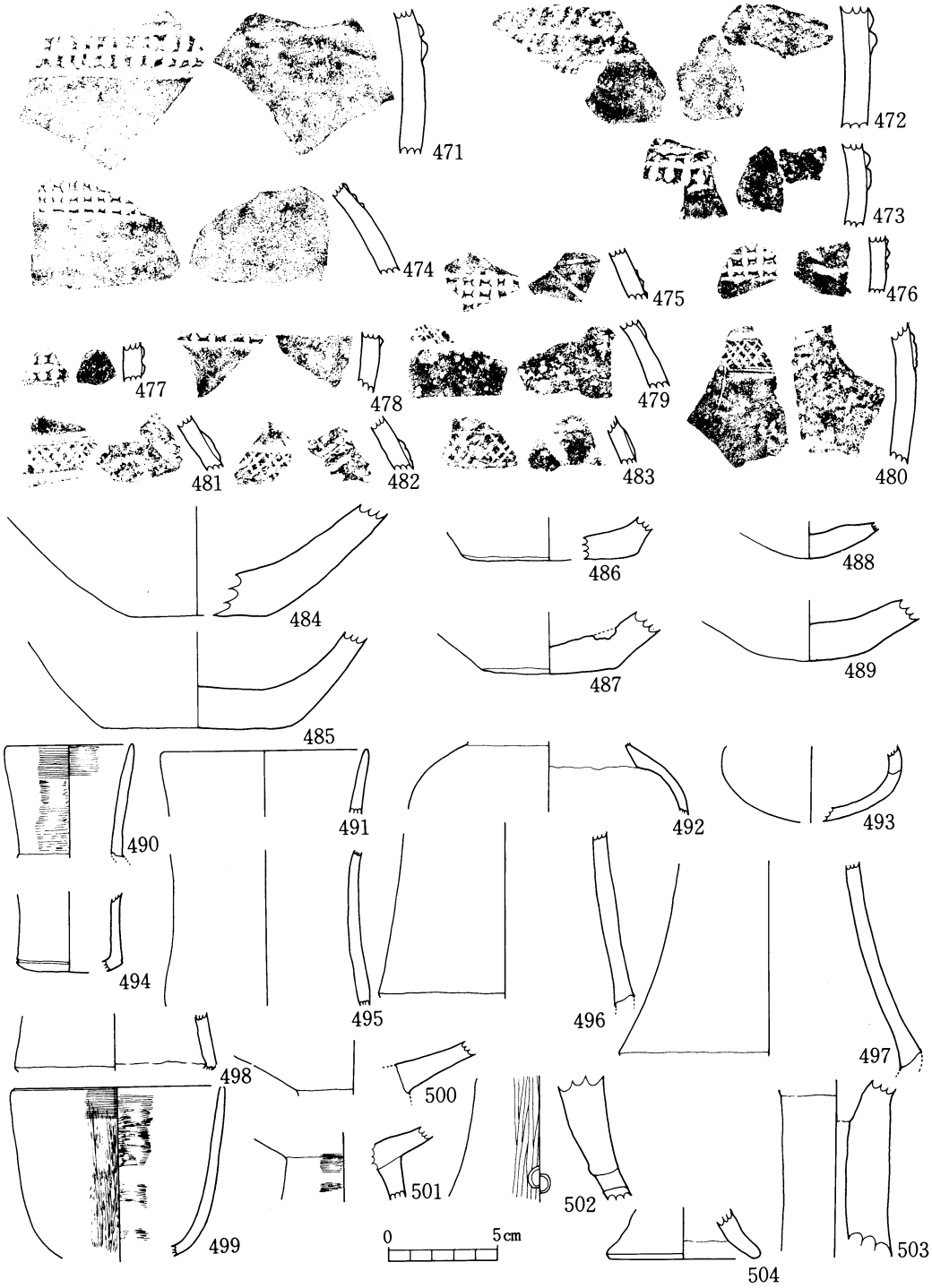
490 ～498 は坩型土器としたものである。490 は復元口縁径5.9 cmを測る口縁部で，頸部はしまり，口縁部はほぼ直行気味に外反し，端部は鋭くおさめる。491 は復元口縁径9.5 cmを測る。492 は肩部から頸部にかけての部位である。胴部は球形状を呈するものと思われる。493 は丸底の底部である。494 ～498 は口縁部及び底部が欠落しており，全体の形状が把握できないものであるが，坩としてとらえたものである。底部は平底ないし平底に近い丸底と思われる。底部近くに胴部の張りがある。胴部の張った部分より内傾して立ち上がり，頸部を有しないでやや外反する口縁部へ至るものと考えられる。



第42図　出土遺物（古墳土器３）



第43図　出土遺物（古墳土器４）



第44図　出土遺物（古墳土器５）

第14表　石塚遺跡古墳土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第39図	338	F－4		石英，長石，角閃石	良好	赤茶褐色	ヘラ磨きナデ	ナデ	内面に焦げ状の煤付着
第40図	339	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	ヘラ削りナデ	〃	
	340	C－3	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	明茶褐色	ナデ	〃	外面に煤付着
	341	C－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	灰黒褐色	〃	〃	〃
	342	C－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒褐色	〃	〃	
	343		Ⅲa	〃　〃　〃	〃	茶褐色	ナデ，ハケ目，ヘラ削り	ハケ目，ヘラ削り	外面に煤付着
	344	D－4		〃　〃　〃	〃	〃	ナデ	ナデ	〃
	345	D－2	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	黒褐色	〃	〃	
	346	H－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	外面に煤付着，突帯
	347	F－4	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	明茶褐色	〃	〃	突帯
	348	H－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	349	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	350	C－2	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	351	H－1	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	352	C－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	353	H－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	354	H－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	
	355	C－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	356	G－2	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	357	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃
	358	G－2	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	〃
	359	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	明茶褐色	〃	〃	〃
	360	G－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	ヘラ削りナデ	〃	
	361	G－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	〃	ハケ目	ハケ目	
	362	D－3	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	黒褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
	363	G－3	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	364	G－2	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒褐色	ハケ目，ナデ	ハケ目，ナデ	外面に煤付着
第41図	365	G－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	ナデ	ナデ	〃
	366	H－1	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	明茶褐色	〃	〃	
	367	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	ヘラ削りナデ	外面に煤付着
	368	D－4		〃　〃　〃	〃	明茶褐色	〃	ナデ	〃
	369	G－2	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	〃
	370	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	371	D－3	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	372	D－4	Ⅲa	〃　〃　〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	373	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	ハケ目の後ナデ	〃	〃
	374	C－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	ナデ	〃	
	375	C－3	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	376	H－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着
	377	H－3		〃　〃　〃	〃	黒褐色	〃	〃	内外面に煤付着
	378	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	灰黒褐色	〃	〃	外面に煤付着
	379	C－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	380	H－2		〃　〃　〃	〃	灰黒茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	381	D－4	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第41図	382	H－2	Ⅲa	石英，長石，角閃石	良好	灰黒茶褐色	ナデ	ナデ	
	383	C－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	384	D－5	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	385	C－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	ヘラ削りナデ	刻目突帯
	386	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	
	387	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	黒褐色	〃	〃	刻目突帯，外面に煤付着
	388	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ハケ目	ハケ目，ナデ	
	389	C－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ハケ目，ナデ	〃 〃	外面に煤付着
	390	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ハケ目	ハケ目	〃
	391	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	灰黒褐色	ハケ目の後ナデ	ナデ	〃
	392	H－2	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	ナデ	ナデ	内面に煤付着
	393	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	黒褐色	ハケ目，ナデ	ハケ目，ナデ	外面に煤付着
	394	G－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ナデ	ナデ	三角突帯
	395	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	396	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃，外面に煤付着
	397	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	398	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	黒褐色	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	〃，外面に煤付着
	399	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ナデ	ナデ	〃
	400	G－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	401	H－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ハケ目の後ナデ	〃	〃，外面に煤付着
	402	C－5	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	灰黒褐色	ナデ	〃	〃
	403	D－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃，外面に煤付着
	404	D－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	〃 〃
	405	D－4	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃 〃
	406	D－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	〃
	407	G－2	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃，外面に煤付着
	408	G－2	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃 〃
	409	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	黒褐色	ハケ目	〃	断面半円突帯，〃
	410	D－3		〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	〃 〃
	411	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	つまみ出突帯
	412	D－4		〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃
	413	E－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色		ハケ目	刻目突帯
	414	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	ナデ	〃
	415	C－Ⅰ	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃，外面煤付着
	416	G－2		〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	417	G－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	〃
	418	G－2	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	〃，外面煤付着
第42図	419	F－4		〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	〃 〃
	420	H－3		〃 〃 〃	〃	黒褐色	〃	〃	〃 〃
	421	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃
	422	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃 〃
	423	G－2	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	〃 〃
	424	C－4	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	〃 〃
	425	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	〃
	426	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第42図	427	D－4	Ⅲa	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	刻目突帯
	428	D－4	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	口唇部に煤付着
	429	C－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ハケ目	ヘラ削り	
	430	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	ナデ	ナデ	
	431	B－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	432	H－1	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	433	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	434	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	ハケ目	〃	中底面に煤付着
	435	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	
	436	B－4		〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	437	C－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ヘラ削り	〃	内面に煤付着
	438	H－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	
	439	G－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	440	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	441	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	〃	
	442	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	ナデ	〃	
	443	C－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	444	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	445	D－4		〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	446	E－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	447	G－3		〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	448	D－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	
	449	G－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
第43図	450	B－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	451	C－5		〃 〃 〃	〃	茶褐色	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	〃	
	452	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ナデ	〃	
	453	G－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	454	G－3		〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	455	C－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	ヘラ削り	
	456	D－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	457	C－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	458	G－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	459	C－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	460	C－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	461	F－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	刻目突帯
	462	D－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	〃	
	463	G－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	茶褐色		〃	刻目突帯
	464	H－1	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ナデ	〃	〃
	465	G－2	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃
	466	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	467	D－4	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	〃
	468	D－4	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	469	D－4	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	〃
第44図	470	C－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃
	471	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第44図	472	C－4	Ⅲa	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	刻目突帯
	473	D－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃 （2条）
	474	C－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃 （3条）
	475	D－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	476	D－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	477	C－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	478	C－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	479	C－4	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	格子状刻目突帯
	480	D－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	481	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	482	C－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	483	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃		
	484	D－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃		
	485	E－4	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	ヘラ削り	
	486	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	ナデ	
	487	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃		
	488	C－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ヘラ削り	ヘラ削り	
	489	C－5		〃 〃 〃	〃	灰黒褐色	〃	ナデ	
	490	H－2		石英，長石（精選土）	〃	茶褐色	ナデ	〃	
	491	H－3	Ⅲa	石英，長石，角閃石（〃）	〃	〃	〃	〃	
	492	D－4	Ⅲ	〃 〃 〃 （〃）	〃	明茶褐色	〃	〃	
	493	DE-4	Ⅱ	〃 〃 （〃）	〃	〃	〃	〃	
	494	G－2	Ⅲ	〃 〃 角閃石（〃）	〃	茶褐色	〃	〃	
	495	GH-2	Ⅲ	〃 〃 〃 （〃）	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	496	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃 （〃）	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	497	H－1	Ⅲ	〃 〃 〃 （〃）	〃	〃	〃	〃	
	498	H－2	Ⅲ	〃 〃 〃 （〃）	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	499	H-2.3	Ⅲa	〃 〃 〃 （〃）	〃	茶褐色	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	〃	
	500	D－4	Ⅰ	石英，長石，角閃石	〃	明茶褐色	ナデ	〃	
	501	D－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	502	D－5	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ヘラ磨き		円形透かしのある脚部
	503	C－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ナデ		
	504	C－2		〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	ナデ	

埦形土器（第44図）

499 は復元口縁径9.9 cm，器高8 cmを測るもので埦形土器としたものである。底部は平底に近い丸底と考えられ，胴部は直線的に立ち上がり口縁部へ至る。口縁端部は鋭くおさめる。外面の上位は横位のナデ，中位から下位にかけてはヘラ削り，内面は横位のナデ調整が施されている。

高坏（第44図）

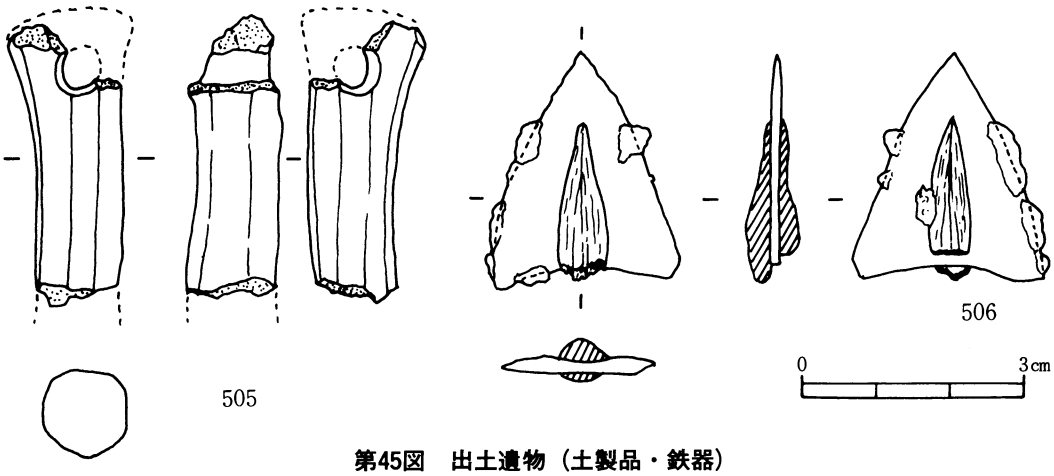
500 ～504 は高坏である。高坏の全体形状の把握は困難である。500 ・501 は脚部と坏部の接合部分で，接合の状況が観察される。502 ～504 は脚部。502 は外面にヘラ磨き調整が見られ，脚部中位に円形の透かしが認められる。503 は筒状になった脚柱部である。504 はやや小型のもので，裾部の開きが大きくないものである。

双孔棒状土錘（第45図）

505 は下半部が欠落しているものの双孔棒状土錘であると思われる。現存長3.8 cm・径1.1cm・現存重量6.1 gを測り，上端の幅を広くした部分に径5～7 mmの穿孔を設けるものである。

鉄鏃（第45図）

506 は無茎の鉄鏃である。長さ3 cm，幅2.6 cm，厚さ0.2 cm，重さ4.77 gを測る二等辺三角形を呈するものである。基部は浅い凹基式で，挿着方法は幅約0.5 cmの先の尖った木で鏃身を挟むもので，鏃身の挿着部分にはわずかではあるがくぼみがみられる。



第45図　出土遺物（土製品・鉄器）

第15表　石塚遺跡古墳土製品・鉄器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器　種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	最大重g	備　考
45図	505	C－5	Ⅰ	双孔棒状土錘	（ 4.8 ）	1.2	1.2		穿孔
	506	D－4	Ⅲ	鉄　鏃	3.2	2.6	0.6		

3　歴史時代の遺構・遺物（第46図～第48図）

歴史時代は平安時代を中心にした遺物が出土しているが，遺構としては一部焼土らしい痕跡が認められたが，建物・溝などの遺構は検出されなかった。

(1)　遺物（第46図～第48図）

遺物は土師器及び須恵器が出土しているが，量はさほど多くない。土師器では蓋・皿・坏・埦・甕等が見られる。須恵器では埦・甕が出土している。

土師器（第46図・第47図）

507 ・508 は蓋。507 は復元口縁径14.5cmを測る。天井部にヘラ削りによりわずかな平坦面をつくり，擬宝珠つまみを有する。平坦面よりなだらかに口縁部へいたる。口縁端部は内湾し内面の段は明瞭ではない。508 は復元口縁径12cmを測る。天井部につまみは見られないがつまみのあったことも想定される。口縁部は内湾し端部は鋭くおさめるものである。

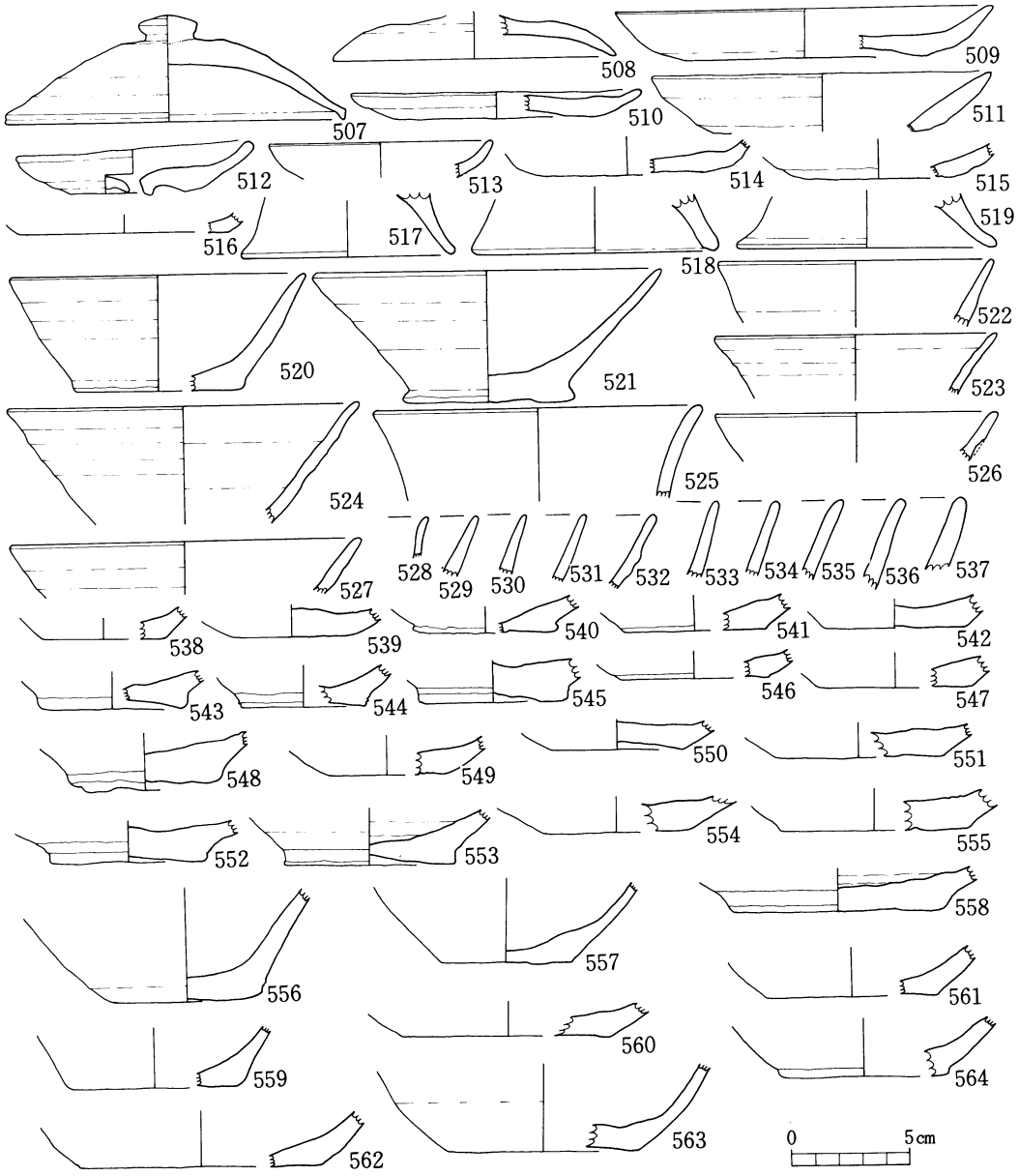
509 ～516 は皿。509 は復元口縁径16cmを測る。510 は復元口縁径11.2cmを測る。ややひずんだ浅い皿である。512 は復元口縁径10.1cmを測る。焼けひずみのためか底部中央に穴があいている。517 ～519 は高台を有する皿の高台部分と思われるもので，高台はいずれも外方へふんばる。

520 ・521 ・538 ～563 は坏である。また，522 ～537 は口縁部だけで底部が欠落しているため坏か埦か判断出来ないが，ここでは坏として考えたい。口縁部は525 をのぞいて直線的に外反するもので端部は鋭くおさめるもの，丸くおさめるものなどがある。520 は復元口縁径12.6cm，器高4.9 cmを測る。口縁部はわずかに内湾する。521 は復元口縁径14.8cm，器高5.6 cmを測る。くびれた底部より外方へ直線的に立ち上がり，端部は鋭くおさめる。525 は口縁部が反り気味に外反し，まるくおさめるものである。538 ～563 は底部である。

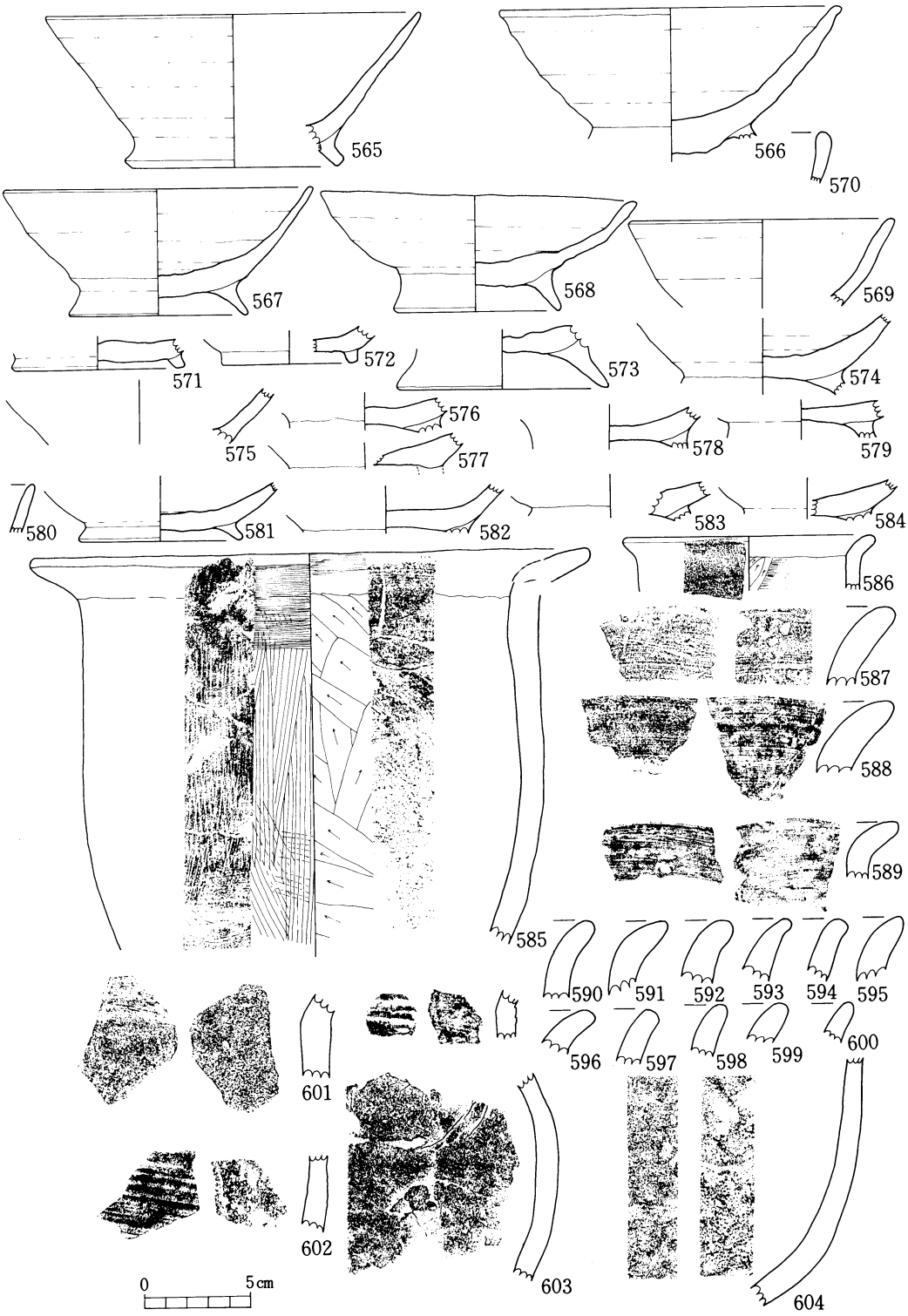
565 ～579 は高台を有する埦である。高台部分はいずれも貼付けである。565 は復元口縁径17.7cm，器高7.2 cmを測る。高台は外方へふんばり，体部は直線的に立ち上がり，端部は鋭くおさめる。566 は復元口縁径16.1cmを測る。器壁は厚く，体部は内湾気味に立ち上がる。567 は復元口縁径14.6cm，器高6 cmを測る。細い高台は外方へふんばり，体部は内湾気味に立ち上がる。568 は復元口縁径14.8cm，器高5.5 cmを測る。体部は内湾し浅いものである。571 ～579 は底部である。

580 ～584 は内面が黒色を呈する，いわゆる内黒土師器である。個体数が少なく全体形状がつかめるものはなかったが，いずれも埦であると思われる。

585 ～604 は甕である。甕は口縁部が外反し，内面の頸部以下がヘラ削り調整が施されているが，全体形状が推定できる個体は少ない。581 は復元口縁径26.4cmを測る。底部は欠損するが，丸底と思われる。胴部は張らず，頸部もしまらないもので，口縁部は強く外反する。外面調整は口縁部が横ナデ，胴部は縦方向の荒いハケ目。内面調整は口縁部が横ナデ，胴部は縦及び斜めのヘラ削りが施される。587 は復元口縁径11.8cmを測る小型の甕である。頸部はしまらず，口縁部は「く」字状に外反する。外面はナデ，内面は口縁部がナデ，胴部がヘラ削りとナデ調整である。



第46図　出土遺物（古代土器１）



第47図　出土遺物（古代土器２）

第16表　石塚遺跡古代土器観察表

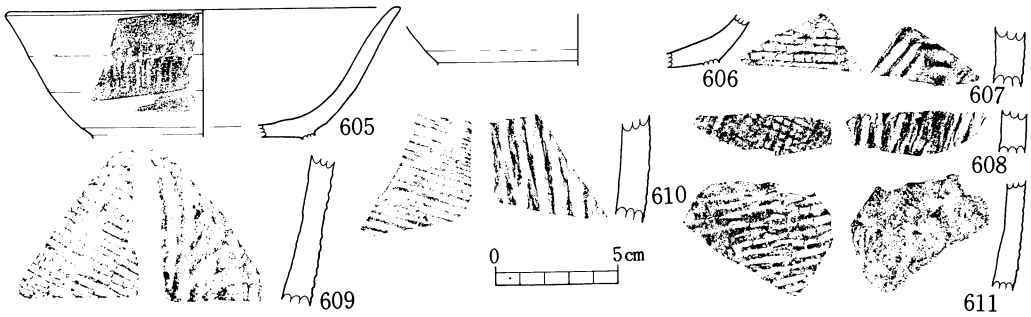
挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
	507	E－4	Ⅲ	石英,長石,角閃石(精選土)	良好	淡茶褐色	ヘラ削り,ナデ	ナデ	
	508	H－2	Ⅱ	石英,長石　(精選土)	〃	明茶褐色	ナデ	〃	
	509	D－4	Ⅱ	〃　〃角閃石(〃)	〃	〃	〃	〃	
	510	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	511	D－5	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着
	512	H－2	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	底部中央に穿孔
	513	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	514	C－5		〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	515	D－4	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
第	516	C-5,6	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	黒色土器？
	517	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	518	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	519	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	520	C－4	Ⅲa	〃　〃　〃(〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	521	C-3,4	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	明茶褐色	〃	〃	
	522	C－2		〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	
	523	F－5	Ⅲa	〃　〃　〃(〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	524	C－4	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
46	525	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	526	G－4	Ⅰ	〃　〃　(〃)	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	527	C－4	Ⅲ	〃　〃角閃石(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	内面に煤付着
	528	D－4	Ⅲa	〃　〃　〃(〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	529	C－3	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	
	530	E－4	Ⅱ	〃　〃　(〃)	〃	灰褐色	〃	〃	須恵質
	531	C－4		〃　〃角閃石(〃)	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	532	G－2	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	内面に煤付着
	533	D－4	Ⅲ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
図	534	C－3	Ⅲa	〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	ヘラ磨き	
	535	C－4		〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	536		Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	淡茶褐色	〃	ナデ	
	537	C－3	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	538		Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	外面は一部赤色顔料
	539	C－4	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	540	G－2	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	541	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	542		Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	543	G－4	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	544	G－3	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	545	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	茶褐色	〃	〃	
	546		Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	547		Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	548	G－2	Ⅱ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	549	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	
	550	H－2	Ⅰ	〃　〃　〃(〃)	〃	〃	〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第46図	551	G－2	Ⅱ	石英,長石,角閃石(精選土)	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	552	H－2	Ⅲ	〃 〃 (〃)	〃	茶褐色	〃	〃	
	553	G－2	Ⅲ,Ⅰ	〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	554	H－3	Ⅱ	〃 〃角閃石 (〃)	〃	灰茶褐色	〃	〃	内面に煤付着
	555	G－3	Ⅰ	〃 〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	556	C－3	Ⅲ	〃 〃 〃 (〃)	〃	明茶褐色	〃	〃	外底面に煤付着
	557	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	茶褐色	〃	〃	
	558	H－2	Ⅰ	〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	559	C－4	Ⅰ	〃 〃 〃 (〃)	〃	明茶褐色	〃	〃	
	560	G－2	Ⅱ	〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	561	H－2	Ⅰ	〃 〃角閃石 (〃)	〃	暗茶褐色	ヘラ削り	〃	
	562	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	ナデ	〃	
	563	C－3	Ⅲ	〃 〃 〃 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	内外面に煤付着
	564	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	明茶褐色	〃	〃	
第47図	565	C－3	Ⅲ	〃 〃 〃 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	ヘラ磨き	
	566	C－4	Ⅲa	〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	ナデ	
	567	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	灰黒褐色	〃	〃	
	568	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	569	C－4	Ⅲa	〃 〃 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	内外面に煤付着
	570			〃 〃 〃	〃	黒褐色	〃	〃	
	571	G－4	Ⅰ	〃 〃 〃 (〃)	〃	明茶褐色	〃	〃	
	572	G－3	Ⅰ	〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	573	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	574	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	内面に煤付着
	575	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	576			〃 〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	577	G－3	Ⅲ	〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	578	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	579	G－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	580			〃 〃 (〃)	〃	灰茶褐色	〃	ヘラ磨き	内黒土師器
	581	H－2	Ⅲ	〃 〃角閃石 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	〃
	582	C－4	Ⅱ	〃 〃 〃 (〃)	〃	赤褐色	〃	〃	〃
	583			〃 〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃
	584			〃 〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	〃
	585	C－4	Ⅱ	石英，長石，角閃石	〃	暗茶褐色	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	口縁内外面に煤付着
	586	H－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ナデ	〃 〃	
	587	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色	〃	ナデ	
	588	G－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	内外面に煤付着
	589	G－2	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃
	590	H－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃	外面に煤付着
	591	G－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	ナデ	〃
	592	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	593	C－5	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ﾍﾗ削り，ﾅﾃﾞ	
	594	C－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	外面に煤付着
	595	G－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	

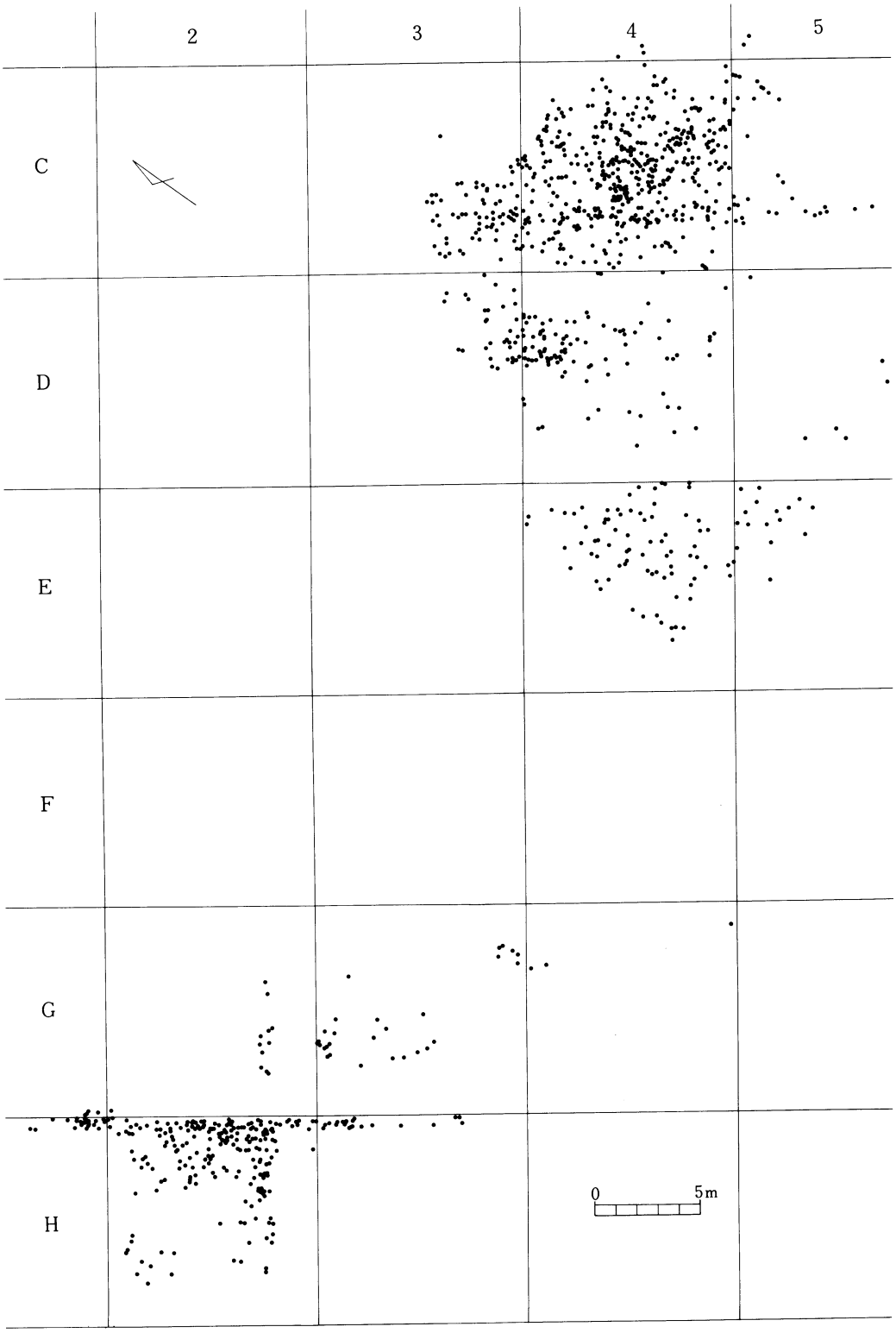
挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第47図	596	H－2	Ⅱ	石英，長石，角閃石	良好	灰黒褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
	597	C－3	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	〃	〃	
	598	D－2	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	599	C－3	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	〃	外面に煤付着
	600	C－5		〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	601	C－3	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	黒茶褐色	〃	ヘラ削り，ナデ	外面に煤付着
	602	C－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	タタキ？	〃 〃	
	603	C－4	Ⅲa	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ナデ	ヘラ削り	
	604	C－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着
第48図	605	H－2		〃 〃 〃	〃	灰白色	叩き後ナデ	ナデ	
	606	D-3,4	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	
	607	D-3,4	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	格子目叩	同心円叩	
	608	E－5	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	平行叩き	
	609	C－5		〃 〃 〃	〃	〃	〃	平行同心円叩	
	610	D3,4	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	灰色	平行叩き	平行叩き	
	611	D－5		〃 〃 〃	〃	灰茶褐色	格子目叩	ナデ	

須恵器（第48図）

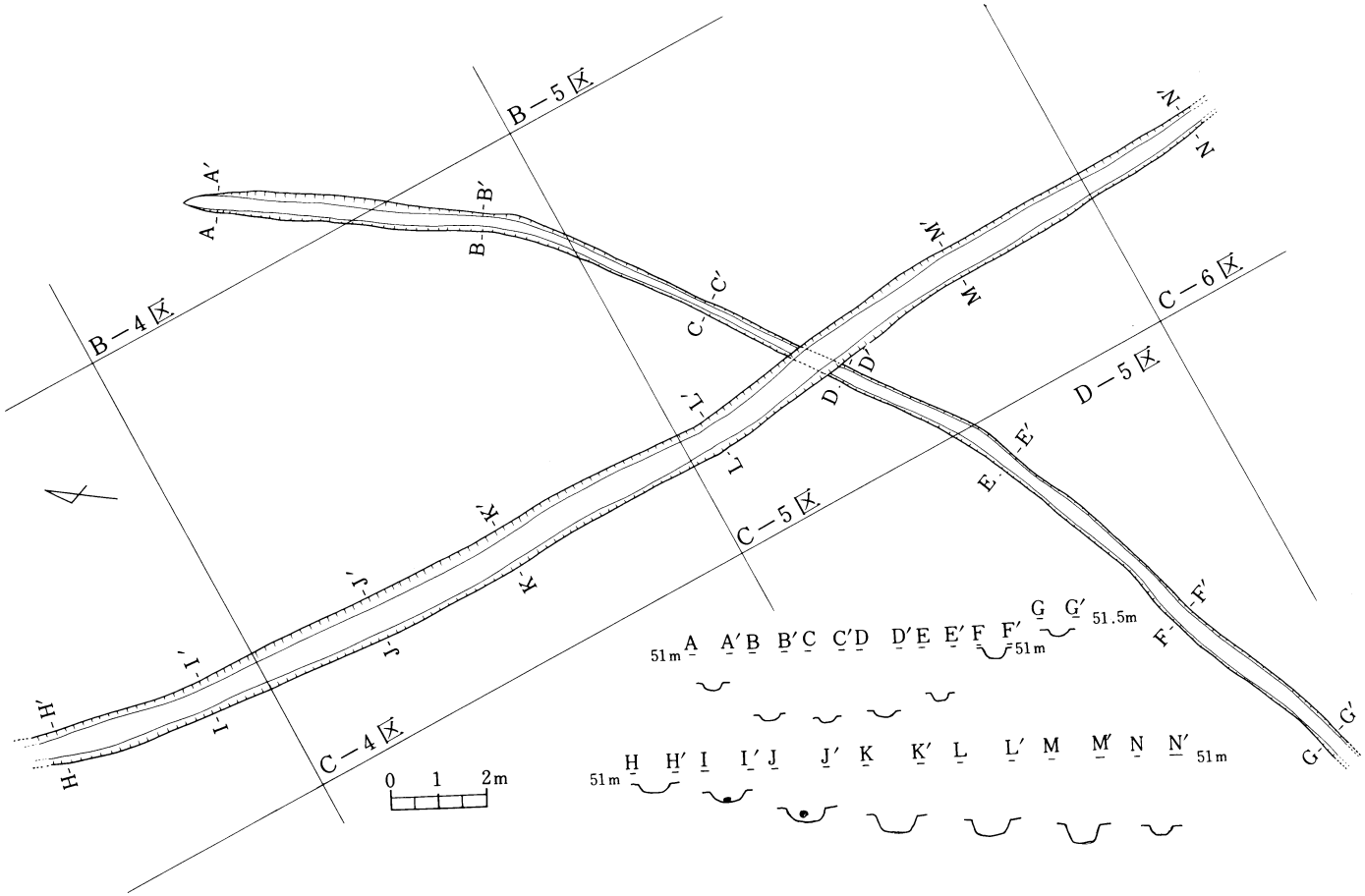
須恵器の出土量は少なく，埦・甕・壺の破片が7点見られるだけである。605 ・606 は埦である。高台を有していたものと思われるが，高台部分は欠損している。605 は復元口縁径16.2cmを測り，体部は内湾気味に立ち上がり口縁部で外反する。口縁端部は鋭くおさめる。607 ・610 は甕。607 ～609 は外面が格子目たたき，内面が平行たたきである。610 は内外面共に平行たたきであるが，内面の叩きの方が幅の広いものである。611 は外面が格子目叩き，内面がナデ整形を施すもので，壺と思われる。



第48図　出土遺物（古代須恵器）



第49図　Ⅱ層遺物出土状況


B－5区
B－4区
C－6区
D－5区
C－5区
C－4区
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
J
J′
K
K′
L
L′
M
M′
N
N′
51m
51.5m
0 1 2m

第50図　中世溝状遺構

4　中・近世の遺構・遺物（第50図～第54図）

中世及び近世については，包含層はⅡ層であるが畑地とする段階での削平を受けているため，残存している部分が少なく，Ⅰ層中よりの出土も多かった。そのため土錘等では，近代のものと区別できにくいものもある。

(1)　遺構（第50図）

遺構は，溝状遺構がⅢ層上面において２条検出された。

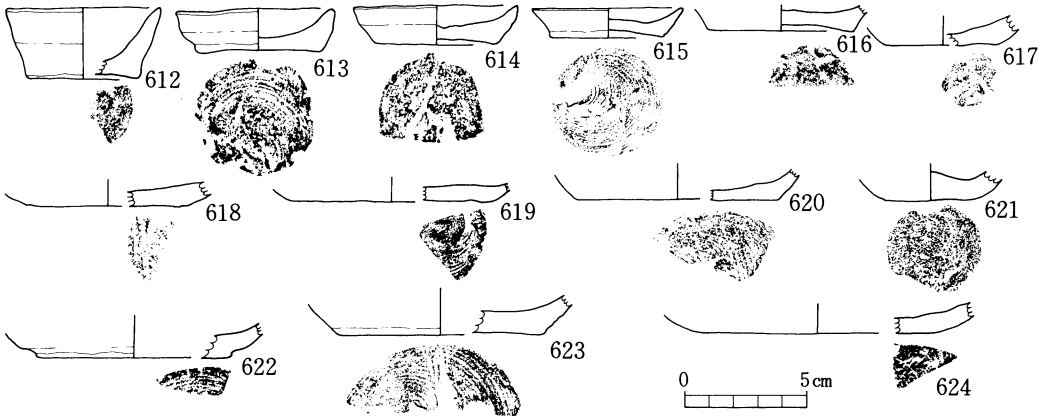
溝１は，Ｂ－４区・Ｃ－４区・Ｃ－５区・Ｄ－５区にわたって検出され，ほぼ南北にはしる。Ｂ－４区の北側およびＤ－５区の南側においては，以前の削平により溝も削除されており，全長はつかめない。溝の規模は，幅55cm，深さ10～20cmで浅いＵ字状を呈する。遺跡地のＣ－５区・Ｄ－４区が深く谷状になっているためＢ－４区およびＤ－５区からＣ－５区へむけて傾斜しており，溝２と切り合う付近が低くなっている。溝１に伴う遺物は数点出土しているが，図化できるものはなかった。

溝２は，Ｃ－３・４・５・６区にわたって検出され，西北から東南方向へはしる。溝２も溝１と同様Ｃ－３区の北側・Ｃ－６区の南側は削除され，全長はつかめない。幅50～85cm，深さ20～40cmで，Ｃ－６区（東南側）に向かって傾斜している。溝中より土器小片や青磁片が出土している。第52図の626 は溝２中より出土したもので，青磁の稜花皿である。復元口縁径12.2cmを測り口縁内面には櫛描文が見られる。

溝１と溝２についてみると，交差する部分で観察すると，溝１が溝２により切られており，溝１が溝２に先行することが確認された。しかしながら，時間差はさほどないものと考えられる。

(2)　遺物（第51図～第53図）

遺物は，土師器・白磁・青磁・染付け・土製品（紡錘車・土馬・土錘）・砥石・銅銭等が見られる。



第51図　出土遺物（中世・近世土器）

土師器（第51図）

土師器は612 ～624 で，いずれも糸切り底の皿である。612 は復元口縁径6.4 cm，器高2.9 cm

を測り，他の皿に比して深い。613 ～615 は器高が 3 cm以下のもので，復元口縁形は613 が6.6 cm，614 が6.8 cm，615 が6.2 cmを測る。616 ～624 は口縁部が欠損している。底部径は 4 ～9.5 cmと幅がある。

磁器（第52図）

625 は白磁の合子蓋と思われる。小破片のため全体の形状・文様については判明しない。

626 ～649 は青磁である。626 ～631 は皿。626 は復元口縁径8.5 cmを測り，口縁部が内湾する小形の皿である。627 ～631 は稜花皿と思われる。627 は溝 2 より出土したものである。628 は復元口縁径12.1cmを測る。629 は内面に櫛描文が見られる。630 ・631 は口縁部を欠損するものである。632 ・633 は櫛描文を施し，632 には内外面に櫛描文が見られる。

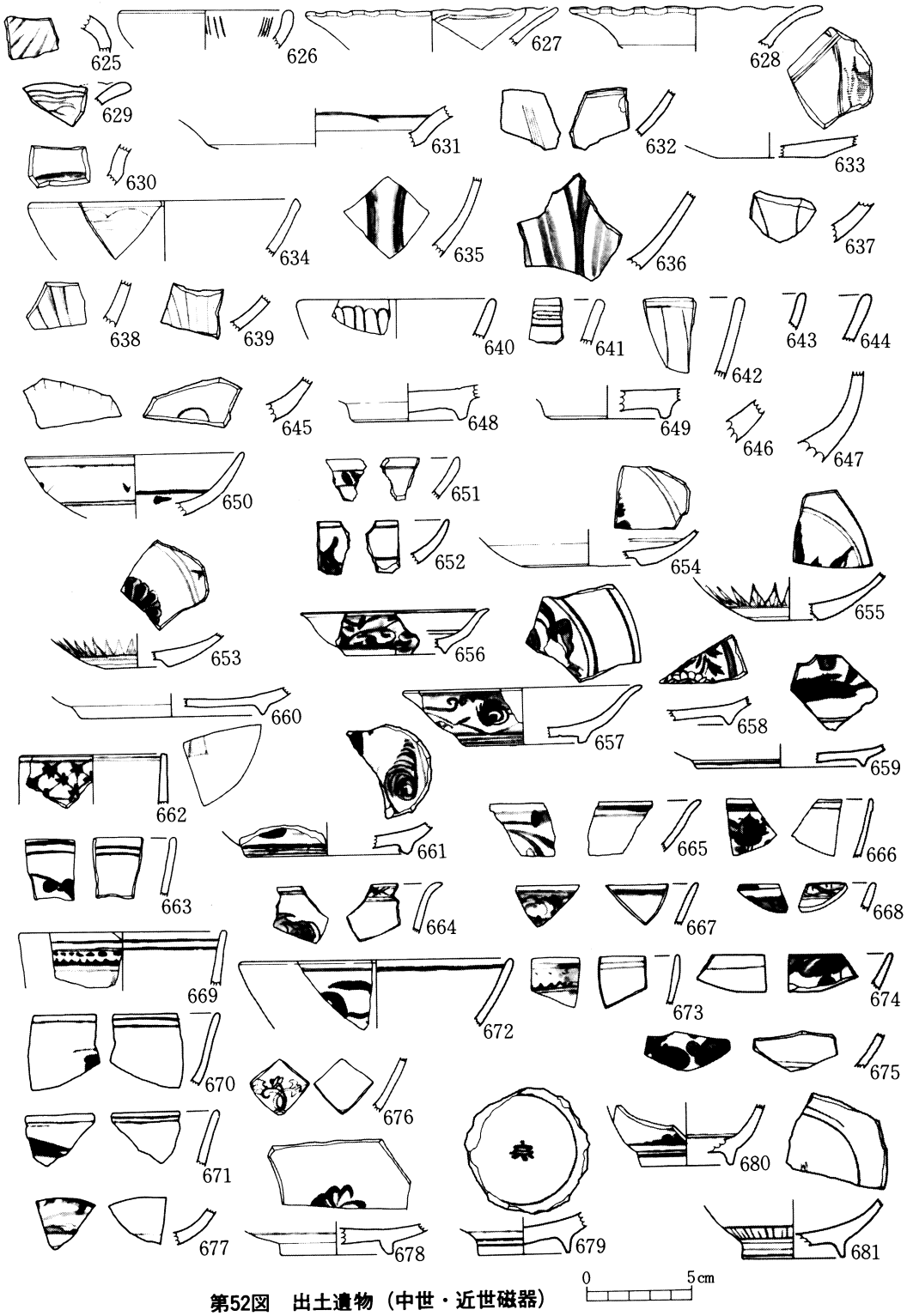
633 は平底の皿である。底部は施釉後にヘラ切りがなされ無釉である。見込みに櫛描文が施される。634 ～649 は碗である。634 はやや白っぽい釉がかかるものである。635 ～637 は鎬蓮弁文が施されるものである。638 ～640 ・642 ・645 はヘラ描き沈線による細い蓮弁文を施す。641 はヘラ描き沈線による雷文風の文様を施す。648 ・649 は底部。648 は高台畳付から外底部が露胎となるが，部分的に釉がかかっている。649 は外底部のみ露胎である。

染付け（第52図）

染付けはⅠ層出土である。650 ～661 は皿。650 ～652 は細かい貫入が見られ，黄色を帯びた磁胎である。650 は復元口縁径16cmを測り，口縁内外面に 1 条・底部外面に 2 条の界線。見込みには 1 条の圏線と不明の文様を描く。653 ～655 は碁笥底の皿で畳付は露胎となるものである。653 は外面に芭蕉文，内面に菊花文を描く。655 は外面に芭蕉文，内面に草花文と思われる文様を描く。656 ～661 は高台を有する皿。656 は復元口縁径 9 cmを測る。外面に唐草文，内面に 1 条の界線と 2 条の圏線を描く。657 は復元口縁径11.5cmを測る。畳付か外底部は露胎である。外面に牡丹唐草文，内面には 1 条の界線，見込みには 2 条の圏線内に玉取獅子らしい文様を描く。658 は畳付のみ露胎で見込みに草花文を描く。659 は畳付のみ露胎で見込みに山水らしい文様を描く。661 は畳付のみ露胎で見込みにはうずまき状の文様が描かれる。662 は筒型碗と思われる。663 ～681 は碗である。いずれも小破片のため全容がつかめないものである。外面に唐草様の文様を描くものなどがある。664 は口縁部内面に四方襷文，666 は外面に牡丹を描く。674 は内面に，675 ・676 は外面につる草様の文様を描く。678 は高台付近から外底部にかけて露胎で，見込みに菊花文を描く。

土製品（第53図）

土製品としては，把手状のもの・紡錘車・土馬・土錘等があげられる。682 は把手と思われるものである。683 は紡錘車である。約 4 分の 1 程度が残存している。厚さ 1 cm・復元径 5.5 cmの円板で中央に0.6 cm程度の穿孔を有するものである。684 は土馬と思われる。尾部及び後足・左前足が欠損する。また東部の両側縁には剝落の痕跡が認められるが，この部分に耳があったのではないかと考えられる。顔面は目から頬の部分を凹ませ鼻すじがとおっている。口はヘラにより切り込んでいる。およそ馬とは程遠い感じである。



第52図　出土遺物（中世・近世磁器）

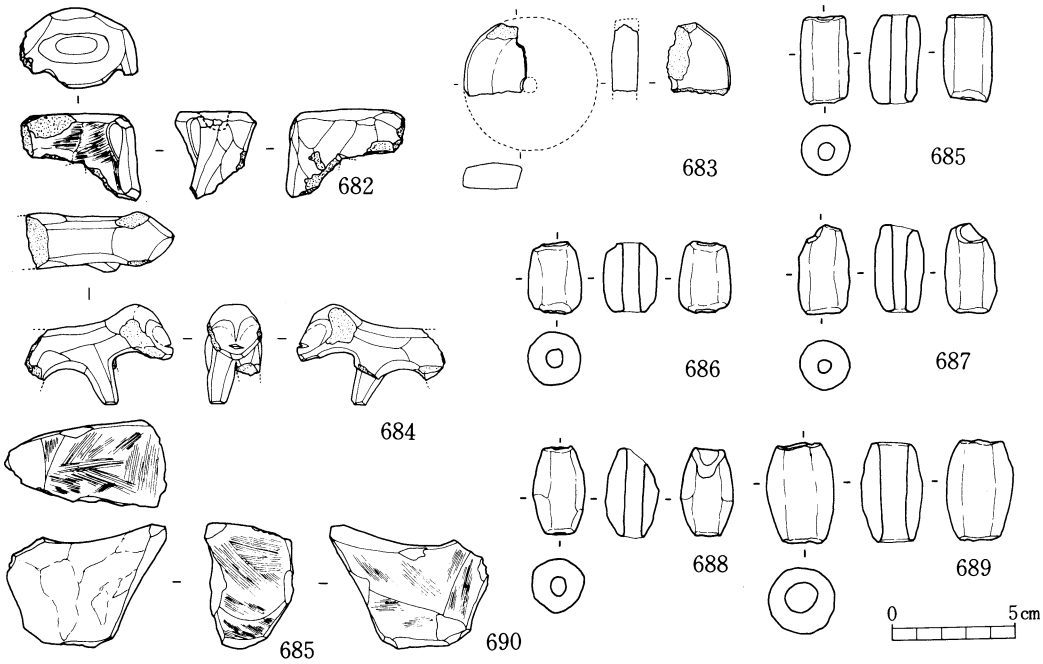
685 ～690 は土錘である（ただし690 は陶製）。685 ～688 はいずれも管状を呈するもので，径が約２cm，長さ３～3.5 cm，穿孔径0.5 ～0.6 cmを測るものである。690 は陶製の錘で，径3.8 cm，長さ4.2 cm，穿孔径1.2 cmを測るものである。

石製品（砥石）（第53図）

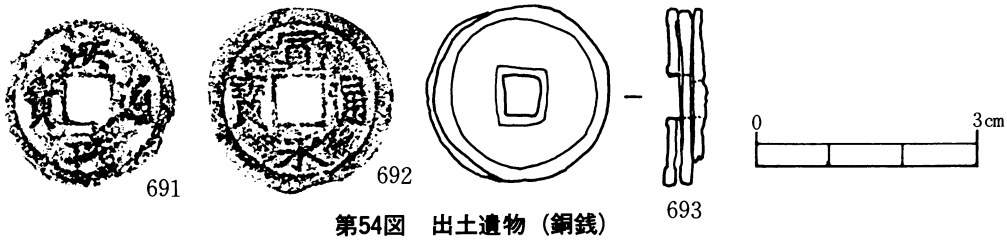
689 は砂岩製の砥石である。長さ6.6 cm，幅3.6 cm，高さ5.2 cmを測り，一面を除き研磨の痕跡が認められ，よく使い込んである砥石である。

銅銭（第54図）

胴銭は６枚が出土しているが，いずれもⅠ層出土である。691 は洪武通寶である。径2.3 cm，孔は一辺0.6 cmである。692 は寛永通寶で，径2.5 cm，孔は一辺0.6 cmである。693 は３枚の胴銭がかたまって出土したが，３枚がくっついており，はなすことはできなかった。文字は判読できないが，寛永通寶ではないかと思われる。



第53図　出土遺物（中世・近世土製品）



第54図　出土遺物（銅銭）

第２節　坂ノ下遺跡

坂ノ下遺跡は，隼人町野久美田字坂ノ下に所在する。鹿児島湾の北岸にせまる標高約146 mの通称城ノ原台地は中世の長浜城跡で，現在はミカン畑として利用されており，本遺跡はこの城ノ原台地の北斜面に位置する。また，南・東・西の三方を山に囲まれた谷頭状の台地にあり，南側が標高約58m，北側が標高約53mの傾斜をもっている。北西には，平成元年度に調査を行った春田遺跡，南東には今回，坂ノ下遺跡と同時に調査を行った石塚遺跡が位置する。

坂ノ下遺跡は，日本道路公団が計画している国分・隼人道路の建設に伴う分布調査により発見された遺跡で，平成元年度に県文化課が確認調査を実施した。確認調査によると，古墳時代・中世の遺物が出土している。

確認調査の結果に基づき，本年度全面調査を実施したもので，縄文時代の石器，古墳時代の土器，奈良・平安時代の土師器，中世の土師器・磁器，近世の土師器・陶磁器などが出土した。

1.　古墳時代の遺物（第59図～第60図）

土器（第59図～第60図）

古墳時代の土器は，甕形土器，鉢形土器，壺形土器などがⅡ層及びⅢ層より出土した。

694 ～731 は甕形土器である。694 は復元口縁径31.5cmを測り，頸部でゆるやかにしまり，外反して口縁部にいたるもので，口縁端部に凹線状のくぼみを持つ。頸部には断面三角形で右下がりの刻み目突帯を巡らす。695 ～706 は外反する口縁部で，口縁端部を丸く納めるもの（695 ・696 ・698 ），端部を平坦におさめるもの（699 ・700 ・701 ・702 ），端部が凹線状にくぼむもの（702 ）がある。706 は頸部片で，外反して口縁部へ至るものである。

707 ～712 は刻みを有する貼付け突帯を巡らすもので，707 ～711 は刻みに布目の痕跡が認められる。

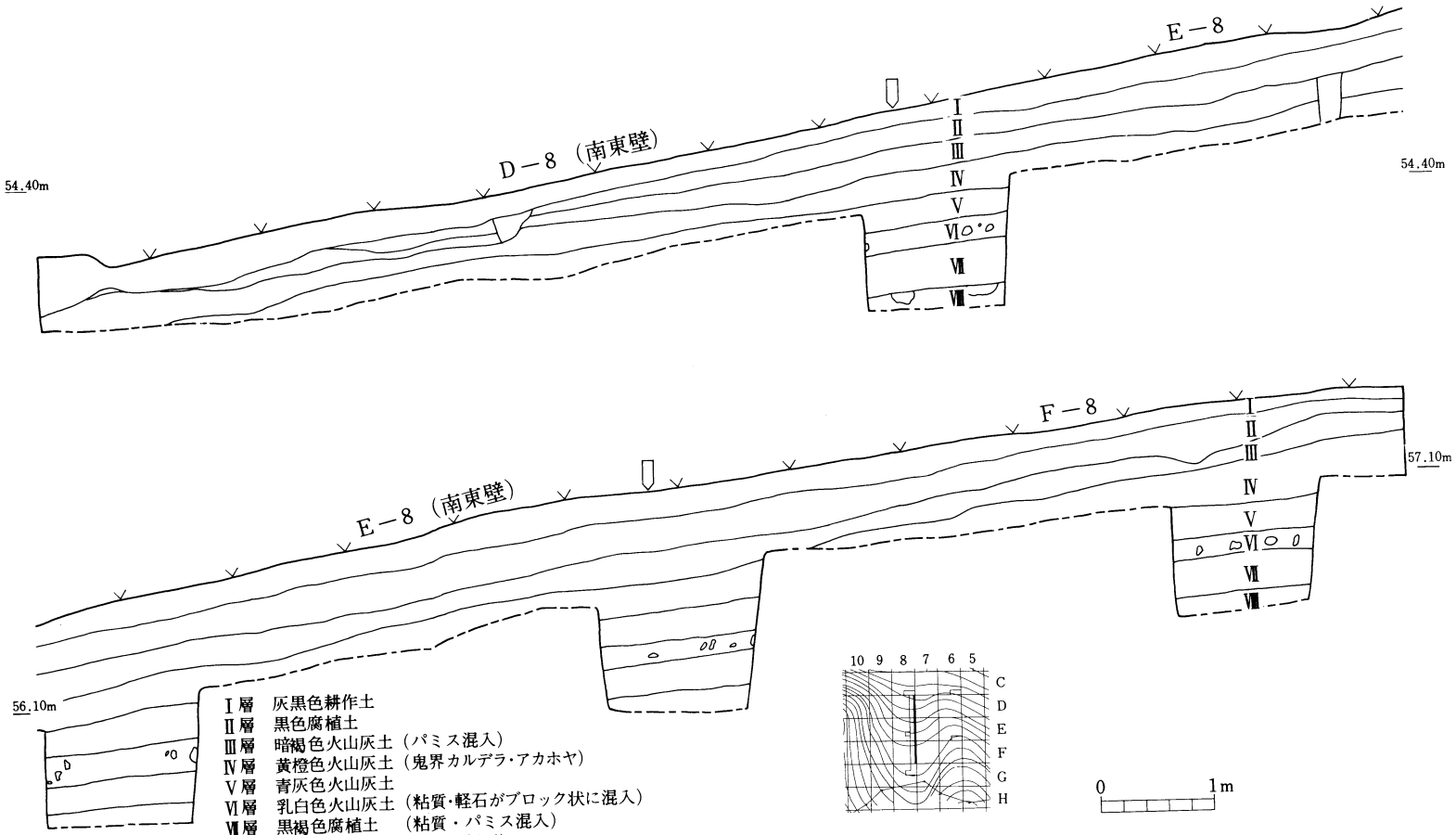
713 ～719 は胴部片で，713 は内外面ともにハケ目調整である。

720 ～724 は，胴部と底部の接合部分で，いずれも貼付けにより胴部と脚台の接合を行っている。725 ～731 は脚台で，いずれも中空となる。

732 ～735 は鉢形土器である。732 は直線状に外へ開くものであるが，器形については小片のため定かでない。733 は安定した平底を呈し，ゆるやかに内湾しながら立ち上がり，現存部の先端でいくぶん屈曲し，外反するものである。734 は低い中空の脚台である。735 はいくぶん上げ底ぎみの平底を呈し，壺形土器の可能性もある。

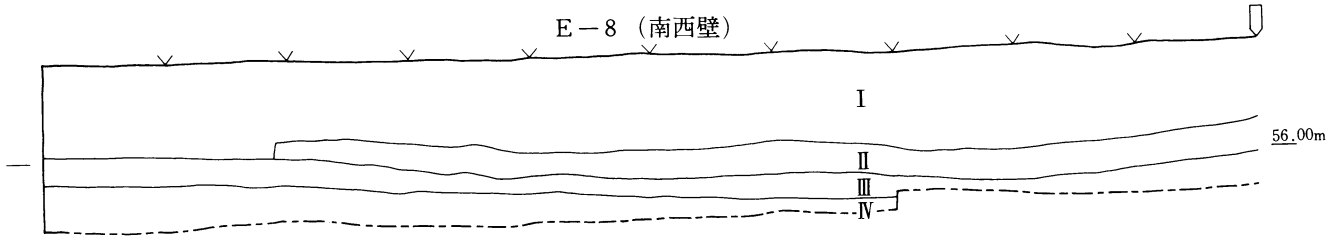
736 ～740 は壺形土器である。736 は口縁部で，頸部から直線的に立ち上がり，口縁部半ばから大きく外反する。737 は球状を呈し，胴最大径部に左下がりの貼付け突帯を巡らすものである。738 は小さな平底を呈し，直線的に底部から立ち上がるもので，鉢形土器の可能性も考えられる。739 は肩部にヘラ状工具により斜位の平行沈線を施した幅1.5 cmの貼付け突帯を巡らすものである。740 は底部で，丸底状を呈するものと考えられる。

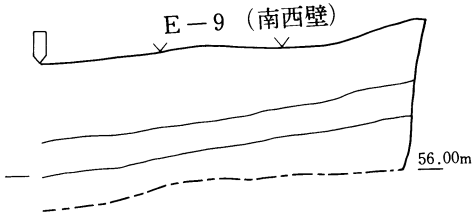
741 ・742 は破片のため，器種・器形は不明である。741 は小形の高坏あるいはミニチュア型

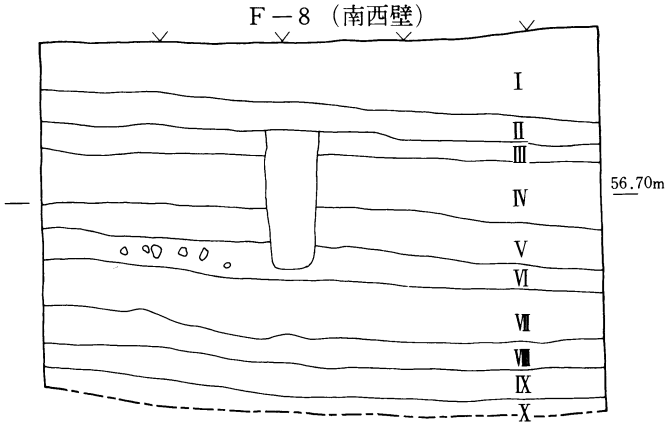


Ⅰ層　灰黒色耕作土
Ⅱ層　黒色腐植土
Ⅲ層　暗褐色火山灰土（パミス混入）
Ⅳ層　黄橙色火山灰土（鬼界カルデラ・アカホヤ）
Ⅴ層　青灰色火山灰土
Ⅵ層　乳白色火山灰土（粘質・軽石がブロック状に混入）
Ⅶ層　黒褐色腐植土　（粘質・パミス混入）
Ⅷ層　灰白色火山灰土（サツマ軽石）
Ⅸ層　暗茶褐色粘質土（チョコレート層）
Ⅹ層　黄白色火山灰土（姶良カルデラ・シラス）

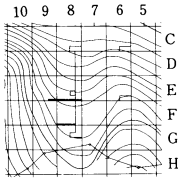
第55図　坂ノ下遺跡土層図１



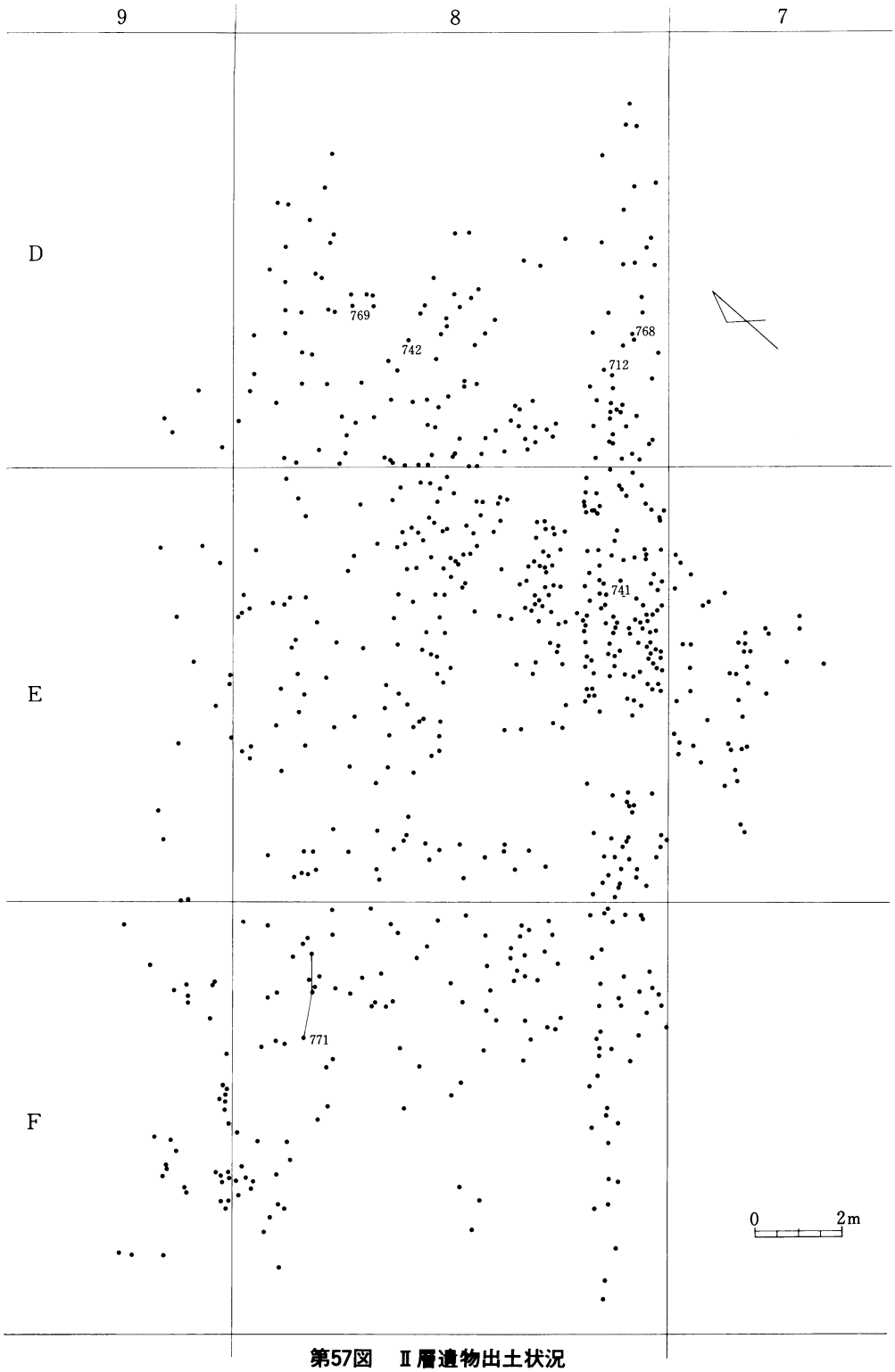




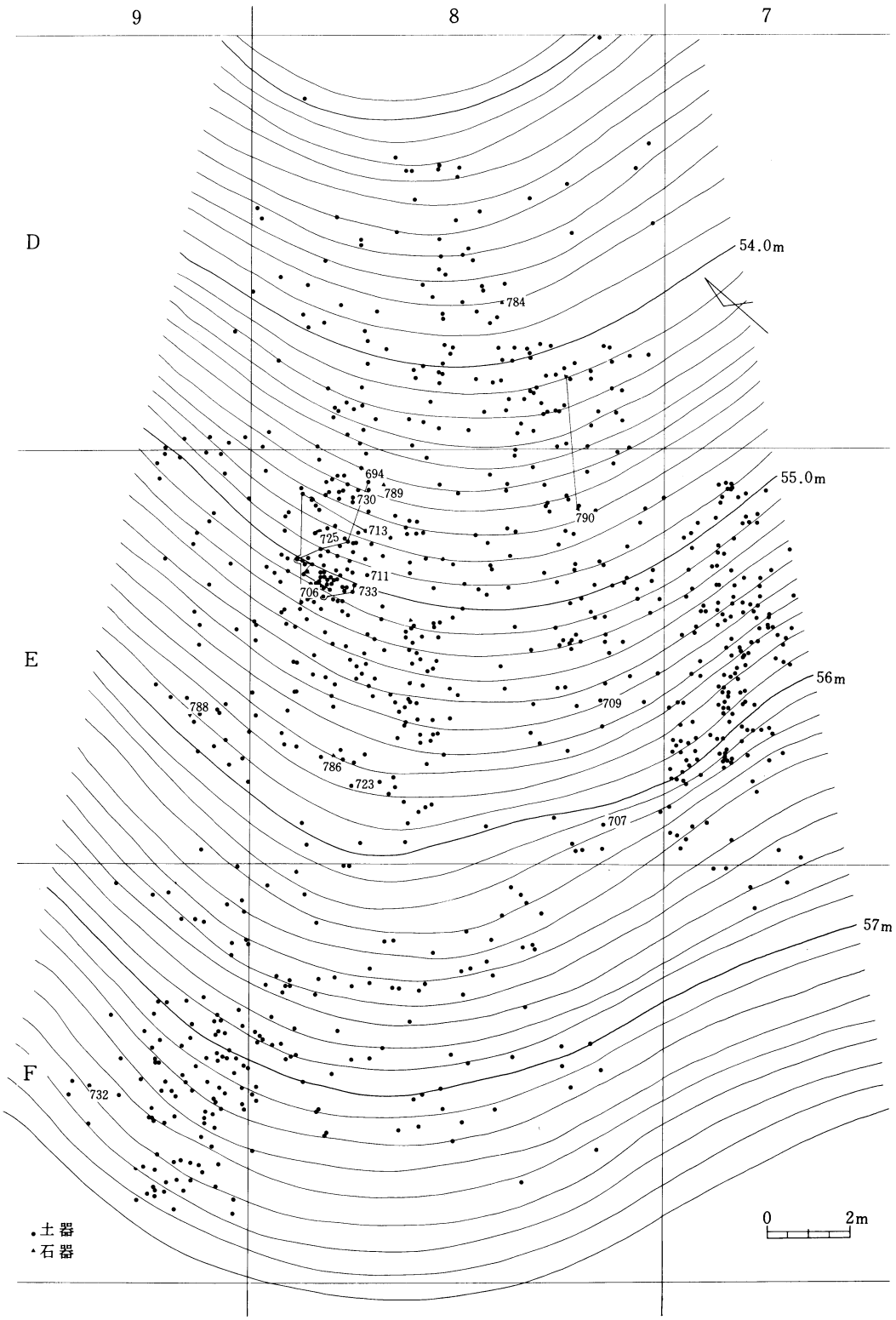
Ⅰ層　灰黒色耕作土
Ⅱ層　黒色腐植土
Ⅲ層　暗褐色火山灰土（パミス混入）
Ⅳ層　黄橙色火山灰土（鬼界カルデラ・アカホヤ）
Ⅴ層青灰色火山灰土
Ⅵ層　乳白色火山灰土（粘質・軽石がブロック状に混入）
Ⅶ層　黒褐色腐植土　（粘質・パミス混入）
Ⅷ層　灰白色火山灰土（サツマ軽石）
Ⅸ層　暗茶褐色粘質土（チョコレート層）
Ⅹ層　黄白色火山灰土（姶良カルデラ・シラス）



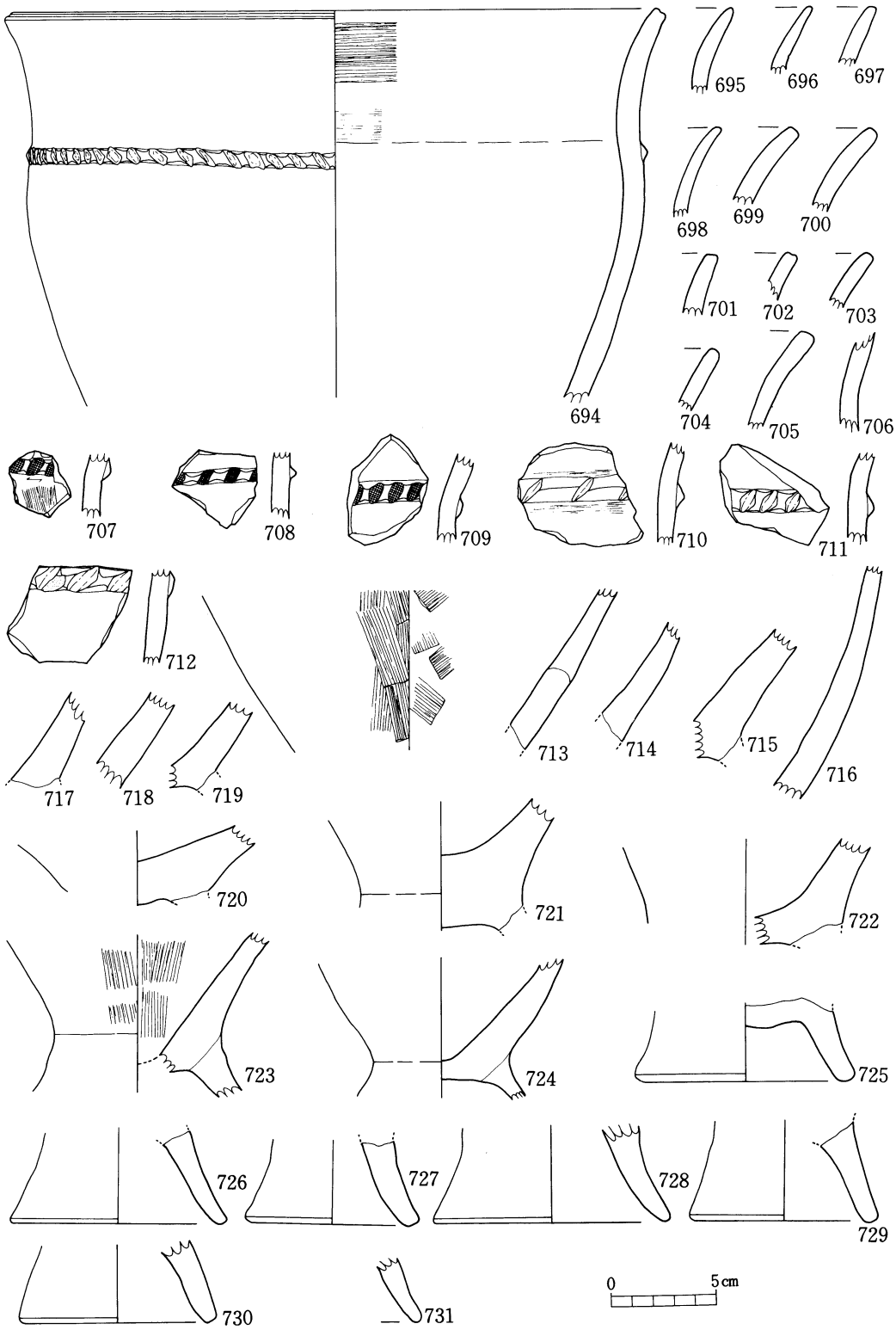
第56図　坂ノ下遺跡土層図２



第57図　Ⅱ層遺物出土状況

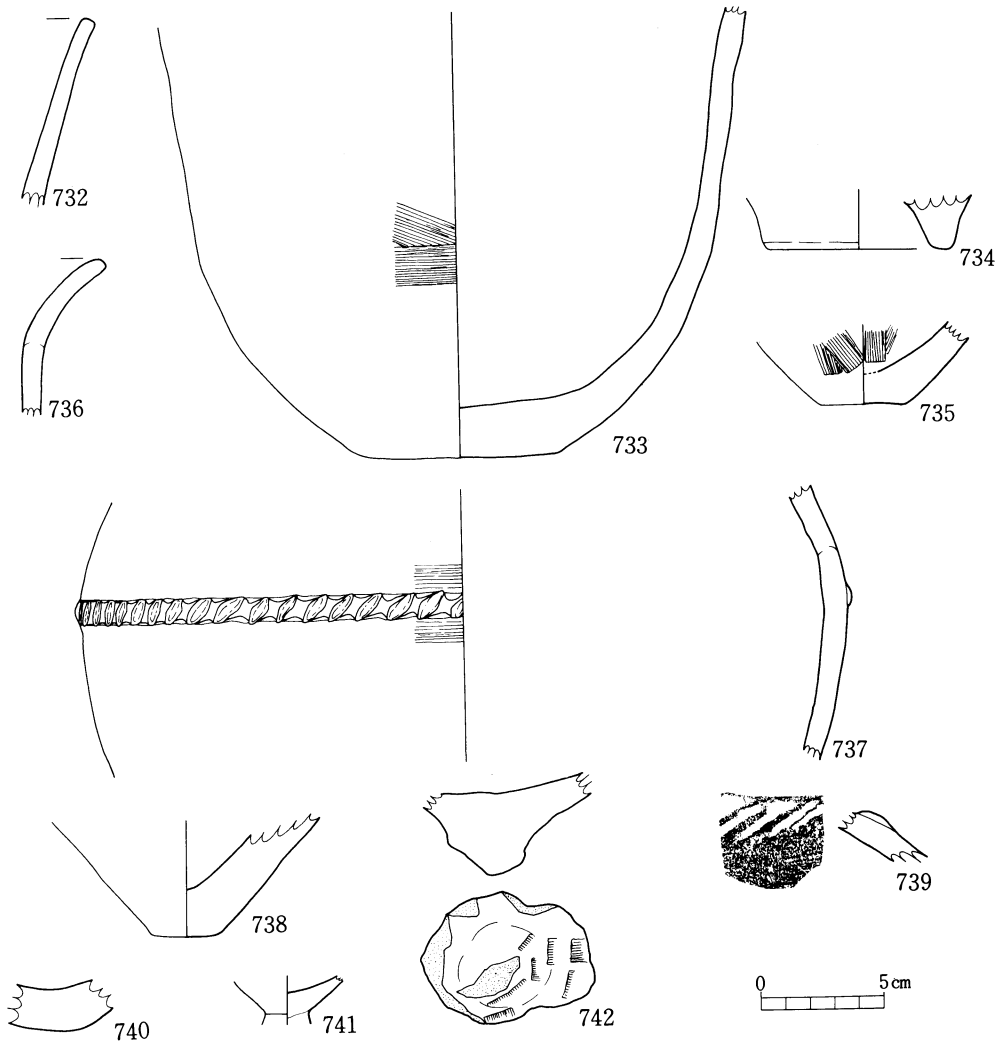


第58図　Ⅲ層遺物出土状況



第59図　出土遺物（古墳土器１）

土器の可能性も考えられる。742 は鉢形土器の脚台の可能性も考えられるもので，外面にあらいハケ目が認められる。



第60図　出土遺物（古墳土器２）

第17表　坂ノ下遺跡古墳土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第	694	E－8	Ⅲ	石英，長石，角閃石	良好	赤茶褐色			器壁があれている
59	695	E－7	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	ナデ	ナデ	
図	696	E－7	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	外面に煤付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第59図	697	F－9	Ⅰ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色			器壁があれている
	698	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	
	699	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色			器壁があれている
	700	D－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	701	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色	ナデ	ナデ	
	702	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色			器壁があれている
	703	D－9	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	704	D－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	705	D－7	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	706	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	707	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	刻目突帯
	708	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色	〃	〃	〃
	709	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	〃
	710	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	711	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
	712	D－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色			器壁があれている
	713	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
	714	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	
	715	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	716	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
	717	F－7	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃			器壁があれている
	718	D－8	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色			〃
	719	F－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色			〃
	720	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐色			〃
	721	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	722	F－9	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃			〃
	723	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
	724	D－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ナデ？	ナデ	
	725	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	〃	
	726	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	727	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	728	F－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			器壁があれている

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第	729	E－8	Ⅲ	石英，長石，角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
59	730	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			器壁があれている
図	731	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	明茶褐色	ナデ	ナデ	外面に煤付着
	732	F－9	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色			器壁があれている
	733	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
第	734	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	ナデ	
	735	D－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	
	736	F－8		〃 〃 〃	〃	〃			器壁があれている
60	737	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ		刻目突帯
	738	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃			器壁があれている
	739	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ		突帯
図	740	E－8	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	741	E－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ ?	ナデ	器種不明
	742	D－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ		〃

2 古代・中世・近世の遺物（第61図～第62図）

古代・中世・近世の遺物はⅠ層・Ⅱ層から土師器・須恵器・青磁・白磁・染付け・陶磁器等が出土した。

土師器（第61図）

土師器は，皿・坏・埦・甕等が出土し，ろくろからの切り離しの手法もヘラ切り・糸切りによるものが混在して出土している。時期については，古代から近世までと幅があるが，ここでは一括して取り扱った。

743 ～752 は皿である。746 は復元口縁径11.4cm，748 は9.3 cm，749 は8 cm，750 は7 cmを測る。743 は底部にヘラ切り，749 ・750 は糸切りによる切り離しの痕跡が観察できるが，他は磨滅が著しく明瞭でない。

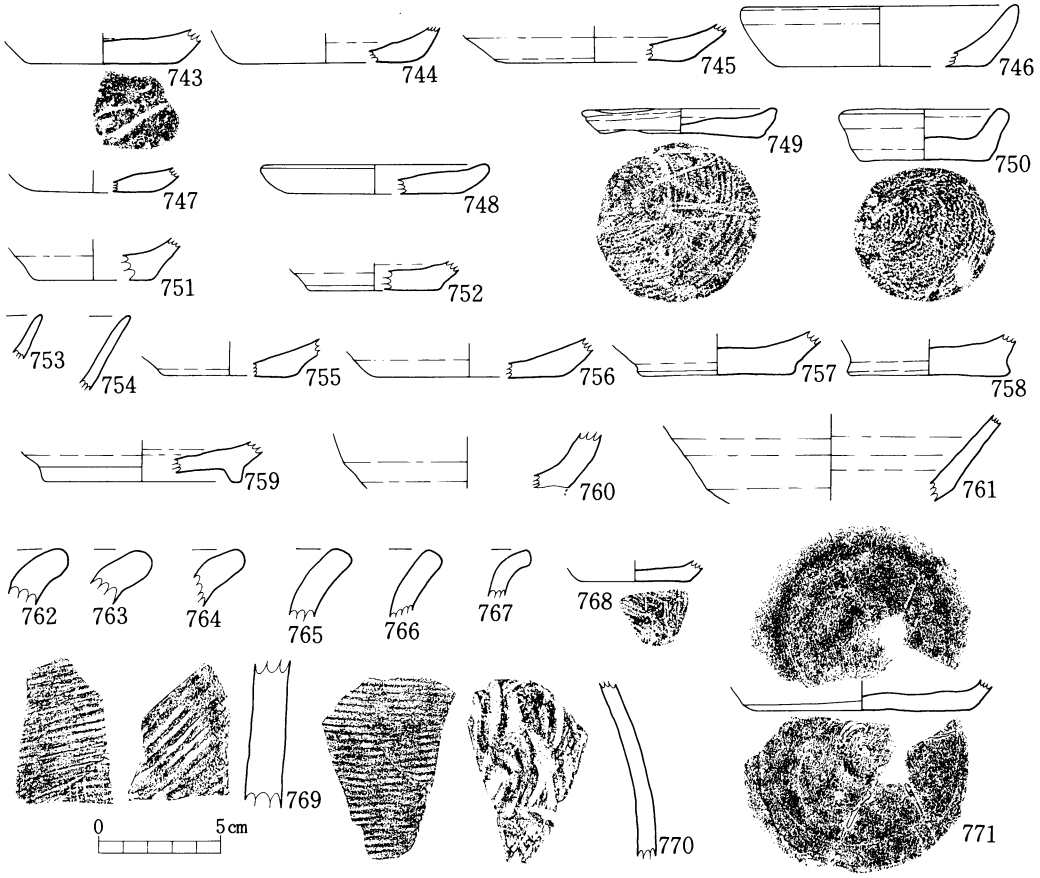
753 ～758 は坏である。753 ・754 は，口縁部が若干外反し，端部は鋭くおさめるものである。これらは，口縁部だけの破片で底部が欠落しているため，坏か埦か判断できないが，ここでは坏として考えたい。

755 ～758 は底部である。底部から外開きで立ち上がるもの（756 ）と立ち上がりがいったん中に入ってから開くもの（757 ・758 ）とがある。

759 ・761 は高台を有する埦である。760 ・761 は高台部分が欠落したもので，760 は体部と高台との接合面から欠落しているものである。

762 ～767 は甕である。762 ～764 は短めの口縁を呈し，端部を丸くおさめるもので，いずれ

も内外面ともナデ調整である。765 ～767 は外反する口縁部で，762 ～764 に比べると，器壁がうすい。いずれも内外面ともナデ調整である。



第61図　出土遺物（古代・中世・近世）

須恵器（第61図）

769 ～771 は須恵器である。769 は坏の底部と考えられる。770 は甕の肩部と考えられ，外面が平行叩き，内面が同心円叩きである。771 は壺の底部であり，回転ヘラ削りである。

第18表　坂ノ下遺跡古代～近世土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第61図	743	D－8	Ⅱ	石英，長石，角閃石(精選土)	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	744	E－9	Ⅰ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	745	B－3	Ⅰ	〃 〃 角閃石 (〃)	〃	淡灰茶褐色	〃	〃	
	746	E－9	Ⅰ	〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	747	E－8	Ⅱ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	748	F－9	Ⅲ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第61図	749	F－8	Ⅱ	石英，長石，角閃石(精選土)	良好	灰茶褐色	ナデ	ナデ	
	750	E－8	Ⅰ	〃 〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	751	D－8	Ⅱ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	752	E－7	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
	753	F－8	Ⅲ	〃 〃 〃 (精選土)	〃	〃	〃	〃	
	754	F－9	Ⅲ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	755	F－8	Ⅱ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	756	F－8	Ⅱ	〃 〃 角閃石 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	757	F－8	Ⅲ	〃 〃 〃 (〃)	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	758	F－8	Ⅱ	〃 〃 (〃)	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	759	E－8	Ⅱ	〃 〃 角閃石 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	760	F－8	Ⅱ	〃 〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	761	F－8	Ⅱ	〃 〃 角閃石 (〃)	〃	〃	〃	〃	
	762	F－9	Ⅱ	石英，長石，角閃石	〃	赤茶褐色	〃	ﾅﾃﾞ，ﾍﾗ削り	
	763	E－8	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ナデ	
	764	B－3	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	765	E－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	ﾅﾃﾞ，ﾍﾗ削り	
	766	E－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色	〃	〃	
	767	F－9	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	〃	ナデ	
	768	D－8	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	灰褐色	〃	〃	
	769	D－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色	平行叩き	平行叩き後ﾅﾃﾞ	
	770	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	灰色	〃	同心円叩	
	771	F－8	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	〃	ナデ	回転ヘラ削り	

青磁・白磁（第62図）

772 ～776 は青磁である。772 は皿で，口縁外面に一条の沈線を巡らし，内面に草花文を描く。773 ～776 は碗である。773 はヘラ描きによる蓮弁文が施される。774 ・775 は外反する碗，776 は碗の体部である。

777 は端反りの皿で，青白磁と思われる。778 は白磁の碗で釉は体部下位まで施され，所々に高台まで及ぶ釉だれが見られる。高台から畳付，外底部は露胎となる。

染付け・陶器（第62図）

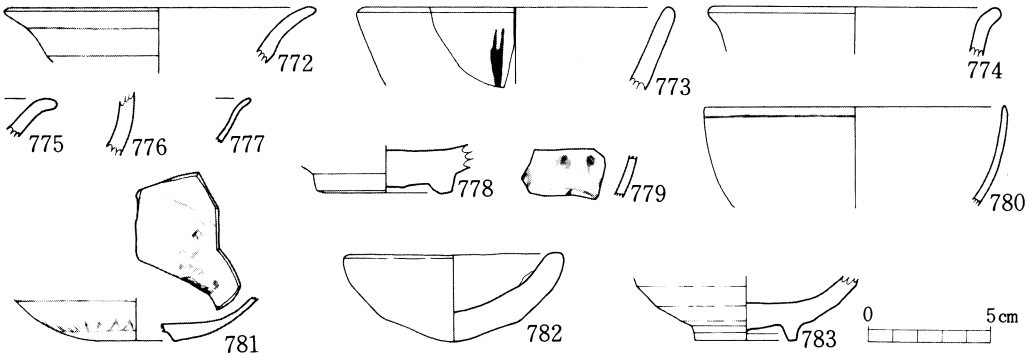
779 ～781 は染付けである。779 は碗の体部で，笹様の文様を描く。780 は口縁部内外面に一条の界線を巡らすもので，器壁は薄い。781 は碁笥底を呈する皿で，芭蕉文を描く。

783 は体部半ばまで釉が施され，以下は露胎となる。露胎部分は，縮緬じわが明瞭に残り深緑

色を呈する皿で，近世のものと考えられる。

その他（第62図）

782 は，るつぼあるいはとりべと考えられるもので，復元口縁径 9 cm，口縁部内面に緑色の鉱滓と思われるものが付着している。胎土は砂粒子を含む。中・近世の遺物の項で取り扱ったが，時期については特定しがたいものである。



第62図　出土遺物（中世・近世陶磁器）

3　縄文時代の遺物（第63図～第64図）

出土した遺物は，石鏃・石匙・磨製石斧・すり石等の石器である。これらの石器はⅢ層及び確認調査時のトレンチより出土している。

坂ノ下遺跡で出土した土器は古墳時代以降のもので，縄文時代の遺物の出土はみられないが石鏃・石匙等は形状から判断すると縄文時代に該当するものと考えられるため，縄文時代の遺物として取り扱った。

石器（第63図～第64図）

石鏃（第63図）

石鏃は全部で 3 点出土している。石材についてみると黒曜石 2 点，頁岩 1 点である。これらは形状において二等辺三角形・正三角形にわけられる。

784 は確認調査時にＢ－３トレンチの排土中から出土したものである。形状は，二等辺三角形を呈する石鏃で底辺に比して二辺が長く，基部は凹基でＶ字状に抉れるものであり，横断面は分厚いレンズ状を呈する。石材は黒曜石である。785 は正三角形を呈すると考えられる石鏃で，基部は凹基で浅いＶ字状に抉れるものであり，横断面はレンズ状を呈する。石材は黒曜石である。786 は二等辺三角形を呈すると考えられる石鏃で，器部は凹基で浅く抉れるものであり，石材は頁岩である。

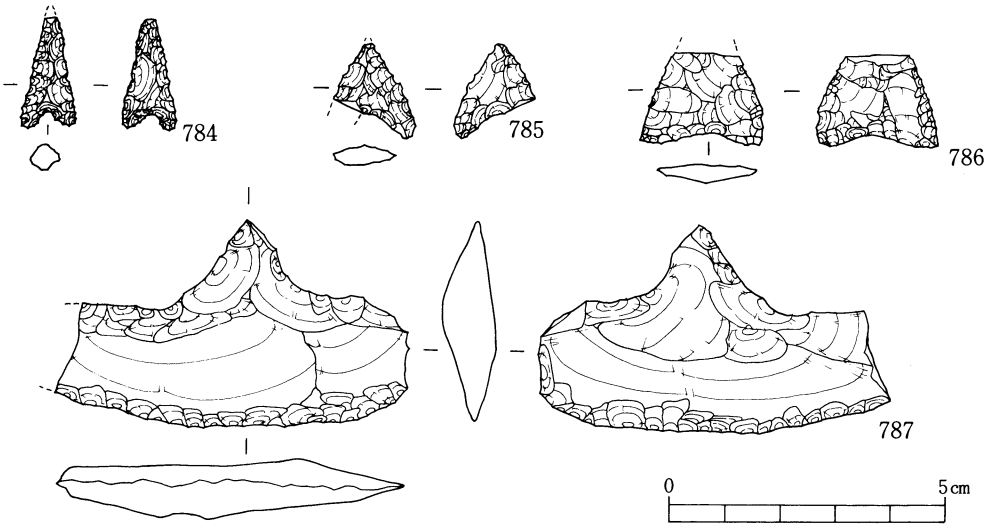
石匙（第63図）

石匙は確認調査時のＢ－３トレンチより出土し，火山灰の 2 次堆積と考えられる不安定な層から出土したものである。横長剝片を用い，ていねいな交互剝離で刃部を作り出している。石材は

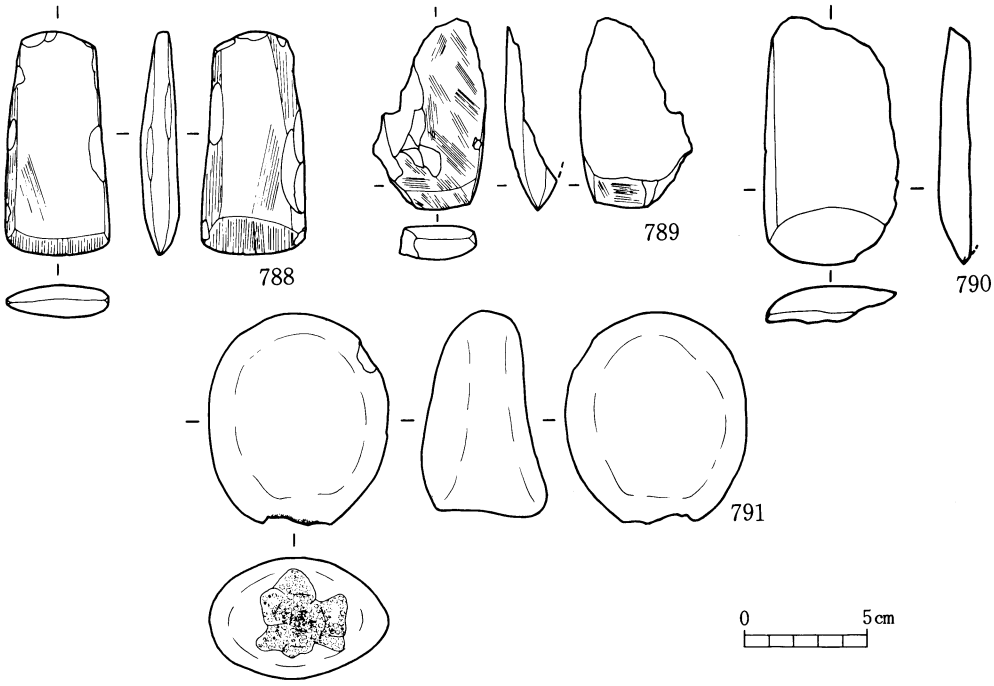
安山岩である。

石斧（第64図）

石斧は3点出土し，いずれも磨製石斧である。788 は粘板岩を石材とするもので，両側縁部及び刃部に入念な研磨が施されており，刃部は両刃である。789 は基部から刃部の一部を欠損する。



第63図　出土遺物（石器１）



第64図　出土遺物（石器２）

ホルンフェルスを石材とし，全面に入念な研磨を施す。刃部は両刃である。

790 は安山岩を石材とするもので，風化のため研磨痕は認められない。基部から一方の刃部にかけての部分を欠損しているが，残存部分から判断すると両刃であると考えられる。

すり石（第64図）

791 は安山岩の円礫を利用したすり石で，全面に作業の痕跡が認められる。また，下端部には敲打痕の残るくぼみが認められ，すり石・たたき石の両方の用途を兼ね備えたものであることがわかる。

19表　坂ノ下遺跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器　種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	最大重g	石　材	備　考
第63図	784	B－3		石　鏃	2.0	1.0	0.43	0.57	黒曜石	
	785	B－3		〃	（1.7）	1.5	0.35	0.53	〃	
	786	E－8	Ⅲ	〃	（1.65）	2.2	0.3	1.23	頁　岩	
	787	B－3		石　匙	3.75	6.4	0.9	17.64	安山岩	
第64図	788	E－9	Ⅲ	磨製石斧	9.35	4.3	1.35	97	粘板岩	層位不安定
	789	E－8	Ⅲ	〃	7.8	4.5	1.4	50	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	
	790	E－8	Ⅲ	〃	10.15	5.45	1.4	100	安山岩	
	791	D－8	Ⅲ	すり石	8.65	7.4	5.1	400	〃	

第Ⅵ章 まとめにかえて

春 田 遺 跡

春田遺跡の発掘調査においては，溝状遺構及び縄文時代前期～晩期，古墳時代，古代，中世，近世の遺物が出土した。

1. 遺 構

溝状遺構は2条検出されたが，埋土中からは縄文時代晩期，成川式土器，土師器等が混在するかたちで出土し，時期及び性格の特定には至らなかった。

2. 遺 物

縄文時代の遺物は前期～晩期の遺物が出土している。1は短沈線により幾何学文を描くもので，前期の曽畑式土器に比定されるものである。2・3は縄文施文土器で，2は内湾する口縁部，3はなだらかに屈曲する胴部である。特に3は，硬い繊維による縄文原体を施す点や内面の整形がヘラ削りであることや赤ホヤ上位からの出土であることから，近年県内で出土例が増加している船元式土器系のものであろうと考えられる。[(1)(2)]

4は口縁部に凹線文を施す土器で，縄文時代中期に比定されるものと考えられる。

5・6は口縁下部に粘土帯を貼付けた文様帯を作り出し，斜位の連続する沈線文を施すもので，南福寺式土器を介して阿高式土器にその源流が求められる[(3)]出水式土器系のものと考えられる。

15～51は縄文時代晩期に比定される浅鉢形土器・深鉢形土器である。器形の復元可能なものは少なく，断片的な判断しかしえないが，浅鉢形土器については，内外ともにヘラ研磨が施され，15のようにマリ状の器形を呈すると思われるもの，比較的長い口縁部に沈線を施したものなどが見られる。深鉢形土器では，32のように雑な沈線を横位に施す点や組織痕土器の出土がまったくみられないことなどを総合すると，入佐式土器の時期に該当するものと考えられる。

縄文時代の石器では，五角形に近い形状を呈する石鏃の出土が顕著[(4)(5)]であり，この石鏃は晩期に伴うものと言われている。本遺跡からも晩期の土器が出土していることから，この時期に伴うものと考えられよう。

古墳時代の甕形土器を中心として検討してみると，口縁部が外反し頸部内面に明瞭な稜を持ちしかも突帯を有しないものが2点，口縁部が外反し頸部内面の稜ははっきりせず，そして突帯を有するものが6点，直行する口縁に突帯を有するものが1点出土している。このような様相は成川式土器の中でも古いタイプから新しいと考えられているタイプ[(6)(7)]までを含んでおり，古墳時代の中においてもかなりの時間の開きがあるものと考えられる。

歴史時代の遺物は，土師器，須恵器，青磁，白磁，染付け等が出土している。土師器は器壁の磨滅が著しいものが多いが，157・166などは底部の切り離しや内面の削りから奈良・平安時代のものと考えられる。また，148などのようにかなり新しい時期と思われるものもある。

次に青磁・白磁・染付け等についてみてみると，玉縁口縁状を呈する白磁（208），碁笥底を呈

し「寿」様の文様が描かれると思われる皿[8](210)等が出土しており，これらは中国の宋から明にかけてのものと考えられ，215 は東播系と呼ばれる中世の陶器で，窯元は兵庫県の魚住古窯群であると考えられる[9]。

なお，本遺跡は国分隼人道路建設により破壊される部分についてのみ調査を実施したもので，調査区の南側には縄文時代から中世にかけての遺跡が存在するものと考えられる。

坂ノ下遺跡

坂ノ下遺跡の発掘調査においては，古墳時代，古代，中世，近世の遺物が出土した。

古墳時代の遺物は，甕形土器，鉢形土器，壺形土器等が出土している。他の土器に比して出土量の多い甕形土器を中心として検討してみると，出土したすべての甕形土器が口縁部は外反している。また，694 ・701 ～711 は頸部に突帯を有し内面の稜は定かでないものが多い。

口縁部が外反し，頸部に刻み目突帯を施す成川式土器は５Ｃ～６Ｃ頃とされており[10][11]，本遺跡の成川式土器もこの特徴を有するものであり，上記の時期に該当するものであると考えられる。

歴史時代の遺物は，土師器，須恵器，青磁，白磁，染付け等が出土している。土師器は器壁の磨滅が著しいものが多いが，743 ・762 ～767 などは底部の切り離しや内面の削りから奈良・平安時代と考えられる。また，749 ・750 などのようにかなり新しい時期と思われるものもある。

次に青磁・白磁・染付け等については，いずれも小片が多く時期等の特定はしがたいが，碁笥底を呈し芭蕉文を描く皿（781 ）については，中国の明朝の時期と考えられるものある[12]。

本遺跡で出土した遺物の中で特異なものが782 である。内面に金属の鉱滓が付着しており，とりべ[13]あるいはるつぼと考えられるものである。他に製鉄に関係する遺物・遺構等はみられず，時期については特定しがたい。

石器については，石鏃・石匙・磨製石斧・すり石等が出土している。本遺跡では縄文時代の土器の出土はみられないが，層位の不安定なトレンチより出土した784 ・785 を除き他は本遺跡の包含層中最下層のⅢ層から出土していることや形状から判断して縄文時代の遺物と考えられる。

石塚遺跡

石塚遺跡においては，縄文時代早期～晩期・古墳時代・平安時代・中近世と幅広い時期の遺構・遺物が出土・検出されている。

縄文時代早期については，遺物の出土量はきわめて少ないが，集石遺構２基が検出されている。土器についてみると，押引文と思われるもので吉田式土器に比定できるもの。格子状の押型文を有するもの。口縁部がラッパ状に外反する塞ノ神式土器に比定できるものなどが出土している。格子目状の押型文土器についてみると，県内では石峰遺跡で細線格子状押型文土器とされているもの[14]，三代寺遺跡で格子目押型文土器等[15]に見られるだけで稀少なものである。今後の資料の増加に期待したい。

また，集石遺構が２基検出されているが，１号集石はこぶし大の礫が密集した状態であるのに比して，２号集石は，やや大きめの礫がまばらであり，１号集石とは性格が異なるようである。いずれも

炭化物・灰・焼土等は検出されず，火を焚いた痕跡は認められないものである。蒸し焼き等の使用が考えられる。

縄文時代中期・後期についてみると出土量は極めて少ない。中期ではいわゆるキャリパー状を呈した器形の春日式土器が出土している。近くの春花田遺跡においても見られるものであるが，[16] 石塚遺跡では資料が少ないため詳細については不明である。また，後期の土器も出土量が少なく詳細は不明である。

縄文時代では，晩期の時期の遺物の出土量が多かった。晩期のものとしては浅鉢型土器・深鉢型土器が見られる。浅鉢型土器は大半が黒色研磨土器で薄手の堅緻なものである。いずれも小破片のため具体的位置付けは困難であるが，おおむね入佐式土器を中心にしたものであろうと考えられる。中には241 の様に後期の御領式土器ではないかと思われるものもある。深鉢型土器についてみると内外面共に研磨が施された精製土器が多く見られる。深鉢型土器においては，上加世田式・入佐式・黒川式と思われるものが見られ，時期幅があるものと思われる。口縁部に文様帯を有し沈線を巡らすもの，胴部屈曲部に沈線を巡らし凹点文を施すもの，底部が上げ底状を呈するもの等は後期の御領式ではないかとも考えられるが，晩期の初頭に位置付けたい。

石器についてみると，石鏃・石匙・削器・石斧・すり石・台石・石錘等が出土している。そのうち石鏃は15本出土している。これらの石鏃は石材・形態などがいろいろである。時期についても明らかにすることは出来ない。308 についてみると未調整の部分が見られ，製作の途中ではないかと思われる。石塚遺跡における縄文時代は，晩期が主体であるので，石器についてもⅤ層出土のものを除いて晩期に伴うものと考えられる。

古墳時代についてみると，遺構は隅丸方形を呈した土壙が１基検出された。一辺1.5 m，深さは推定２mの規模である。埋土中には基盤層に含まれている花崗岩の礫が多く混在し，カーボンも確認されている。また，甕形土器で底部を欠損するものが口縁部を下にした状態で出土している。時期についてみると，甕形土器が外反口縁部であることから成川式土器のなかでも古手のものと考えられ，４～５世紀代ではないかと思われる。

古墳時代の土器についてみると，ほとんどの土器が成川式土器と呼称されるものである。甕形土器は例外なく口縁部が外反するもので，頸部に突帯を有するものと，突帯を有しないものとがある。また，突帯を有しないものは頸部から口縁部へかけて板状施文具等によりカキ上げ調整を施すものが多くみられる。底部は成川式土器特有の中空の脚台である。壺形土器は小破片が多く，良好な資料が少ない。口縁部はしまった頸部より外反するものが見られる。胴部及び肩部には刻目突帯を巡らすものが見られるが，刻目も布状の痕跡が認められるもの，３条の突帯に同時にヘラで刻目を施すもの，やや幅広の突帯に格子状に刻目を施すものなどが見られる。底部は平底とやや丸みを帯びた底が見られる。その他に坩・埦・高坏等が出土しているが，いずれも破片のため全体形状のつかめないものだけである。

また，特殊なものとして双孔棒状土錘と鉄鏃が見られる。双孔棒状土錘は姶良町小瀬戸遺跡[17]・鹿児島市七社遺跡[18]・川内市外川江遺跡[19]・指宿市小牧遺跡[20]・鹿児島市鹿児島大学構内神川堤第１地点遺跡[21]・

鹿児島市大龍遺跡[22]・東郷町五社遺跡[23]・指宿市橋牟礼川遺跡[24]・東串良町下伊倉城跡[25]等に次いで10例目である。時期については，古墳時代であろうと考えられるが，表層出土のため確定は出来ない。用途については下山覚氏が神川堤第１地点遺跡の報告書の中で考察し，菅状土錘と組み合わせて用いて，刺し網等の小規模網に使用されたのではないかと論じている[26]が，下山氏も述べている　ように，今後民俗例等にも注意して行く必要があるものと思われる。

鉄鏃は，無茎の鉄鏃で先の尖った木で鏃身を挟むものである。無茎鉄鏃の出土例も少なく，県内では大口市羽月地下式板石積石室[27]より出土しているのみである。宮崎県えびの市小木原遺跡でも類似した鉄鏃が出土しており，４世紀代に比定できるとのことである[28]。石塚遺跡の鉄鏃は遺構に伴わず包含層から出土したもので時期設定の決め手がないものである。

古墳時代の遺物は土器・双孔棒状土錘・無茎鉄鏃等が出土しているが，土器は成川式の中でも古いタイプのもので，５世紀代より新しくはならないものと考えられる。また，無茎鉄鏃も古墳時代前期のものと考えられ，土器の年代と合致するものと思われる。

古代についてみると，遺構は検出されず，Ⅲ層上位より土師器とわずかながら須恵器が出土している。器種は蓋・皿・坏・埦・内黒土師器（埦）・甕が見られるが，奈良時代までさかのぼるものはなく，平安時代の中でおさまるものと思われる。

中世・近世については，Ⅱ層中より青磁片等が出土し，Ⅲ層上面で溝状遺構が検出されているが，大半はⅠ層出土である。溝状遺構は２条検出されている。溝１は中央谷部の凹みにほぼ直行する状況で走っており，両端が高く中央が低くなっている。溝２は西北部より東南部方向へ傾斜に沿って低くなっている。溝１と溝２の切り合いを観察すると，溝２が溝１を切った状況で溝２の方が新しいことがわかる。しかしながら大して時間差はないものと考えられる。溝からは土師器の小片等が出土しているが実測できるものはない。ただ溝２中より１点だけ青磁の稜花皿が出土しており，時期を考えるうえで貴重な資料であった。この稜花皿は竜泉窯系の青磁で15～16世紀ころと思われるもので，溝もその時期のものと考えられる。また，溝の埋土については水が流れたり，溜っていたりというような痕跡は観察されず，用途等については明らかにすることはできなかった。

出土している土師器はすべて糸切り底の皿で器高の浅いものである。

磁器には白磁・青磁・染付けが見られる。白磁は１点だけの出土であるが，合子の蓋と思われるもので貴重な資料である。残念ながら小破片のため詳細が不明である。青磁は同安窯系と思われる櫛描文を施したもの，竜泉窯系と思われる稜花皿・縞蓮弁文を施す碗，ヘラ描きの細い蓮弁文を施す碗など13世紀から16世紀ころまでのものが見られる。染付けにしても15・16世紀を中心としたものが多く出土している。これらは，遺跡地の南側の丘陵にある中世山城の長浜城（生別府城）との関連が深いものと思われる。長浜城は現在みかん畑が広がり，損傷もおおきいが土塁及び空堀等も残されており，城域も広い山城である。

土製品では，土錘の他に土馬と思われるものが出土している。土馬は馬形土製品と称されることもあり，時期的には奈良時代から平安時代を中心とするものであるが，石塚遺跡においてはⅠ層出土のため時期が判明しない。ただ，これまでに出土しているものに比べると若干様子が異なるようである。

また，当遺跡においては奈良時代相当の土師器は見られず，古く見ても平安時代と思われる。今後の資料の増加を待ちたい。

以上，石塚遺跡について若干の考察を試みたが，縄文時代早期から中近世までの長期にわたって生活の場であったことに驚きの念を感じ得ない。今後は外観だけで遺跡地であるか否かの判断をすることについては十分注意するべきであると感じた。

＜参　考　文　献＞

(1) 中村耕治・吉永正史　『前谷遺跡』　松山町教育委員会　1986
(2) 牛ノ浜修・東　和幸　『鞍谷遺跡』　枕崎市教育委員会　1990
(3) 乙益重隆　「縄文文化の発展と地域性 -九州西北部 -」『日本の考古学Ⅱ -縄文時代』
(4) 東和幸　『井手ノ上遺跡』　末吉町教育委員会　1989
(5) 冨田逸郎・児玉健一郎　『川原遺跡・屋根添遺跡他』　東郷町教育委員会　1990
(6) 池畑耕一　「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古第14号』　1980
(7) 田々良友博　「成川式土器の検討」『鹿児島考古第15号』　1981
(8) 中村耕治・中島哲郎　『薩摩国分寺』　川内市教育委員会　1985
(9) 大村敬通・水口富夫　『魚住古窯群』　兵庫県教育委員会　1983
(10) (6) に同じ
(11) (7) に同じ
(12) 力武卓治・大庭康時　『博多』　福岡市教育委員会　1988
(13) 前川威洋・浜田信也・新原正典・馬場弘稔　『筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡』　福岡県教育委員会　1978
(14) 河口貞徳・出口浩・戸崎勝洋・池畑耕一・長野真一・青崎和憲　『石峰遺跡』　鹿児島県教育委員会　1980
(15) 新東晃一・弥栄久志・牛ノ浜修　『三代寺遺跡』　鹿児島県教育委員会　1979
(16) 吉永正史・井ノ上秀文　『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』　鹿児島県教育委員会　1985
(17) 戸崎勝洋・立神次郎　『小瀬戸遺跡』　鹿児島県教育委員会　1982
(18) 出口浩　「吉野町七社遺跡」『鹿児島考古第８号』　1973
(19) 青崎和憲・繁昌正幸　『外川江遺跡』　鹿児島県教育委員会　1984
(20) 池畑耕一　「隼人の漁撈生活」　『隼人文化』　1979
(21) 下山覚　「双孔棒状土錘に関する一考察」『神川堤第一地点遺跡』　鹿児島大学工学部　1985
(22) 上村俊雄・本田道輝・桒畑光博・下山覚・吉本正典・中園聡　『大龍遺跡』　鹿児島市教育委員会　1986
(23) 旭慶男・宮田栄二　『五社遺跡』　東郷町教育委員会　1986
(24) 下山覚氏（指宿市教育委員会）の御教示による。
(25) 吉永正史・宮田栄二　『下伊倉城跡・下伊倉遺跡』　鹿児島県教育委員会　1989
(26) (21)に同じ
(27) 寺師見国　「鹿児島県大口市大住・焼山石室古墳群」『鹿児島県文化財調査報告書６』　1959
(28) 永友良典氏（宮崎県文化課）の御教示による。

北側より

南側より

石塚遺跡空中写真

図版 2

石塚遺跡遠景

石塚遺跡遺物出土状況

石塚遺跡遺物出土状況

石塚遺跡遺物出土状況

坂ノ下遺跡近景

坂ノ下遺跡遺物出土状況

石塚遺跡・坂ノ下遺跡確認調査

春田遺跡発掘風景

春田遺跡発掘風景

春田遺跡発掘風景

春田遺跡遺物出土状況

春田遺跡遺物出土状況

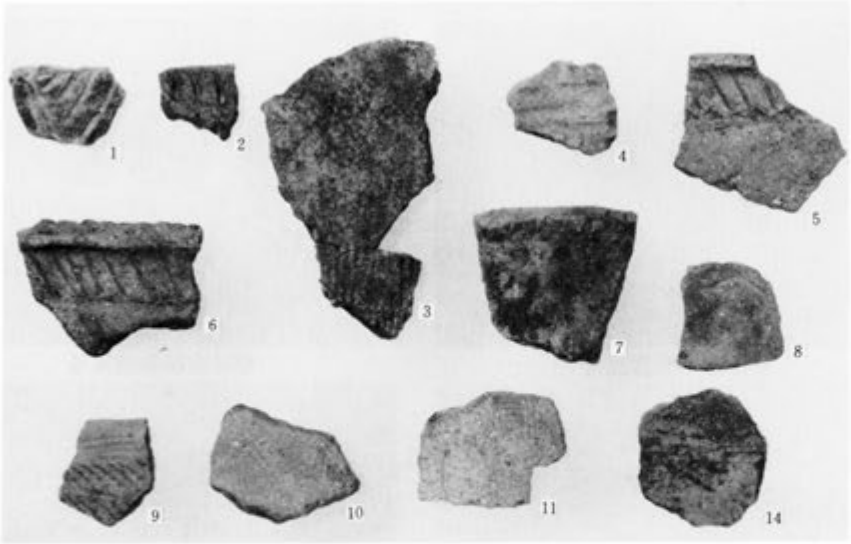
春田遺跡遺物出土状況

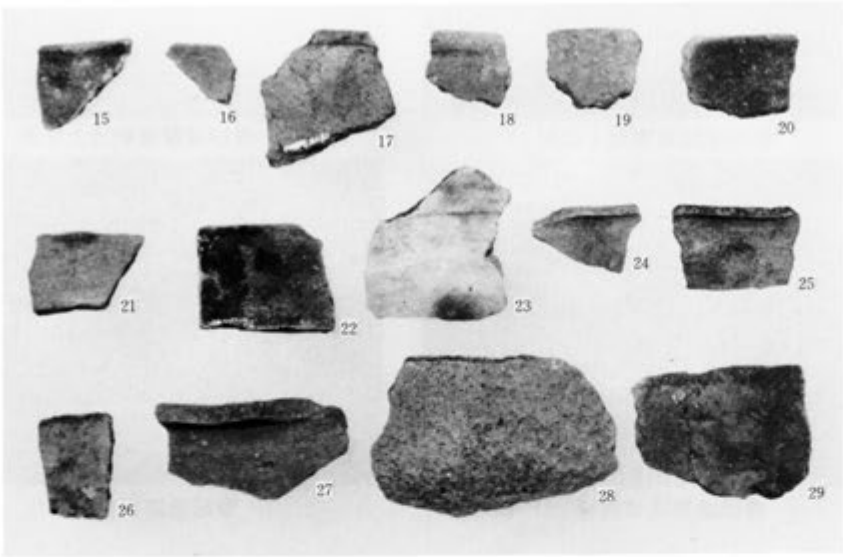
春田遺跡溝状遺構

春田遺跡溝状遺構

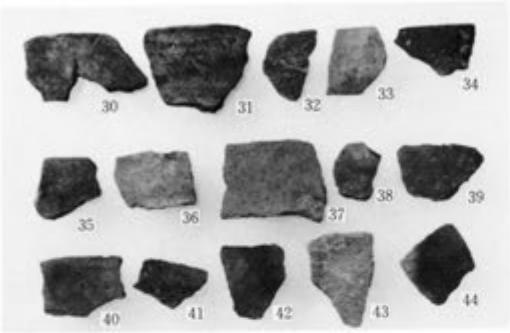
春田遺跡発掘風景及び遺物出土状況・溝状遺構

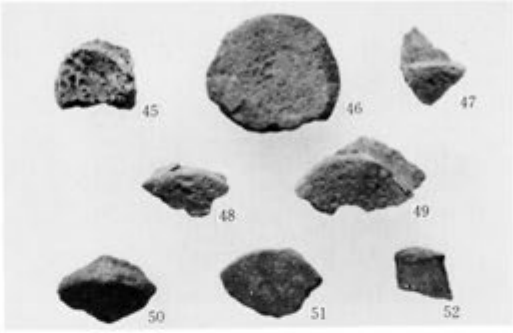
図版 4

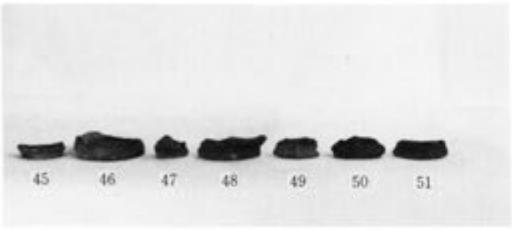


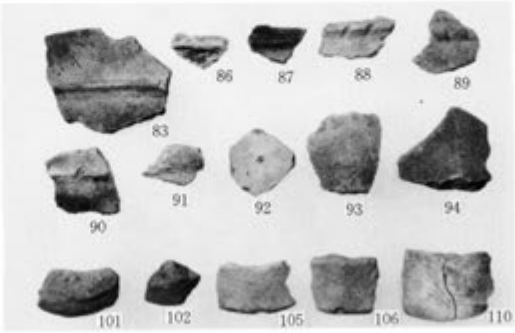


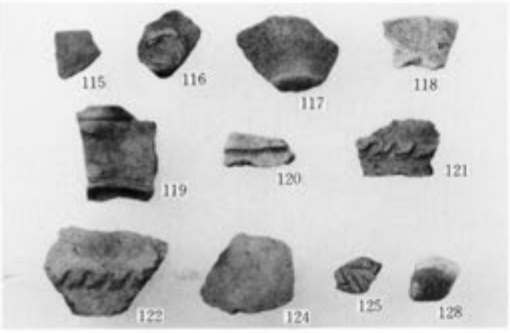
春田遺跡出土遺物（1）


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

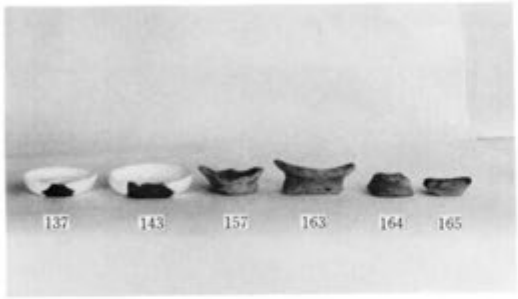

45
46
47
48
49
50
51
52

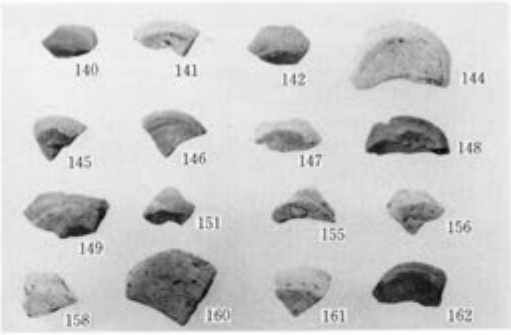

45
46
47
48
49
50
51


83
86
87
88
89
90
91
92
93
94
101
102
105
106
110


115
116
117
118
119
120
121
122
124
125
128

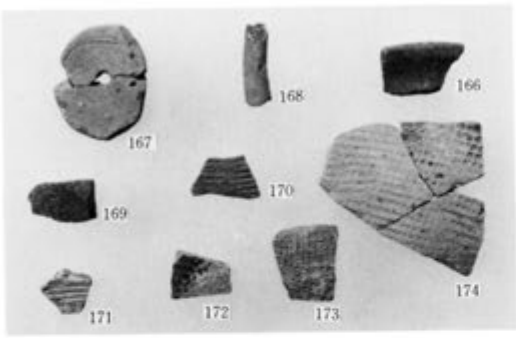
129
130
131
132
133
123
134
135
136

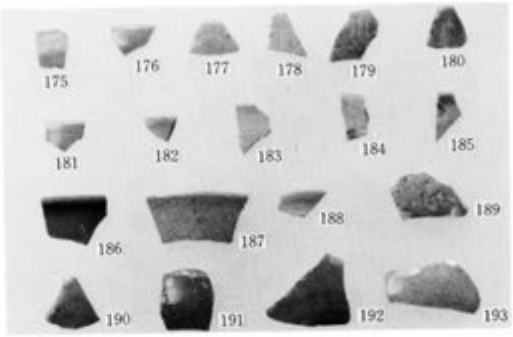

137
143
157
163
164
165

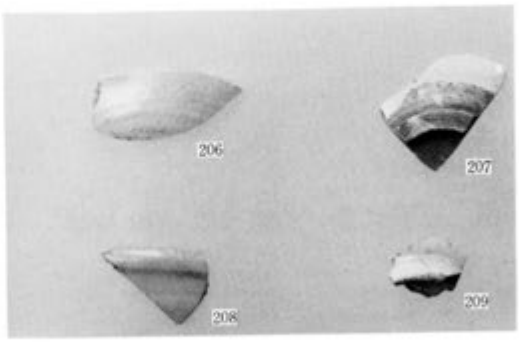

140
141
142
144
145
146
147
148
149
151
155
156
158
160
161
162

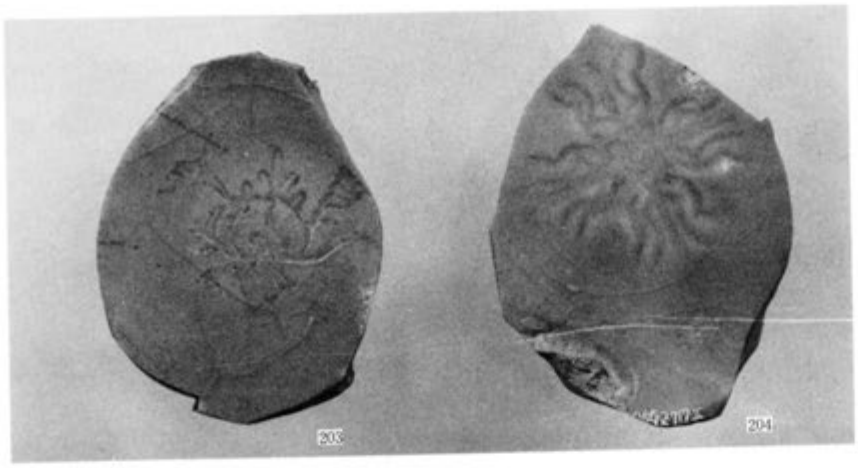
春田遺跡出土遺物（2）

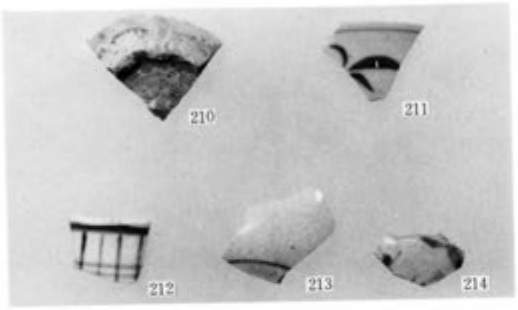
図版 6

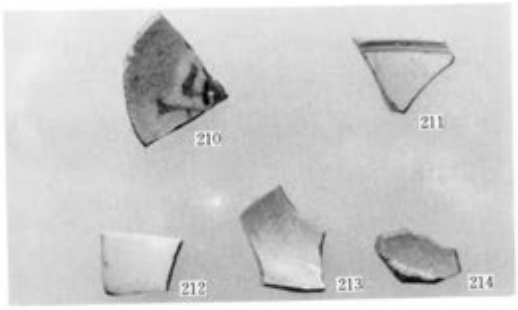




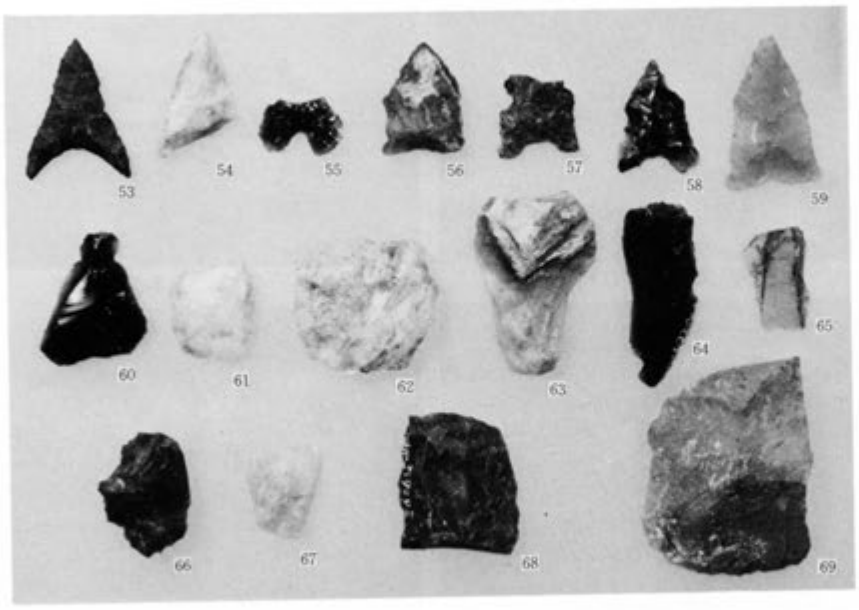


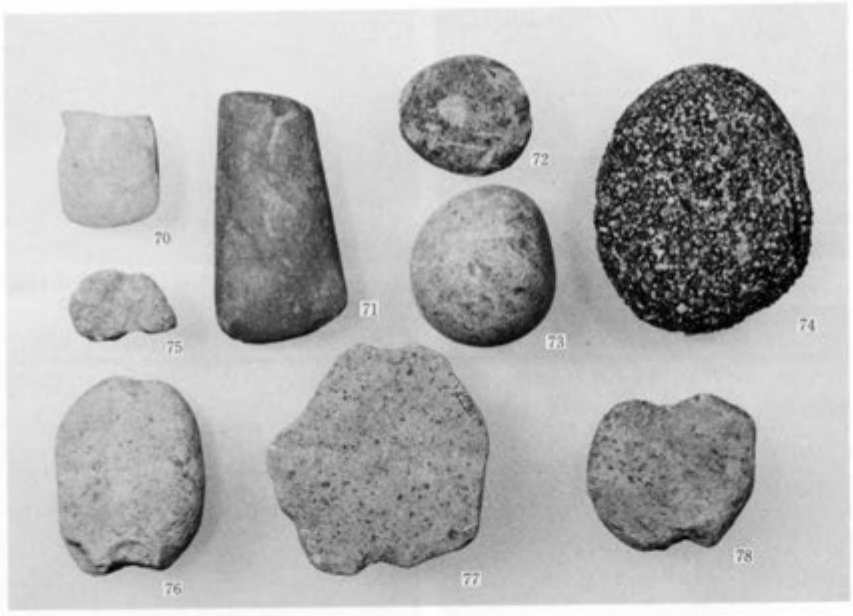






春田遺跡出土遺物（3）


53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69


70
71
72
73
74
75
76
77
78

春田遺跡出土遺物（4）

図版8

遺跡近景（南より）

重機による表土剝ぎ

測量風景

河口先生の指導を受ける

発掘風景

ラジコンヘリによる空中撮影

E・F—4区東壁断面

F—4区東壁断面拡大

石塚遺跡調査風景及び土層断面

E—2・3・4区北壁断面

H—2区東壁断面

G—2区東壁断面

1号集石遺構

1号集石遺構

1号集石遺構（断面）

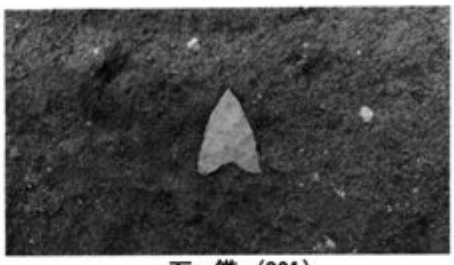
2号集石遺構

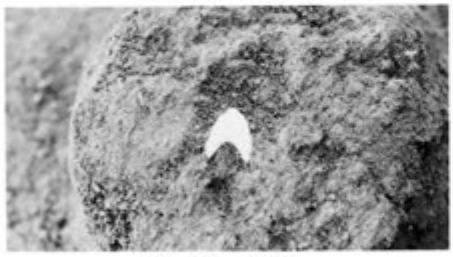
2号集石遺構

石塚遺跡・土層断面及び集石遺構

図版10

石　鏃（295）


石　鏃（301）


石　鏃（303）

石　匙（309）

石　匙（312）

磨製石斧（315）

磨製石斧（317）

磨製石斧（316）

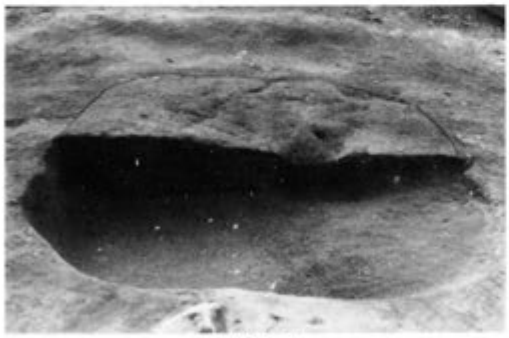
土器底部（234）

土器口縁部

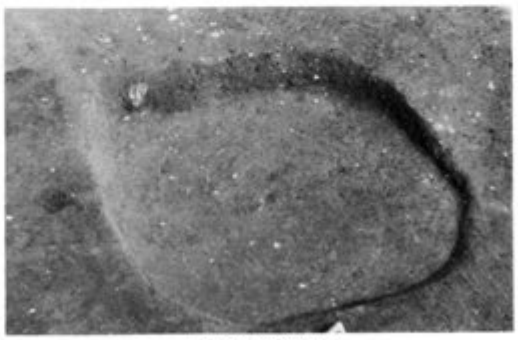
石塚遺跡遺物出土状況（縄文時代）

土坑検出状況

土坑内出土土器（338）

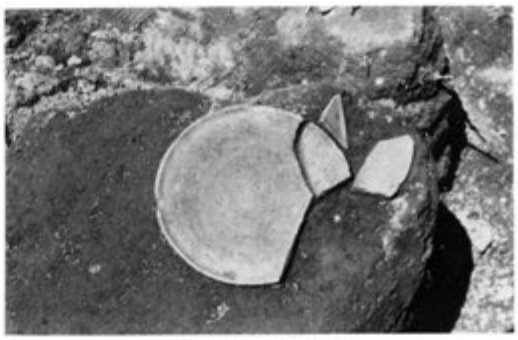


土坑断面



土坑全掘状況

無茎鉄鏃（506）



土師器蓋（507）

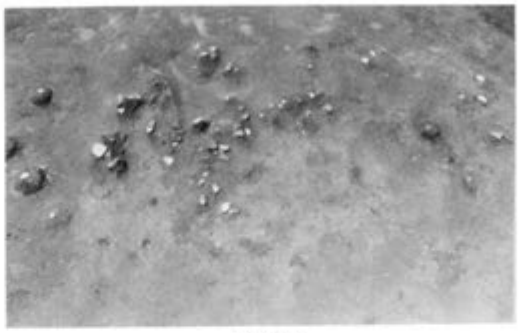
土師器埦

土師器埦，皿

石塚遺跡遺物出土状況（古墳時代・古代）

図版12

土師器



土師器

溝状遺構検出状況

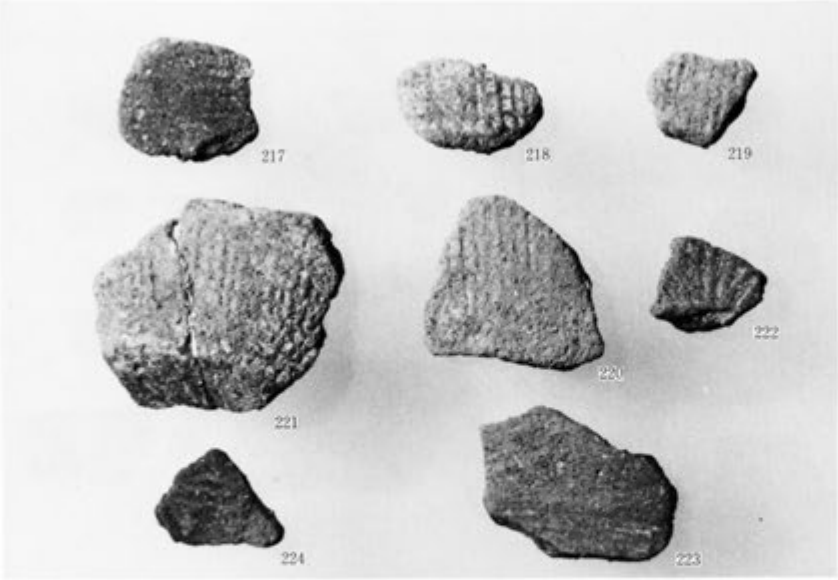
溝状遺構２断面

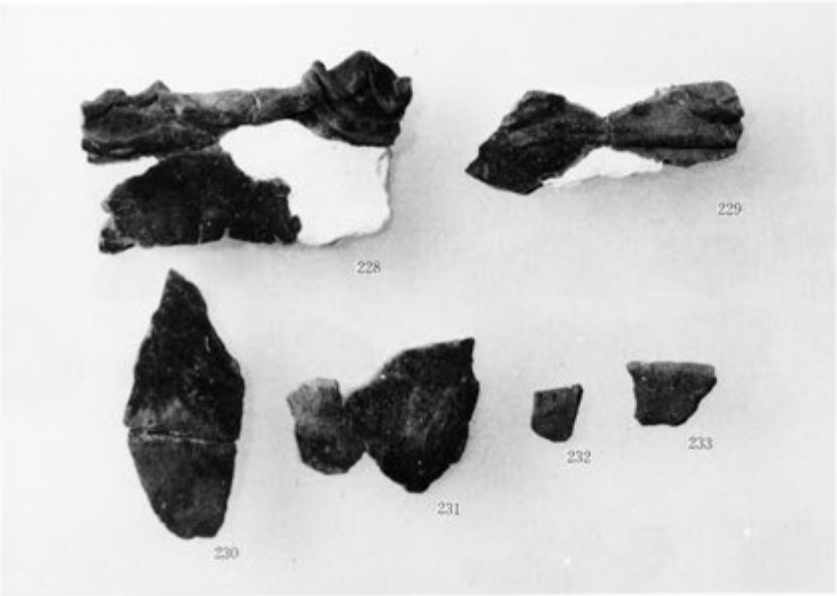
溝状遺構（北より）

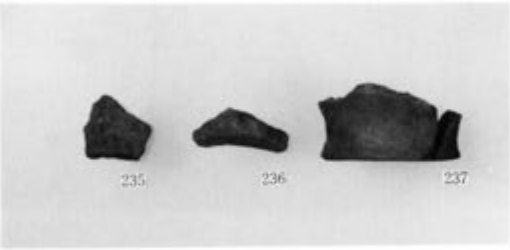
溝状遺構（南より）

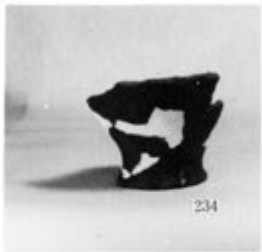
溝状遺構（東より）

石塚遺跡遺物出土状況及び溝状遺構


217
218
219
220
221
222
223
224

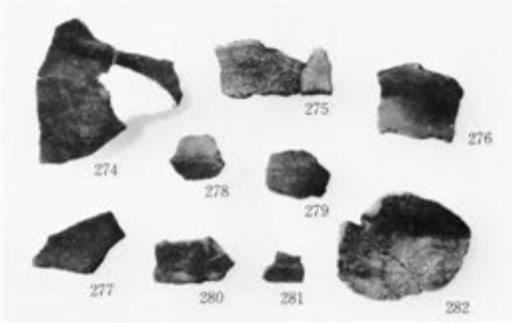

228
229
230
231
232
233

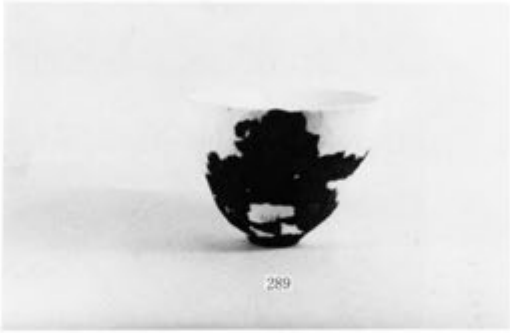

235
236
237


234

石塚遺跡出土遺物（1）

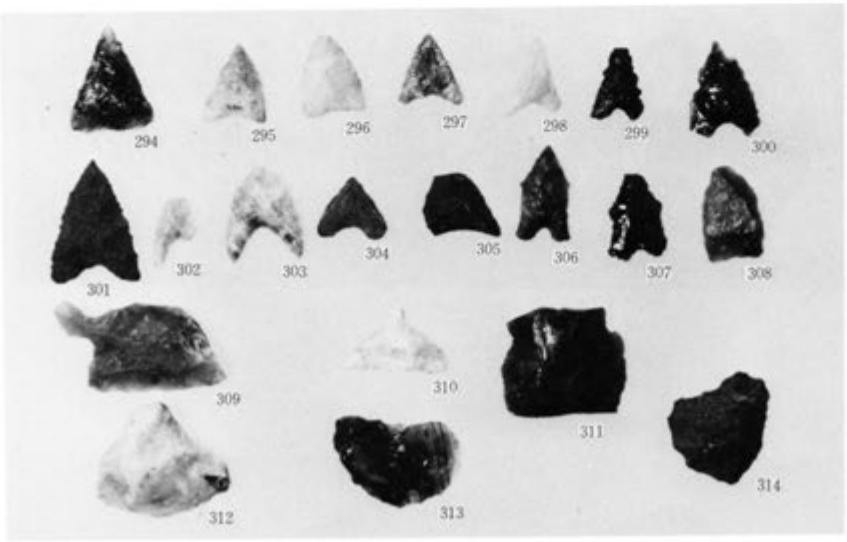
図版14





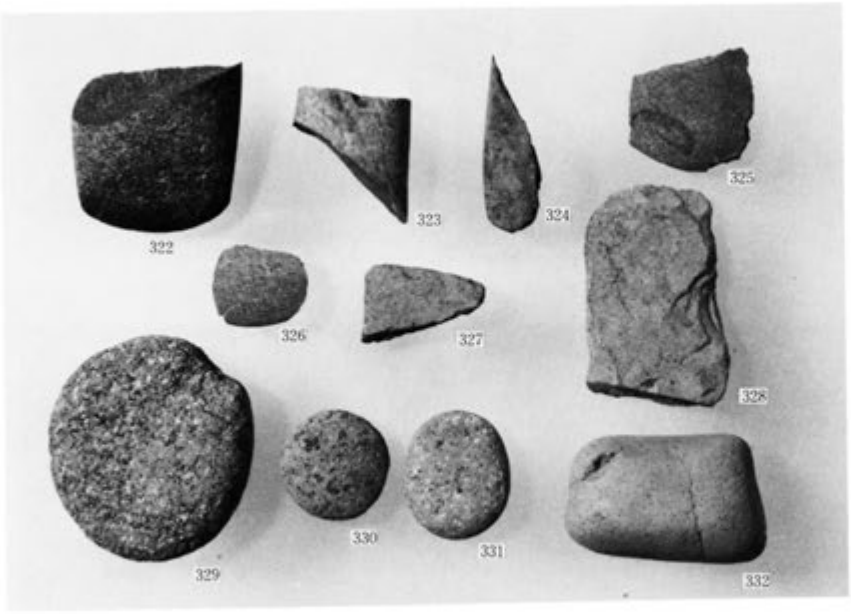
石塚遺跡出土遺物（2）

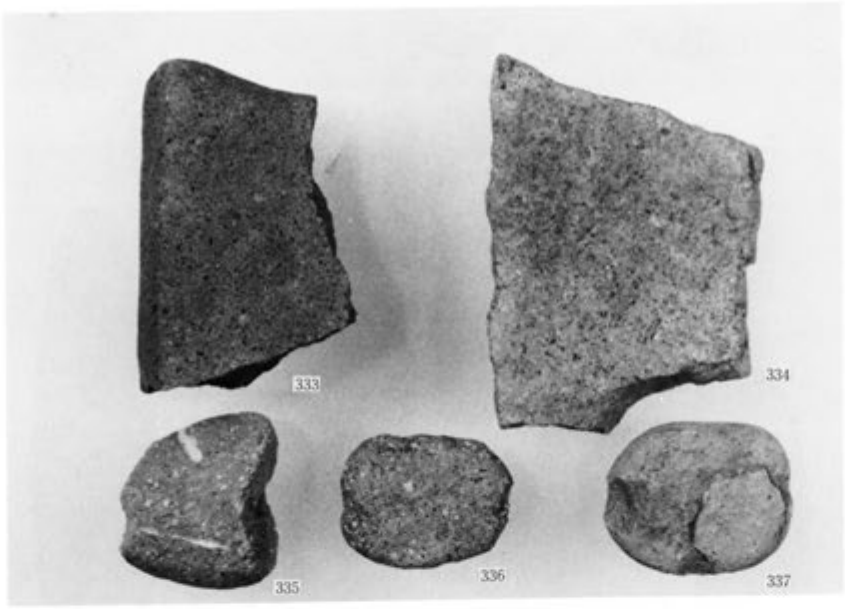
225
226
227


294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314

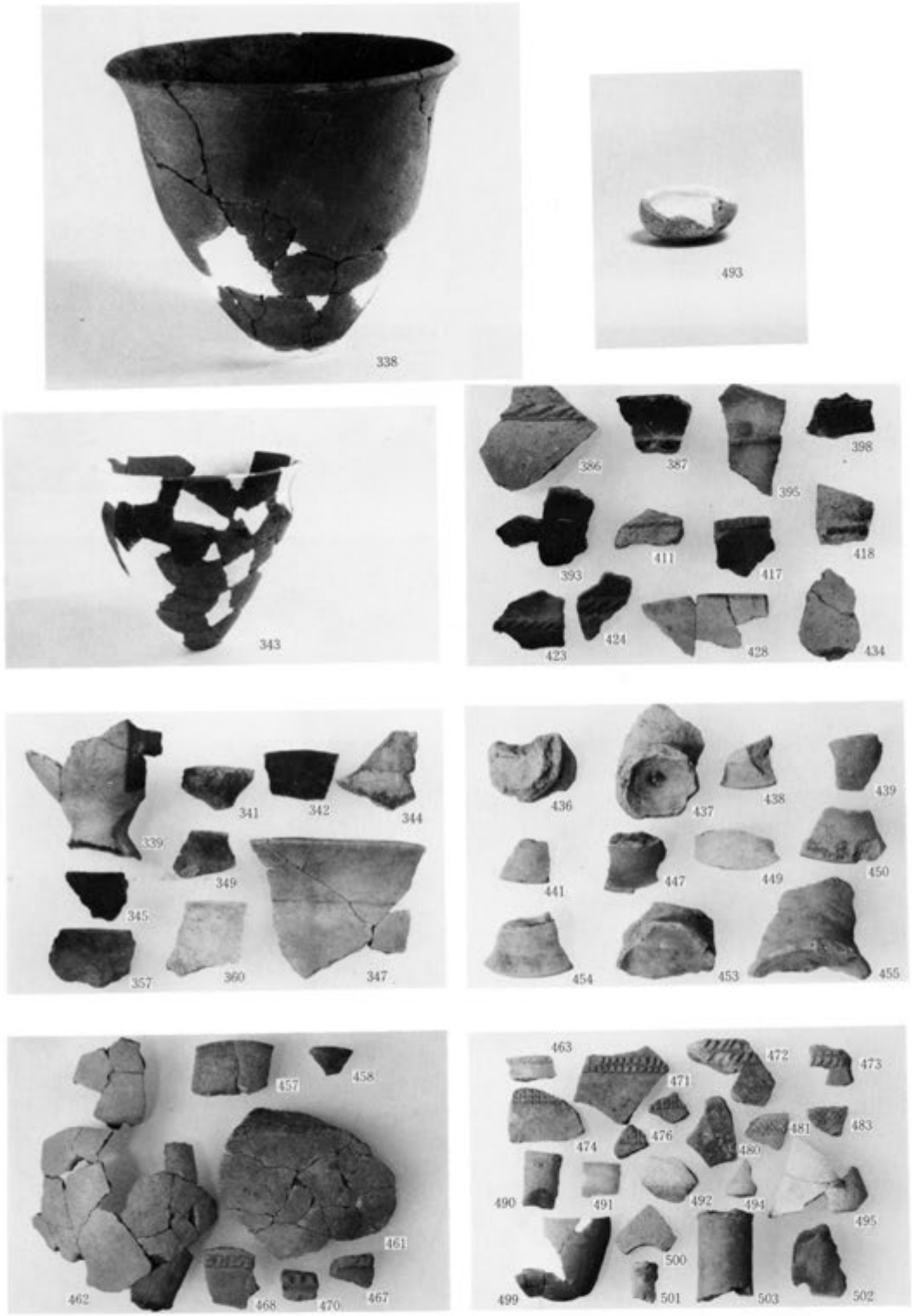
315
316
317
321
320
319
318

石塚遺跡出土遺物（3）



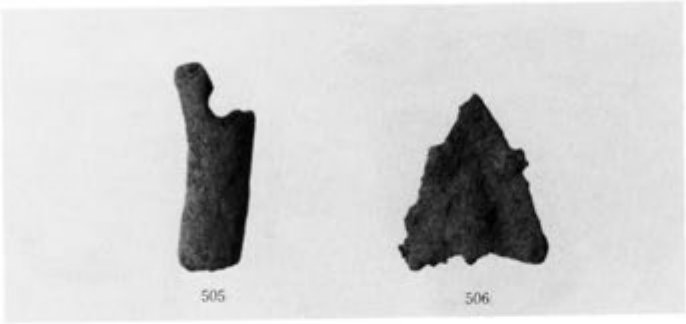


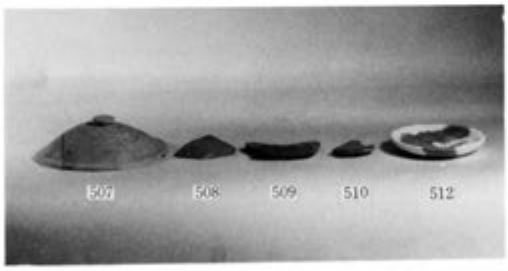
石塚遺跡出土遺物（4）

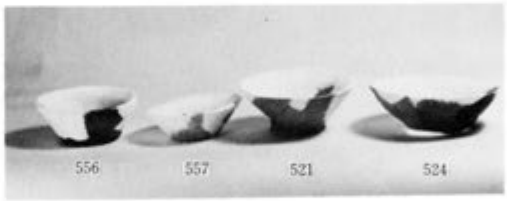

338
493
343
386
387
398
395
393
411
417
418
423
424
428
434
341
342
344
339
349
345
357
360
347
436
437
438
439
441
447
449
450
454
453
455
457
458
461
462
468
470
467
463
471
472
473
474
476
481
483
480
490
491
492
494
495
500
499
501
503
502

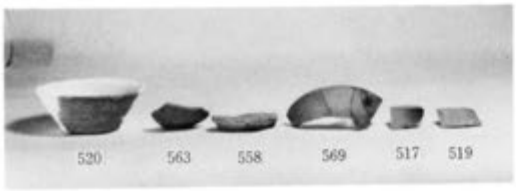
石塚遺跡出土遺物（5）

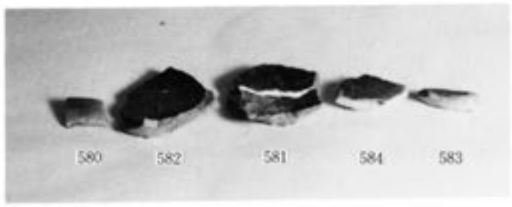
図版18

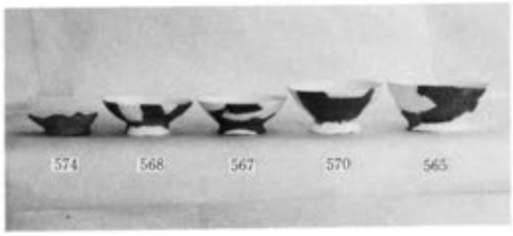


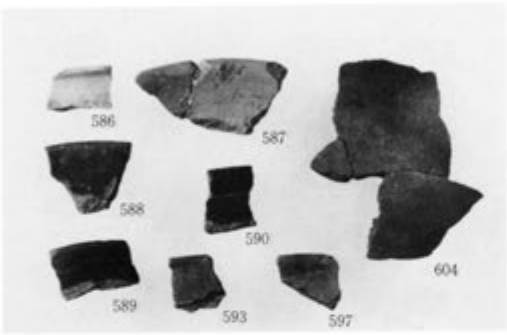


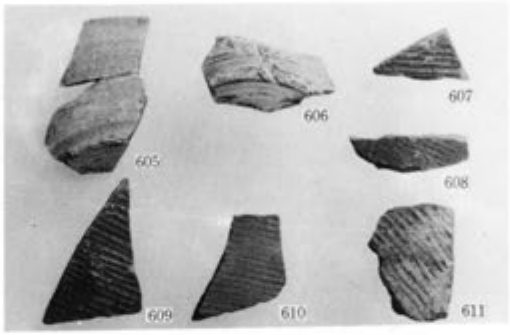






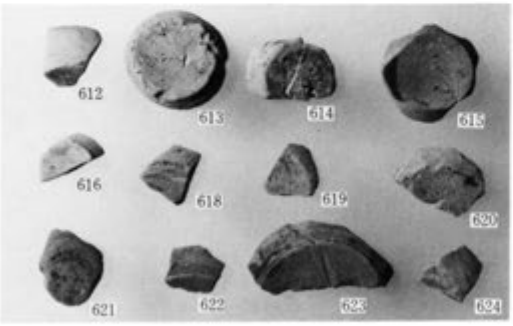


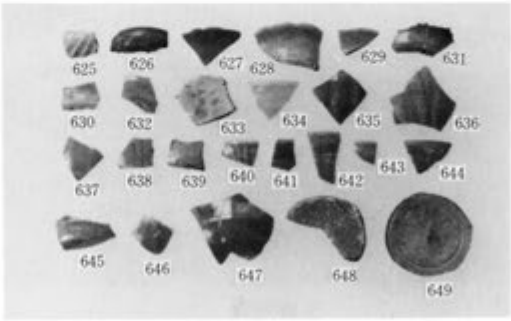




石塚遺跡出土遺物（6）

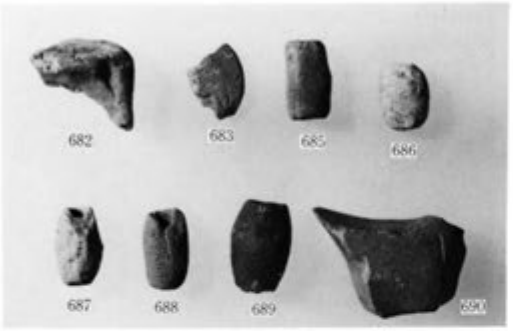
684

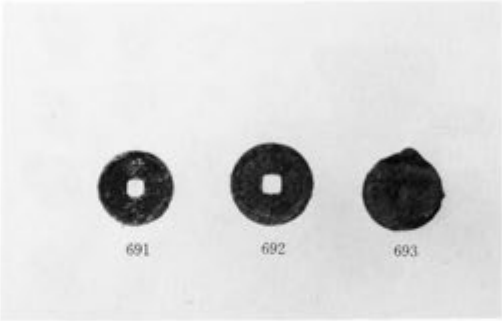




(650～681)　表

(650～681)　裏





石塚遺跡出土遺物（7）

図版20

発掘風景

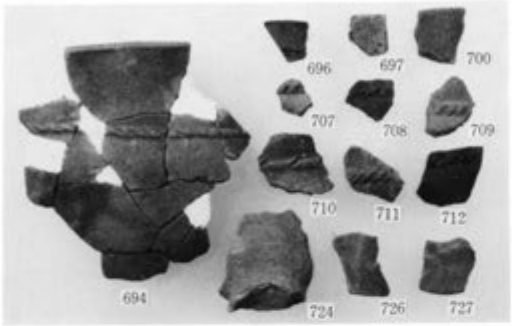
遺物出土状況

土層断面

土層断面

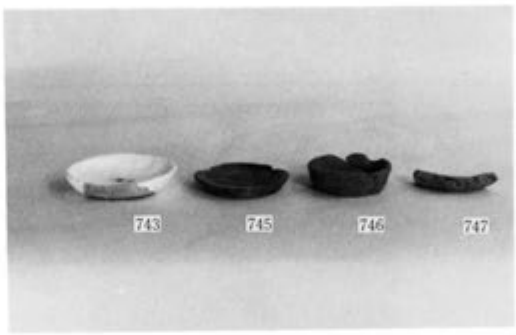
土層断面

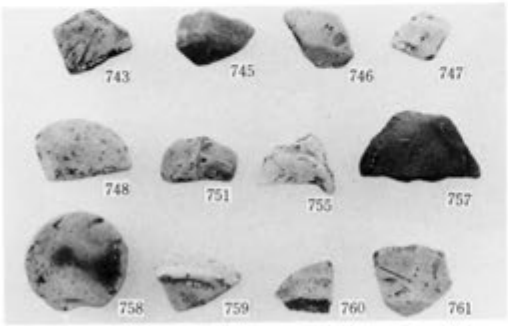
遺物出土状況

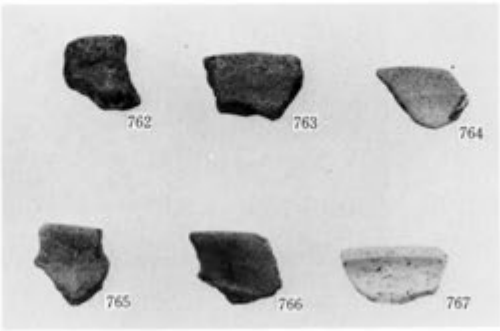


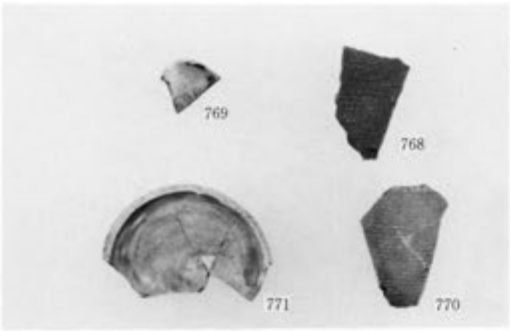
坂ノ下遺跡（発掘風景及び土層断面・出土遺物）

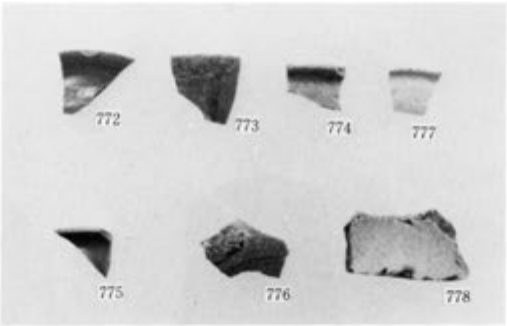
732
734
735
736
737
738
739
740
741
742

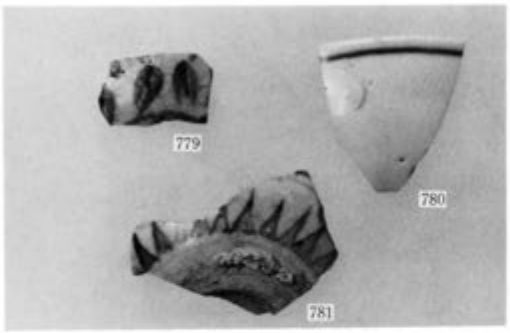

743
745
746
747

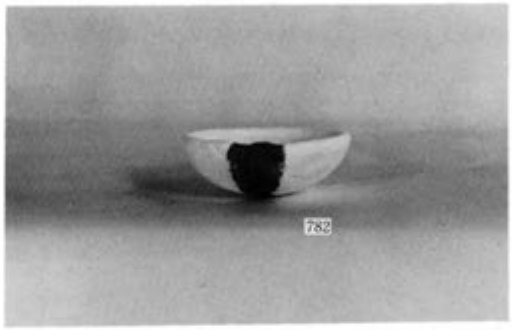

743
745
746
747
748
751
755
757
758
759
760
761


762
763
764
765
766
767

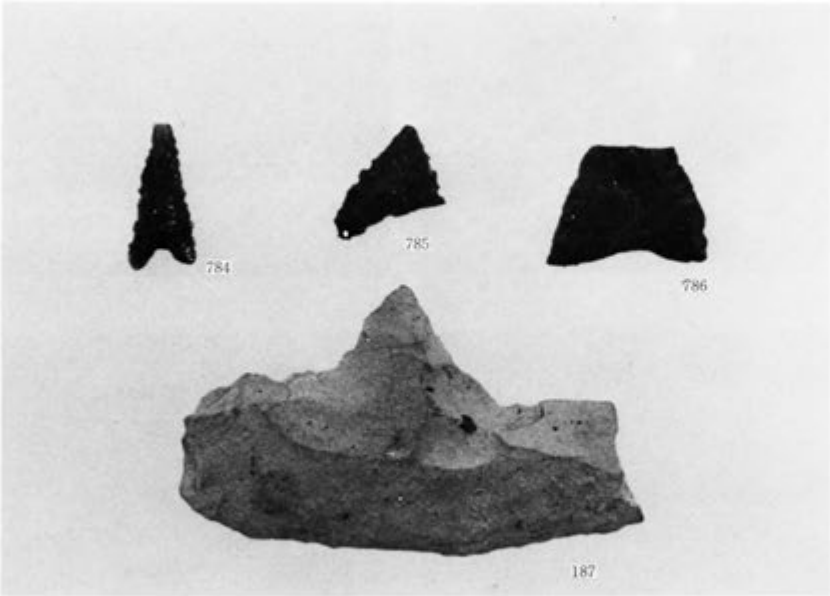

769
768
771
770

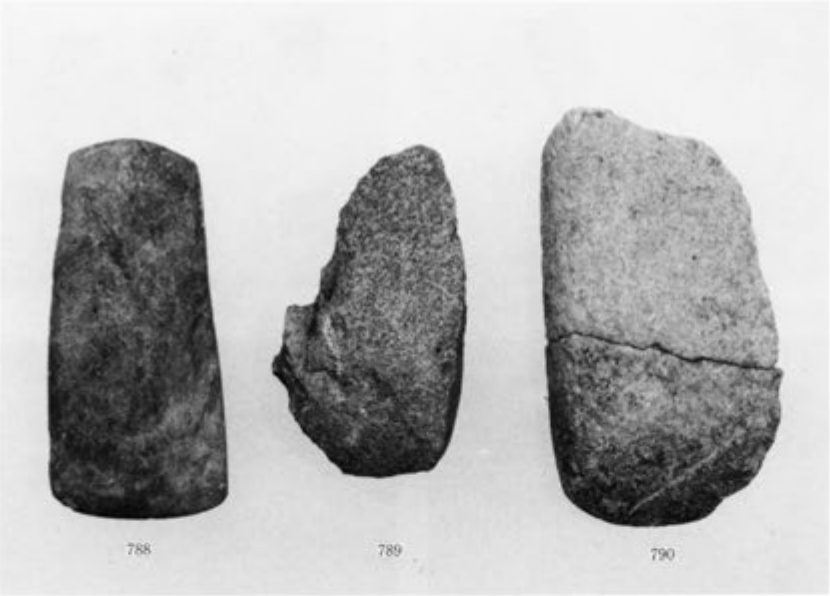

772
773
774
777
775
776
778


779
780
781


782

坂ノ下遺跡出土遺物





坂ノ下遺跡出土遺物

周辺の地形地質と遺跡のテフラ

（森脇　　広）

1. 遺跡周辺の地形地質

(1) 地　形

遺跡は錦江湾北岸の斜面上に位置する。北側には十三塚原のような広い平坦面を残すシラス台地 ―火砕流台地 ―が分布する（図１）。十三塚原は錦江湾側に傾斜し，その末端は一般に急崖をなし，その下には錦江湾の海岸や国分・隼人の低地が分布する。遺跡の立地するところはこの末端付近にあたる。ここはシラス台地の原面が大きく開析され，平坦面は野久美田から永浜の間の海岸部に若干残すに過ぎない。この平坦面の北側斜面に遺跡がある。

このような平坦面を形成したシラスは入戸火砕流と呼ばれているが，その体積は 300立方キロメートル以上に及び，世界でも最大規模の火砕流噴火の産物である。分布も給源から 100キロメートル以上の範囲に及び，円形に広がっているのが特徴である。 2.2万年前にこの噴火は生じた。

遺跡の立地する所は入戸火砕流の噴出源となった姶良カルデラの北縁部にあたり，海岸側にある永浜集落に沿う急崖はそのカルデラ壁となっている。カルデラ縁はここから南方に折れ曲がり，神造島を半島状に巻いて国分平野沿いに東方につづく。姶良カルデラは長径20キロメートルの巨大カルデラがあるが，この付近のカルデラ縁の形からもわかるように，必ずしも輪郭はスムースな円形または矩形をなしていない。このことは，複数の巨大噴火がカルデラの形成に関与したことを示唆する。現在のカルデラ底の水深は一般に 100メートルであるが，東部は 200メートルの水深を持つ小カルデラがみられ，若尊カルデラと呼ばれている。このように急深なことが鹿児島湾の大きな特徴で，それはこの湾が火山構造性陥没地という特異な成因のためである。

遺跡地の東西には鹿児島湾沿岸ではもっとも広い国分・隼人平野と姶良・加治木の平野が分布する。これらの平野は約6,000 年前の縄文海進のピーク以後に離水したものである（森脇ほか，1986）。このピークの時の海岸線は平野の奥深くにまで後退した。遺跡地の周辺についていえば東側の低地では野久美田の集落にまで，西側の小浜の低地でも国道10号線沿いの集落付近は海が進入したことはまちがいない。この時遺跡のある台地は半島状になった。

興味あることはこれらの平野は隆起し，海成沖積段丘を形成していることである。その高さは10 -15メートルあり，6,000 年間に10メートル以上の隆起が認められる。この隆起現象は桜島の噴火による姶良カルデラの地殻変動とかかわって興味深い資料を提供する。

(2) 地　質

この地域の地質はほとんど第四紀層からなる。その中で，上記した入戸火砕流堆積物はもっとも新しい。その特徴は，数十メートル以上堆積しているにもかかわらず溶結していないことであ

る。この地域でも非溶結の入戸火砕流堆積物が斜面や谷を埋めるように分布する。入戸火砕流堆積物に象徴されるように，この地域は火砕流堆積物が何層もあるのが特徴である。遺跡地周辺の狭い範囲に限っても，地久里火砕流堆積物（加久藤火砕流堆積物），清水流紋岩，小田火砕流堆積物，鍋倉火砕流堆積物などが認められている（大塚・西井上，1980）。

これらの火砕流堆積物の間には，海成・湖成の砂岩・泥岩を主体とする地層 ──隼人層・蒲生層・加治木層 ──が挟まっている。これらは国分層群と呼ばれ，前期更新世に形成された（大塚・西井上，1980）。

2．遺跡でみられるテフラ

この遺跡には4枚のテフラ層が認められる（図2）。これらのテフラは上記の基盤地質の斜面をシート状におおって堆積しており，入戸火砕流のカルデラ噴火以後に噴出した後期更新世末・完新世の新しい噴出物である。

このうち，最下位の薩摩軽石層と最上位のアカホヤ火山灰層は層位（年代）・給源・分布がすでによく知られているテフラで，錦江湾北岸地域の斜面でもよく保存され，良質な鍵テフラとなっている。

薩摩軽石層（降下年代：1.1 万年前，給源：桜島）は，17枚以上ある桜島起源のテフラのうちの上位から14番目の噴出物（P14）とされる（小林，1982）。このテフラの分布は，桜島起源のテフラの中では特異である。一般に桜島起源のテフラは大隅半島方面に分布するが，薩摩軽石層は大隅半島だけでなく，北方の国分・隼人方面，さらに薩摩半島に広く分布する。とくに，給源から西方の鹿児島市方面に厚く堆積しているのが特徴である。こうした給源から東西南北の多方向への分布は，このテフラ層が10層以上の多数のメンバーからなっていることに起因する（森脇，1990）。各メンバーが給源から異なる方向に分布しているからである。そうしたメンバーは全体としては降下軽石からなっているが，それらの降下軽石の間に，マグマ水蒸気噴火によって噴出したベースサージ堆積物や降下火山灰があるのが目につき，分布が多方向におよぶという点とともに桜島のテフラの中ではきわめて特徴のあるテフラとなっている。石塚遺跡でみられる薩摩軽石は最下位の降下軽石メンバー（Sa-lpfa ；森脇，1990）である。ここでの厚さは10センチメートルほどである。これは斜面上にあるため，二次的に若干移動し，パッチ状の堆積状態となっているが，考古学的な層位区分のための層準を示す役割は十分果たすことができる。

鬼界アカホヤ火山灰層は日本列島を広くおおう広域テフラとしてよく知られている（町田・新井1978）。その広域分布は，火砕流 ──幸屋火砕流 ──にともなう細粒降下火山灰が大量に発生したことによる。給源は鬼界カルデラである。年代は6,300 年前で，縄文文化の広域な編年に大きく貢献している。石塚遺跡では最上部におよそ1メートルの厚さで堆積しているが，上部は腐植物が混ざり，また全体として黄褐色の汚い層相をしていることから，若干斜面を移動していることは明らかである。

これら2枚のテフラ層の間に，未知のテフラ層が2層ある。上位のテフラは砂粒大の灰色スコリ

アからなり，板状に締まっている。厚さは5センチメートルほどで，パッチ状に堆積している。これまでの知見から考えて，このスコリア層は蒲生の米丸マールから噴出した米丸スコリア層（森脇ほか，1986）に対比することができる。米丸スコリア層は，給源近くの蒲生では鬼界アカホヤ火山灰層の下位にあり，しかもこの火山灰層にきわめて近い層準にある。これと米丸スコリア層下位にある海成層の貝化石のC－14年代値から，米丸スコリア層の年代は少なくとも6,500-7,000 年前に入るとされる（森脇ほか，1986）。こうした層位関係は石塚遺跡のそれとよく一致する。

米丸スコリア層は多数の薄層理をもつベースサージ堆積物を主体とするテフラである。米丸マール近くの蒲生では，このベースサージ堆積物はマールから南南東向に厚く堆積する（図3）。蒲生の町のあたりでは10メートル以上の厚さがある。最近，姶良町平松の建昌城跡でこのテフラが見いだされ，もっと東方に分布することがわかった。ここでは，上部と下部の二つのユニットに分けられ，下部は淡灰色の細粒スコリアからなり，その厚さはおよそ15センチメートルである。この中には火山豆石を含む薄層が挟まれる。下部ユニットはマントル状に堆積しており，降下テフラであろう。上部は灰色の細粒スコリアで，厚さはおよそ30センチメートルである。石塚遺跡はここから9キロメートルほど東にあり，これまでの調査から明らかとなった米丸スコリア層の分布範囲に入る。層厚も矛盾しない。以上のように米丸スコリア層の特徴 ――層位，分布，層厚，岩相 ――から考えて，石塚遺跡の細粒スコリア層は米丸スコリア層に対比されるものと考える。

米丸マールの近くには住吉池マールがある。このマールの噴出物もマグマ水蒸気噴火によって細粒化された降下スコリア層からなり，しかも米丸スコリアの下位で，これに近い層準にあり，層位と岩相は石塚遺跡のスコリア層と似ている。しかし，このスコリア層は給源の住吉池マールから北方に分布軸を持ち，東方の石塚遺跡方面には分布しないことから（図3），これを石塚遺跡のスコリア層には対比することはできない。

米丸スコリア層と薩摩軽石層の間にあるテフラは発泡の悪い灰色の軽石からなり，パッチ状に堆積している。この軽石層をここでは野久美田軽石と呼んでおく。厚さは10センチメートルほどで，逆級化の層相をなす。上部の粗粒部のマトリックスは白色の風化火山灰からなり，これによって全体の軽石層が白色にみえる。軽石の最大粒径は8ミリメートルである。この軽石層に対比されそうなテフラは周辺地域では見当たらない。このことや粒径などから考えて，給源は姶良カルデラ外の火山にあることは考えられず，桜島などの火山が給源であることはまちがいない。しかし，桜島東方の大隅半島に分布するおびただしい数の桜島起源のテフラは北方にいくにつれて急激に減少し，国分の上野原では桜島起源のテフラは上記の薩摩軽石を含む2枚ほどしか認められなくなる。その1枚も層位や岩相が石塚遺跡の軽石層とは異なり，この石塚遺跡の軽石は桜島東方に分布する桜島の諸テフラに対比できそうもない。したがって，この軽石層は桜島または姶良カルデラの海底の火山に給源を持ち，そこから北方の国分・隼人などの地域に狭く分布しているだけかもしれない。その年代は，米丸スコリア層の6,500 年前から薩摩軽石層の1.1 万年前の間にはいることは明らかであるが，もっと厳密な年代は，考古遺物との関係やC－14年代さらに桜島テフラとの層位関係などからさらに検討していく必要がある。

引 用 文 献

小林哲夫（1982）桜島火山の地質：これまでの研究の成果と今後の課題。火山，２集，27巻４号，277-292 。

町田　洋・新井房夫（1978）　南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究，17，143-163 。

森脇　広（1990）更新世末の桜島の大噴火に関する研究 ― 薩摩軽石層の噴火の経過と様式 ―。鹿児島大学南科研資料センター報告特別号，第３号，40-47 。

森脇　広・町田　洋・初見祐一・松島義章（1986）鹿児島湾北岸におけるマグマ水蒸気噴火とこれに影響を与えた縄文海進。地学雑誌，95巻２号，94-113。

大塚裕之・西井上剛資（1980）鹿児島湾北部沿岸地域の第四系。鹿児島大学理学部紀要（地学・生物学），13号，35－76。

図1　遺跡周辺の地形

砂目：低地，破線：流域の境界，一点鎖線：姶良カルデラ縁（森脇ほか，1986による）

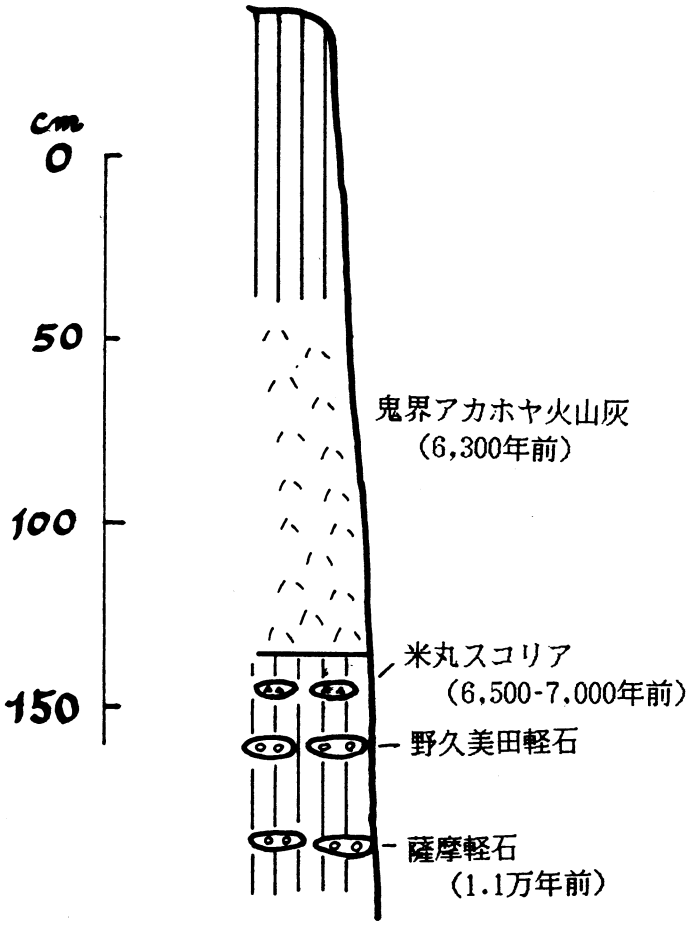


図2　遺跡地のテフラ柱状図

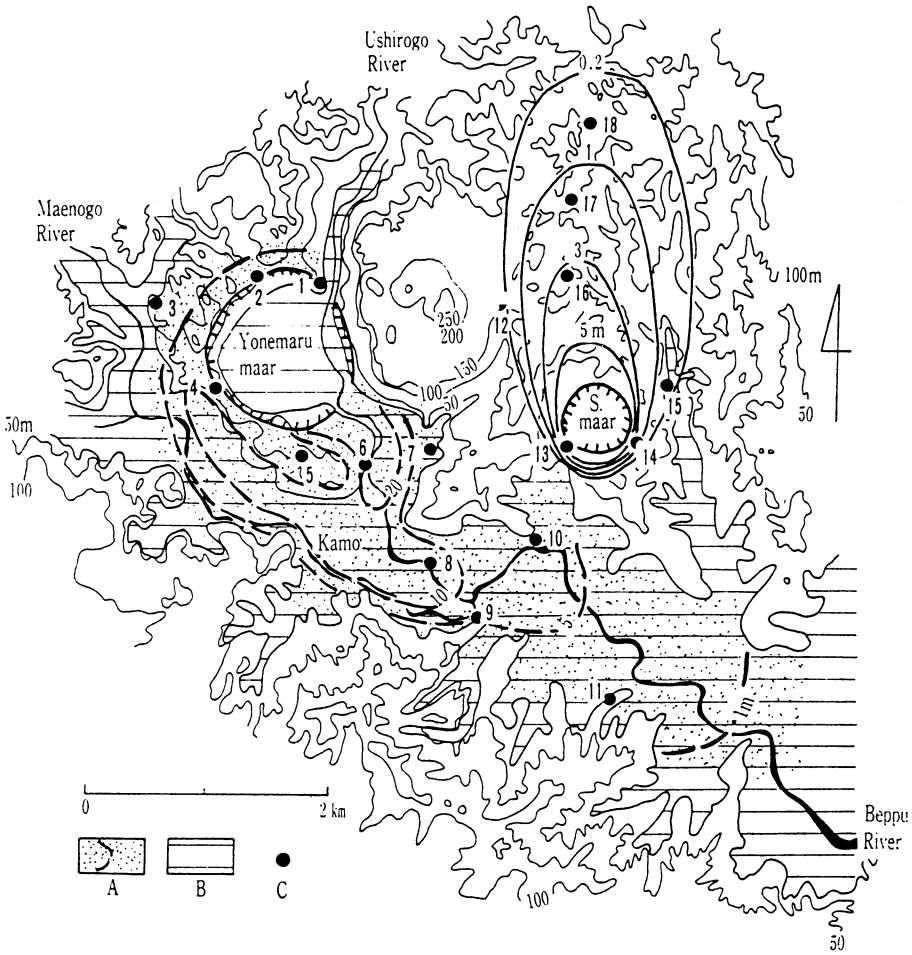


図3　米丸スコリアと住吉池スコリアの分布

A：米丸スコリアの分布と等層厚線，B：低地，C：露頭位置（森脇ほか，1986による）

あ と が き

平成元年に確認調査及び春田遺跡の全面調査を実施し，平成二年度に石塚遺跡・坂ノ下遺跡の全面調査を実施した。

春田遺跡では，さながら田植えのごとき状況での確認調査で，汲み出しても汲み出しても湧き出てくる水と格闘しながらの調査であった。

石塚遺跡・坂ノ下遺跡では，現地にたどりつくのがやっとという状態での確認調査に引き続き，周辺では鹿児島県内でも最大のものと思われる重機類が動き回っている中で，全面調査を行った。さらに，今年の夏は異常なほどの酷暑で，作業員の方々も気分が悪くなる人が続出した。

しかしながら，ほぼ予定どおりの８月には調査を終了し，現在は着々と工事が進んでいるようである。

いま，ここに国分隼人道路建設に係わる発掘調査報告書の校了にこぎつけたが，遺跡の立地条件など今後の分布調査の方法等に問題点を投げかけてくれた遺跡であったと思われる。

最後に，酷暑の中発掘作業に携わっていただいた地元の方々，文化課収蔵庫の作業員の方々には心から感謝いたし，末尾ながら，氏名を記して謝意を表します。

平成元年度発掘調査作業員

阪元玲子　山口ミヨ　永里フジエ　是枝キミ子　山元千鶴子　山下シズ子　森永フミエ
笛田順子　岩下明美　岩下和子　福重よし子　山田義徳　田中ツヤ子　榎元日出子　島子良子
岩下ちづ子　是枝逸雄　蔵元守　末永和徳　田中章　山下菊雄　山元キヨ子　末永タミエ
大庭ノリ子　日高玄子　蔵元カズ子　吉元常子　永里シツエ　前村美代子　川西アキ子
藤浪チエ子　藤浪妙子　大庭春代　阪口シヅエ　藤浪ハルミ　永里ツギエ

平成元年度整理作業員

川畑明子　郷司山いつ子　竹下淳子　榎本京子　塊島孝子　相良政子　市来悦子　下畠節子
東しず子　野入満喜子

平成２年度発掘調査作業員

大庭ノリ子　是枝キミ子　日高玄子　川西アキ子　山下静子　大人トシ子　永里アヤ子
逆瀬川鈴子　前村美代子　岩下ちづ子　福重レイ子　磯山みち子　鬼塚かおり　山元キヨ子
門田ヒサエ　福重よし子　阪口格　山元シゲ子　白拍子スミエ　竹崎タミ　西国領シズエ
永里ツギエ　永里シツエ　末永タミエ　山元クサ子　藤浪チエ子　大庭絹子　阪口シズエ
大庭春代　藤浪ハルミ　蔵元カズ子　松崎涼子　中村鶴美　山口ミヨ　阪元玲子　山元千鶴子
吉元常子　寺園勇　初瀬弘　蔵元護　阪元一志　是枝逸雄　伊東昌雄　末永和徳　田中章
寺園シカ　初瀬トミ子　石野ヨシ子　寺園ヌイ子　池田リツ子　寺園ヒサ子　安達ヨツ
森永フミエ　岩下和子　榎元日出子　島子良子　野村美智子

平成２年度整理作業員

相良政子　東しず子　野入満喜子　郷司山いつ子　四丸久美子　徳永美喜子　本多直子
久山七代　情松イチ子　沼時子　小山君子　丸山ナリ子　川田美津子　高橋文子　岩城カヨ子
橋元澄代　中名主和子　山上美千代　有馬理子　川畑恵子　高倉晴美　上谷川きみ代
井手みどり　喜入カツエ　川畑明子　後藤悦子　中原己美子　行船順子

平成２年度　作業員

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（59）
国分隼人道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

春　田　遺　跡
石　塚　遺　跡
坂　ノ　下　遺　跡

発行日　平成２年３月
発　行　鹿児島県教育委員会
　　鹿児島市山下町14－50
印　刷　有限会社　アート印刷
　　鹿児島市東坂元2-29-1